鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（161）

二渡船渡ノ上遺跡・山崎野町跡Ａ　二〇一一年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（161）

川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅲ）

二渡船渡ノ上遺跡
山崎野町跡Ａ

（薩摩郡さつま町）

2011年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

川内川下流から見た二渡船渡ノ上遺跡

川内川下流から見た山崎野町跡Ａ

序　　文

この報告書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴って，平成19年度及び平成21年度から平成22年度にかけて実施した薩摩郡さつま町に所在する二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡Ａの発掘調査の記録です。

二渡船渡ノ上遺跡では，縄文時代中期から近代までの遺構・遺物が発見されました。特に，平安時代の中国産の磁器が出土したことは，川内川を使用した当時の交易の様子を示すものとして注目されます。

対岸の山崎野町跡Ａでは，縄文時代早期から近代までの遺構・遺物が発見されました。中でも，野町跡に関連すると思われる遺構や当時の生活がうかがえる陶磁器の発見が注目されます。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所，さつま町教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成２３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山　下　吉　美

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふたわたりふなわたしのうえいせき・やまさきのまちあとえい
書名	二渡船渡ノ上遺跡・山崎野町跡A
副書名	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅲ）
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第161集
編著者名	内山伸明・森雄二
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899−4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡：0995−48−5811
発行年月日	西暦2011年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	日本測地系経緯度 北緯	日本測地系経緯度 東経	発掘期間	発掘面積㎡	調査起因
二渡船渡ノ上遺跡（ふたわたりふなわたしのうえいせき）	薩摩郡（さつまぐん） さつま町 二渡（ふたわたり）	46392	39−107	31° 51′ 38″	130° 25′ 41″	確認調査 2007.03.08 本調査 ①2007.12.04〜 2008.02.27 ②2009.09.07〜 2009.11.27 ③2010.01.20〜 2010.03.19	56.62 2,000 2,180 820	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う記録保存調査
山崎野町跡A（やまさきのまちあとえい）	薩摩郡（さつまぐん） さつま町 山崎（やまさき）		39−133	31° 51′ 33″	130° 25′ 46″	確認調査 2009.02.16 2009.11.05,06 本調査 ①2010.1.20〜 2010.03.19 ②2010.07.01〜 2010.07.27	32.48 163.60 2,850 950	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二渡船渡ノ上遺跡（ふたわたりふなわたしのうえいせき）	散布地	縄文時代中期		船元式土器，春日式土器	
		縄文時代晩期	埋設土器(1) 土坑(9)	上加世田式土器，滋賀里式土器，入佐式土器，黒川式土器，刻目突帯文土器，石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，石核，剥片，黒曜石，打製石斧，磨製石斧，石錘，磨石，敲石	
		弥生時代		刻目突帯文土器，高橋式土器，黒髪式土器	
		古墳時代		成川式土器	
		古代	土坑(5)，ピット(78)	土師器，須恵器，土錘，輸入陶磁器（越州窯）	
		中世〜近世	礫集積(7)	白磁，青磁，青花・染付，陶器，須恵器，土師器，石製品，火打ち石，白磁の小坏	
		近代	畝(1)，溝(1) 杭(105)，石列(1) 石組(1)，水田(1)		
山崎野町跡A（やまさきのまちあとえい）	散布地	縄文時代早期	集石遺構(1)	押型文土器，塞ノ神式土器，苦浜式土器，石鏃，石匙，磨石，石斧，敲石，軽石製品，黒曜石	
		縄文時代前期〜晩期		曽畑式土器，深浦式土器，大歳山式土器，条痕文土器，船元式土器，春日式土器，並木式土器，出水式土器，西平式土器，黒川式土器，刻目突帯文土器，石鏃，石匙，スクレイパー，剥片，石核，石錘，石斧，敲石，磨石，石皿，礫器，黒曜石	
		弥生時代〜古墳時代		高橋式土器 成川式土器	
		古代〜中世	掘立柱建物跡(1)	土師器，須恵器	
		近世以降	礎石建物跡(3)，布基礎(2)	染付，陶器（肥前・唐津），薩摩焼（平佐・龍門司），煮繭鍋	

要約

二渡船渡ノ上遺跡では，縄文時代中期〜近代の遺構・遺物が発見されている。縄文時代中期は，船元式土器の出土が注目される。縄文時代晩期は，用途不明の土坑が検出され，上加世田式土器〜刻目突帯文土器や打製石斧が多く出土している。古代は，土坑・ピットが検出され，土師器・須恵器・土錘・青磁が出土し，中でも当時の交易の様子がうかがえる越州窯の碗，水注などの輸入陶磁器は注目される。　山崎野町跡Aでは，縄文時代早期から近世に至るまでの幅広い時代の遺構・遺物が発見された。特に縄文時代は，遺物の出土数に比べて土器型式の多様性が際立つ。また，近世の遺構・遺物では大型の礎石建物跡が見られるほか，17世紀から19世紀にかけての陶磁器類が出土しており，白薩摩の土瓶や肥前系大皿，製糸関連の遺物（煮繭鍋）などが見られる。

遺跡位置図

例　　言

1　本書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う二渡船渡ノ上遺跡及び山崎野町跡Ａの発掘調査報告書である。

2　二渡船渡ノ上遺跡は，鹿児島県薩摩郡さつま町二渡に所在し，山崎野町跡Ａはさつま町山崎に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　二渡船渡ノ上遺跡の発掘調査は，平成19年12月４日～平成20年２月27日，平成21年９月７日～11月27日，平成22年１月20日～平成22年３月19日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成21年度～平成22年度に実施した。
　山崎野町跡Ａの発掘調査は，平成22年１月20日～平成22年３月19日，平成22年７月１日～平成22年７月27日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成22年度に実施した。

5　遺物番号は，通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　土器表面に赤色顔料と炭化物・煤が確認できる場合は，実測図中に赤色と灰色で示した。

8　本書で用いたレベル数値は，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

9　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は，二渡船渡ノ上遺跡を有限会社ふじたに委託し，山崎野町跡Ａを有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

10　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て内山伸明・森雄二が行った。

11　土器・陶磁器等の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て森が行った。

12　石器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て森が行い，一部は株式会社九州文化財研究所・株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，監修は内山・森が行った。

13　自然科学分析は，株式会社加速器分析研究所・株式会社パレオ・ラボに委託した。

14　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

15　本書の編集・執筆の分担は次のとおりである。
第１章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・森
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・森
第３章　二渡船渡ノ上遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・森
第４章　山崎野町跡Ａの調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・内山
第５章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・森
第６章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・内山・森

16　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，遺物注記の略号は二渡船渡ノ上遺跡が「ＦＷ」，山崎野町跡Ａの確認調査が「山ノマチＡ」，本調査が「ノマチＡ」である。

本文目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
目次

第１章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至るまでの経過・・・・・・・・・・・1
　第２節　事前調査・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　本調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第４節　整理・報告書作成作業・・・・・・・・・・・6

第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・7
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・7

第３章　二渡船渡ノ上遺跡の調査・・・・・・・・・・15
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第２節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　第３節　調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　　１　縄文時代中期Ⅵ層の調査成果・・・・・・・・22
　　２　縄文時代晩期Ⅴ層の調査成果・・・・・・・・23
　　３　弥生時代の調査成果・・・・・・・・・・・・64
　　４　古墳時代の調査成果・・・・・・・・・・・・68
　　５　古代の調査成果・・・・・・・・・・・・・・69
　　６　中世から近世の調査成果・・・・・・・・・・78
　　７　近代の調査成果・・・・・・・・・・・・・・82

第４章　山崎野町跡Ａの調査・・・・・・・・・・・・85
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・85
　第２節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　第３節　調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・89
　　１　縄文時代早期の調査成果・・・・・・・・・・89
　　２　縄文時代前期から晩期の調査成果・・・・・・94
　　３　弥生時代から古墳時代の調査成果・・・・・110
　　４　古代から中世の調査成果・・・・・・・・・114
　　５　近世以降の調査成果・・・・・・・・・・・116

第５章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・131

第６章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143

挿　図　目　次

第１図　二渡船渡ノ上遺跡試掘トレンチ位置図・・・４
第２図　山崎野町跡Ａ試掘トレンチ位置図・・・・・４
第３図　山崎野町地図・・・・・・・・・・・・・・９
第４図　山崎野町跡　石垣実測図・・・・・・・・・10
第５図　山崎野町跡　調査範囲・・・・・・・・・・11
第６図　周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・13

第３章　二渡船渡ノ上遺跡

第７図　土層断面図（１）及びトレンチ位置図・・・20
第８図　土層断面図（２）・・・・・・・・・・・・21
第９図　Ⅵ層調査範囲及び土器出土状況図・・・・・22
第10図　Ⅵ層出土縄文時代中期土器実測図・・・・・22
第11図　Ⅴ層調査範囲及び遺構配置図・・・・・・・23
第12図　Ⅴ層検出縄文時代晩期土坑実測図（１）・・24
第13図　Ⅴ層検出縄文時代晩期土坑実測図（２）及び
　　土坑内遺物実測図（１）・・・・・・・・・25
第14図　縄文時代晩期土坑内遺物実測図（２）・・・26
第15図　縄文時代晩期土坑内遺物実測図（３）・・・27
第16図　縄文時代晩期土坑内遺物実測図（４）・・・28
第17図　縄文時代晩期埋設土器検出状況図及び土器実測
　　図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第18図　縄文時代晩期土器出土状況（１）・・・・・30
第19図　縄文時代晩期土器実測図（Ａ～Ｃ類）・・・31
第20図　縄文時代晩期土器実測図（Ｃ～Ｄ１類）・・32
第21図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ２類）・・・・33
第22図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ３～Ｄ６類）・34
第23図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ６・Ｄ７類）・35
第24図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ７類）・・・・36
第25図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ８・Ｄ９類）・37
第26図　縄文時代晩期土器実測図
　　（Ｄ10類，Ｅ類）・・・・・・・・・38
第27図　縄文時代晩期土器出土状況（２）・・・・・39
第28図　縄文時代晩期土器実測図（Ｅ類）・・・・・40
第29図　縄文時代晩期土器実測図
　　（Ｅ類，Ｆ１・Ｆ２類）・・・・・・41
第30図　縄文時代晩期土器出土状況（３）・・・・・42
第31図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ２類）・・・・43
第32図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ３～Ｆ５類）・44
第33図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ５～Ｆ７類）・45
第34図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ８類）・・・・46
第35図　縄文時代晩期土器実測図（円盤形土製加工品）
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第36図　縄文時代晩期石器出土状況（１）・・・・・50
第37図　縄文時代晩期石器出土状況（２）・・・・・51
第38図　縄文時代晩期石器実測図（１）・・・・・・52
第39図　縄文時代晩期石器実測図（２）・・・・・・53
第40図　縄文時代晩期石器実測図（３）・・・・・・54
第41図　縄文時代晩期石器実測図（４）・・・・・・55
第42図　縄文時代晩期石器実測図（５）・・・・・・56
第43図　縄文時代晩期石器実測図（６）・・・・・・57
第44図　縄文時代晩期石器実測図（７）・・・・・・58
第45図　縄文時代晩期石器実測図（８）・・・・・・59
第46図　縄文時代晩期石器実測図（９）・・・・・・60
第47図　縄文時代晩期石器実測図（10）・・・・・・61
第48図　縄文時代晩期石器実測図（11）・・・・・・62
第49図　弥生時代土器出土状況・・・・・・・・・・64
第50図　弥生時代土器実測図（１）・・・・・・・・65
第51図　弥生時代土器実測図（２）・・・・・・・・66
第52図　弥生時代土器実測図（３）・・・・・・・・67
第53図　古墳時代土器実測図・・・・・・・・・・・68
第54図　Ⅳ層検出古代土坑・ピット実測図・・・・・69
第55図　Ⅳ層検出古代土坑・ピット配置図・・・・・70
第56図　古代土坑内遺物実測図・・・・・・・・・・71
第57図　古代包含層出土遺物実測図（１）・・・・・72
第58図　古代包含層出土遺物実測図（２）・・・・・73
第59図　古代包含層出土遺物実測図（３）・・・・・74
第60図　古代包含層出土遺物実測図（４）・・・・・75
第61図　中世～近世遺構配置図・・・・・・・・・・78
第62図　中世～近世遺構実測図・・・・・・・・・・79
第63図　中世～近世遺物実測図・・・・・・・・・・80
第64図　近代畝状遺構実測図・・・・・・・・・・・82
第65図　近代石組遺構実測図・・・・・・・・・・・83
第66図　近代杭痕実測図・・・・・・・・・・・・・84
第67図　近代遺構配置図・・・・・・・・・・・・・84

第４章　山崎野町跡Ａ

第68図　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・88
第69図　縄文時代早期遺構配置・遺物出土状況図・・89
第70図　縄文時代早期集石遺構実測図・・・・・・・89
第71図　縄文時代早期土器実測図（１）・・・・・・90
第72図　縄文時代早期土器実測図（２）・・・・・・91
第73図　縄文時代早期石器実測図（１）・・・・・・92
第74図　縄文時代早期石器実測図（２）・・・・・・93
第75図　縄文時代早期石器実測図（３）・・・・・・94
第76図　縄文時代前期～晩期遺物出土状況図・・・・95
第77図　縄文時代前期～晩期土器実測図（１）・・・95
第78図　縄文時代前期～晩期土器実測図（２）・・・96
第79図　縄文時代前期～晩期土器実測図（３）・・・97
第80図　縄文時代前期～晩期土器実測図（４）・・・98

挿　図　目　次

第81図　縄文時代前期～晩期土器実測図（５）・・・99
第82図　縄文時代前期～晩期石器実測図（１）・・・102
第83図　縄文時代前期～晩期石器実測図（２）・・・103
第84図　縄文時代前期～晩期石器実測図（３）・・・104
第85図　縄文時代前期～晩期石器実測図（４）・・・105
第86図　縄文時代前期～晩期石器実測図（５）・・・106
第87図　縄文時代前期～晩期石器実測図（６）・・・107
第88図　縄文時代前期～晩期石器実測図（７）・・・108
第89図　縄文時代前期～晩期石器実測図（８）・・・109
第90図　弥生・古墳時代土器実測図（１）・・・・・111
第91図　壺形土器（662）出土状況実測図・・・・・112
第92図　弥生・古墳時代土器実測図（２）・・・・・113
第93図　古代～中世遺構配置図・・・・・・・・・114
第94図　掘立柱建物跡実測図・・・・・・・・・・114
第95図　古代～中世土器実測図・・・・・・・・・115
第96図　近世以降遺構配置図・・・・・・・・・・116
第97図　礎石建物跡１号実測図・・・・・・・・・117
第98図　礎石建物跡２号実測図・・・・・・・・・118
第99図　礎石建物跡３号実測図・・・・・・・・・119
第100図　布基礎実測図・・・・・・・・・・・・120
第101図　近世以降瓦質土器実測図・・・・・・・122
第102図　近世以降磁器実測図（１）・・・・・・・123
第103図　近世以降磁器実測図（２）・・・・・・・124
第104図　近世以降陶器実測図（１）・・・・・・・125
第105図　近世以降陶器実測図（２）・・・・・・・126
第106図　近世以降陶器実測図（３）・・・・・・・127
第107図　近世以降陶器実測図（４）・・・・・・・128
第108図　近世以降金属遺物実測図・古銭・・・・・130

第５章　自然科学分析

第109図　古代３号土坑の暦年較正年代グラフ・・・132
第110図　中近世６号礫集積の暦年較正年代グラフ・132
第111図　弥生時代早期土器の暦年較正年代グラフ・134
第112図　古代モモ核の暦年較正年代グラフ・・・・134
第113図　縄文時代前期末～中期前葉土器の暦年較正年代グラフ・・・・・・・・・・・・・・・135
第114図　縄文時代晩期土器の暦年較正年代グラフ・135
第115図　二渡船渡ノ上遺跡から出土した炭化種実と現生標本・・・・・・・・・・・・・・・・135
第116図　プレス試料及び元素マッピング図・・・・137
第117図　火山ガラスの屈折率（ｎ１）・・・・・・138
第118図　テフラ中の火山ガラス・鉱物の顕微鏡写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第119図　No.181外面付着顔料の成分（スペクトル）142

第６章　総括

第120図　土錘の出土状況・・・・・・・・・・・・144
第121図　縄文時代前期～晩期土器垂直分布（１）・145
第122図　縄文時代前期～晩期土器垂直分布（２）・145
第123図　二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡の遺跡範囲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146

表　目　次

表１　試掘調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・３
表２　周辺遺跡一覧表（さつま町）・・・・・・・・・12
表３　周辺遺跡一覧表（薩摩川内市）・・・・・・・・12

第３章　二渡船渡ノ上遺跡

表４　土器分類表・・・・・・・・・・・・・・・・・16
表５　石材分類表・・・・・・・・・・・・・・・・・19
表６　石器分類表・・・・・・・・・・・・・・・・・19
表７　二渡船渡ノ上遺跡基本土層・・・・・・・・・・20
表８　縄文時代中期土器観察表・・・・・・・・・・・23
表９　縄文時代晩期土器観察表（１）・・・・・・・・47
表10　縄文時代晩期土器観察表（２）・・・・・・・・48
表11　縄文時代晩期土器観察表（３）・・・・・・・・49
表12　縄文時代晩期土製品観察表・・・・・・・・・・49
表13　縄文時代晩期石器観察表・・・・・・・・・・・63
表14　弥生時代土器観察表・・・・・・・・・・・・・67
表15　古墳時代土器観察表・・・・・・・・・・・・・68
表16　古代ピット計測表・・・・・・・・・・・・・・76
表17　古代遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・77
表18　中世～近世遺物観察表・・・・・・・・・・・・81

第４章　山崎野町跡Ａ

表19　土器分類表・・・・・・・・・・・・・・・・・86
表20　石器器種分類表・・・・・・・・・・・・・・・87
表21　山崎野町跡Ａ基本土層・・・・・・・・・・・・88
表22　縄文時代早期土器観察表・・・・・・・・・・・91
表23　縄文時代早期石器観察表・・・・・・・・・・・94
表24　縄文時代前期～晩期土器観察表・・・・・・・100
表25　縄文時代前期～晩期石器観察表（１）・・・・109
表26　縄文時代前期～晩期石器観察表（２）・・・・110
表27　弥生・古墳時代土器観察表・・・・・・・・・112
表28　掘立柱建物跡計測表・・・・・・・・・・・・115
表29　古代・中世土器観察表・・・・・・・・・・・115
表30　礎石建物跡１号計測表・・・・・・・・・・・121
表31　礎石建物跡２号計測表・・・・・・・・・・・121
表32　礎石建物跡３号計測表・・・・・・・・・・・121
表33　布基礎計測表・・・・・・・・・・・・・・・121
表34　陶磁器類観察表・・・・・・・・・・・・・・129
表35　金属製品観察表・・・・・・・・・・・・・・130
表36　古銭観察表・・・・・・・・・・・・・・・・130

第５章　自然科学分析

表37　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑴・132
表38　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑵・132
表39　測定試料及び処理・・・・・・・・・・・・・133
表40　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果・・134
表41　二渡船渡ノ上遺跡から出土した炭化種実・・135
表42　分析試料・・・・・・・・・・・・・・・・・136
表43　半定量分析結果・・・・・・・・・・・・・・136
表44　屈折率測定結果・・・・・・・・・・・・・・138
表45　山崎野町跡Ａのテフラ分析結果⑴・・・・・139
表46　山崎野町跡Ａのテフラ分析結果⑵・・・・・140
表47　№181外面付着顔料の成分分析結果・・・・・142

図　版　目　次

二渡船渡ノ上遺跡

図版１　縄文時代中期・晩期の調査状況・・・・・147
図版２　縄文時代晩期の調査状況・・・・・・・・148
図版３　古代の調査状況・・・・・・・・・・・・149
図版４　中近世・近代の調査状況・・・・・・・・150
図版５　近代の調査状況・調査風景・・・・・・・151
図版６　縄文時代中期・晩期の土器・・・・・・・152
図版７　縄文時代晩期の石器・・・・・・・・・・153
図版８　弥生時代・古墳時代の土器・・・・・・・154
図版９　古代・中近世の遺物・・・・・・・・・・155

山崎野町跡Ａ

図版10　北側調査区（１）・・・・・・・・・・・156
図版11　北側調査区（２）・・・・・・・・・・・157
図版12　北側調査区（３）・南側調査区・・・・・158
図版13　出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・159
図版14　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・160
図版15　出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・161
図版16　出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・162

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

平成18年７月，薩摩地方北部を記録的な豪雨が襲った。特に川内川流域は県境を越えた宮崎県えびの市から河口の薩摩川内市まで甚大な被害を受ける災害となった。同年10月には，川内川激甚災害対策特別緊急事業（平成18～22年度の５か年）が採択され，復興へのスタートを切ることとなった。

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，同年11月，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所（以下，川内川河川事務所）は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に先立って，41か所の事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は，平成18年12月に川内川流域の湧水町・菱刈町・大口市・さつま町・薩摩川内市内の埋蔵文化財分布調査を実施した結果，18か所について埋蔵文化財調査が必要であることが明らかとなった。

この結果をもとに，平成19年２月に川内川河川事務所は，県文化財課へ埋蔵文化財調査対象地の試掘調査実施を依頼し，県文化財課は同月の下ノ原Ｂ遺跡（伊佐市）の調査を皮切りに，調査着手の条件が揃ったところから試掘調査を進めることとなった。

さつま町二渡船渡ノ上遺跡については，平成19年３月８日に県文化財課が用地買収済部分を対象に試掘調査を実施し，遺物包含層が残っていると考えられる部分（約4,000㎡）について本調査の対象となることが明らかとなった。

本調査は，用地買収の進捗にあわせ，平成19年12月～平成20年２月，平成21年９月～11月，平成22年１月～３月の３期に分けて県立埋蔵文化財センターが実施した。最終的な調査面積は当初に比べ遺跡の拡がりが確認されたことから，5,000㎡であった。

さつま町山崎野町跡Ａ地点については，平成21年２月16日と平成21年11月５日・６日に県文化財課が試掘調査を実施し，遺物包含層の存在が確認された。

本調査は，用地買収の進捗にあわせ，平成22年１月～３月と平成22年７月の２回に分けて県立埋蔵文化財センターが実施した。最終的な調査面積は，3,800㎡であった。

整理・報告書作成作業については，平成21年４月～平成22年３月と平成22年４月～平成23年３月の２期にわたって県立埋蔵文化財センターで実施し，平成23年３月に報告書刊行の運びとなった。

第２節　事前調査

１　分布調査

二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡の分布調査は，平成18年12月26日に川内川河川事務所からの依頼を受け，県文化財課が実施した。

二渡船渡ノ上遺跡の工事対象地は，周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されている部分を中心に，工事の内容と遺跡の現状を把握しながら調査を進めた。

また，山崎野町跡Ａ地点については，周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが，野町の略図に見える「板倉」や「ムシロ倉」の位置にあたることもあり，表面採集とともに地形の現状について野町略図と照合しながら調査を進めた。

なお，山崎野町跡は，川内川本流とそれに合流する久富木川沿いにあり，築堤や掘削等の工事箇所も数か所に分かれたことから，分布調査も各箇所を対象に実施し，国土交通省管轄部分をＡ地点，県土木部河川課管轄部分をＢ・Ｃ・Ｄ地点として対応することとし，本報告部分は川内川と久富木川の合流点にあたる部分で，Ａ地点とすることとした。

その結果，二渡船渡ノ上遺跡は，隣接する圃場整備工事の際に遺構・遺物が発見されていることや，畑地表面から遺物が採集されること等から，工事対象地は試掘調査の実施が必要と判断した。

また，山崎野町跡Ａ地点についても，野町略図との関係を把握する必要性があることから，試掘調査の実施が必要と判断した。

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長	中尾　理
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長補佐	前原　浩一
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	青﨑　和憲
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	前迫　亮一
調査協力	さつま町教育委員会	
	課長	川添　俊行
	主査	村原　政樹

2　試掘調査（二渡船渡ノ上遺跡）

二渡船渡ノ上遺跡の試掘調査は平成19年３月８日に買収済の土地を対象に実施した。

調査は，約３×３ｍを基本とするトレンチを６か所設定し，小型バックホウによる掘下げを中心に進めた。地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら掘下げを行った。トレンチは，状況に応じて拡張しながら進めた。

その結果，1～４トレンチからは，遺構・遺物共に発見されなかった。

５トレンチ及び６トレンチでは古代から中・近世の遺構・遺物が確認された。

また，6トレンチから北東方向にかけて，縄文時代晩期頃の遺物が表面採集や切り通しの土層断面で観察できたことから，かつて町教委が調査した区域にかけて遺跡が続いている可能性が高いことが判明し，約4,000㎡について本調査が必要となった。試掘調査の総面積は56.62㎡であった。

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課　長	木原　俊孝
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長補佐	前原　浩一
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	青﨑　和憲
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	前迫　亮一
調査協力	さつま町教育委員会	
	課　長	川添　俊行
	主　査	村原　政樹
立会者	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
	専門職	山本　幸次
	専門員	酒匂　俊輔

3　試掘調査（山崎野町跡Ａ：第１次）

山崎野町跡Ａ地点の試掘調査は，用地買収の進捗を見ながら，平成21年２月16日（第１次試掘調査）と平成21年11月５日・６日（第２次試掘調査）の２回に分け，県文化財課が実施した。

第１次試掘調査は，買収済の土地を対象に，約３×３ｍを基本とするトレンチを４か所設定し，小型バックホウによる掘下げを中心に進めた。地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら掘下げを行った。トレンチは，状況に応じて拡張しながら進めた。

その結果，1～４のいずれのトレンチからも遺構は検出されなかった。また，明瞭な遺物包含層も確認できなかった。

ただし，1トレンチ付近は，野町に関連すると考えられる近世の倉跡等が想定される部分であることや，2トレンチや３トレンチの表土及びその周辺からは縄文時代の遺物が出土したため，約4,000㎡について本調査が必要となった。第１次試掘調査の総面積は32.48㎡であった。

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課　長	有川　昭人
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長補佐	福山　徳治
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	堂込　秀人
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	前迫　亮一
調査協力	さつま町教育委員会	
	課　長	川添　俊行
	主　査	村原　政樹
立会者	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
	宮之城出張所　所　長	佐藤　耕作
	技術係長	橋本裕二郎

4　試掘調査（山崎野町跡Ａ：第２次）

第２次試掘調査は，第１次調査後に買収された土地を中心に，約２×３ｍを基本とするトレンチを８か所設定し，小型バックホウによる掘下げを中心に進めた。掘下げは地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら行った。

トレンチは，状況に応じて拡張しながら進めたため，２トレンチの２×17mのようにロングトレンチとなるものや１トレンチのように調査面積が50㎡を越えるものもあった。試掘調査総面積は163.6㎡であった。

その結果，1～４トレンチからは，表土下で礎石と考えられる石や石列，竈跡，土坑等が検出された。

５・６トレンチは20年ほど前の製材所解体工事により，攪乱を受け遺構面が残存していなかった。近世以前に関して，旧石器時代相当層まで掘り下げたが，遺物包含層は確認できなかった。

７・８トレンチでは，表土除去後すぐに縄文時代晩期相当の土器や石斧，黒曜石が出土し，土坑も検出された。

２回の試掘調査結果をふまえ，1～４トレンチ周辺と７・８トレンチ周辺について，本調査が必要なことが判明した。

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課　長	有川　昭人
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長補佐	中尾　純則
	埋蔵文化財係長	堂込　秀人
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	中村　和美
調査協力	さつま町教育委員会	
	課　長	川添　俊行
	主　事	小倉　浩明
	埋蔵文化財専門員	佐藤　真人
立会者	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
	工務課	佐藤　亜彦

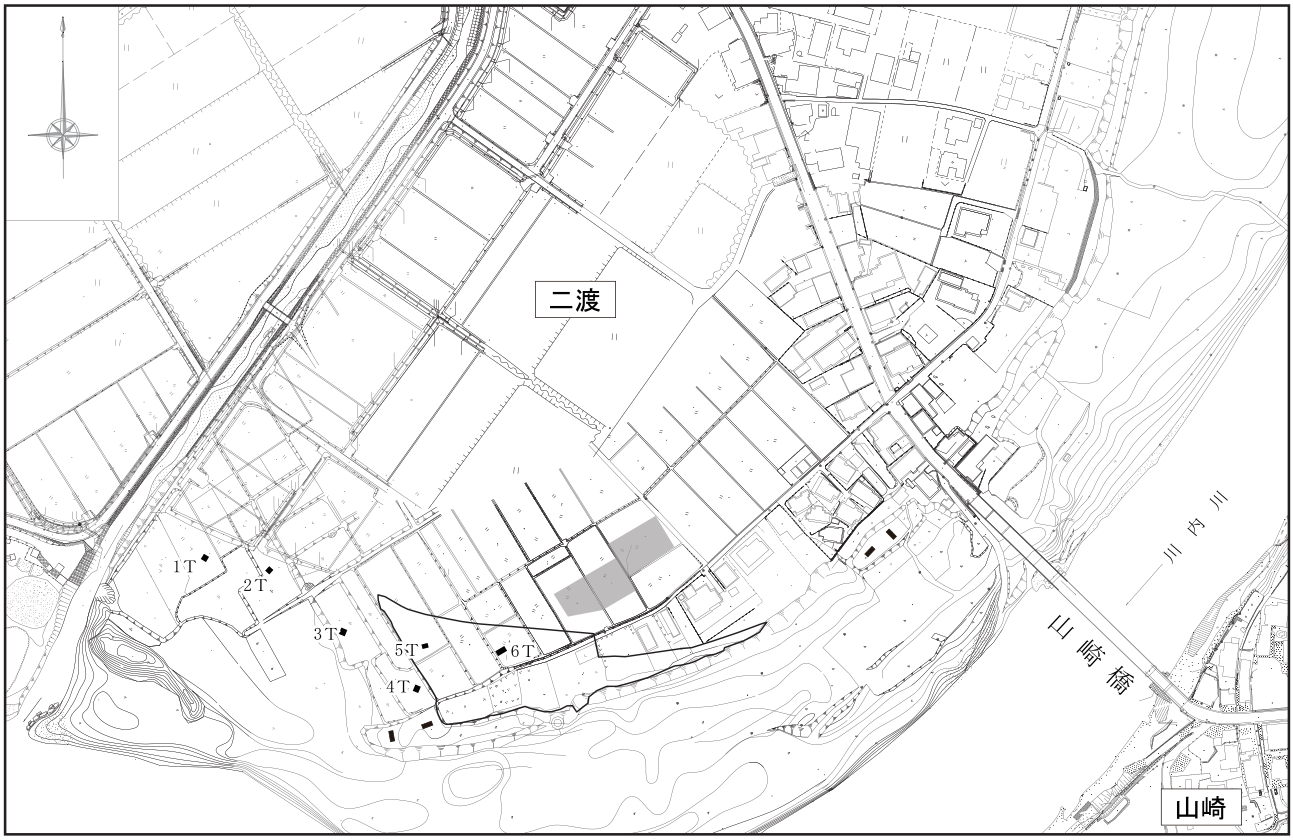
表１　試掘調査結果

二渡船渡ノ上遺跡

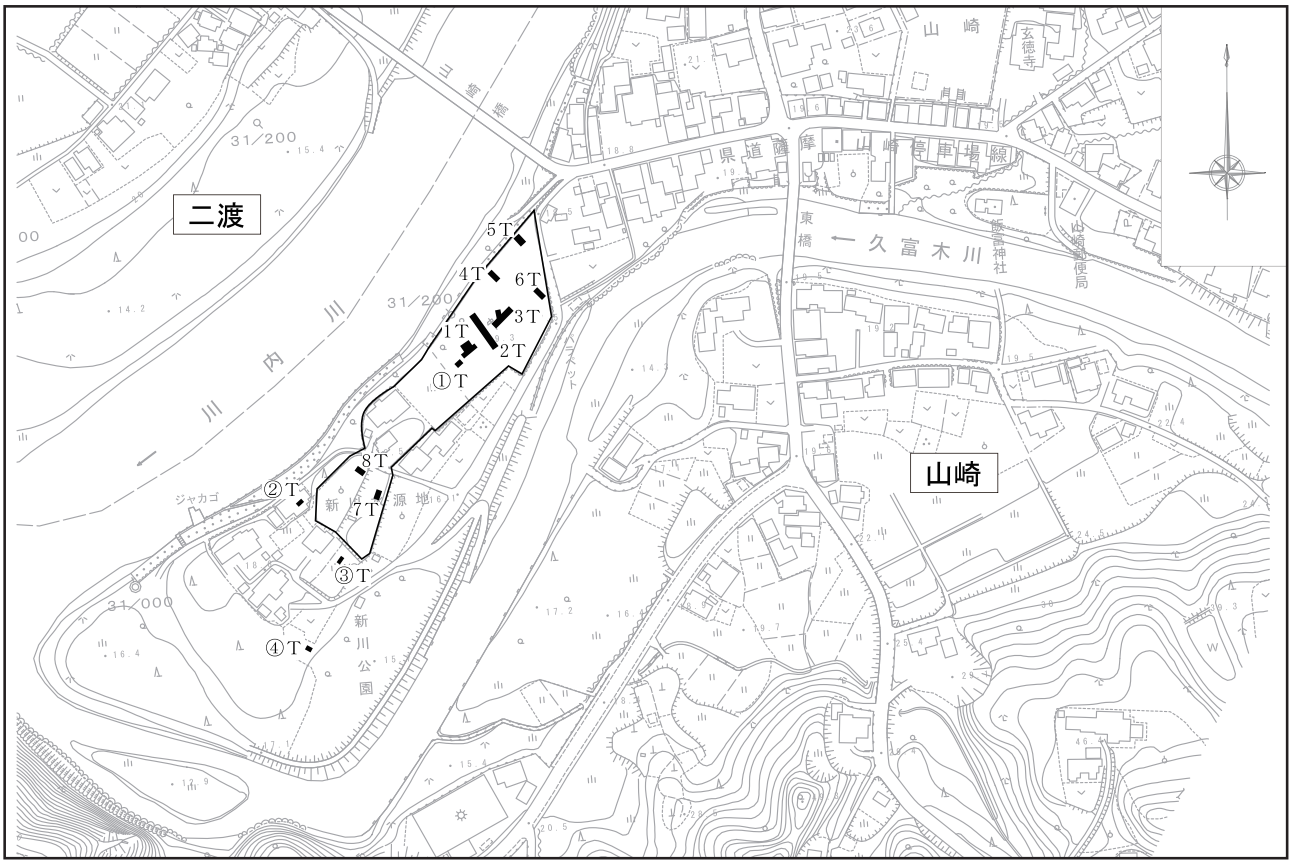
トレンチＮｏ.	面積（㎡）	遺構	遺物	時代・時期	包含層までの深さ（㎝）	備考
1	9.00	－	－		－	
2	7.84	－	－		－	
3	9.00	－	－		－	
4	7.84	－	－		－	
5	7.28	柱穴？	土師器 陶磁器	古代～中近世	40	Ⅳ・Ⅴ層
6	15.66	石列，溝	土師器 陶磁器	古代～中近世	50	遺構は近世の灌漑施設か？
調査総面積		56.62　㎡				

山崎野町跡Ａ

トレンチＮｏ.	面積（㎡）	遺構	遺物	時代・時期	包含層までの深さ（㎝）	備考
①	9.80	－	－		－	
②	7.20	－	－		－	
③	9.00	－	－		－	
④	6.48	－	－		－	
1	52.30	竈跡，礎石石列	陶器	近世以降	20	
2	34.00	礎石		近世以降	10～70	
3	34.80	土坑		近世以降	40～50	
4	12.70	－	－		－	
5	9.80	－	－		－	
6	8.00	－	－		－	
7	6.00	－	土器	縄文時代晩期	30	Ⅲ層：明茶褐色土
8	6.00	土坑	土器，石斧 黒曜石	縄文時代晩期	10	Ⅱ層：茶褐色土
調査総面積		196.08　㎡				



第１図　二渡船渡ノ上遺跡試掘トレンチ位置図
（網フセは，旧宮之城町が平成12年に調査した範囲，番号のないトレンチは，本調査中に試掘を実施）



第２図　山崎野町跡Ａ試掘トレンチ位置図　（①～④は第１次試掘）

第３節　本調査

１　調査概要

二渡船渡ノ上遺跡は，用地買収の進捗に応じて平成19年12月４日～平成20年２月27日（作業員実働49日間），平成21年９月７日～11月27日（作業員実働44日間），平成22年１月20日～３月19日（作業員実働37日間）の期間で行った。調査面積は，5,000㎡である。

山崎野町跡Ａについては，平成22年１月20日～平成22年３月19日（作業員実働37日間），平成22年７月１日～７月27日（作業員実働19日間）の期間で行った。調査面積は，3,800㎡である。

２　調査体制

本調査に係る期間の組織体制は，年度ごとにまとめると以下のとおりである。

⑴　平成19年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	宮原　景信
調査企画	次長兼総務課長	平山　章
	次長兼南の縄文調査室長	新東　晃一
	調査第一課長	池畑　耕一
	主任文化財主事	
	兼調査第一課第二調査係長	中村　耕治
調査担当	文化財主事	東郷　克利
	文化財主事	森　雄二
	文化財主事	富山　孝一
事務担当	総務係長	寄井田正秀
調査指導	鹿児島国際大学短期大学部	
	名誉教授	三木　靖
	鹿児島大学法文学部	
	教授	渡辺　芳郎

⑵　平成21年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	齋藤　守重
	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	調査第一課長	中村　耕治
	主任文化財主事	
	兼調査第一課第二調査係長	宮田　栄二
調査担当	文化財主事	佐藤　義明
	文化財主事	森　雄二
	文化財主事	吉岡　康弘
	文化財主事	永濵　功治
事務担当	総務係長	紙屋　伸一
調査指導	鹿児島大学法文学部	
	准教授	本田　道輝
	鹿児島大学法文学部	
	准教授	森脇　広

⑶　平成22年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	調査第一課長	長野　眞一
	文化財主事	
	兼調査第一課第二調査係長	八木澤一郎
調査担当	文化財主事	森　雄二
	文化財主事	羽嶋　敦洋
事務担当	総務係長	大園　祥子

３　調査経過

本調査は，事業区内の用地買収の進捗に合わせ，4期に分けて実施した。１期調査は，平成19年12月～平成20年２月の約３か月で二渡船渡ノ上遺跡2,000㎡を調査した。２期調査は，平成21年９月～平成21年11月の約３か月で二渡船渡ノ上遺跡2,180㎡を調査した。この２期調査の中で確認調査を実施したところ，二渡船渡ノ上遺跡の範囲が自然堤防上に拡大することが明らかになった。そこで３期調査は，平成22年１月下旬～平成22年３月の約２か月で二渡船渡ノ上遺跡の遺跡拡大範囲の820㎡と山崎野町跡Ａ2,850㎡を併行して調査した。４期調査は，平成22年７月の１か月で山崎野町跡Ａ950㎡を調査した。

調査面積は，二渡船渡ノ上遺跡が5,000㎡，山崎野町跡Ａが3,800㎡である。計画していた調査をすべて終了した。なお，調査の詳しい経過は，各遺跡の調査日誌に基づき，第３章・第４章で略述する。

第４節　整理・報告書作成作業

１　作成概要

発掘調査報告書作成に伴う出土遺物及び遺構実測図面等の整理作業は，二渡船渡ノ上遺跡に関して平成19年度の調査終了後に一時開始したが，本格的な作業は平成21年度・平成22年度に実施した。平成21年度は，9月から11月（二渡船渡ノ上遺跡），翌年１月から３月（二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡Ａ）の２回の発掘調査と並行して基礎作業（遺物の注記・接合と遺構図面の整理）と土器実測の一部を行った。平成22年度は，7月に実施した山崎野町跡Ａ発掘調査と並行して，両遺跡の基礎作業から遺物の分類・実測など報告書作成作業全般を行った。

作業は県立埋蔵文化財センターで行い，報告書は平成22年度に２遺跡の内容を合本で刊行することとした。

２　作成体制

報告書作成に係る期間の組織体制は，年度ごとにまとめると以下のとおりである。

⑴　平成21年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
作成企画	次長兼総務課長	齋藤　守重
	次長兼南の縄文調査室長	青崎　和憲
	調査第一課長	中村　耕治
	主任文化財主事 兼調査第一課第二調査係長	宮田　栄二
作成担当	文化財主事	佐藤　義明
	文化財主事	森　雄二
事務担当	総務係長	紙屋　伸一

⑵　平成22年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
作成企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	調査第一課長	長野　眞一
	文化財主事 兼調査第一課第二調査係長	八木澤一郎
作成担当	文化財主事	内山　伸明
	文化財主事	森　雄二
事務担当	総務係長	大園　祥子
企画担当	文化財主事	関　明恵
	文化財主事	黒川　忠広
調査指導	鹿児島大学法文学部 教授	渡辺　芳郎

３　作成経過

整理作業の具体的経過については，主な作業を月ごとに記しておく。

⑴　平成21年度

◇４月～７月
　注記，分類・選別，復元（平成19年度の遺物）
◇８月・９月
　土器実測
◇12月～３月
　洗浄，注記，分類・選別，復元

⑵　平成22年度

◇４月
　洗浄，注記，分類・選別，復元
◇５月～７月
　土器復元，図面整理，遺構トレース，遺物実測，石器実測委託
◇８月
　洗浄，注記，分類・選別，復元
◇９月・10月
　土器復元，図面整理，遺構トレース，遺物実測・トレース，科学分析委託，石器実測委託
◇11月・12月
　写真撮影，レイアウト，原稿執筆，印刷起案・入札
◇１月～３月
　校正，遺物・図面等の整理，収納作業

⑶　報告書作成指導委員会

平成22年11月29日　次長ほか３名

⑷　報告書作成検討委員会

平成22年12月１日　所長ほか９名

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡の所在するさつま町は，伊佐市・出水市・薩摩川内市・霧島市に接し，周囲は北に矢筈岳・宮ノ尾山・国見岳，東に安良岳・烏帽子岳・中ノ岳・片城山・船見岳，南に八重山・冠岳・雄岳，西に紫尾山に囲まれ，川内盆地の一部となっている。

さつま町の中央をほぼ南北に流れる川内川は，熊本県白髪岳（1417m）に源を発し，宮崎県えびの市を中心とした西諸県盆地を流れ，本県の大口盆地，川内平野を貫流し，東シナ海に注ぐ，幹線流路137㎞，流域面積1636㎢の九州屈指の河川である。流域の市町は，宮崎県えびの市，本県の湧水町・伊佐市・さつま町・薩摩川内市の三市二町であり，川内川に合流する支流は109河川を数える。支流には，北から柊野を流れる夜星川，平川大薄を流れる大薄川とが紫尾で合流して柏原までの夜星川，上平川から下平川，海老川を経て推込付近までの海老川，泊野・母ヶ野・一ツ木・白男川を流れて川口までの泊野川，仮屋原で南方川と合流し，田原，時吉を経て轟の瀬付近までの穴川，祁答院から久富木を流れて山崎までの久富木川がある。その他，屋地を流れる東谷川，豊川・虎居を流れる後川，船木を流れる五反田川，二渡を流れる大山口川などの小さい支流がある。川内川とこれに流入するこれらの河川による浸食・運搬・堆積により，沖積地や河岸段丘が形成されている。この地域の地質は四万十累層群を基盤としている。北部の紫尾山地は四万十累層群とこれに貫入した花崗閃緑岩からなる。南部及び東部には四万十累層群に貫入した火山岩類が低い山地を形成している。また，紫尾山地を除く広い範囲に今から約30万年前から約２万５千年前の火砕流堆積物が分布している。

今回報告する２遺跡は，川内川と久富木川の合流地点から約250m上流に架かる県道薩摩山崎停車場線の山崎橋付近に位置する。川内川右岸の標高約20mの自然堤防が二渡船渡ノ上遺跡で後背地に水田が開けている。北から小河川の大山口川が流れ川内川に合流する。標高は，川内川に近いほど高く，大山口川にいくほど低くなっていく。その高低差は約７mある。川内川及び大山口川の影響と水田等に土地を利用されていたことから砂・シルト・粘土などが堆積し，桜島や霧島火山噴出のローム層をほとんど確認できない。また，二渡船渡ノ上遺跡の範囲は，地形的にみて川内川に沿って上流の方へのびているものと思われる。二渡船渡ノ上遺跡の対岸で久富木川と川内川に挟まれた地点が山崎野町跡Ａである。地形は，久富木川が南へ大きく弯曲し川内川に合流するために三方を河川に囲まれ，標高約19mの河岸段丘である。河川の氾濫による砂泥の堆積層と浸食による切り立った岸がが見られる。

第２節　歴史的環境

さつま町の中央を流れる川内川やその支流周辺には肥沃な台地が多く，先史時代から人々の生活に適した地域であったと考えられる。山崎と二渡においても周囲に各時代の遺跡があり，人々の生活を窺い知ることができる。

旧石器時代の遺跡と断定できないが，米ノ山遺跡が久富木の台地上に存在する。平成５年度に県文化財課が行った分布調査で黒曜石の剥片を採集し，細石核の調整剥片があることから旧石器時代の遺跡である可能性がある。現在のところ旧石器時代遺跡の発見例は数少ないが，川内川を中心とする生活圏が存在した可能性は高い。

縄文時代の遺跡は，大畝町園田遺跡，園田遺跡や甫立原遺跡等が代表的である。まず，久富木に所在する大畝町園田遺跡では，早期の手向山式土器，前期の轟式土器，曽畑式土器，中期の阿高式土器，後期の出水式相当土器，晩期の黒川式土器等が出土し，この地域で長期間安定した生活が営まれていた様相が窺える。また，虎居に所在する甫立原遺跡では，縄文時代早期の押型文土器が出土している。さらに，虎居海老川に所在する松尾城及び宗功寺跡では，縄文時代早期・中期・晩期の土器や磨製の鑿形石斧を含む石器等が出土している。その他，東下原遺跡・西下原遺跡・舟木原遺跡・原畑遺跡・下原遺跡・坪井遺跡・米ノ山遺跡・川添遺跡・宮ヶ原遺跡・諏訪下遺跡・荒瀬上原遺跡・上大原遺跡・内堀遺跡・山角遺跡・上原遺跡・下川内遺跡・丸岡遺跡・茶屋ヶ段遺跡などが発見されている。

弥生時代の遺跡は，町内で少ない。大畝町園田遺跡や時吉地区一帯及び湯田地区の山越，湯田原地区では弥生時代の土器片が発見されている。

古墳時代の遺跡は，成川式土器が町内各地で採集されており，柊崎遺跡・舟木原遺跡・下原遺跡・四目ヶ迫遺跡・坪井遺跡・鷹ノ巣遺跡・米ノ山遺跡・堂ノ前遺跡・川添遺跡・宮ヶ原遺跡・荒瀬上原遺跡・前床遺跡・上大原遺跡・内堀遺跡・上原遺跡では，成川式土器片が採集されている。また，原畑遺跡・西下原遺跡・下川内遺跡では，成川式土器片が多量に散布し，東下原遺跡では，成川式土器に加えて須恵器が採集されている。加えて本遺跡からは距離があるが，薩摩隼人の墓制といわれる地下式板石積石室墓が別府原古墳群・日露古墳・湯田原古墳・小松原古墳にあり，鉄刀・鉄剣・鉄鏃などが副葬品として出土している。また，湯田原や轟原で採集された土器には高坏が多く，内外面に丹を塗り研磨されたものがある。

古代には，さつま町は薩摩国高城郡に属する。『和名抄』には，高城六郷として合志・飽田・鬱木・宇都・新多・託万の名があげられている。合志を鶴田町神子に，鬱木を宮之城町一ツ木に，新多を薩摩川内市新田八幡宮付近に比定する説がある。平安時代の遺跡は発見例が少なく，

坪井遺跡・上大原遺跡が発見されている。

平安時代末期には，大前氏が山崎を含む祁答院地方を支配する。その後，南北朝時代に関東から下向した渋谷氏が祁答院地方を支配することが，「祁答院記」や「山崎名勝志再撰方志ら遍帳留」及び「三国名勝図絵」などからうかがわれる。これら資料によると本遺跡周辺は，祁答院氏第七代重茂の三男重直が山崎城の領主，東郷渋谷氏第六代氏親の七男正重が二渡地区の北西側にある山城「高城」の領主となりこの地域を支配していたことがわかる。そして，永禄９年（1566年）十三代良重の代で約300年にわたる渋谷氏の支配が終わり，島津氏の支配が始まった後に，豊臣秀吉が天正15年（1587年）に島津討伐のため薩摩へ侵攻し，肥後路を南下してきた。その際，豊臣秀吉は５月３日に薩摩に入り川内の泰平寺で島津義久の降伏を受け入れ，帰路の途中，当時から交通の要所であった二渡を通り川内川の対岸にある山崎城に泊をとったといういわれが有名である。この頃の遺跡には，山城の長松院跡・舟木の古城跡・高城跡・山崎城跡・久富木城跡・松尾城跡・於天城跡・余ヶ城跡が知られている。また，城館跡の恋ノ巣城跡と古戦場の牧の峯，寺医院跡の浄福寺跡，法円寺跡が知られている。平成５年の分布調査で青磁が上原遺跡から採集された。また，土師器が柊崎遺跡から採集された。他にも大畝町園田遺跡・上大原遺跡が知られている。

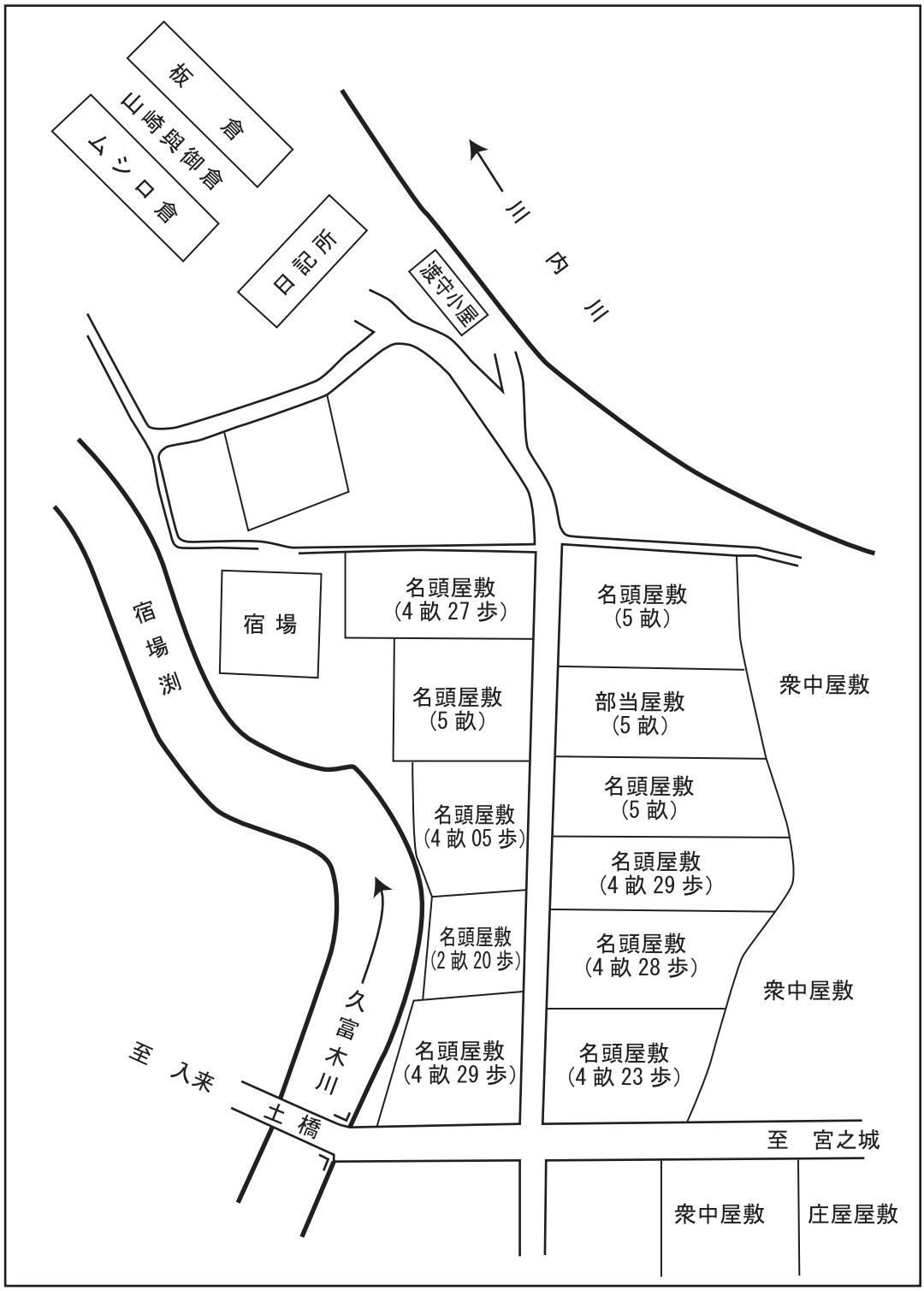
近世の頃になると「旧記雑録」に寛永16年（1639年）の外城薩摩三十七か所の中に山崎郷の名があり，慶長19年（1614年）大村郷から久富木村が山崎郷に加わり，明暦から万治（1655～1660年）の頃に東郷渋谷氏の勢力藩であった二渡・白男川・泊野の３つの村が加わり，山崎を含め５つの村で郷が成り立った。地理的に山崎郷は，私領の宮之城・入来・藺牟田と境を接し，四方（大村・樋脇・副田・宮之城）への街道が交差しているので交通の要衝であった。そのため山崎郷の藩政時代は島津氏の直轄地（地頭所）であった。当初，地頭仮屋は山崎野町の宿場屋敷付近にあったが，文化11年（1814年）に現在の山崎小学校付近に移され明治維新まで続いた。その頃の山崎野町の様子については宮之城町史に絵図（第３図）があり，山崎町の十文字付近から川内川岸までの間に名頭屋敷と部当屋敷が道の両側に並び，町人が生活していた様子がうかがえる。また，今回発掘調査を行った場所には山崎輿御倉があったと考えられ，その関係で宿場があり，目前に流れる久富木川のところを宿場渕と呼んでいた。

山崎野町跡は川内川の支流である久富木川にかかる東橋の西側一帯に位置する。川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う県道山崎川内線（山崎２東橋）改良事業に伴い，平成21年９月７日から平成21年９月18日まで調査を実施している。トレンチ調査の結果，宅地として造成，盛土され，遺物包含層は確認されなかった。しかし，久富木川に面した石垣については，実測を行い記録保存がなされた（第４図）。

石垣上部は切石を各段の高さを水平に揃えて積まれ，一部セメントの使用も確認できる。また，周辺地域の歴史からも明らかなように，明治初期に宅地の造成が行われた時期のものであることが確認できた。さらに，石垣東端部は昭和年間に至るまで道路工事で使われた長方形の平石の隅を立てて積む谷積であった。隣接する東橋の建設に伴い，昭和初期に一部改築されたものと考えられる。石垣下部は，自然石を加工せずに積み上げただけで石の形に統一性がなく，石同士がかみ合っていない。排水性に優れているが，技術的に初期の石積法である。明治以前に築かれたもので江戸時代の野町に関連する石垣と考えられる。なお，近世の遺跡は，寺院跡の清庵寺跡と養庵寺跡がある。

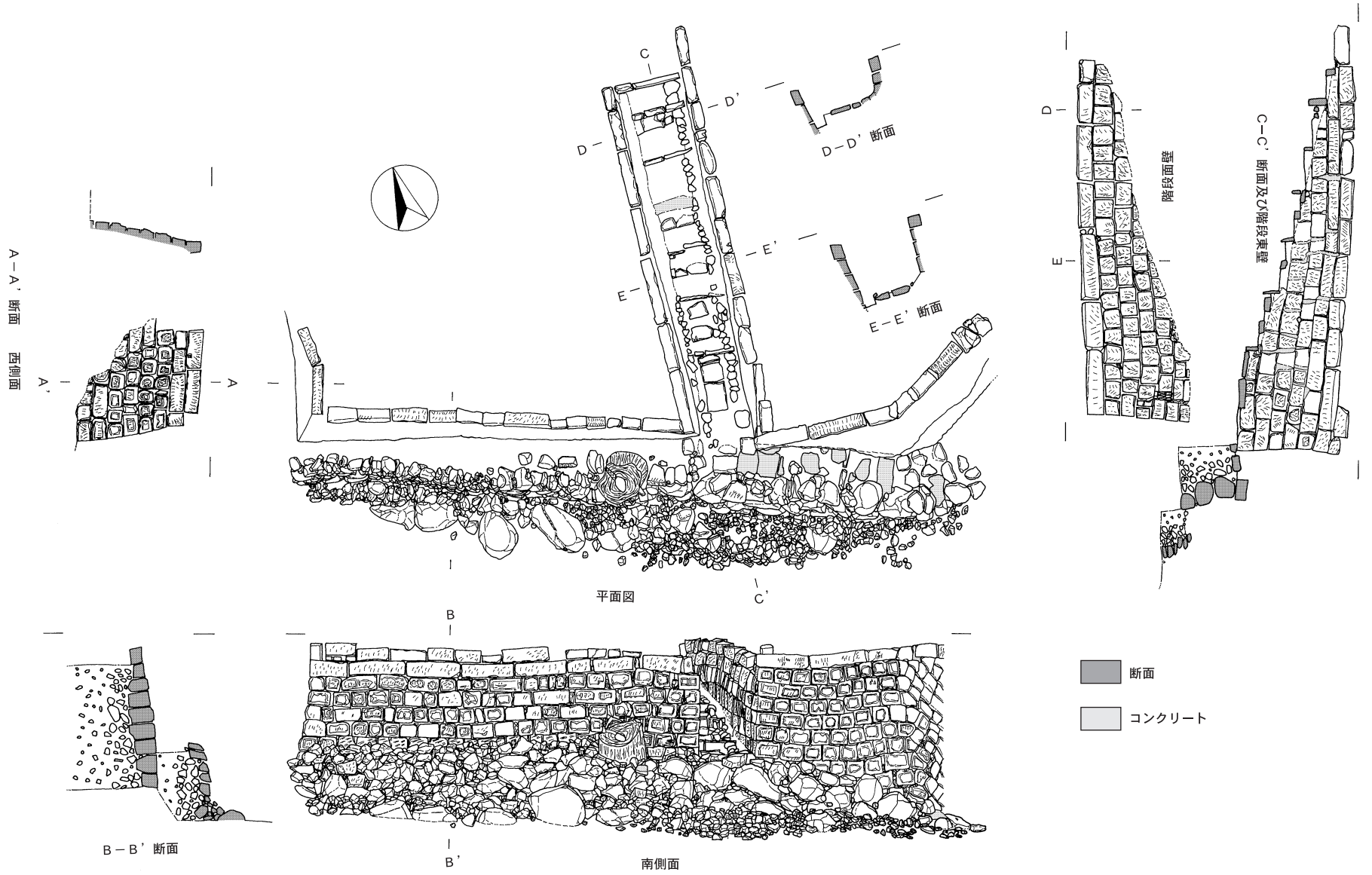
山崎野町跡調査範囲遠景

石垣近景

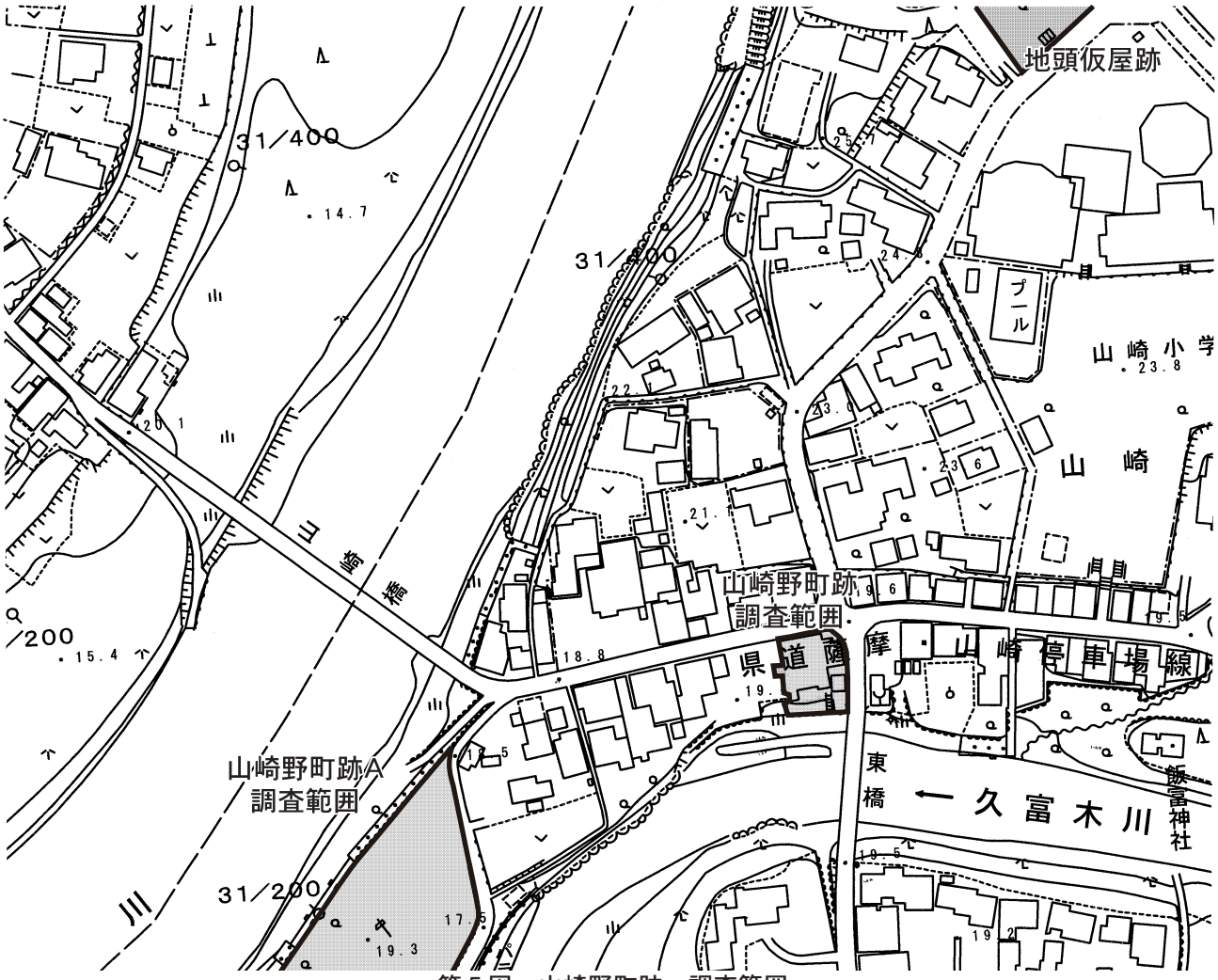


旧宮之城町史 229 頁に掲載されている図を基に作成

第 3 図　山崎野町地図



第４図　山崎野町跡　石垣実測図



第５図　山崎野町跡　調査範囲

当時の産業で特筆されるものは，養蚕・茶業及び稲作がある。養蚕は，島津家二代忠長が加世田から宮之城に移封されたときに同行した家臣が養蚕業を興したと言われる。また，茶業は，宮之城島津家４代久通が京都の宇治から茶の実を持ち帰り栽培したのが始まりと言われている。山崎郷御仮屋文書の明治３年の諸廻文に茶業が記され，現在でも地域の高台では盛んに栽培されている。近世中期である享保年間には，各地で新田開発が盛んに行われ，二渡地区の二渡新田は享保14～16年（1729～1731年）の頃の宮之城島津家による開発と伝えられている。なお当一帯の水田への用水は，川内川の上流にある泊野川から水を引き南瀬までの延長約7.5㎞にわたる井手溝からの用水が現在も使われており，途中には岩盤を掘り抜いた隧道が何か所もある。

次に交通は，街道による陸上交通の要衝であったことは前述したが，川内川の舟運も重要であった。島津忠長の家老稲冨掃部介長元（元周）が川舟を造らせ，川内川を下らせたのが舟運の起こりと言われ，慶長の頃（1600年代）から，宮之城と川内の間で舟による荷物・旅客の往来が行われた。当時の荷物は，下りが米・雑穀・木

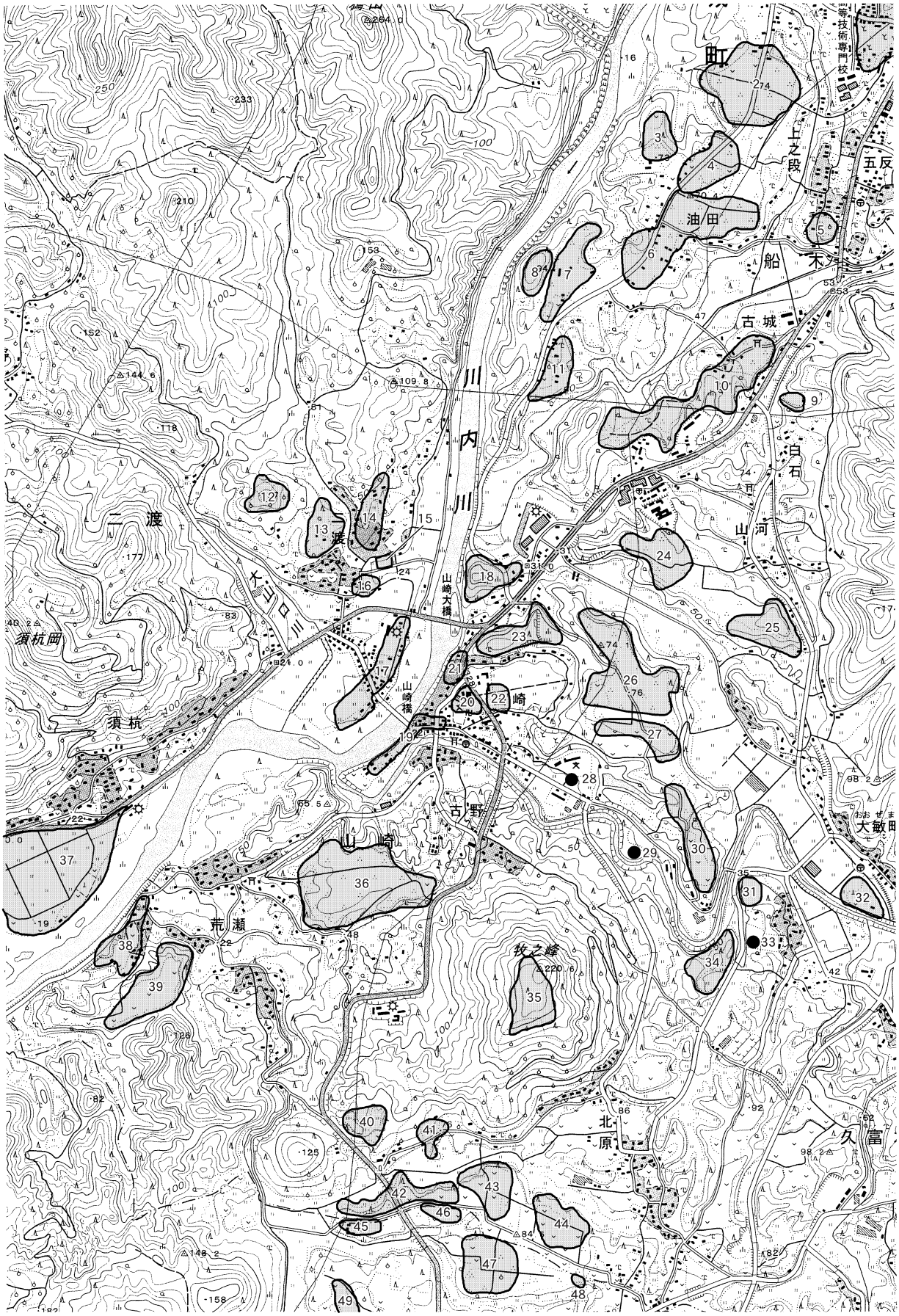
二渡新田（隧道）

表２　周辺遺跡一覧表（さつま町）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代							備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
1	柊崎	船木	台地				●		●		Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
2	舟木原	船木	台地		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
3	下原	船木	台地		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
4	原畑	船木	台地		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
5	長松院跡	船木	台地						●		中世山城跡
6	四目ヶ迫	船木字坪井ほか	台地				●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
7	坪井	船木	台地		●		●	●	●		Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
8	於天城跡	船木	台地						●		
9	恋ノ巣城跡	船木字城ノ段	丘陵						●		中世城館跡
10	舟木の古城跡	船木	台地						●		中世山城跡
11	鷹ノ巣	船木	台地				●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
12	高城跡	二渡	丘陵						●		中世山城跡
13	宮ヶ原	二渡	台地		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
14	諏訪下	二渡ほか	丘陵		●						Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
15	宮下原	北原	丘陵				●				
16	清庵寺跡	二渡	河岸段丘							●	
17	二渡船渡ノ上	二渡	自然堤防		●		●	●	●		本報告書・町発掘調査報告書(10)
18	山崎城跡	山崎	丘陵						●		一部消滅，中世山城跡
19	山崎野町	山崎	河岸段丘							●	
20	養庵寺跡	山崎	河岸段丘							●	
21	浄福寺跡	山崎	台地						●		
22	貝俣	山崎	河岸段丘				●				
23	余ヶ城跡	山崎	台地						●		
24	堂ノ前	船木	台地				●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
25	米ノ山	久富木	台地	●	●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
26	上原	山崎	台地		●		●		●		Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
27	内堀	山崎	台地		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
28	大窪	山崎大窪	山麓緩斜面								
29	州之元	山崎州之元	河岸段丘								
30	山角	山崎	台地		●						Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
31	松尾城跡	久富木字上横橋	台地						●		中世城館跡
32	大畝町園田	久富木大畝町園田	河岸段丘		●				●		町発掘調査報告書（１）
33	法円寺跡	久富木	台地						●		
34	久富木城跡	久富木	丘陵						●		中世山城跡
35	牧の峯	山崎	丘陵		●				●		古戦場
36	荒瀬上原	山崎荒瀬	台地		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
37	川添	二渡ほか	自然堤防		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
38	前床	山崎荒瀬ほか	河岸段丘				●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
39	上大原	山崎荒瀬	台地		●		●	●	●		Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
40	茶屋ヶ段	久富木ほか	丘陵		●						Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
41	丸岡	久富木ほか	丘陵		●						Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
42	下川内	山崎久富木荒瀬ほか	台地		●		●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
43	西下原	久富木北原ほか	台地				●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)
44	東下原	久富木北原ほか	台地				●				Ｈ５年度県教委分布調査(Ⅲ)

表３　周辺遺跡一覧表（薩摩川内市）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代							備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
45	下永北	入来町副田小字下永北	低地・古墳				●				昭和62年度町教委文化財調査
46	後迫	入来町副田小字後迫	低地		●		●				昭和62年度町教委文化財調査
47	永山	入来町副田小字永山	低地		●		●				昭和62年度町教委文化財調査
48	上永北	入来町副田小字上永北	低地				●				昭和62年度町教委文化財調査
49	寺畑	入来町副田小字寺畑	低地		●		●				昭和62年度町教委文化財調査



（S＝1／25,000）

第６図　周辺遺跡位置図

材・木炭・船材で，上りが塩・魚・砂糖・焼酎・骨粉・獣骨だった。その後，大口－加治木の交通が盛んになり，明治期に著しく衰退した。

近代から現在にかけては，明治10年に起きた士族による武力反乱であった西南戦争で，西郷軍の勇義隊と振武隊が官軍に追われ衝突を繰り返しながら，同年６月下旬には宮之城から山崎へて副田に敗走した。幸い山崎郷内での交戦はなかったが，副田において両軍が戦闘した際に勇義隊が炊き出しに使った米は，山崎郷組蔵から持ち出されたものであった。また官軍の一部は山崎麓筋へ向かい麓船渡場から川内川を二渡に渡り，東郷に進出していた大隊と連絡している。明治22年４月町村制の施行で山崎郷が山崎村となり，これまでの５つの村が大字となった。昭和28年の町制で山崎町となり，さらに昭和30年に旧宮之城町と合併し，2005年３月に鶴田町・薩摩町・宮之城町が合併し現在のさつま町となっている。

産業は前述した養蚕が盛んに行われ，明治７年の「山崎郷御仮屋文書」に山桑で養蚕していたことが記され，明治30年代から大正時代末までに山崎村だけでも２つの製糸工場が稼働し，約150名の従業員が働いていた。また，煙草は明治８年に税を納めることで煙草の製造販売が可能となり，盛んに生産され始めた。明治36年の煙草の作付面積と生産高は，宮之城村の5.5haで6,190kgであったのに対し，山崎村は48.38haで42,069kgと他の地域に比べ飛び抜けて生産が盛んであった。明治37年煙草専売法が公布され，国の専売事業となったあとも，近年まで生産が続いた。他にも馬の飼育が盛んで，大正から昭和の初期には，山崎橋下で婦人財嚢と呼ばれる賞金付きの草競馬が催され賑わったと言われている。

次に交通は，古くから交通の要所であり，今日に至るまで変わっていない。明治26年３月に県道鹿児島－宮之城線が開削され，久富木川に東橋が架橋された。その後，明治32年に架け替えられ，さらに，昭和８年に鉄筋コンクリート製の東橋となった。また，明治28年に県道川内－山崎線が開削され，川内川に板橋であったが山崎橋が架橋された。その後，大正14年に７月鉄筋コンクリート製の山崎橋となった。これら２つの橋は，近年まで利用されていたが，平成18年７月の災害で新しく架け替えられることになった。また公共交通機関は，大正７年10月に宮之城－川内間で乗合自動車が運行される。県内においても乗合自動車の営業運行は当時ほとんどなく，バス事業の草分けであった。昭和21年には，省営バス（現ＪＲバス）北薩線（鹿児島－宮之城線）が開通し，山崎の役場前に山崎町駅ができた。ほかにも鉄道が大正15年５月川内－宮之城間に国鉄宮之城線が開通し，薩摩山崎駅ができた。その後，昭和12年12月宮之城線は大口まで伸びたが，自動車の普及で昭和62年１月に廃止になった。

山崎橋

参考文献

宮之城町教育委員会　1985「大畝町園田遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』（１）

宮之城町教育委員会　1992「甫立原遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』（２）

宮之城町教育委員会　1995「諏訪原遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』（６）

宮之城町教育委員会　2002「二渡船渡ノ上遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』（10）

宮之城町史編纂委員会　2000『宮之城町史』

鹿児島県教育委員会　1994『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書』（Ⅲ）

鹿児島県教育委員会　2002「松尾城跡」『鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（42）

入来町教育委員会　1987『入来町文化財調査報告書』

原口虎雄　1982『三國名勝圖會』第三巻　図書出版青潮社

原口泉　永山修一　日隈正守　松尾千歳　皆村武一　1999『鹿児島県の歴史』山川出版社

河口貞徳　1988『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社

鹿児島県土木部河川課　1992『鹿児島の河川・海岸』

第３章　二渡船渡ノ上遺跡の調査方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

平成19年３月８日に行われた県文化財課の事前調査を受けて，平成19年12月から平成20年２月までと，平成21年９月から11月，平成22年１月から３月の計９か月間の本調査を行った。

調査は，対象区域全体を用地境界座標点のＺ４（Ｘ：－125750.667, Ｙ：－54531.508）とＺ６（Ｘ：－125782.761, Ｙ：－54382.695）の２点を直線で結び，その延長上でＺ６から南方にある調査区側へ５ｍ移動させた地点を座標（0，100）とし，10m四方のグリッドを設定した。各グリッドについては，アルファベットと数字で呼称することとし，座標（0，0）から南方へ大文字のアルファベットと北方へ小文字のアルファベット，東方に数字を付した。平成19年度は，用地取得済みの11区以西の自然堤防後背地部分の調査を実施し，調査面積は2,000㎡であった。平成21年度は，平成19年度に調査できなかった自然堤防部分の調査を実施した。調査面積は3,000㎡であった。

発掘調査は重機によってⅠ・Ⅱ層（いずれも表土）を除去した後，おおむねⅣ層もしくはⅤ層から人力で掘り下げた。後世の攪乱によって層位が乱されているＤ・Ｅ－４・５区付近については，攪乱層を表土同様に重機で掘り下げ，包含層が残存していないことを確認した。また，最終的な下層確認のためのトレンチを設定して，これを人力で掘り下げた。

遺構は検出状況を写真で撮影し，位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測終了後の状況も写真で撮影した。

遺物は，トータルステーションを用いて出土位置を記録した後に取り上げた。ただし，古代以降の遺物については，おおむね同一グリッドの出土遺物は一括で取り上げ，遺構埋土内出土遺物などはトータルステーションを用いて出土位置を記録し，取り上げた。

２　遺構の認定と検出方法

遺物包含層上面を検出した際，各遺物包含層上面の精査を行い，土質の違いや礫のまとまり具合を見極めて遺構の有無を確認した。その後，遺構内外で異なる土の境界をたどり，平面的に遺構の輪郭を確定した。その結果・埋設土器・土坑・ピット・礫の集積・石組み・畝跡・水田・杭痕を検出した。その後，埋土の堆積状況が把握できるようベルトを設定し，遺構の掘下げを行った。その際，埋土の色・質・硬さなどの違いを比較しながら埋土を掘り下げた。さらに，遺構を検出した層や埋土状況・遺構の形態・遺構内出土遺物などの情報から総合的に遺構の構築時期や性格等の検討を行った。

３　発掘調査経過

⑴　平成19年度

川内川の自然堤防の後背地に掛かる遺跡範囲2,000㎡の本調査を行った。詳細は，日記抄により，略述する。

〈11月〉

重機による表土剥ぎ取り，トレンチ設定・掘下げ，幅杭・基準杭設置（27日，川内川河川事務所）

〈12月〉

重機による表土剥取り，トレンチ設定・掘下げ，環境整備，ベルトコンベア設置，グリッド設定，Ⅳ層掘下げ，遺物一括取上げ，調査範囲平板実測，Ⅴ層遺物取上げ，石列遺構検出（Ｄ－７区），ピット検出（Ｃ－５～７区，Ｂ－６・７区），畝状遺構検出（Ｂ－６区，Ａ－９・10区，Ｂ－10区），杭列検出（Ｂ－４区），

〈１月〉

Ⅳ層掘下げ，Ⅳ層遺物取上げ，石列・礫の集積・杭列・ピット・土坑検出・実測，石組み遺構検出・実測，Ⅳ層地形図作成，水田跡検出・埋土掘下げ，

三木靖（鹿児島国際大学短期大学部），渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）現地指導（28日）

〈２月〉

Ⅳｂ・Ⅴ層掘下げ・遺物取上げ，水田跡埋土掘下げ，石組み遺構・石列実測，土坑検出・埋土掘下げ・実測，空中写真撮影（14日），ピット・土坑検出・実測，下層確認トレンチ設定・掘下げ，現場撤収作業

⑵　平成21年度

本遺跡は２期に分けて川内川の自然堤防に掛かる遺跡範囲合計3,000㎡の本調査を行い，計画していた調査をすべて終了した。詳細は，日記抄により，略述する，

〈９月〉

重機による表土剥取り，調査範囲内グリッド杭新設，レベル移動，面積測量，Ｂ～Ｄ－９～11区Ⅴ層掘下げ・遺物取上げ，Ｄ～Ｆ－５～11区トレンチ設定・確認調査，ｆ～ｉ－23～26トレンチ設定・確認調査

〈10月〉

ａ・ｂ・Ａ～Ｄ－12～19区Ⅴ層掘下げ・遺物取上げ・遺構検出・検出写真撮影・実測，6トレンチ（Ｃ－12区）拡張・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影，7～11トレンチ設定・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影，Ⅵ層直上まで重機による掘下げ・Ⅵ層精査

〈11月〉

ａ・ｂ・Ａ～Ｄ－12～19区Ⅴ層掘下げ・遺物取上げ・遺構検出・検出写真撮影・実測，6トレンチ（Ｃ－12区）拡張・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影，7～11トレンチ設定・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影，Ⅵ層直上まで重機による掘下げ・Ⅵ層精査，調査区引渡し協議

本田道輝氏（鹿児島大学法文学部准教授）現地指導（12日）

〈1月〉

環境整備，表土掘下げ，ベルトコンベア設置，表土一括遺物取上げ

〈2月〉

D～F－5～11区Ⅴ層上面精査・掘下げ・遺物取上げ，D－9区Ⅴ層埋設土器検出・写真撮影・掘下げ・実測，D－8区Ⅴ層土坑2基検出・写真撮影・掘下げ・実測，ベルトコンベア移設

〈3月〉

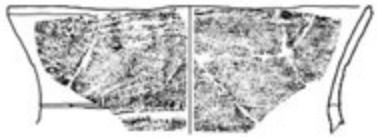
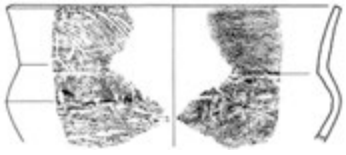
E－8・D－8区下層確認トレンチ設定・掘下げ，Ⅴ層遺物出土状況撮影，D－8区土坑実測，D－9区埋設土器実測，F－6区土坑検出・写真撮影・実測，E・F－6区礎石検出・写真撮影・実測，環境整備，7・8区間セクションベルト土層断面実測・写真撮影，完掘状況撮影，撤収作業，調査区引渡し協議

4　出土遺物の分類

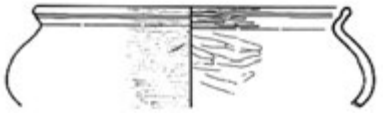
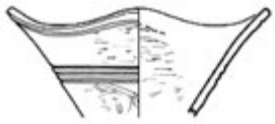
（1）土器の分類

本遺跡では，縄文時代中期から近世までの幅広い時代の土器・陶磁器が出土した。中でも縄文時代晩期から弥生時代の土器がⅤ層から多数出土した。他にも古代の土師器・須恵器・青磁などがⅣ層から比較的多く出土している。そこで一定量の遺物数があり，類を作ることができた縄文時代晩期土器に限って次のとおりに分類した。

表4　土器分類表

大分類	小分類	**器　　形**：器形・底部形態・口縁部形態などを表記する。 **文　　様**：器面に施された文様とその施文原体を表記する。 **器面調整**：器面に行われる調整と原体を表記する。 **土器型式**：従来言われている土器型式名を表記する。	**図**：二渡船渡ノ上遺跡の代表的な土器実測図・拓本を提示する。 （スケール不統一）
A	—	**器　　形**：口縁部が肥厚して内弯する深鉢形土器 **文　　様**：数条の沈線・凹線を巡らす。 **器面調整**：ミガキ，ナデ **土器型式**：上加世田式土器	
B	—	**器　　形**：口縁部が内弯する深鉢形土器 **文　　様**：数条の沈線線を巡らす。 **器面調整**：ミガキ，ナデ **土器型式**：滋賀里式土器	
C	—	**器　　形**：口縁部が肥厚して外に開く深鉢形土器 **文　　様**：下位に段を有する。 **器面調整**：ナデを施すが，条痕が若干残るものもある。 **土器型式**：入佐式土器	
D	1	**器　　形**：口縁部が肥厚せずに外傾する深鉢形土器 **文　　様**：貝殻条痕 **器面調整**：内外面共に貝殻によるケズリのちナデ **土器型式**：黒川式土器	

大分類	小分類	**器　　形**：器形・底部形態・口縁部形態などを表記する。 **文　　様**：器面に施された文様とその施文原体を表記する。 **器面調整**：器面に行われる調整と原体を表記する。 **土器型式**：従来言われている土器型式名を表記する。	**図**：二渡船渡ノ上遺跡の代表的な土器実測図・拓本を提示する。 （スケール不統一）
D 粗製土器	2	**器　　形**：口縁部が緩やかに外反し，胴部が膨らむ深鉢形土器 **文　　様**：貝殻条痕 **器面調整**：内外面共に貝殻によるケズリのちナデ **土器型式**：黒川式土器	
	3	**器　　形**：口縁部が直行し，胴部は僅かに屈曲する深鉢形土器 **文　　様**：貝殻条痕 **器面調整**：内外面共に貝殻によるケズリのちナデ **土器型式**：黒川式土器	
	4	**器　　形**：口縁部が直行ないし僅かに内弯する深鉢形土器 **文　　様**：無紋である。 **器面調整**：ナデを施すが，条痕が若干残るものもある。 **土器型式**：黒川式土器	
	5	**器　　形**：口径が胴部屈曲部径より小さい鉢形土器 **文　　様**：無紋である。 **器面調整**：条痕を残さず，ナデ・ミガキを施す。 **土器型式**：黒川式土器	
	6	**器　　形**：口唇部を肥厚させた深鉢形土器 **文　　様**：無紋である。 **器面調整**：ナデを施すが，条痕が若干残るものもある。 **土器型式**：黒川式土器干河原段階	
	7	**器　　形**：口縁部下位及び胴部屈曲部に２条の刻目突帯 **文　　様**：刻目突帯文，沈線 **器面調整**：内外面共にナデ **土器型式**：刻目突帯文土器	
	8	**器　　形**：１～８に属さない口縁部をもつ深鉢形土器	
	9	**器　　形**：胴部片を一括した。	
	10	**器　　形**：底部片	
E	—	**器　　形**：明瞭な底部をもたないボール状の器形 **器面調整**：外面に組織圧痕，内面にミガキが施される。 **土器型式**：半粗半精製土器に属する。	
F	1	**器　　形**：口縁部が短く直立する。沈線が施されているものは玉縁状の口部縁を呈する。胴部が屈曲して底部に至る。 **土器型式**：入佐式土器	

大分類	小分類		
		器　　形：器形・底部形態・口縁部形態などを表記する。 **文　　様**：器面に施された文様とその施文原体を表記する。 **器面調整**：器面に行われる調整と原体を表記する。 **土器型式**：従来言われている土器型式名を表記する。	**図**：二渡船渡ノ上遺跡の代表的な土器実測図・拓本を提示する。 （スケール不統一）
F 精製土器	2	**器　　形**：口縁部は頸部まで緩やかに外反する。口縁部内外面に１条の沈線が施され，玉縁状の口縁部を呈する。胴部は屈曲して底部に至る。 **土器型式**：黒川式土器	
	3	**器　　形**：口径より胴部径が大きい。胴部が強く屈曲する。 **文　　様**：沈線で玉縁状の端部とする。 **土器型式**：黒川式土器	
	4	**器　　形**：口縁－頸部の間が短い口径より胴部径が大きい。 **文　　様**：沈線で玉縁状の端部とする。 **土器型式**：黒川式土器	
	5	**器　　形**：口縁部が内弯する。流水形の器形をもつ。 **文　　様**：口縁端部・屈曲部・底部に顔料が入った沈線。リボン・ヒレが多い。 **土器型式**：黒川式土器干河原段階	
	6	**器　　形**：器高が浅い。胴部などに屈曲がない。 **文　　様**：口縁部に沈線があるものもある。 **土器型式**：黒川式土器	
	7	**器　　形**：口縁部が外反する。 **文　　様**：無紋 **土器型式**：刻目突帯文土器の時期	
	8	**器　　形**：上記分類に属さないもの，底部破片	

（２）石器の分類

本遺跡では，縄文時代晩期から弥生時代の土器が多く出土したⅤ層から打製石斧を多く含む1,145点の石器が出土した。

器種は，石鏃・石匙・スクレイパー・使用痕剥片・二次加工剥片・石錐・石核・打製石斧・礫器・抉入状石器・磨製石斧・磨石・敲石・石皿・砥石・石錘である。

石器について分析していくにあたり，石材及び器種について可能なものについて分類を試み，その表を以下に示した。そこで，本報告書における石器に関する記述は，以下の表を参照し述べていくこととする。

ア　石材分類表

石材に関しては，県内有数の黒曜石産地に比較的近接することから，特に黒曜石の細分化を試み，以下のように分類した。

イ　石器分類表

石器は，同一器種内で属性による相違が明瞭で，一定量以上出土するものについて，グルーピングし，以下のように分類した。使用による折損や欠損等により他器種への転用が見られる場合は，最終用途をその石器の器種と捉えて分類した。

表５　石材分類表

岩石分類		概　　要
黒曜石（ｏｂ）	Ⅰ	不純物を多く含み，漆黒で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻，いちき串木野市川上平木場，いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	Ⅱ	光を通し，不純物を大量に含むものを総括した。鹿児島市の三船，伊佐市大口平出水の日東・小川内の五女木，錦江町の長谷等の原産地資料に類似するが，細分を行うことはできなかった。
	Ⅲ	飴色～黒色を基調とし，不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。えびの市の桑ノ木津留，伊佐市大口市の上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似するが，細分を行うことはできなかった。
	Ⅳ	黒色で不純物を全く含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市腰岳産の資料に類似するが，一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系のものも含まれる。
	Ⅴ	青灰色で不純物の少ないものを包括した。針尾中町や長崎県佐世保市東浜，淀姫等西北九州の原産地資料に類似するが，原産地不明の一群も含まれる。
	Ⅵ	不純物をあまり含まない灰色のものを包括した。佐賀県椎葉川周辺のものを原産地資料とするが，原産地不明の一群も含まれる。
	Ⅶ	原産地不明なものを包括した。
安山岩		数mmの長方形をした黒（角閃石や輝石）や白（斜長石）の鉱物の結晶（斑晶）が点在するものを包括した。淡灰色～黒色で著しく多孔質～細粒緻密やガラス質，摩擦は大～小まで様々なものがある。黒色を呈し，硬質なサヌカイトが有名。
蛇紋岩等		蛇紋岩はぬめっとした肌触りを有し，光沢がある。石材不明資料中，蛇紋岩に類似した資料を含めた。
頁岩		泥や粘土の固結した岩石で，平行な平面で割れる傾向がある。黒色のものが多いが，褐色系の色のものもある。非常に細粒で，肉眼では粒子の識別出来ないものが多い。粒度均質。さびが付着するのも特徴である。
砂岩		砂粒・石英粒が集合して固まった堆積岩の一種。触ると砂粒感が強いものを本類に含めた。
瑪瑙系		瑪瑙・玉髄・石英・タンパク石・鉄石英・水晶・石英斑岩・珪岩などを総称して，本類に含めた。
ホルンフェルス		泥岩や砂岩などの堆積岩が熱により変成したもの。片理や劈開がない細粒から粗粒の緻密な変成岩である。
チャート		珪酸を含み光沢感を有する。灰白色を呈する。

表６　石器分類表

器種分類			概　　要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施してある小型から中型の三角形状の石器群
		Ⅰ	全体の形状が正三角形を呈するもの
		Ⅱ	全体の形状が二等辺三角形を呈するもの
		Ⅲ	先端が尖り側縁が緩やかに曲線を描くもの
		Ⅳ	Ⅰ～Ⅳに該当しない特徴を呈するもの
		Ⅴ	未製品や欠損品
	石匙		剥片を素材とし刃部及びつまみ部を作出し，つまみ部に着紐して携帯する石器群
	スクレイパー		剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形を施してあるもの
	使用痕剥片		剥片の縁利な縁辺に肉眼で使用痕と考えられる刃こぼれた刃潰れが観察される。
	二次加工剥片		剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形が認められないもの
	石錐		棒状の錐部を有し，主要剥離面や礫皮面をつまみ部とする。
石核			原石から石器製品作出のための剥片を採種した残存石材を本類に分類した。
礫石器	打製石斧	Ⅰ	明瞭な抉りを持たず，短冊形（長方形）の器形を呈する。
		Ⅱ	基部と刃部を境界作る抉り部を持ち，ラケット状を呈する。有肩石斧と呼称される。
		Ⅲ	中型から小型で，細身の外形を持つものである。
		Ⅳ	中型から小型で，左側，右側のどちらかが弯曲しているものである。。
		Ⅴ	分類不可資料及び未製品
	抉入状石器		厚みのある剥片の両側辺に二次加工を施し，抉りが入るため，外形が弯曲したもの
	磨製石斧		器厚が厚く，重量感がある。刃部は蛤の形態を有し，器形は長方形状を呈する。
	礫器		素材剥片の縁辺部に刃部調整が施される。
	磨石	Ⅰ	全面的もしくは部分的に磨面を有し，側縁に明瞭な敲打痕が連続して見られる。
		Ⅱ	全面的もしくは部分的に磨面を有し，側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
		Ⅲ	全面的もしくは部分的に磨面を有し，側縁の敲打痕は不明瞭である。
	敲石		長軸の端部や側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
	石皿		磨面・凹面を有する。磨石とセット関係にあり，木の実を磨り潰したりするためと考えられる。
	砥石		砂岩質の礫素材を利用し，主として長軸方向に削痕が縦走し，深い凹面を有することが多い。
	石錘		左右１対の抉り部を有する。抉り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。
石製品			上記石器に該当せず，利器としての用途が不明なもの。

第２節　層序

二渡付近の地質を概観すると，基盤層は四万十累層群であり，その上層に約30万年前から約２万５千年前の火砕流堆積物，川内川及びその支流の作用による砕屑物の沖積層が覆う。

本遺跡は川内川右岸の標高約20mの自然堤防上と後背地に位置する。自然堤防上は，広範囲にわたり安定した沖積層の堆積が確認できた。

一方，後背地においては，耕作によると思われる削平が部分的に調査前の現況で確認できた。また，トレンチ調査を進めていく途中でⅣ層とⅤ層が確認できない範囲が存在した。特にＤ・Ｅ－４・５区付近において砂質土の間に粘質土が堆積している状況を確認した。この範囲は川内川及びその支流の影響と耕作等に土地を利用されたことによって，遺跡が消失したものと考えられる。

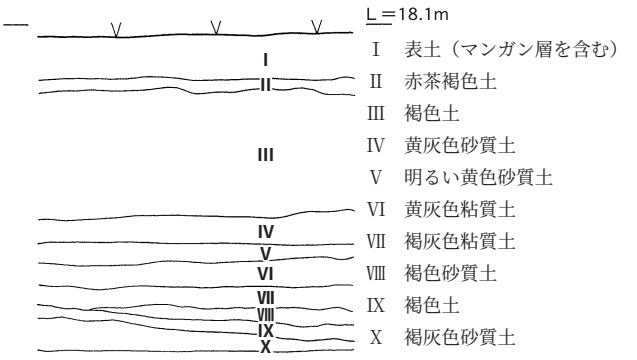
また，山崎橋付近のｆ－23～ｋ－27区においては，砂質土と砂層の堆積が著しく，包含層を確認することができなかった。

なお，三度の調査によって得られた層序の情報を検討し，本遺跡の基本的な土層の堆積状況を次のとおりにまとめた。

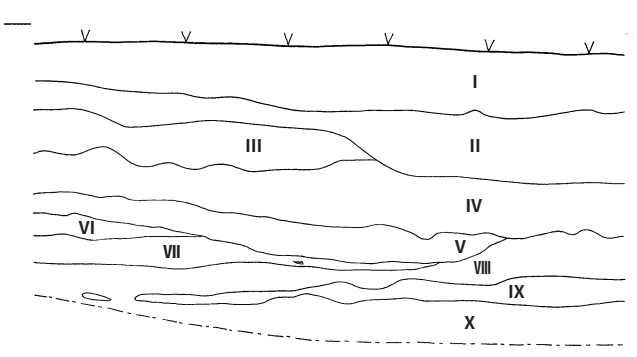
表７　二渡船渡ノ上遺跡基本土層

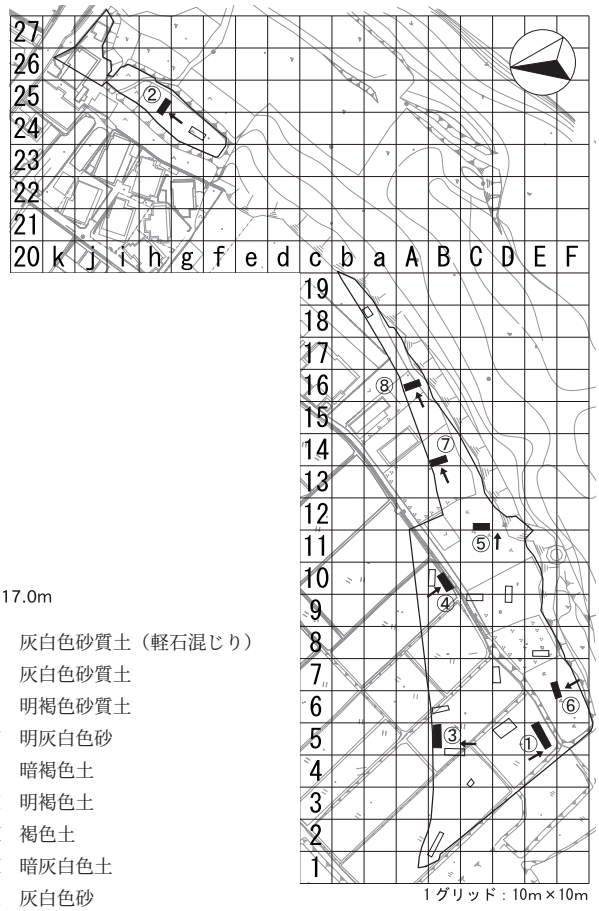
Ⅰ　層	表土
Ⅱ　層	表土
Ⅲ　層	灰褐色土
Ⅳ　層	赤茶褐色土 **古代～近世遺物包含層**
Ⅴ　層	褐色砂質土 **縄文時代晩期～古墳時代遺物包含層**
Ⅵ　層	黄褐色砂質土 **縄文時代中期遺物包含層**
Ⅶ　層	灰褐色砂
Ⅷ　層	褐色砂
Ⅸ　層	褐色砂と灰褐色砂の葉理（雲母片を含む）

①Ｅ－５区



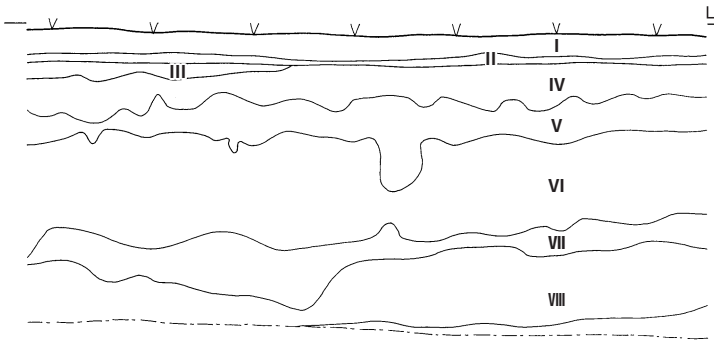
②ｈ－25区





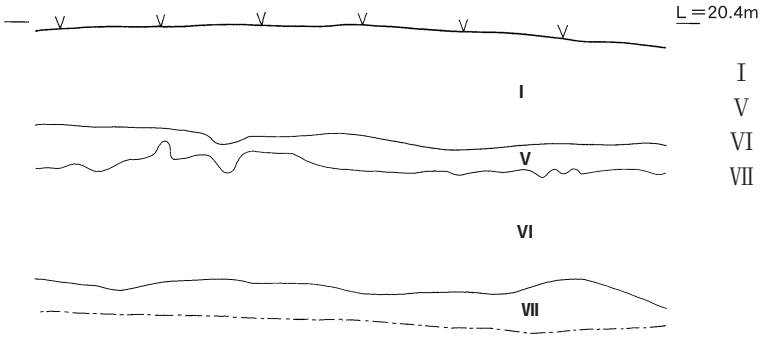
第７図　土層断面図（１）及びトレンチ位置図

③３Ｔ　Ｂ－５区



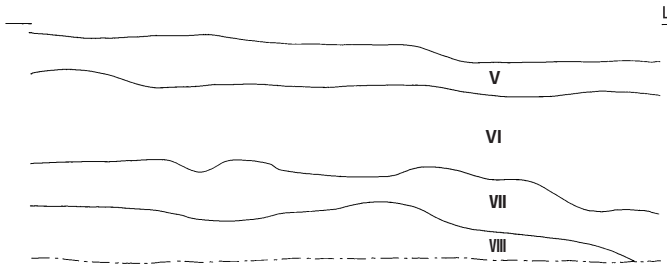
Ⅰ　褐灰色土（表土）
Ⅱ　褐灰色土（表土）
Ⅲ　灰黄褐色土（軽石を含む）
Ⅳ　にぶい褐色土
Ⅴ　にぶい黄褐色土
Ⅵ　黄褐色粘質土
Ⅶ　黄褐色土（粘性が少ない）
Ⅷ　黄褐色砂質土
Ⅸ　明黄褐色砂質土

④H19－６Ｔ　Ｂ－10区



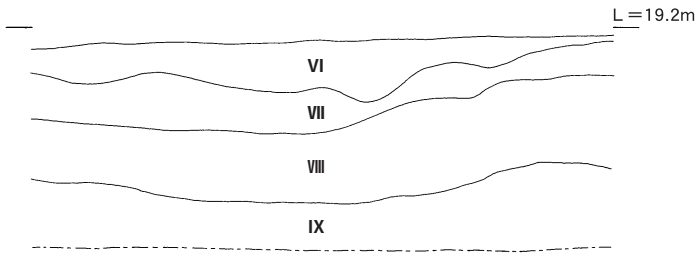
Ⅰ　黒褐色土〈表土）
Ⅴ　暗褐色土
Ⅵ　暗褐色砂質土
Ⅶ　灰褐色砂質土

⑤H21－６Ｔ　Ｃ－12区



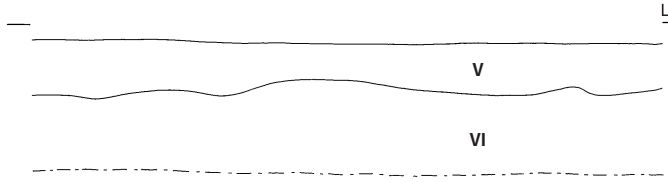
Ⅴ　褐色砂質土
Ⅵ　黄褐色砂質土
Ⅶ　灰褐色砂
Ⅷ　褐色砂

⑥下層確認Ｔ　Ｅ・Ｆ－６・７区



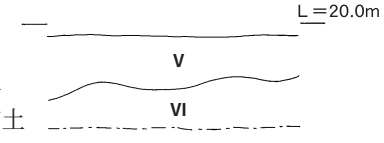
Ⅵ　黄褐色砂質土
Ⅶ　灰褐色砂
Ⅷ　褐色砂
Ⅸ　褐色砂と灰褐色砂の葉理（雲母片を含む）

⑦11Ｔ　Ｂ－14区



Ⅴ　褐色砂質土
Ⅵ　黄褐色砂質土

⑧10Ｔ　Ａ－16区



第８図　土層断面図（２）

第３節　調査成果

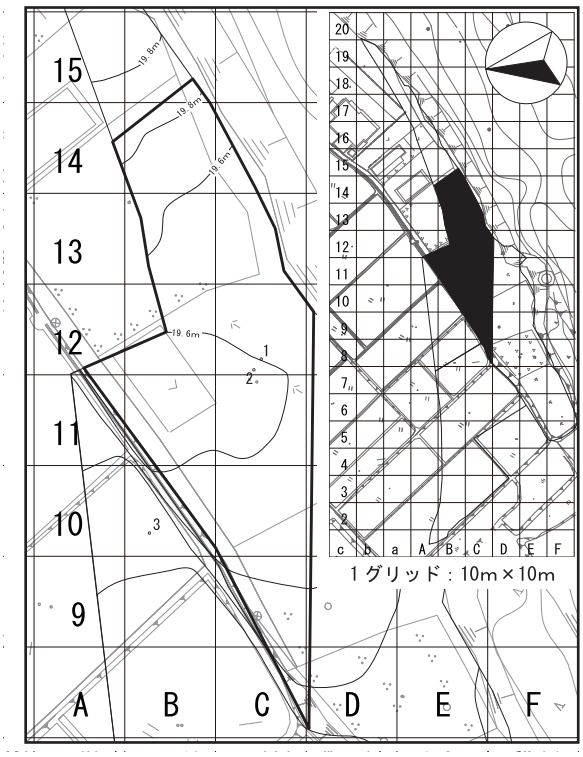
１　縄文時代中期（Ⅵ層）の調査成果

⑴　概要

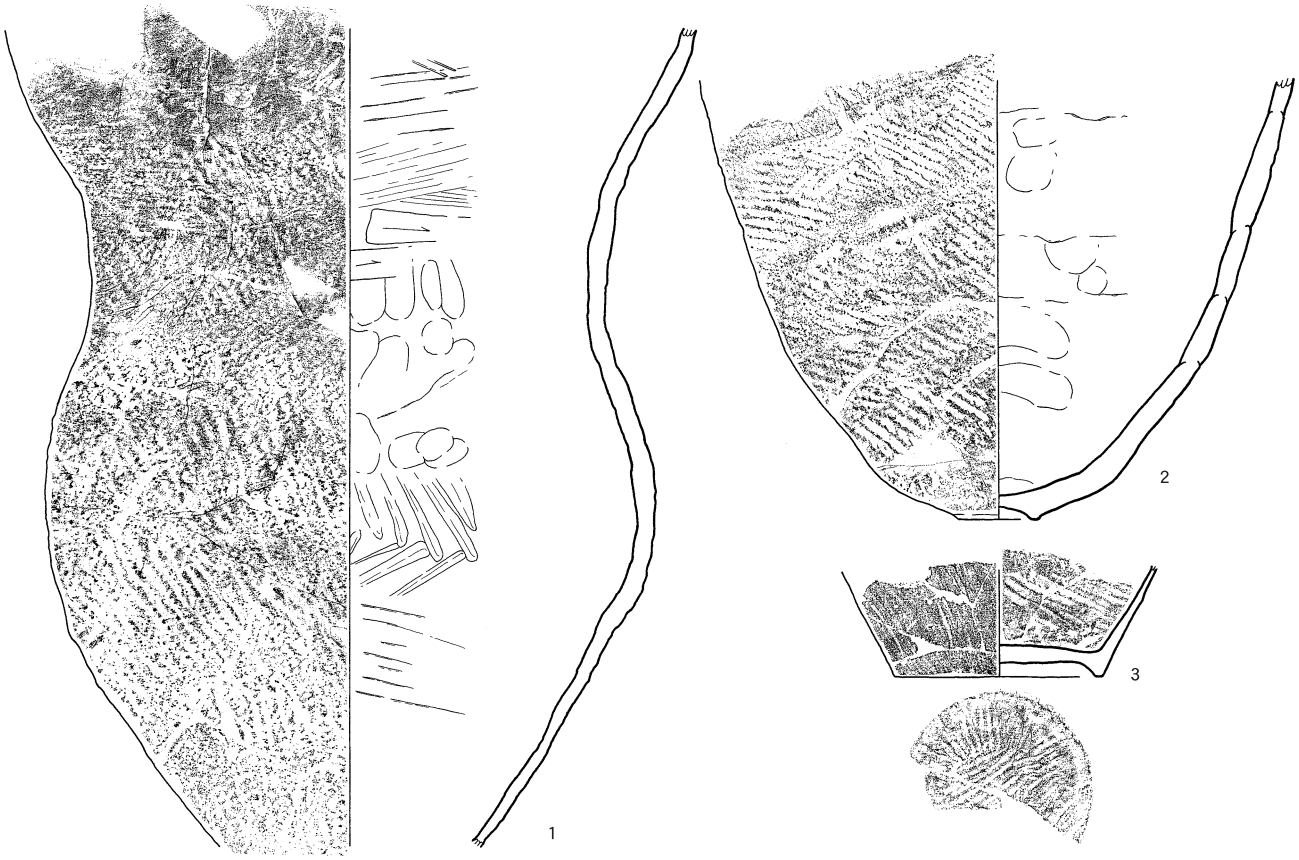
Ｃ－12区において，Ⅴ層調査後に下層確認のため２×５ｍのトレンチ調査を開始したところ，Ⅵ層から２個体分の当該期深鉢破片が集中して出土した。そのため，トレンチを拡張し，調査を行ったが，それ以上の遺構・遺物は発見できなかった。調査面積は約700㎡である。

⑵　遺物（第10図１～３）

出土遺物は土器だけで，全てを掲載した。１と２は，トレンチ内でそれぞれ集中して出土し，接合で２個体となった。１は，口縁部と底部は欠落しているが，残る胴部から口縁部下位の形状はいわゆるキャリパー状を呈し，胴部上位で明瞭に縊れる。外面は，ＲＬの縄文が全面に施される。内面は荒いヘラナデを基調とし，肩部に指頭の跡が見られる。２は，胴部から底部に近づくにしたがい急にすぼまる。そして，直径34㎜の小振りな上げ底の底部となる。外面の調整は，ＲＬの縄文が全面に施される。内面の調整は，指頭による作りだしの跡が顕著に見られ，ケズリ・ナデ等の調整が少ない。そのため，輪積みの接合痕が観察できる。３は，Ⅴ層出土の上げ底の底部である。器壁が薄く貝殻による調整痕が特徴である。



第９図　Ⅵ層調査範囲及び土器出土状況図



第10図　Ⅵ層出土縄文時代中期土器実測図

表８　縄文時代中期土器観察表

挿図	番号	区		層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	備考
									外	内	外	内							
10	1	C	12	Ⅵ	4308	深鉢	胴部	縄文	RL撚糸	ヘラ・指ナデ	黒褐／明黄褐色	暗黄褐／にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	2	C	12	Ⅵ	4289	深鉢	胴～底部	縄文	RL撚糸	指ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	3	B	10	Ⅴ	1239	深鉢	底部	条痕文	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐色	橙色	○	○			○		上げ底

２　縄文時代晩期（Ⅴ層）の調査成果

⑴　概要

調査範囲の中でも，川内川により近く，標高が周囲に比べて高い自然堤防上において表土直下のⅤ層から遺構・遺物を発見した。調査範囲は約3,300㎡である。

⑵　遺構

ア　土坑（第12・13図）

Ⅴ層上面おいて灰褐色の円形プランの土坑９基を検出した。複数の土坑からは，縄文時代晩期に該当する遺物が出土し，それらの一部を資料化した。

１号土坑（第12図，第13図４）

Ａ－16区で検出した。平面形は円形で，直径は約0．９mである。埋土は２枚に分層できた。土器片６点が埋土内から出土した。４が出土遺物である。浅鉢形土器の胴部で内外両面にミガキが施されている。

２号土坑（第12図，第13図５・６）

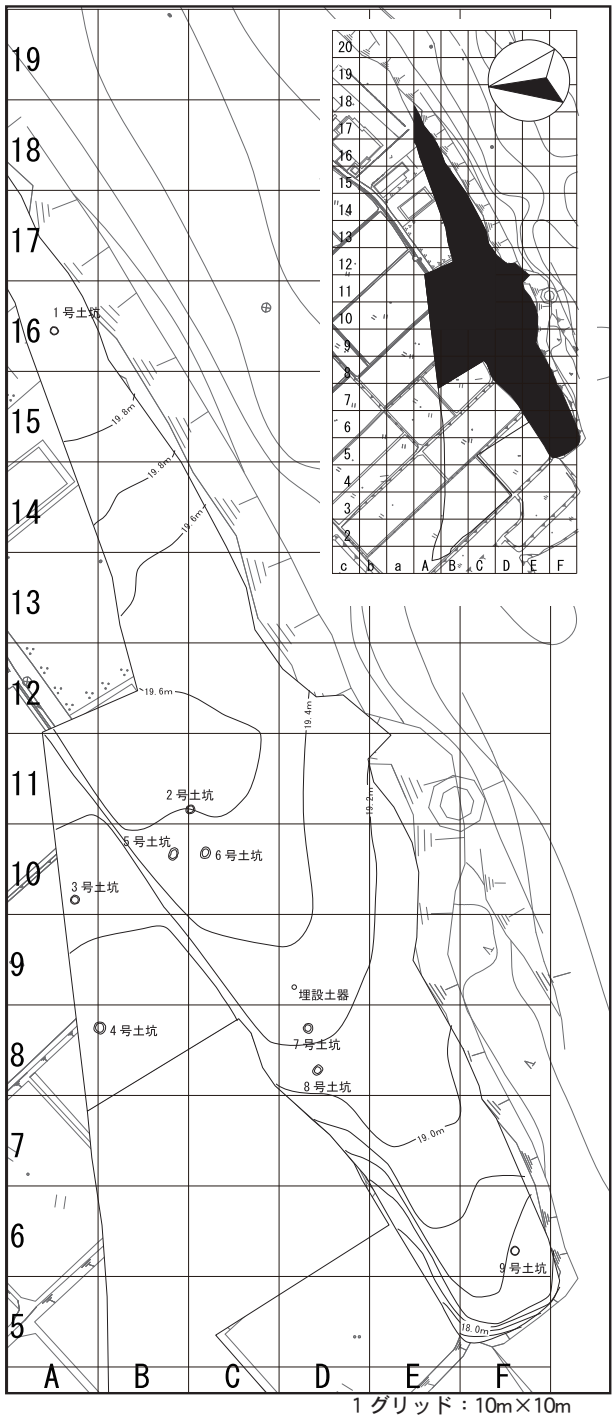
Ｂ・Ｃ－11区で検出した。平面形は略円形で，直径は約１mである。土器片が８点，石器・剥片等９点が埋土内から出土した。５・６が出土遺物である。５は深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で，包含層遺物のＡ２類に該当する。６は砥石で３面に作業面が確認できる。

３号土坑（第12図，第13図７～第14図15）

Ａ－10区で検出した。平面形は円形で，直径は約１mである。埋土は２枚に分層できた。土器片45点，石器３点が埋土内から出土した。７～15が出土遺物である。７～11は深鉢形土器の口縁部で，包含層遺物のＣ，Ｄ１・２類に該当する。12は深鉢形土器の底部である。13・14は精製の浅鉢形土器口縁部である。Ｆ６類に該当する。15は磨石である。

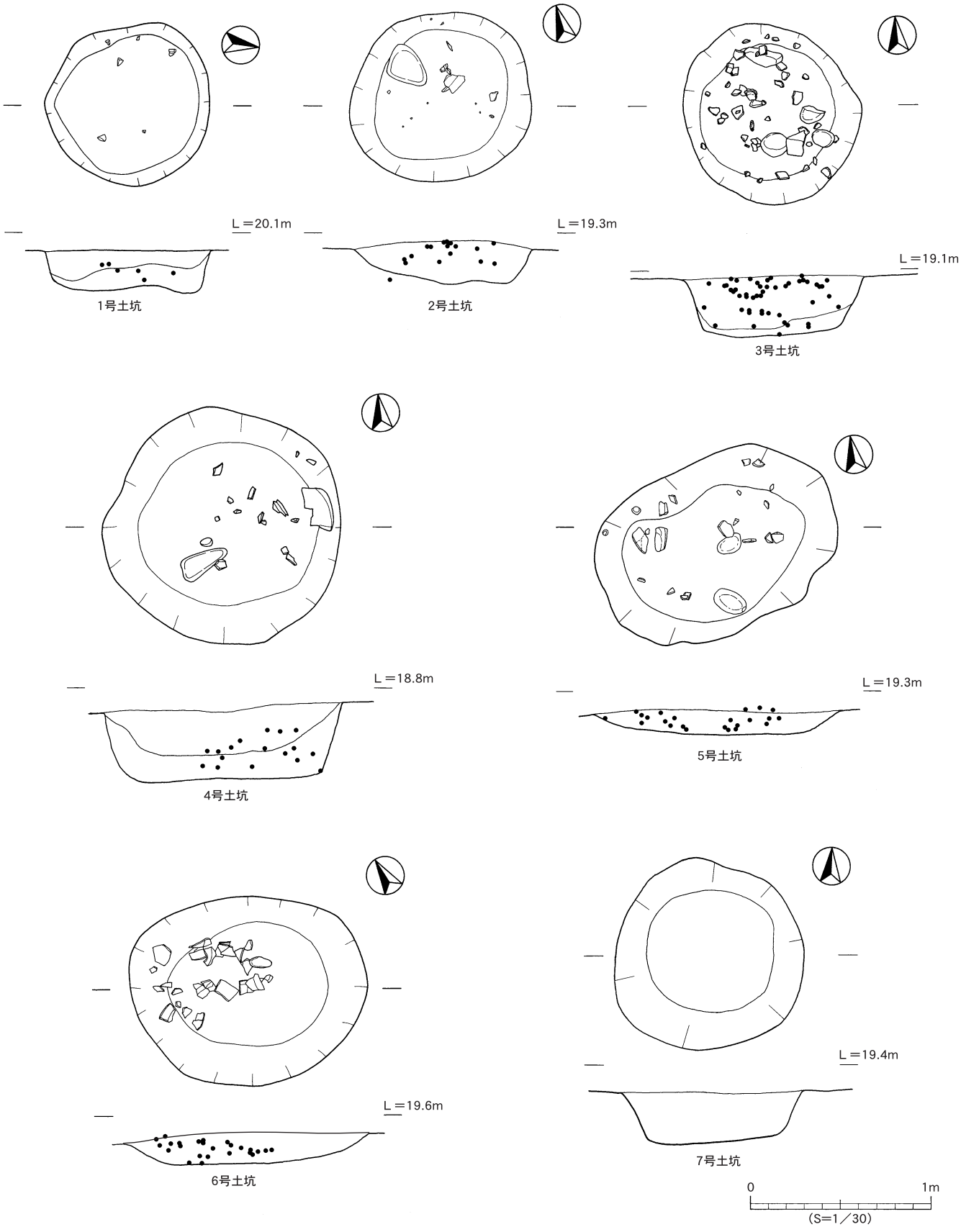
４号土坑（第12図，第15図16・17）

Ａ・Ｂ－８区で検出した。平面形は円形で，直径は約1.3mである。埋土は２枚に分層できた。土器片14点と石器等３点が埋土内から出土した。16・17が出土遺物である。16は精製の浅鉢形土器でＦ４類に該当する。17は砥石で１面のみ作業面が確認できる。

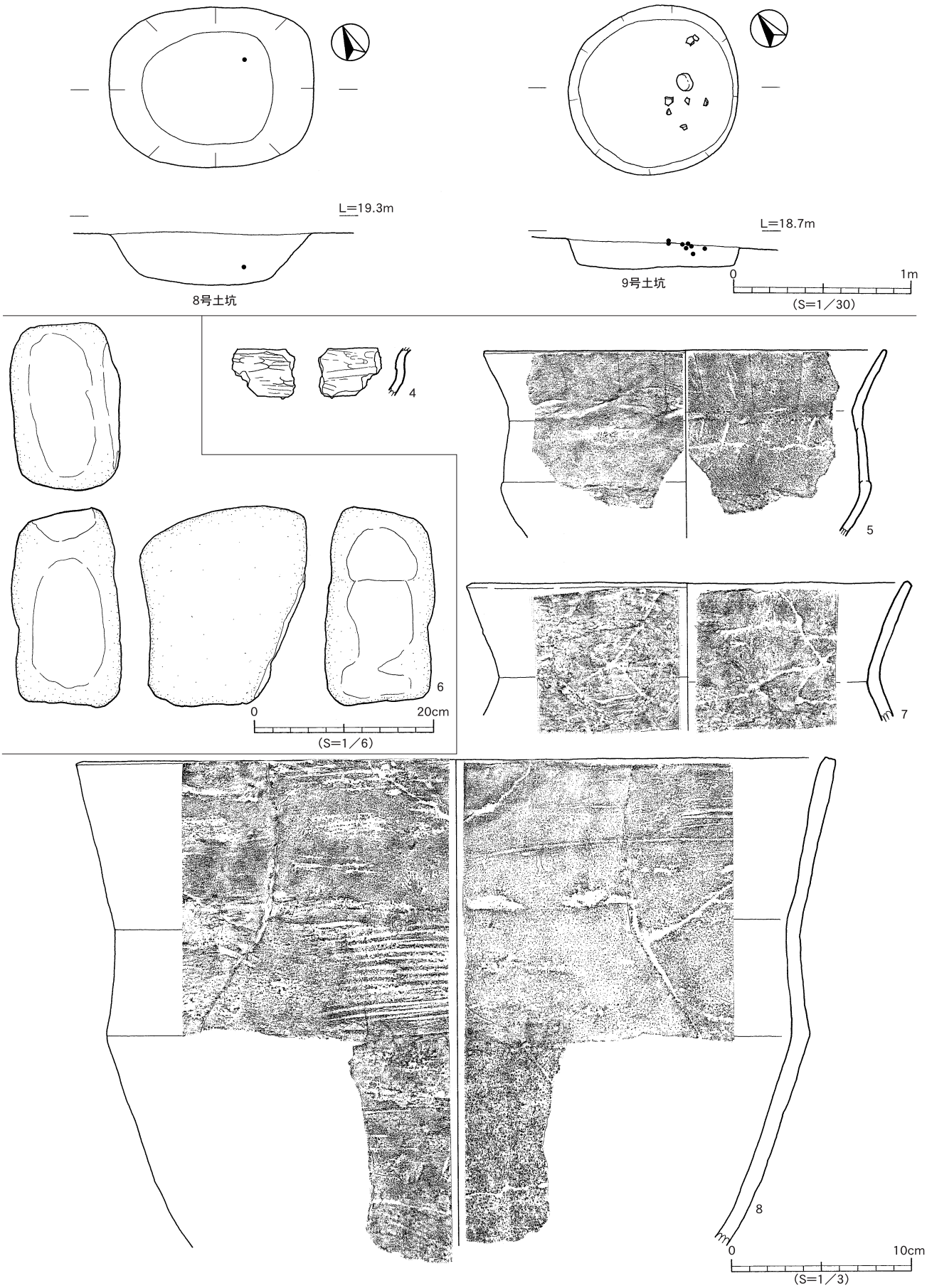


１グリッド：10m×10m

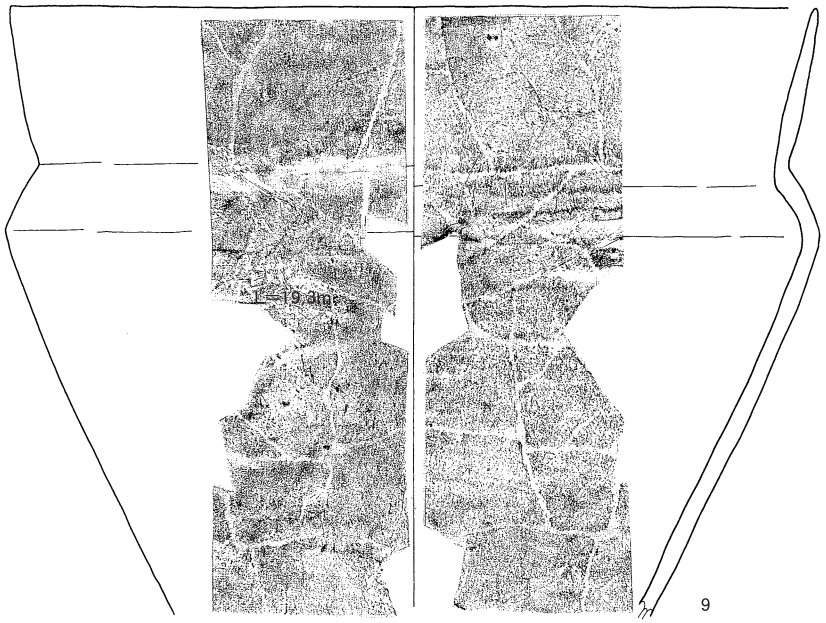
第11図　Ⅴ層調査範囲及び遺構配置図

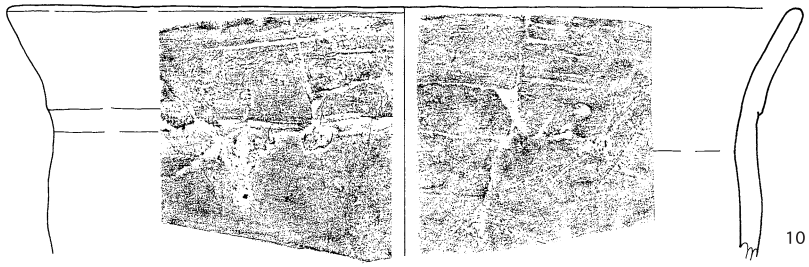


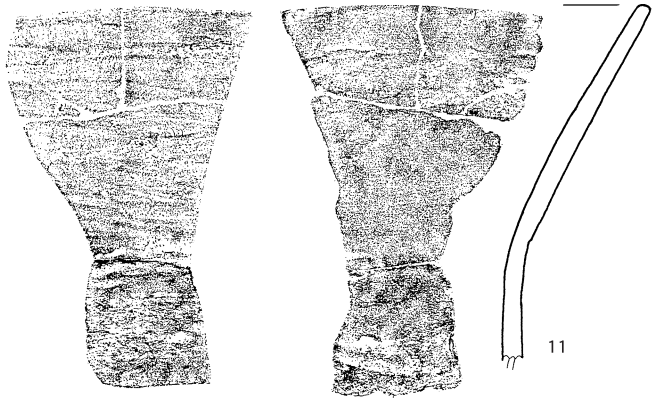
第12図　Ⅴ層検出縄文時代晩期土坑実測図（１）

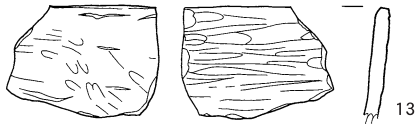


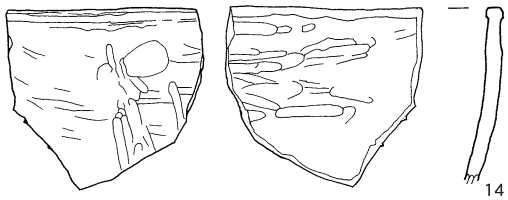
第13図　Ｖ層検出縄文時代晩期土坑実測図（２）及び土坑内遺物実測図（１）

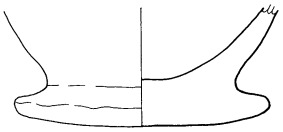


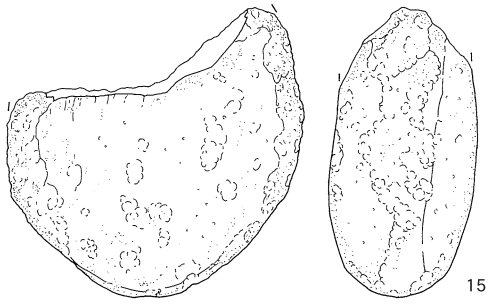


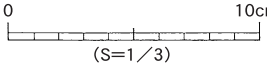












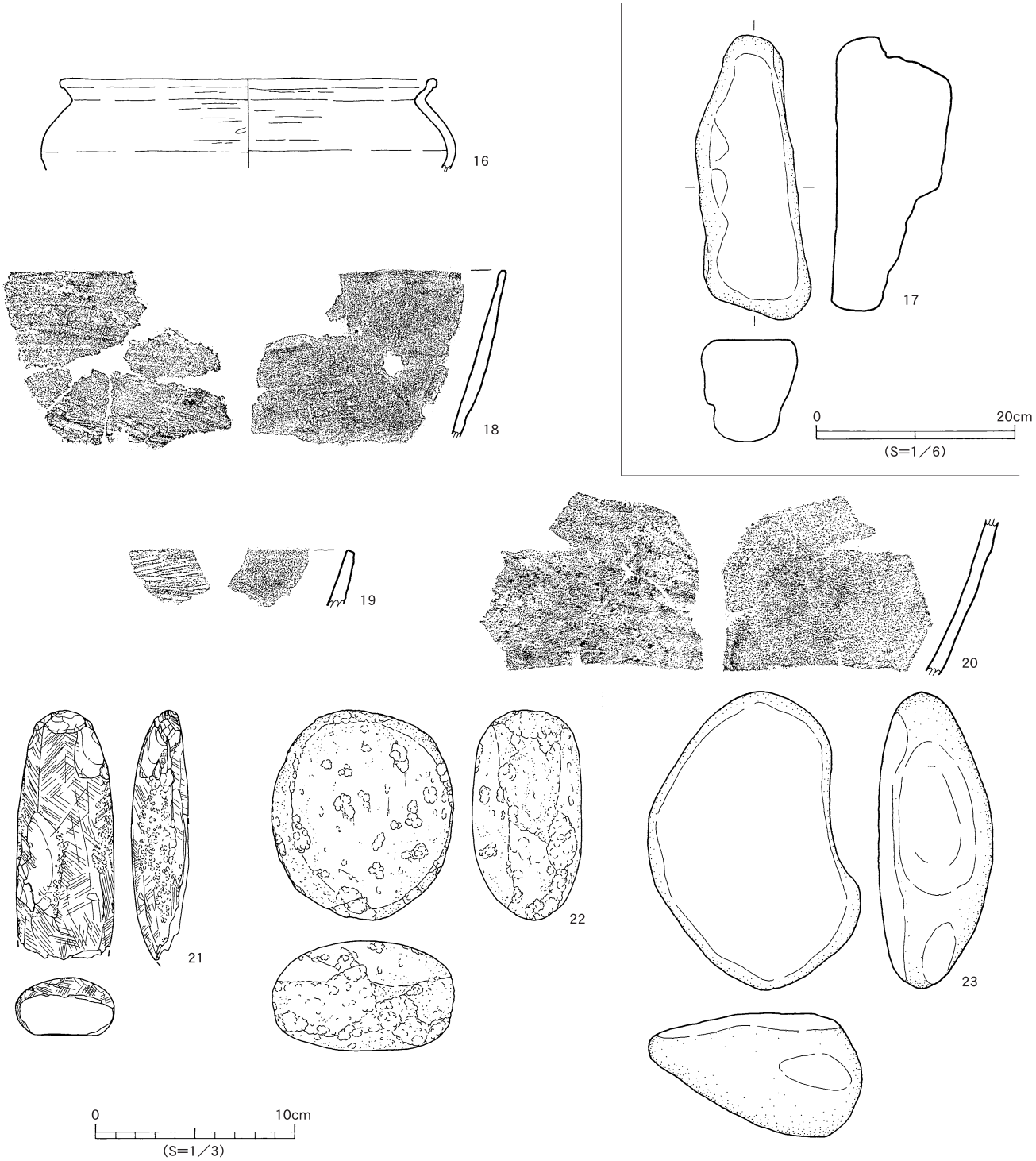
第14図　縄文時代晩期土坑内遺物実測図（２）

５号土坑（第12図，第15図18～23）

Ｂ－10区で検出した。平面形は楕円形で，長径約1.4m，短径約１mである。土器片15点と石器・剥片・礫６点が埋土内から出土した。18～23が出土遺物である。18・19は深鉢形土器の口縁部で，18はＤ４類に該当する。20は深鉢胴部である。21はホルンフェルスの磨製石斧である。22・23は磨石である。

６号土坑（第12図，第16図24～26）

Ｃ－10区で検出した。平面形は楕円形で，長径約1.3m，短径約１mである。土器片25点，礫１点が埋土内から出土した。土器片は口縁部・底部の占める割合が多い。24～26が出土遺物である。24は口縁部から胴部下位までの破片，25は口縁部から底部までの破片で復元ができた。いずれも口縁部が肥厚する特徴があり，包含層遺物のＤ１類に該当する。26は粗製の浅鉢底部である。



第15図　縄文時代晩期土坑内遺物実測図（３）

７号土坑（第12図）

Ｄ－８区で検出した。平面形は円形で，直径は約1.1mである。遺物は埋土内から出土しなかった。

８号土坑（第13図）

Ｄ－８区で検出した。平面形は楕円形で，長径約1.2m，短径約0.9mである。胴部土器片１点が埋土内から出土した。

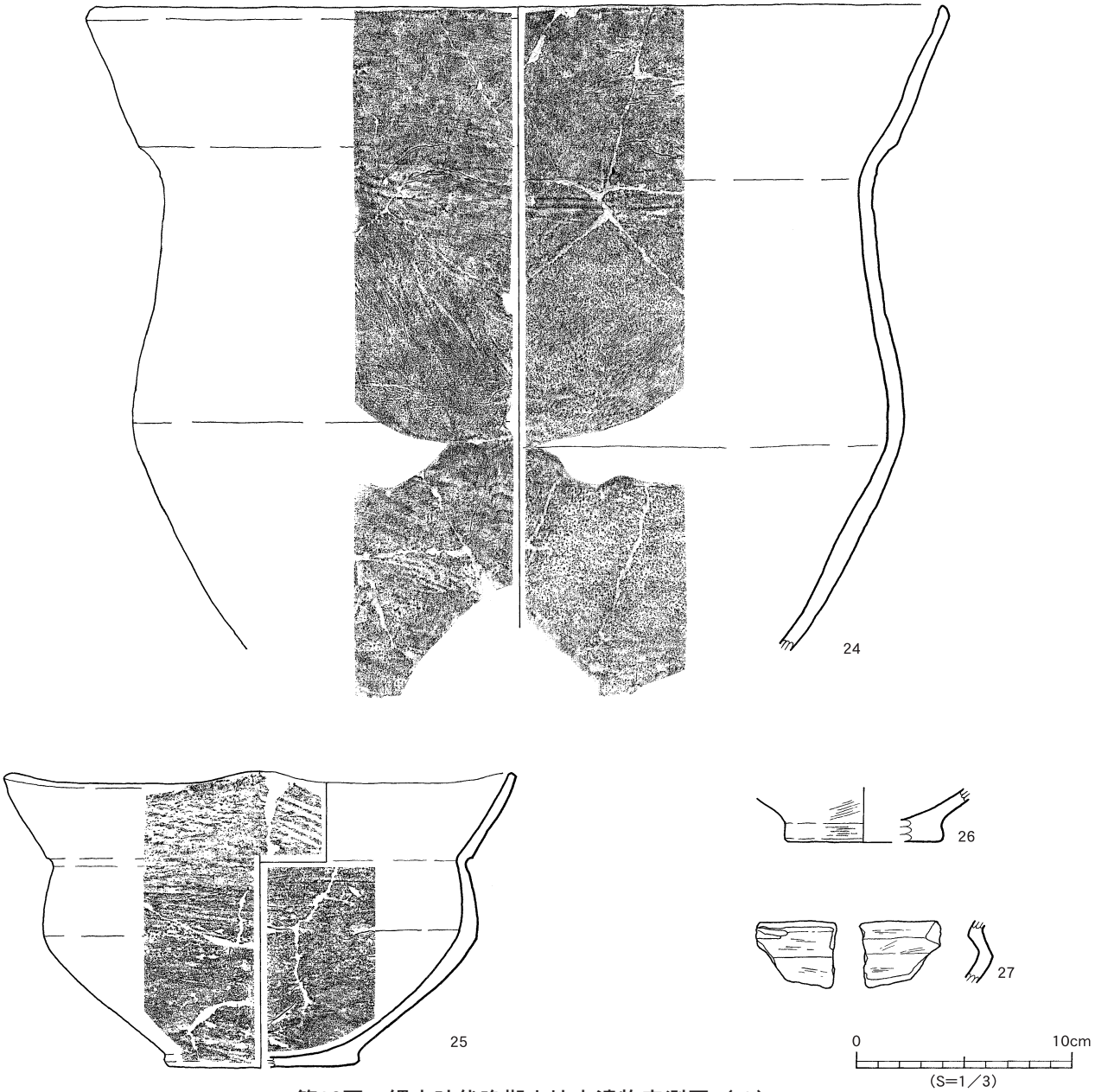
９号土坑（第13図，第16図27）

Ｆ－６区で検出した。平面形は円形で，直径は約１mである。土器片６点・石器１点が埋土内から出土した。27が出土土器で浅鉢胴部片である。

イ　埋設土器（第17図28）

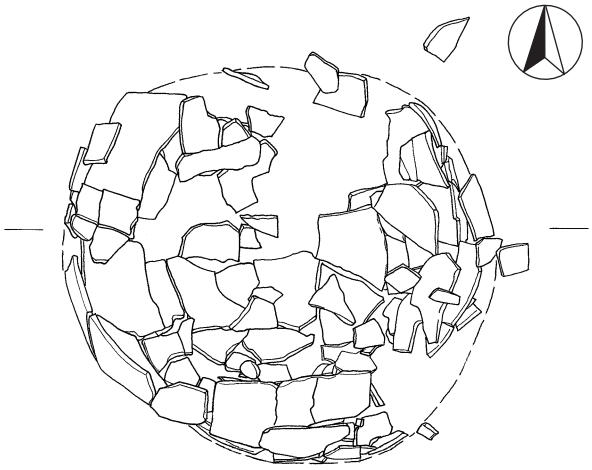
Ｄ－９区Ⅴ層で検出した。頸部から上位は削平によって欠損し，やや上下に潰れた状態であった。土器周囲の検出面でのプラン，断面での掘込みは確認できなかった。また，土器内部の土壌においても，肉眼での観察ではⅤ層との違いを見いだすことができなかった。そのため，遺構の用途を明らかにする目的で土壌分析を試みた。その結果リン・カルシウムを多く含まないことが明らかになった。詳細については，第５章自然科学分析の第５節を参照されたい。

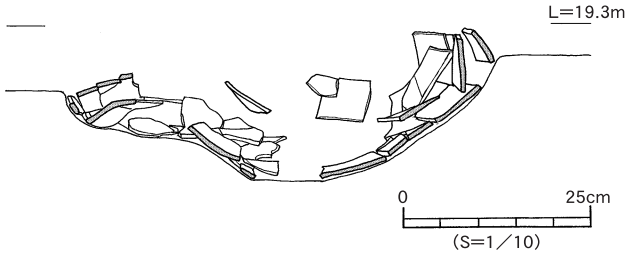
28の深鉢は復元を試みたものである。大きさは胴部最大径が約50㎝，底部直径が約９㎝である。底部の打ち欠きは見られない。Ｄ１類ないしＤ２類に属すると考えられる。

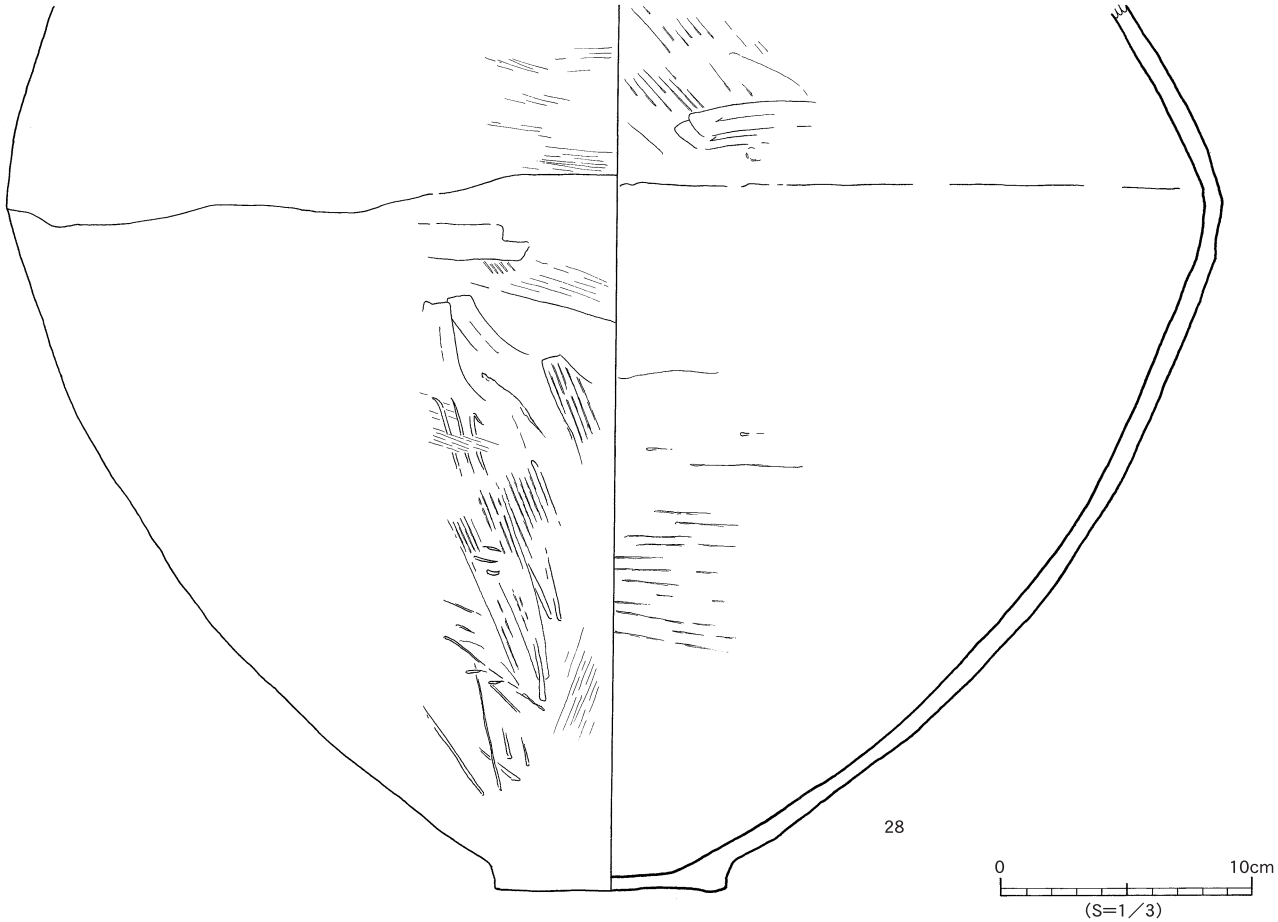


第16図　縄文時代晩期土坑内遺物実測図（４）

埋設土器半截状況







第17図　縄文時代晩期埋設土器検出状況図及び土器実測図

⑶　遺物

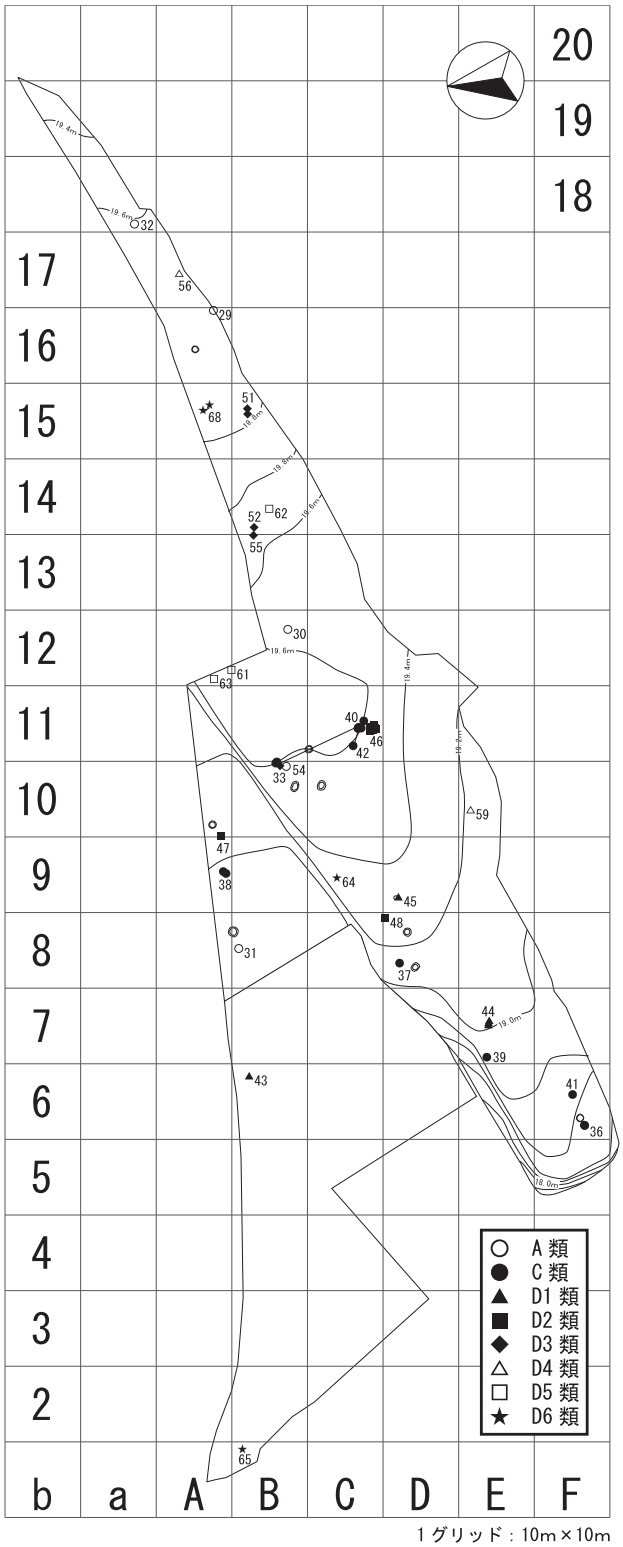
ア　土器

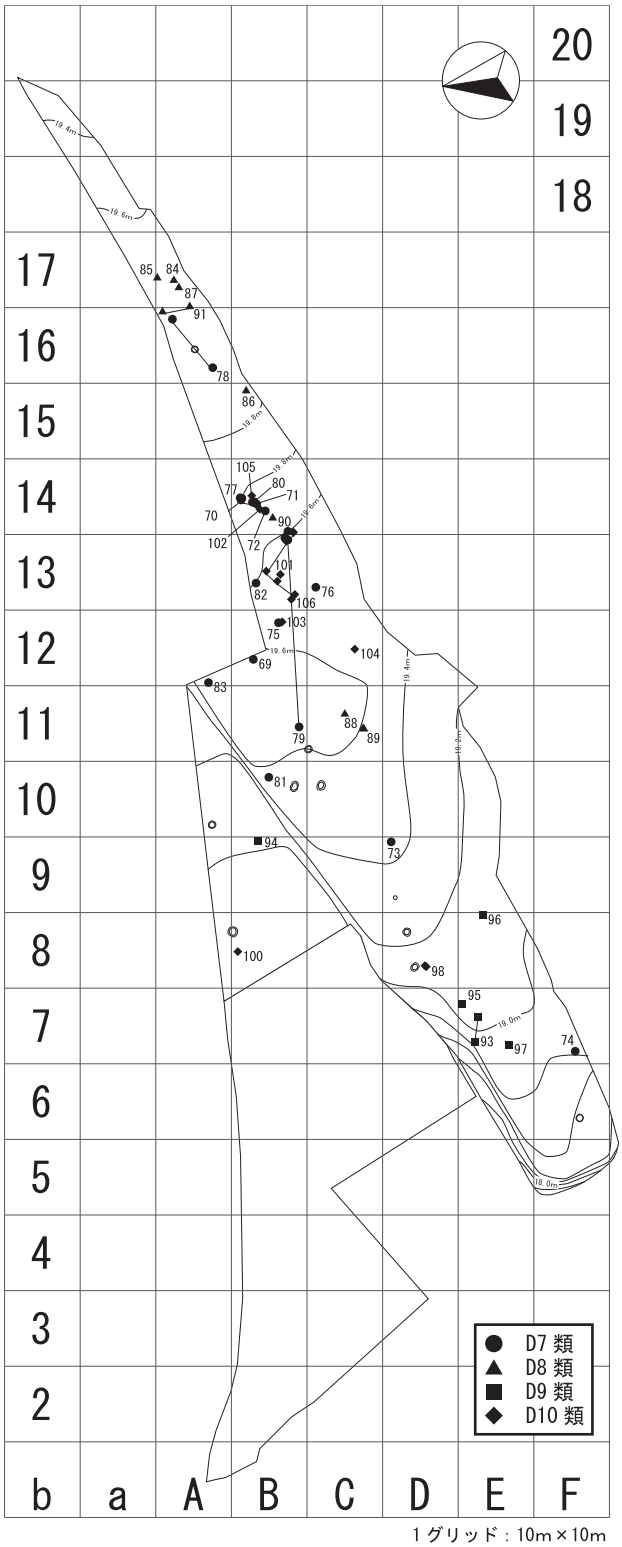
概要

縄文時代晩期に属する土器は，平成21年度の調査区全域と平成19年度の調査範囲の一部で出土し，Ａ～Ｆ類の６つに分類した。それぞれの類別の出土状況は第18・27図である。Ｄ類（粗製土器）は深鉢・鉢，Ｅ類（半粗半精製土器）は鉢，Ｆ類（精製土器）は浅鉢からなり，それぞれの類の中において器形などの特徴から細分を試みた。内容については各項目で詳述していくこととする。

Ａ類（第19図29～33）

口縁部が肥厚して内弯し，数条の沈線・凹線を巡らすものを一括した。総数で17点出土し，そのうち５点を図





第18図　縄文時代晩期土器出土状況（１）

化した。29は，内弯する口縁部の外面に凹線が２条施される。30～33は，口縁部外面に沈線が数条施されている。30は，内外面にミガキが明瞭に確認できる。32は，破断面で口縁部下位の屈曲部の接合痕が明瞭に確認できる。

Ｂ類（第19図34）

口縁部が内弯し，数条の沈線が巡るものである。総数で４点出土し，そのうち１点を図化した。34は，器壁が薄く，内外面はミガキの調整が入る。口縁部外面に沈線による文様が入り，赤色顔料の残存が確認できる。

Ｃ類（第19図35～第20図42）

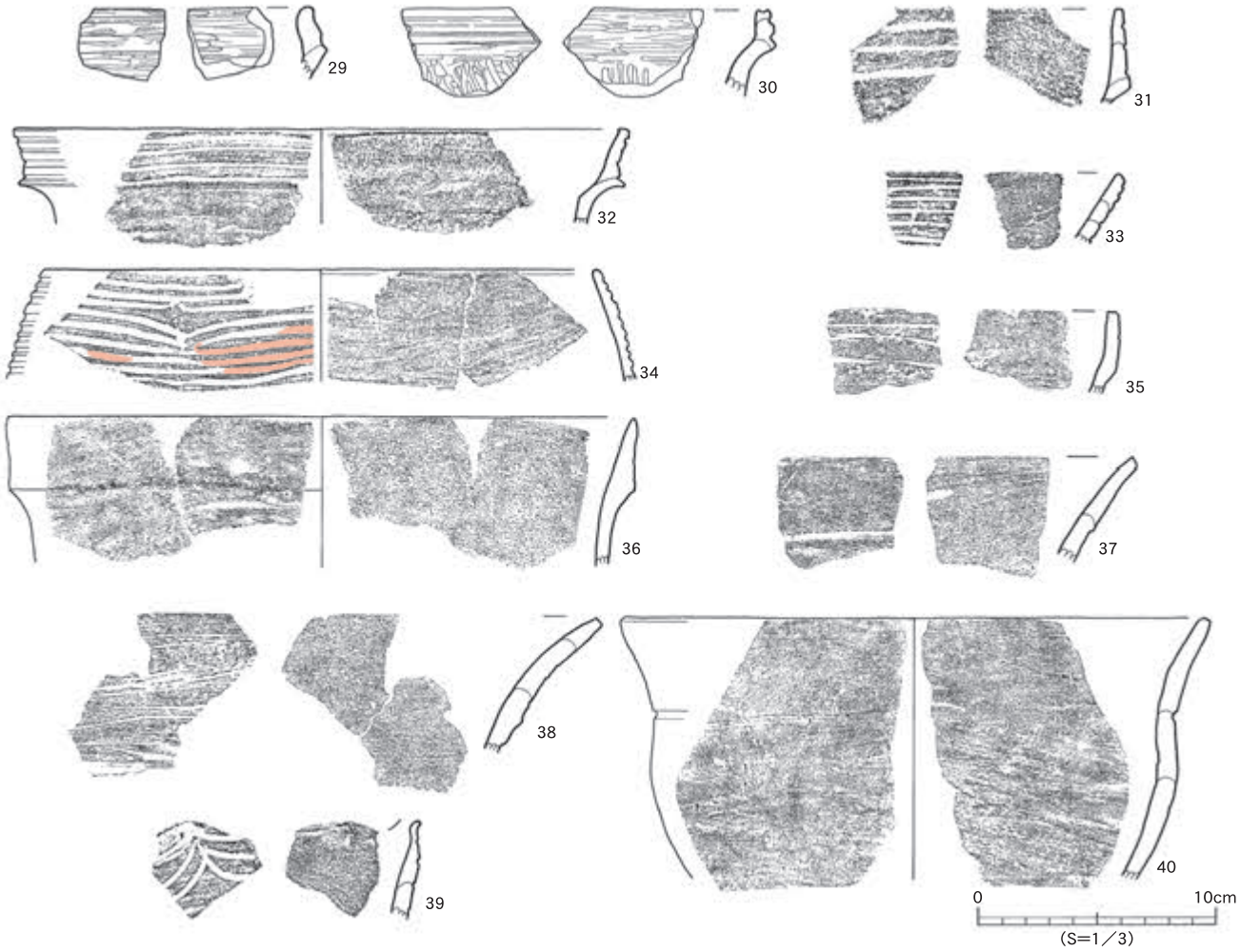
口縁部が肥厚し，外に開くものである。また，口縁部下位に段を有する。総数で20点出土し，そのうち８点を図化した。35は，やや内弯する口縁部の外面に沈線が施される。36～38は，外傾する口縁部をもつ。38は，横位の沈線が不規則に施される。39は，波状口縁を呈し，波頂部へ向かうように沈線が施文されている。40は，口縁部の下端に段を有し，やや膨らむ胴部へ至る。41は，貝殻条痕の残る口縁部の下端に段を有し，強く屈曲する胴部へ至る。42は，外反する口縁部の下端に段を有する。

Ｄ１類（第20図43～45）

口縁部が肥厚せずに外傾し，胴部が屈曲するものを一括した。総数で18点出土し，そのうち３点を図化した。43は，貝殻条痕の残る口縁部が外傾し，胴部で屈曲する。44は，口縁部上位が欠損のため不明であるが，口縁部下位から胴部まで外面全面に貝殻条痕が残り，胴部でやや強く屈曲する。45は，頸部から胴部の破片である。胴部上位は，ナデの調整で貝殻条痕が残らない。胴部の強い屈曲部より下位の胴部に丁寧な貝殻条痕が確認できる。

Ｄ２類（第21図46～50）

口縁部が緩やかに外反し，胴部が膨らむものを一括した。総数で68点出土し，そのうち５点を図化した。46は，底部の形状が欠損のため不明であるが，外面全面に貝殻条痕が見られる。一部ナデも見られるが，極めて調整は粗い。また，胴部内面にも貝殻条痕が残る。47は，不規

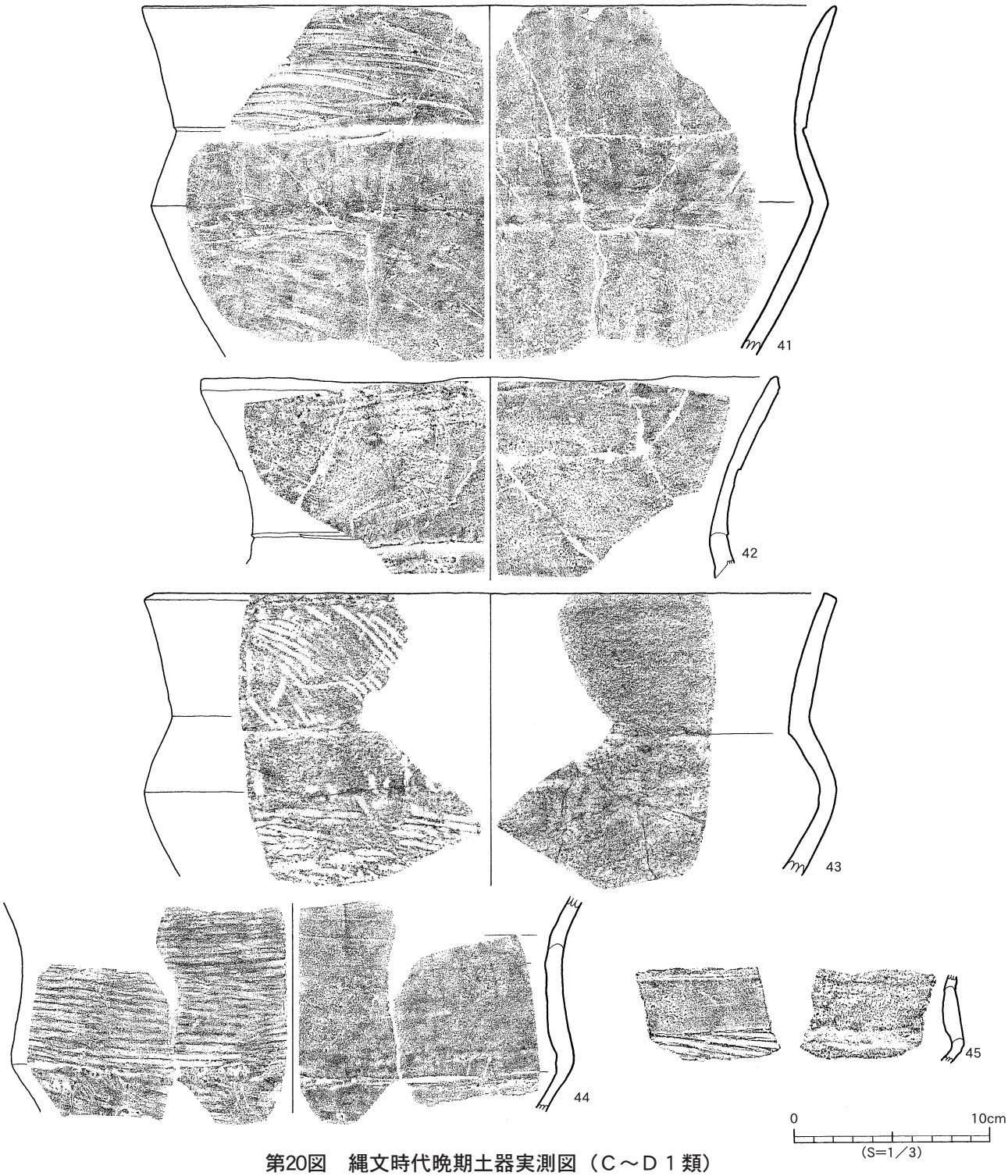


第19図　縄文時代晩期土器実測図（Ａ～Ｃ類）

則に交差する貝殻条痕が口縁部外面に残る。器壁は厚く，平たい口唇部をもつ。48は，口縁部外面をナデで調整しているが，若干の貝殻条痕が残る。器壁は厚く，口唇部の断面観は丸みを帯びる。49・50は，内外面共にナデ調整が不完全で，全面にわたって貝殻条痕が残る。49は，口唇部の形成が丁寧でない。50は，口唇部に対して交差する方向に二枚貝でナデたと思われる貝殻条痕が残る。

Ｄ３類（第22図51～55）

口縁部が直行し，胴部は僅かに屈曲するものを一括した。総数で13点出土し，そのうち５点を図化した。51・52は，口縁部内外面に貝殻条痕が残る。その口縁部下端で小さく屈曲し，底部へ向かう。53～55は，内外共にナデ調整が施される。口縁部下端で小さく屈曲し，底部へ向かう。器高はやや低いと思われる。55は，平たい口唇部をもつ。



第20図　縄文時代晩期土器実測図（Ｃ～Ｄ１類）

Ｄ４類（第22図56～60）

口縁部が直行ないし僅かに内弯するものを一括した。総数で61点出土し，そのうち５点を図化した。56～58は，直行する口縁部をもつ。56・57は，内面に若干貝殻条痕を残す。57は，平らな口唇部をもち，58は，薄く尖る口唇部をもつ。59・60はやや内弯する口縁部をもつ。59は厚い器面の内面に，60は，薄い器面の外面に，若干の貝殻条痕が残る。

Ｄ５類（第22図61～63）

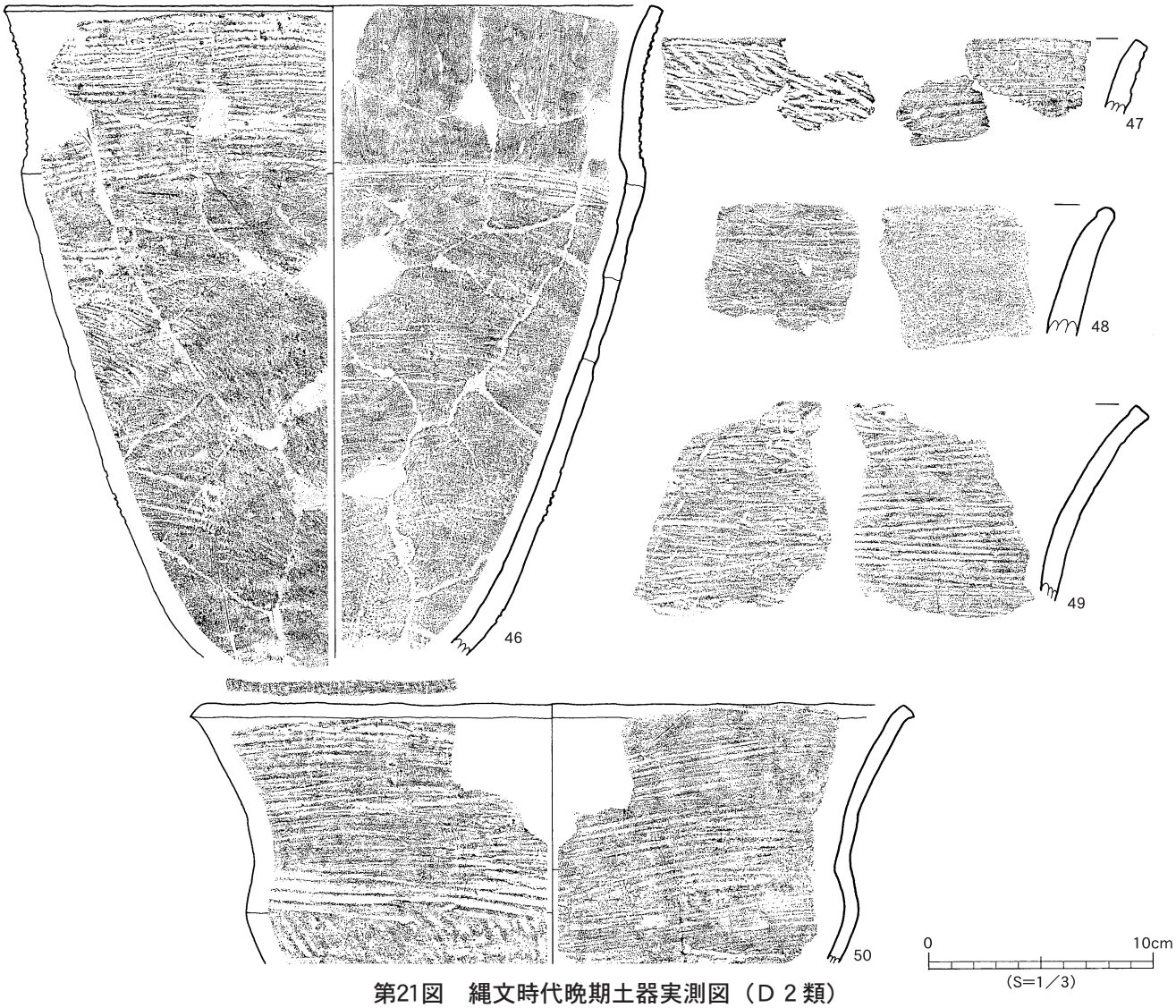
口径が胴屈曲部径より小さい鉢形を一括した。総数で７点出土し，そのうち３点を図化した。61は，内傾した口縁部の下端で強く屈曲する。62・63は，外反しつつも内傾する口縁部をもつ。62は，胴部屈曲が強く，63は，緩やかに屈曲し，内面に炭化物の付着がある。

Ｄ６類（第22図64～第23図68）

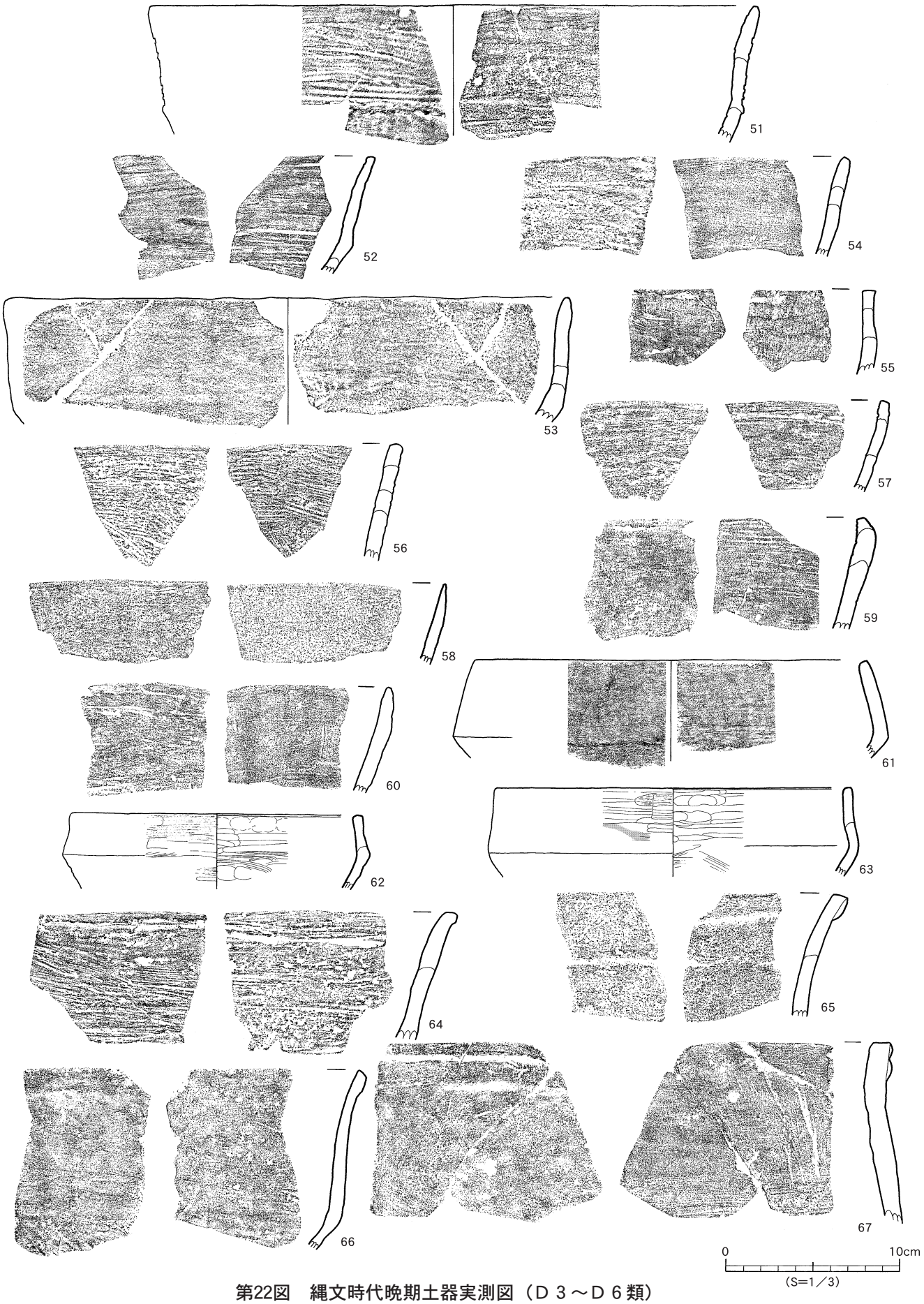
口縁部上端を肥厚させたものを一括した。総数で58点出土し，そのうち５点を図化した。64～66は，外反する口縁部をもつ。64は，口唇部近くが約８㎜の幅で肥厚する。65・66は，口縁部の上端が約20㎜の幅で肥厚する。66は，口縁部下端で屈曲し胴部へ至る。67は，内傾する口縁部の上端が24.4㎜の幅で肥厚し，その部分に１条の沈線が巡る。68は，直立する口縁部の上端が21㎜の幅で肥厚する。また，内面に貝殻条痕が明瞭に残る。

Ｄ７類（第23図69～第24図83）

口縁部下位及び胴部屈曲部に２条の刻目突帯を有するものを一括した。総数で35点出土し，そのうち15点を図化した。69～75は，外傾する口縁部が屈曲せず胴部に至る器形をもつ。69・70は，口縁部下位に上下２条の刻目突帯が巡る。71は，2条の突帯が口縁部外面を単純に巡るのではなく，横長の方形の文様を構成する。72は，へ



第21図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ２類）



第22図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ３～Ｄ６類）

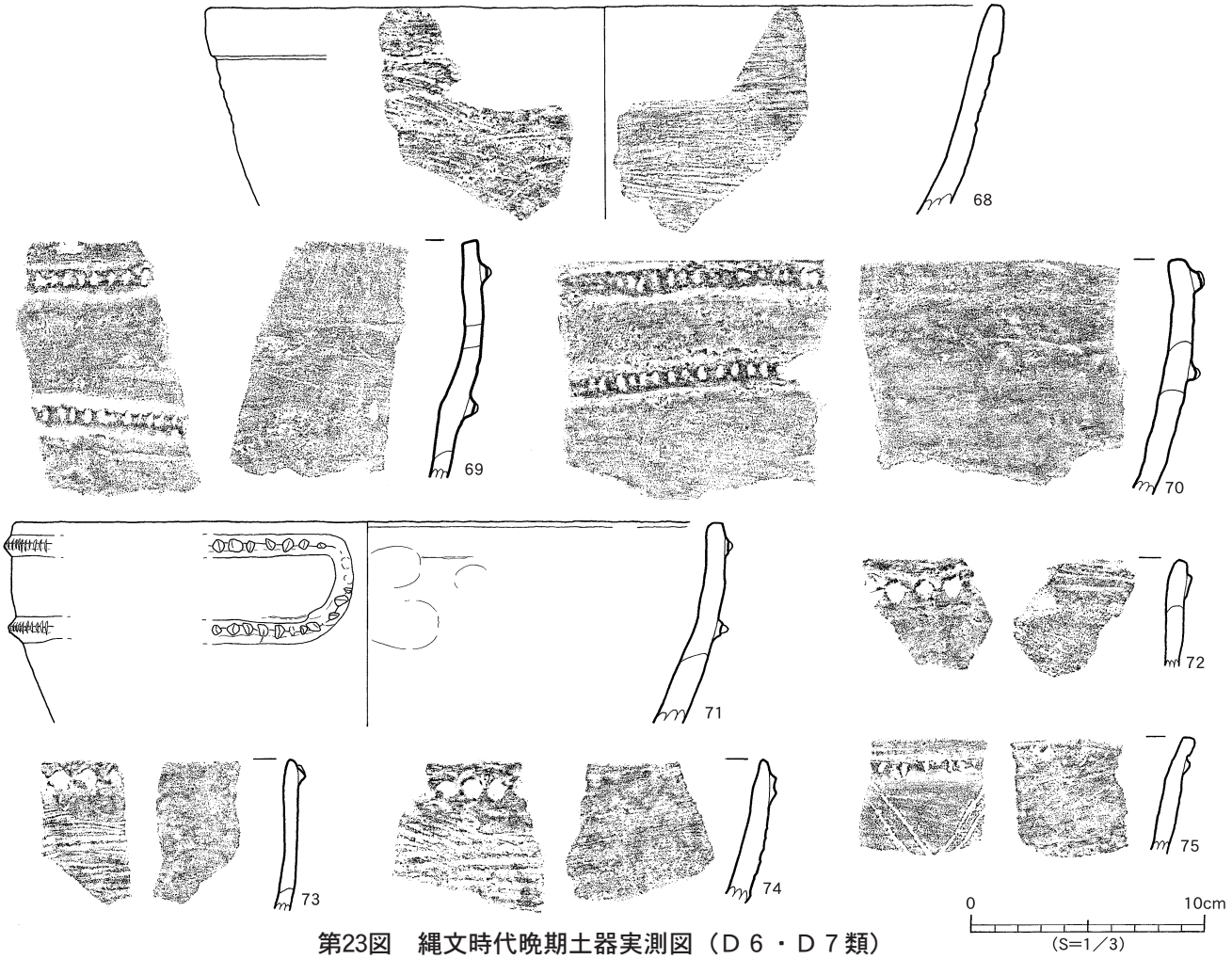
ラの側面で突帯に深い刻みを入れている。73・74は，外面に条痕が残り，73の突帯は，下から上へ押し上げるように刻みを入れたため突帯の頂部が波形を描く。75は，刻目突帯に２条の沈線による山形文を組み合わせている。76～83は，内傾する口縁部をもち，屈曲して胴部に至る器形を呈する。76～78は，口縁部下端で強く屈曲する。上下２条の刻目突帯が巡り，下の突帯は屈曲部のところに巡る。79・80は，口縁部下端で屈曲せずに緩く胴部が膨らむ器形をもつ。２条の刻目突帯が横長の方形の文様を構成する。さらに方形の文様内に沈線による山形文を組み合わせている。80は，右上に刺突のある浮文が施され，すぐ近くに補修孔も穿たれている。81・82は，無刻突帯文が２条施されている。82は，突帯の間に沈線による山形文を組み合わせている。83は，2条の沈線に巻き貝の殻頂部を使って刻みを入れている。

Ｄ８類（第25図84～92）

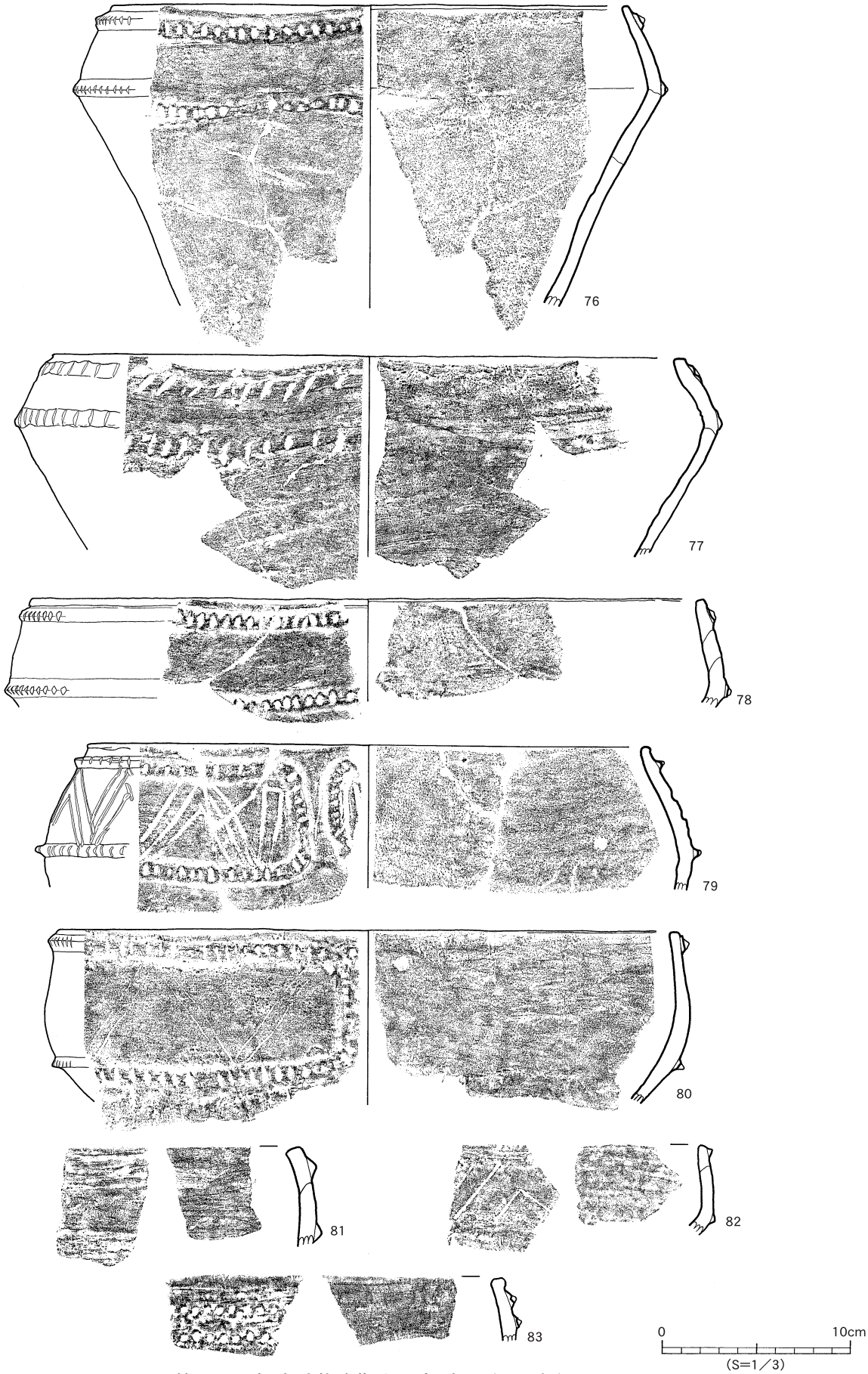
Ｄ１～Ｄ７類に属さない口縁部をもつものを一括した。総数で16点出土し，そのうち９点を図化した。84～88は口縁部に突起があるものである。84～86は，リボン状突起が付く。なかでも85・86は，口縁部を肥厚させている。87は，口縁部を肥厚させ，山形の突起が付く。88は，口縁部より厚みのある横長の方形状の突起が付く。89は，波状口縁で，口縁部を肥厚させている。口縁部下端外面に段を有し，その段の位置にリボン状突起を付けている。器形は，緩やかな「S」字カーブで口縁部から底部に至る。90は，外反する波状口縁で，波頂部に１か所「U」字の刻みが入る。91は，大きく外傾した口縁部であることから粗製の浅鉢の可能性がある。焼成後に穿たれた補修孔が確認できる。92は，外傾する口縁部で口唇部が薄く作られている。その口縁部に外面から内面方向に押し込まれているところがある。その場所は，上面観で口唇部が内側に弯曲するのが確認できる。

胴部片（Ｄ９類）（第25図93～97）

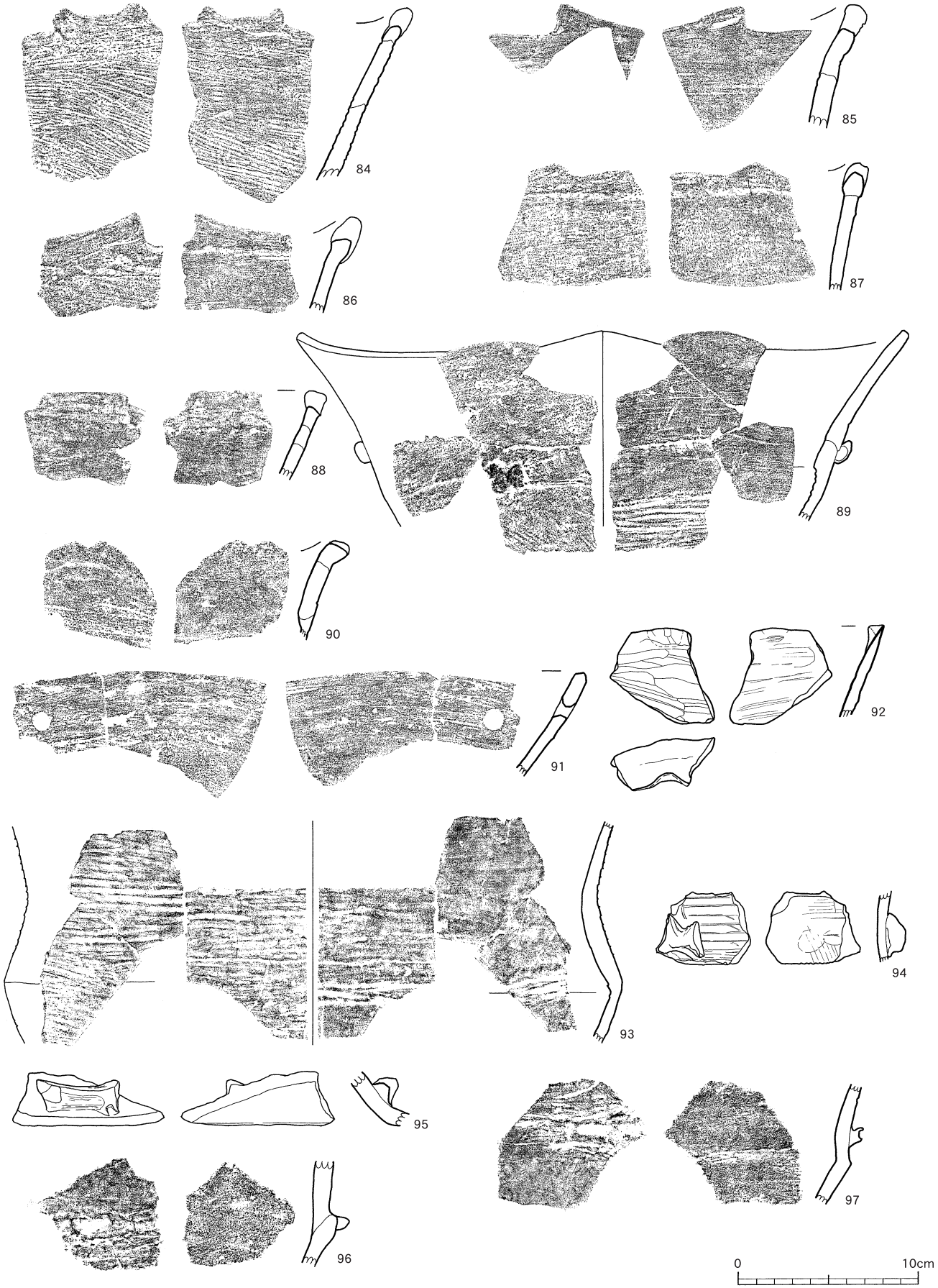
胴部片を一括した。総数で12点出土し，そのうち５点を図化した。93は，外面に貝殻条痕の残る胴部片で，屈曲が見られる。口縁部の特徴は不明であるが，Ｄ１類に属する可能性がある。94・95は，胴部が括れているところにリボン状突起が付く。94のリボン状突起は左右対称でなく，左が大きい。96・97は，不規則な突帯状の突起が付く。96は，屈曲部に段を作り，そこに突起が付く。



第23図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ６・Ｄ７類）



第24図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ７類）

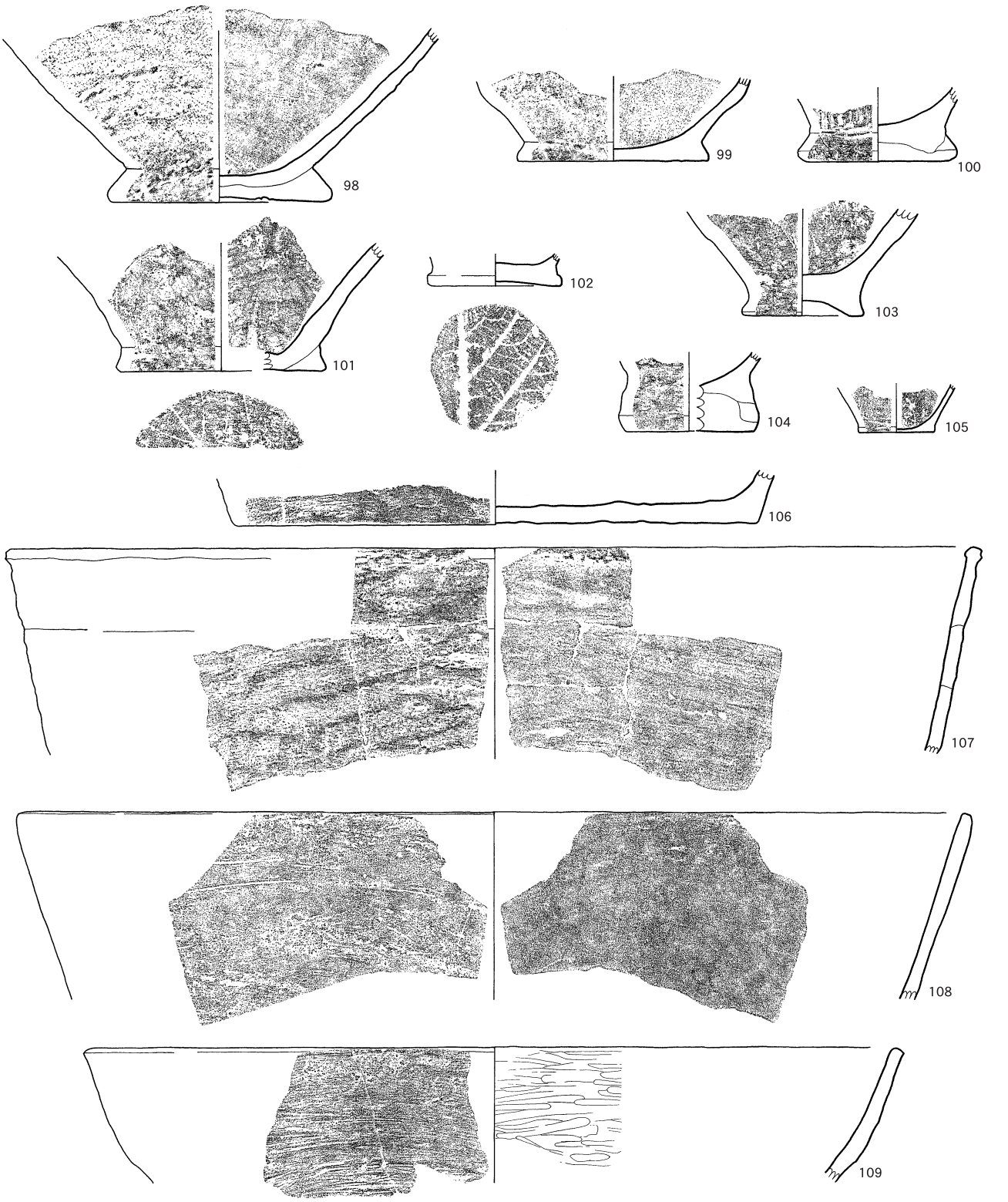


第25図　縄文時代晩期土器実測図（Ｄ８・Ｄ９類）

突起の断面観は丸い。97は，屈曲部より上位の上胴部に粘土紐が貼り付く。それをつまみ上げるような成型で，突起中央が凹み，上端が上方を向く断面観になったと思われる。

底部片（D10類）（第26図98～106）

底部片を一括した。総数で54点出土し，そのうち９点を図化した。98～102は，平底で底部外面が外へ開くものである。101・102は，葉脈の圧痕が底に見られる。103は，上げ底で，104は，充実高台である。105は，器壁が薄く，外面が外に開かない平底の底部で，器形が小さい。

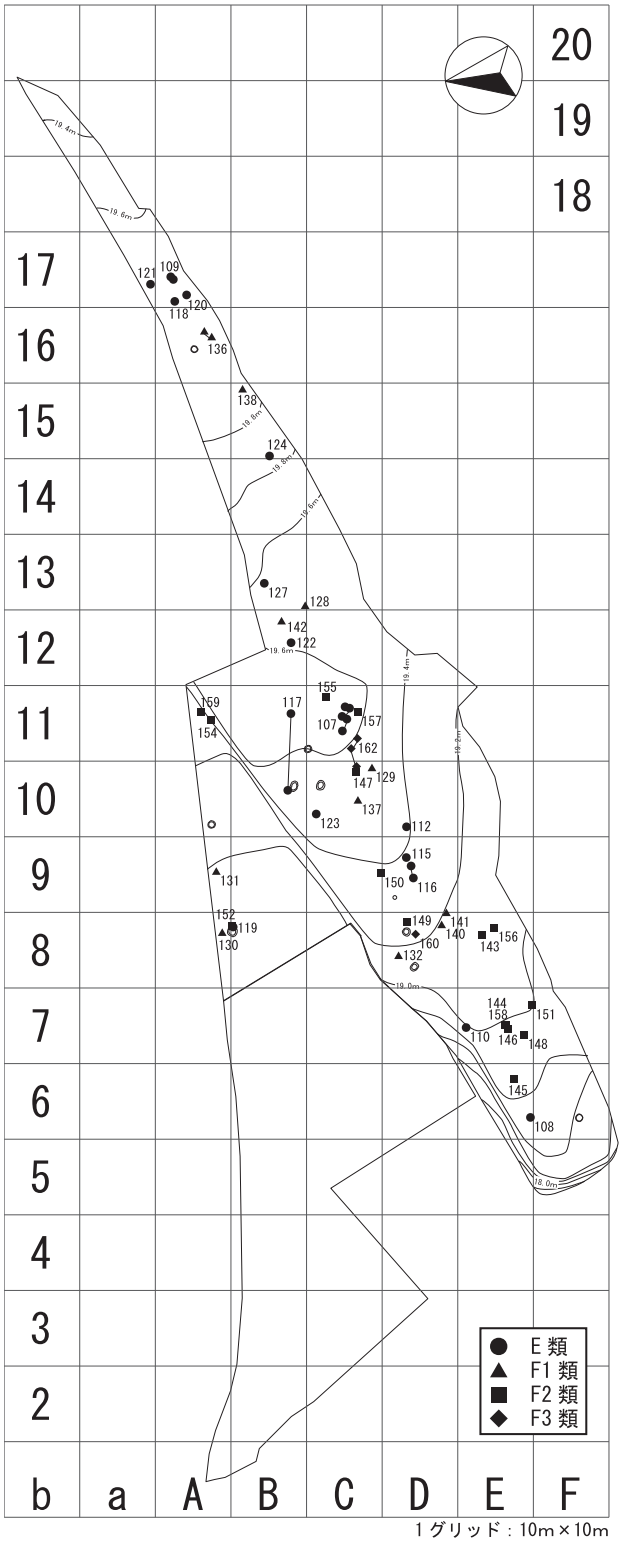


第26図　縄文時代晩期土器実測図（D10類，E類）

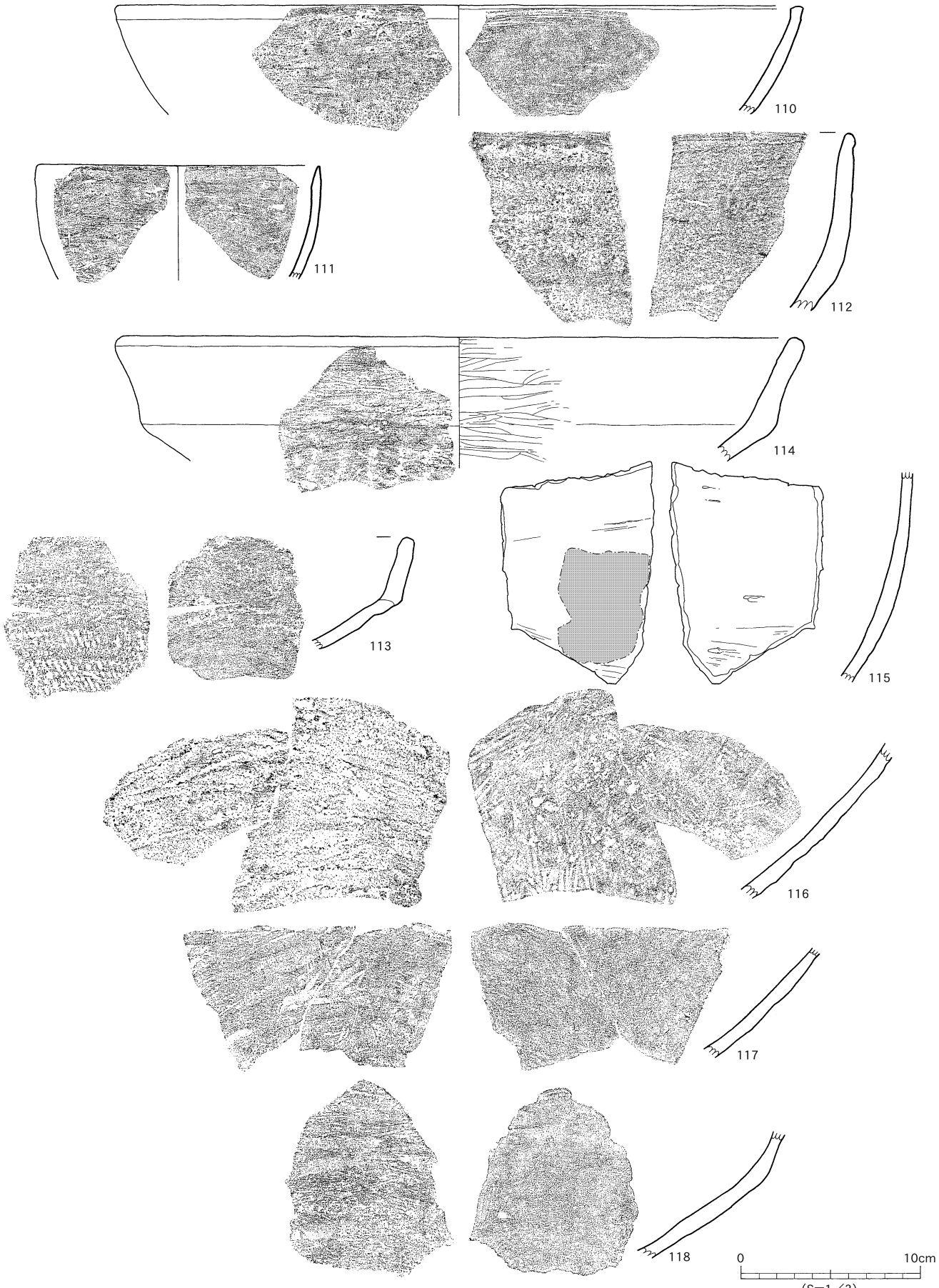
106は，直径約28㎝の平底である。類例がなく，器形を推測できない。

E類（第26図107～第29図127）

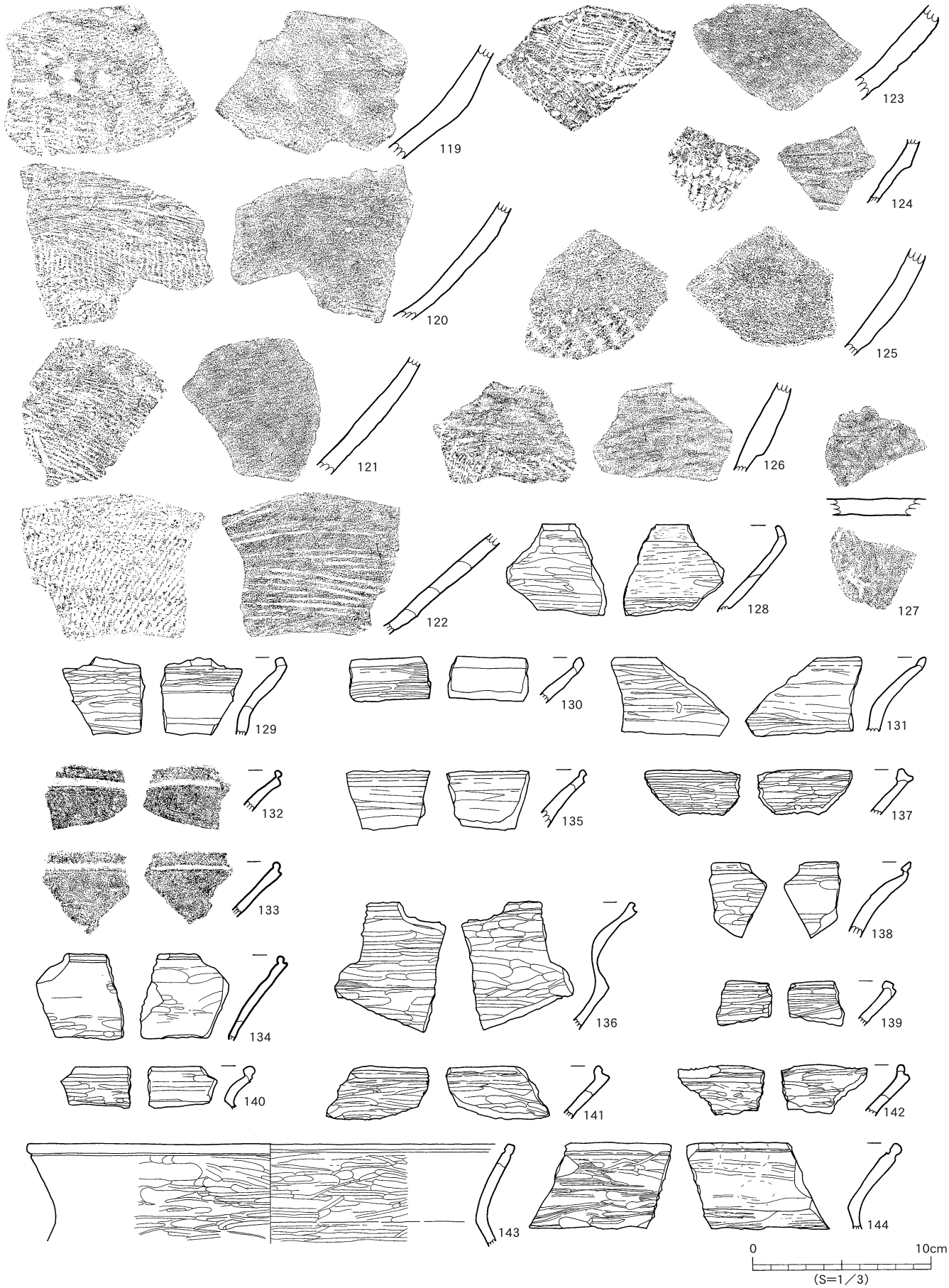
該期の土器群のうち内面にミガキを施し，外面に条痕やナデなどが施されるものを半粗半精製土器として位置づけ，E類とした。出土状況は第27図に示す。その範囲で主に出土し，総数51点であった。そのうち21点を図化した。107～110は，直径が30㎝を越える大型の器形をもつ。口縁部から屈曲せずに胴部へ至る。107は，粗い作りであるが，玉縁口縁のように仕上げられている。また外傾も弱く，他に比べ器形が高いと思われる。110は，口縁部内面上端が内に反る。111は，小型の器形をもつ。112～114は，口縁部から屈曲して胴部に至る器形をもつ。112は，緩やかに屈曲するタイプである。113・114は，112に比べ屈曲が明瞭である。また，屈曲部下位に組織痕をもつ。113は粗い織りの布目，114は，編布圧痕が確認できる。115～119は胴部片である。115～117は，屈曲部を確認できない。115は，外面に炭化物が約２㎜の厚さで付着している。116の内面は，貝殻条痕後に丁寧なナデの調整を施し，極めて平滑に仕上げてある。117の内面は，貝殻条痕後にミガキを施している。118・119は，器面に僅かであるが屈曲が確認できる。119は，指頭圧痕と思われる窪みが複数確認できる。また，指頭と異なる不可解な窪みも複数確認できる。120の外面は，上位が横ナデ，下位に布目が付く。内面は平滑にミガキが入る。121・122は，粗い織りの布目の圧痕が確認できる。122は，4本の粘土紐が積まれていることが外面の観察から確認できる。また，内面はミガキが入るが，貝殻条痕が明瞭に残る。123は，編布圧痕が確認できる。124は，外面の器面調整が行われていない粗い胴部片である。外面全体に粘土のしわが入る。ただし，外面に段を有し，その段の下位に布があてられていたのではないかと思われる組織痕が僅かに確認できる。内面はヘラナデが粗に入る。125は，内外面共に風化が激しく，器面調整は不明である。しかし，外面の下位に斜位連続する編布圧痕が確認できるのでここに掲載した。126は，外面に段を有し，その下位に物の特定はできないが圧痕が確認できるのでここに掲載した。127は，外面に非常に細かく編まれた布目が確認できる。詳細については，第５章自然科学分析の第８節で述べているので参照されたい。



第27図　縄文時代晩期土器出土状況（２）



第28図　縄文時代晩期土器実測図（E類）



第29図　縄文時代晩期土器実測図（Ｅ類，Ｆ１・Ｆ２類）

Ｆ類

該期の土器群のうち精製土器をＦ類とした。さらに口縁部・胴部等の特徴からＦ１～Ｆ８類に細分した。それぞれの類別の出土状況は第27・30図である。

Ｆ１類（第29図128～142）

口縁部が短く直立し，胴部が屈曲して底部に至るものを一括した。総数で35点出土し，そのうち15点を図化した。128～131は，外傾する口縁部の上部が屈曲し，短く直立する。130は，外面調整がミガキであるが，内面調整は風化のために不明である。131は，内外面の色調が明赤褐色を呈し，化粧土の可能性がある。132～141は，外傾する口縁部の口唇部近くにおいて内外面に１条の沈線が施される。そのため玉縁状の口縁部を呈する。136は，口縁部が緩やかに外反する。また，胴部が強く屈曲し，器壁の厚さに大きな変化が見られる。142は，口縁部外面に１条の沈線が施され，玉縁状の口縁部を呈する。

Ｆ２類（第29図143～第31図159）

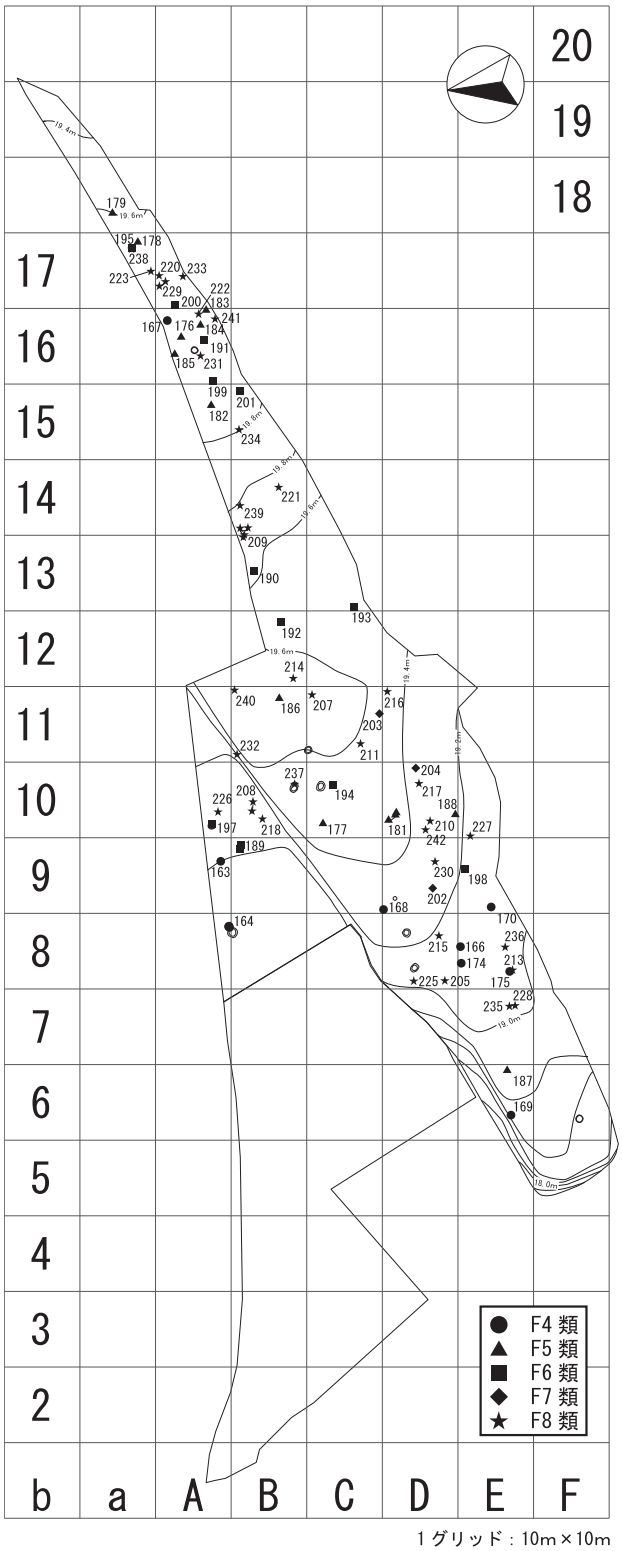
口縁部内外面に１条の沈線が施され，玉縁状の口縁部を呈する。口縁部は頸部まで緩やかに外反し，屈曲して底部に至るものを一括した。総数で74点出土し，そのうち17点を図化した。143～150は，器壁がやや厚く，内外面に巡る１条の沈線が口唇部からさほど離れていない位置で施されている。そのため玉縁状の口縁部断面が正方形もしくは円形に近い。148は，胎土のきめが細かく，砂粒がほとんど含まれない。151～156は，内外面に巡る１条の沈線が口唇部からやや離れている位置で施されている。そのため玉縁状の口縁部断面が楕円形に近い。152・154は，他の資料と比べ器高が低い。155・156は，器壁は薄く，156は口縁部下位外面に段を有する。157は，内外面に施される１条の沈線の位置にずれがあるため口縁部断面が「Ｓ」字形になる。また，胎土のきめが細かく，砂粒がほとんど含まれない。158は，口縁部内面のみに沈線が巡る。159は，器壁が厚く，器面で砂粒を多く確認できる。

Ｆ３類（第32図160～162）

口縁部内外面に１条の沈線が施され，玉縁状の口縁部を呈する。また，口径より胴部径が大きく，胴部が強く屈曲するものを一括した。総数で７点出土し，そのうち３点を図化した。160は，上胴部がやや膨らむ。161は，玉縁状の口縁部がやや直立する。162は，口縁部の内面にミガキが確認できるが，頸部以下の内面は，粗いナデで調整が済まされている。

Ｆ４類（第32図163～175）

口縁部内外面に１条の沈線が施され，玉縁状の口縁部



１グリッド：10m×10m

第30図　縄文時代晩期土器出土状況（３）

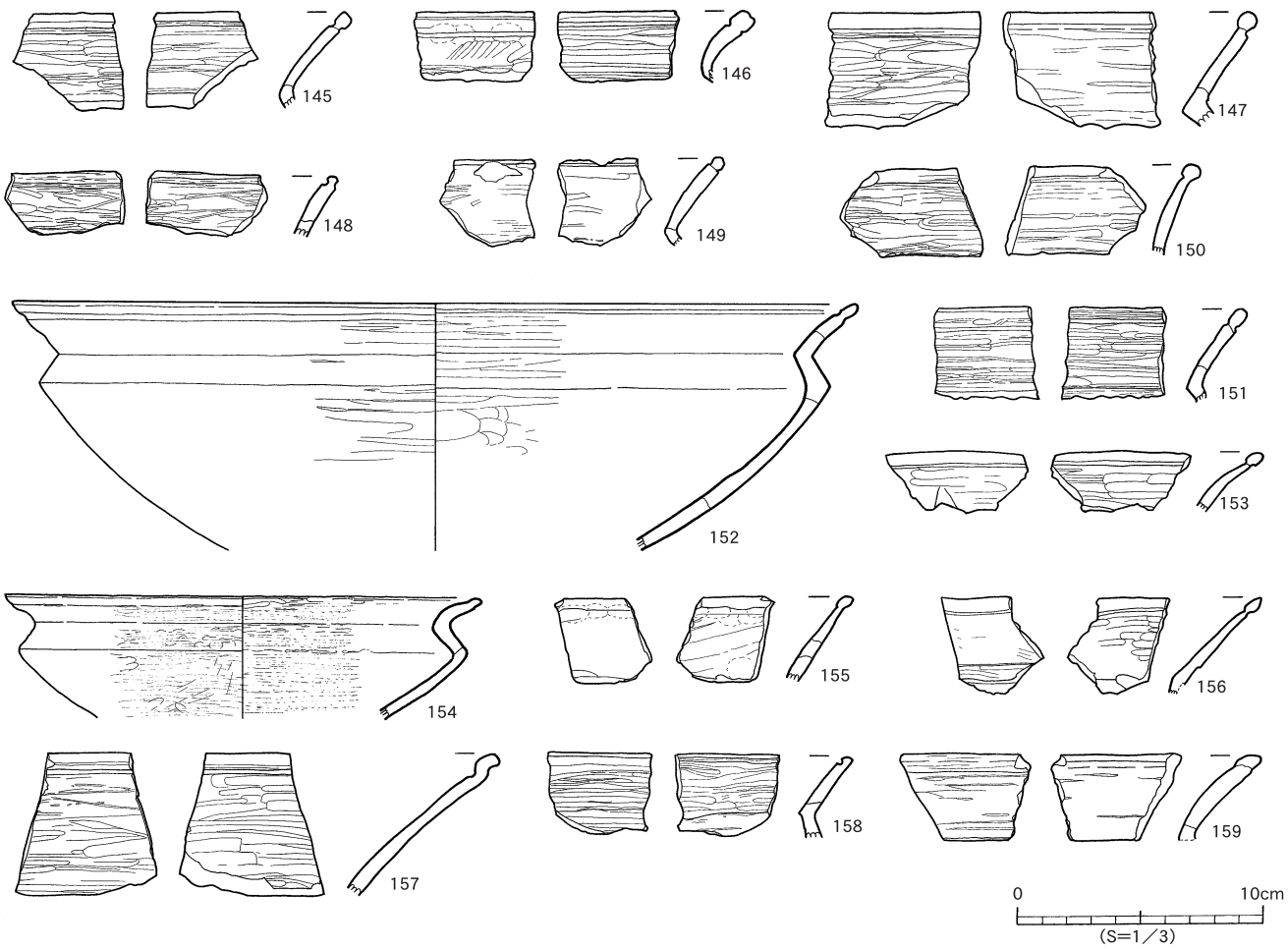
を呈する。また，口縁ー頸部の間が短く，口径より胴部径が大きい。胴部の屈曲は丸みを帯びる程度で，Ｆ３類のように強く屈曲しないものを一括した。総数で86点出土し，そのうち13点を図化した。163～168は，器壁は厚く，大きな玉縁状の口縁部をもつ。164の外面調整は，ミガキと考えられるが，剥落が激しく断定できない。167は，非常に短い口縁部をもつ。また，内面の風化が激しい。168は，口縁部の形状に変化が見られることから突起を有する可能性がある。169～175は器壁が薄く，小さな玉縁状の口縁部をもつ。170・171の外面調整は，ミガキと考えられるが，風化で表面が荒れているため断定できない。174・175は，短い口縁部に明瞭な沈線が巡るため凹凸の変化が激しい玉縁状の口縁部を有する。

Ｆ５類（第32図176～第33図188）

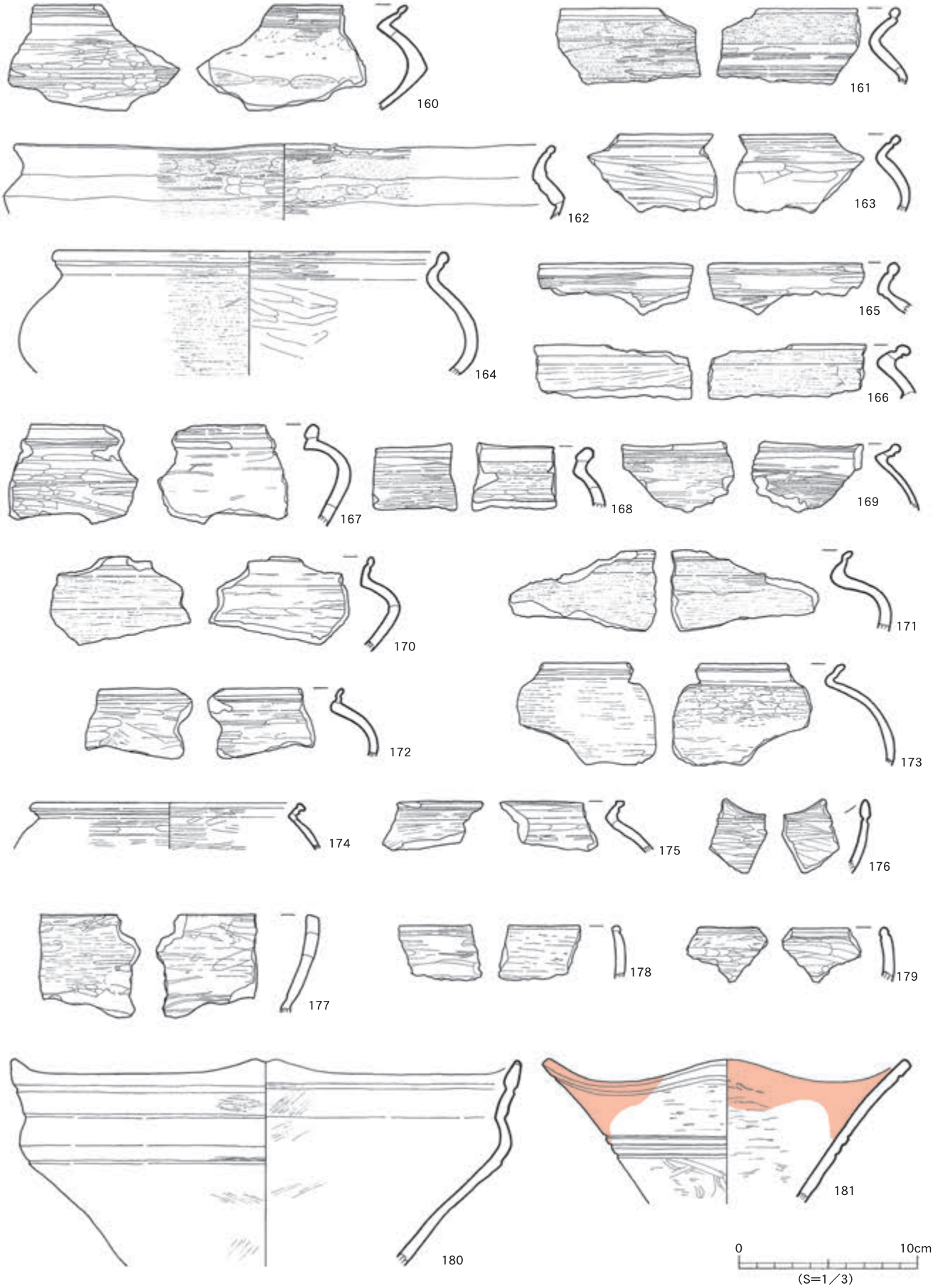
口縁部が内弯気味に立ち上がり，胴部が外反する流水形の器形を呈する。胴部は屈曲しないタイプも存在する。底部は，立ち上がりが丸みを呈する平底である。波状口縁が大半を占め，赤色顔料が残存する沈線が口縁部，胴部屈曲部，底部近くに巡る。また，リボン状突起・ヒレ状突起が付く資料が多い。総数で17点出土し，そのうち13点を図化した。176～179は口縁部破片である。176は，リボン状の突起が口縁部に付く。180は，胴部が外反する流水形の器形を呈するタイプである。器面は粗れているため調整方法の断定はできない。181は，胴部が屈曲しないタイプである。内外面に赤色顔料の付着が広く確認できる。182～185は胴部破片である。いずれも沈線が施されている。182・183は，沈線に赤色顔料を確認した。185は，沈線の施されている位置から底部近くの破片と思われる。186～188は底部もしくは底部付近の破片である。187は，外面に段を有する。その他は沈線が施されている。

Ｆ６類（第33図189～201）

器高が低く，胴部などに屈曲がないものを一括した。総数で54点出土し，そのうち13点を図化した。189～193は，口縁部に沈線がない。190・191は，口縁部が僅かに内弯し，直立気味である。194は，口縁部内面に浅い沈線が見られる。195は，口縁部外面に沈線が見られる。196～199は，口縁部内外面に明瞭な沈線が巡り，玉縁状の口縁部を呈する。200は，口縁部内外面にごく浅い凹線が見られる。201は，外面の調整が粗く，凹凸が確認できる。



第31図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ２類）



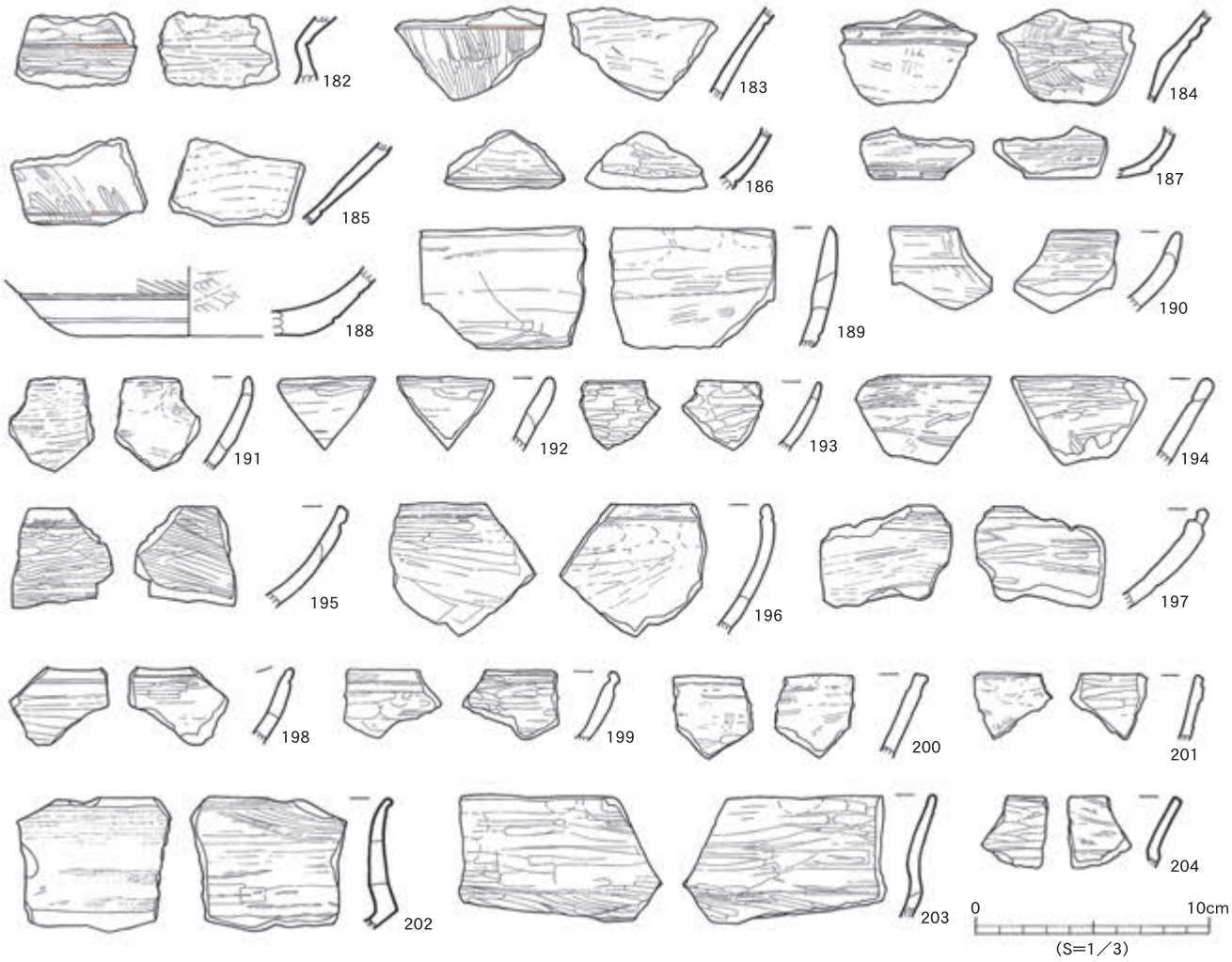
第32図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ３～Ｆ５類）

Ｆ７類（第33図202～204）

外反する口縁部をもち，口縁部下位で屈曲し，底部に至るものを一括した。刻目突帯文土器が出現する時期の浅鉢である。総数で３点出土し，そのうち３点を図化した。202は，大きく外反する口縁部をもち，口縁部下位で強く屈曲する。203は，口縁部下位の屈曲が緩やかである。204は，203と同様の形態的特徴をもち，小型の器形をなすものと考えられる。

Ｆ８類（第34図205～242）

分類を試みたが，Ｆ１～Ｆ７類に属させることが困難だった口縁部及び胴部片と底部を一括した。205～208は，口縁部が外反し，胴部で屈曲する。器形はＦ２類とほぼ同じであるが，口縁部に沈線が巡らないところに違いがある。208は，他と比べて器高が低い。209は，短い口縁部に胴部の強い屈曲をもつ。器形はＦ３類とほぼ同じであるが，口縁部に沈線が巡らないところに違いがある。210と211は，外傾し，肥厚した口縁部をもつ。211は，口縁部下位外面に段を有する。212～214は，口縁部下位に段を有する。215は，段の下位に１条の沈線が施されている。216・217は，口縁部外面に凹線が施されている。218～222は，短い口縁部に大きく膨らむ胴部をもつ。器形はＦ４類とほぼ同じであるが，口縁部内面のみに沈線が施されている点で異なる。そのため玉縁状の口縁部ではない。218は，頸部に沿って約５㎜幅の赤彩が確認できる。219は，胴部に１条の沈線が施される。220は，下胴部が肥厚し，外面に段を有する。223・224は，短い口縁部の内面に沈線が施されたマリ状の器形を想定する。225～227は，短い口縁部の内面に沈線が施され，口縁部外径より小さい胴部は屈曲する。228は，緩やかに外反する口縁部で，沈線による形成でない玉縁の口縁部をもつ。229～236は，口縁部にリボン状突起をもつものである。232は内面に赤彩が確認できる。237・238は胴部片である。237は，口縁部下位内面に沈線が施される。238は内面の沈線に赤色顔料の付着が確認できる。239～242は，底部である。239～241は，平底であるが，242は上げ底である。ただし，242については，形態的特徴から縄文時代後期土器の可能性を否定できない。

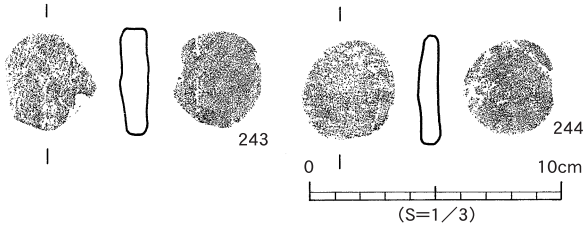


第33図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ５～Ｆ７類）

第34図　縄文時代晩期土器実測図（Ｆ８類）

円盤形土製加工品（第35図243・244）

通称メンコと呼ばれるものである。６点出土し，そのうち２点を図化した。いずれも直径が約４㎝で縁辺部は打ち欠かれている。



第35図　縄文時代晩期土器実測図（円盤形土製加工品）

表９　縄文時代晩期土器観察表(1)

挿図	番号	区		層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	備考
									外	内	外	内							
13	4	A	16		1号土坑	F	胴部		ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	5	BC	11		2号土坑	D1	口縁～胴部		ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	7	A	10		3号土坑	D	口縁部		ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	8	A	10		3号土坑	D	口縁部		ナデ	不明	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○			○		
14	9	A	10		3号土坑	D	口縁部		ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい褐色	○	○	○		○		
	10	A	10		3号土坑	D	口縁部		ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○		○	○		
	11	A	10		3号土坑	D	口縁部		ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい黄橙色	○	○		○	○		
	12	A	10		3号土坑	D	底部		ナデ	ナデ	にぶい橙色	黒褐色	○	○		○	○		
	13	A	10		3号土坑	F	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	褐灰色	○	○	○		○		
	14	A	10		3号土坑	F	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐色	褐灰色	○	○	○		○		
15	16	A	8		4号土坑	F	口縁～胴部		ミガキ	ミガキ	赤褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	18	B	10		5号土坑	D	口縁部		ナデ	ナデ	黒褐色	褐灰色	○	○		○	○	○	
	19	B	10		5号土坑	D	口縁部		条痕	ナデ	黒褐色	褐灰色	○	○			○		
	20	B	10		5号土坑	D	胴部		ナデ	不明	橙／黒褐色	浅黄橙／黒色	○	○			○		
16	24	C	10		6号土坑	D	口縁～胴部		ナデ	ナデ	橙／灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○	○	○		
	25	C	10		6号土坑	D	口縁～底部		貝殻条痕／ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	褐灰色	○	○			○		
	26	C	10		6号土坑	F	底部		ナデ	不明	にぶい橙色	にぶい黄色	○	○		○	○		
	27	F	6		9号土坑	F	胴部		ミガキ	不明	褐灰色	褐灰色	○	○	○		○		
17	28	D	9		埋設土器	D	胴～底部		ヘラナデ	ナデ	にぶい黄褐／黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
19	29	A	16	V	9960	A	口縁部	凹線文	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	橙色	○	○		○			
	30	B	12	V	9142	A	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○			○	○	
	31	B	8	Ⅳa	1474	A	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○		○	○		
	32	a	18	V	7731	A	口縁部	沈線											
	33	B	10	V	6029	A	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰褐色	○	○	○		○		
	34	C	7	Ⅳa	一括	B	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○	○		○		赤彩
		A	8		一括														
	35	C	8		一括	C	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい橙色	○	○	○		○		
	36	F	6	V	12555	C	口縁部		ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		○		
		F	6	V	12556														
	37	D	8	V	11520	C	口縁部		ナデ	ナデ	暗褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	38	A	9	V	1008	C	口縁部	沈線	ナデ	丁寧なナデ	橙色	にぶい橙色	○	○	○		○		
		A	9	V	1262														
	39	E	7	V	12835	C	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○	○		○		
	40	C	11	V	4930	C	口縁～胴部	沈線	粗いナデ	ナデ／粗いナデ	黒褐色	橙色	○	○	○		○		
		B	10	V	5417														
		B	10	V	5857														
20	41	F	6	V	13010	C	口縁～胴部		ナデ／貝殻条痕	ナデ	褐色	橙色	○	○	○		○		
	42	C	11	V	4602,4941,5172	C	口縁～頸部		粗いナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○	○	○		
		C	11	V	5196,5197														
	43	B	6	Ⅳb	2799	D1	口縁～胴部		ナデ／貝殻条痕	ナデ	明赤褐色	橙色	○	○			○		
	44	E	7	V	12377,12381	D1	頸～胴部		貝殻条痕	指頭圧痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
		E	7	V	12382														
	45	D	9	V	10146	D1	胴部		ナデ／貝殻条痕	ナデ	灰黄褐色	明黄褐色	○	○	○		○		
21	46	C	10	V	5525	D2	口縁～胴部		貝殻条痕	ナデ／貝殻条痕	橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○	○	
		C	11	V	3336,4611,4614														
		C	11	V	4615,4629,4630														
		C	11	V	4631,4633,5204														
		C	11	V	5522,5523,5524														
	47	A	10	V	852	D2	口縁部		粗い貝殻条痕	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	48	D	8	V	4360	D2	口縁部		ナデ／貝殻条痕	ナデ	明黄褐色	浅黄色	○	○	○		○	○	
	49	A	9	V	一括	D2	口縁部		貝殻条痕	貝殻条痕	橙色	にぶい黄橙色	○	○		○	○		
	50	A	9	V	一括	D2	口縁～肩部		貝殻条痕	貝殻条痕	橙色	にぶい橙色	○	○		○	○		
22	51	B	15	V	8265	D3	口縁～胴部		ナデ／貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄	○	○	○		○		
		B	15	V	8273														
	52	B	14	V	8530	D3	口縁部		貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	53	A	2	Ⅳb	一括	D3	口縁部		ナデ	ナデ	褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	54	B	10	V	6194	D3	口縁部		粗いナデ	ナデ	暗灰黄色	黒褐色	○	○	○		○		
	55	B	13	V	7426	D3	口縁部		ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙色	黒色	○	○	○		○		
	56	A	17	V	9617	D4	口縁部		貝殻条痕	貝殻条痕	明黄褐色	褐灰色	○	○	○		○		
	57	A	17	V	一括	D4	口縁部		粗いナデ	ナデ／貝殻条痕	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	58	C	7	Ⅳa	一括	D4	口縁部		ナデ	丁寧なナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	59	E	10	V	10984	D4	口縁部		粗いナデ	ナデ／貝殻条痕	にぶい橙色	明黄褐色	○	○	○		○		
	60	B	7		一括	D4	口縁部		粗いナデ	丁寧なナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○	○	○		
	61	A	12	V	9706	D5	口縁部		ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	62	B	14	V	7542	D5	口縁部		粗いナデ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	63	A	12	V	9693	D5	口縁部		ミガキ／ナデ	ミガキ	にぶい黄褐色	黒褐色	○	○	○		○		炭化物
	64	C	9	V	4405	D6	口縁部		粗いナデ	粗いナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		◎		
	65	B	1	Ⅳb	2894	D6	口縁部		ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		○		
	66			I	一括	D6	口縁部		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		◎		
	67	A	1	Ⅳa	一括	D6	口縁部	凹線	ナデ	ナデ	橙色	黒褐色	○	○			○		
		A	2	Ⅳa	一括														
23	68	A	15	V	8233,9554	D6	口縁部		粗いナデ	貝殻条痕	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	69	B	12	V	5634	D7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	明黄褐色	浅黄橙色	○	○	○		○		
	70	B	14	V	7607	D7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		炭化物
	71	B	14	V	7605	D7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○	○		○		
	72	B	14	V	8596	D7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	にぶい褐色	橙色	○	○	○		○	○	
	73	D	9	V	4486	D7	口縁部	刻目突帯	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	74	F	7	V	13026	D7	口縁部	刻目突帯	貝殻条痕	ナデ	灰黄褐色	灰褐色	○	○	○		○		
	75	B	12	V	5707	D7	口縁部	刻目突帯沈線	ナデ	ナデ	暗赤褐色	橙色	○	○	○		○	○	
24	76	C	13	V	6741	D7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	暗褐色	橙色	○	○	○		○		
	77	B	14	V	7593,9018,9035	D7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	○	○			○	○	
		B	14	V	9040														
	78	A	16	V	7983	D7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		
		A	16	V	8180														
	79	B	11	V	3745	D7	口縁部	刻目突帯沈線	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
		B	13	V	7067,7115,7451														

表10　縄文時代晩期土器観察表(2)

挿図	番号	区		層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	備考
									外	内	外	内							
24	80	B	14	V	7608	D 7	口縁部	刻目突帯沈線	ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	81	B	10	V	5572	D 7	口縁部	突帯	ナデ	ナデ	にぶい褐色	明黄褐色	○	○	○		○		
	82	B	13	V	9246	D 7	口縁部	突帯沈線	ナデ	ナデ	黒褐色	灰褐色	○	○			○		
	83	A	12	V	9661	D 7	口縁部	刻目突帯	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○			○	○	
25	84	A	17	V	7929	D 8	口縁部		貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	85	a	17	V	7883	D 8	口縁部		丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○	○	
	86	B	15	V	8248	D 8	口縁部		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	87	A	17	V	8382	D 8	口縁部		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○	○	
	88	C	11	V	3389	D 8	口縁部		ナデ	ナデ	灰黄褐色	褐灰色	○	○			○	○	
	89	C	11	V	5200,5201	D 8	口縁部		ナデ	貝殻条痕	灰黄褐色	褐灰色	○	○			○	○	
	90	B	14	V	9007	D 8	口縁部		ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		○		
	91	a	16	V	7975	D 8	口縁部		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○	○	○		補修孔
		a	16	V	7992														
	92	A	8	I	一括	D 8	口縁部		ナデ	ナデ	橙色	黒褐色	○	○	○		○	○	
	93	E	7	V	12385	D 9	胴部		貝殻条痕	ナデ／貝殻条痕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
		E	7	V	12813														
	94	B	9	V	887	D 9	胴部		貝殻条痕	ナデ	黒色	にぶい黄橙色	○	○	○		○	○	
	95	E	7	V	12323	D 9	胴部		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	○	○	○		○		
	96	E	8	V	10884	D 9	胴部		ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	97	E	7	V	11875	D 9	胴部		ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○	○	
26	98	D	8	V	11230,11231	D10	底部		粗いナデ	ナデ	明黄褐色	灰黄褐色	○	○	○	○	○		
	99	BC	7・8		水田一括	D10	底部		粗いナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	100	B	8	Ⅳa	1472	D10	底部		貝殻条痕	ナデ／貝殻条痕	橙色	橙色	○	○	○		○		
	101	B	13	V	6856	D10	底部		粗いナデ	粗いナデ	にぶい褐色	橙色	○	○	○		○	○	葉脈
	102	B	14	V	8603	D10	底部		ナデ	ナデ	にぶい褐色	橙色	○	○	○		○		葉脈
	103	B	12	V	6630	D10	底部		粗いナデ	ナデ	にぶい黄橙色	暗赤灰色	○	○			○	○	
	104	C	12	V	6406	D10	底部		粗いナデ	ナデ	橙／黄橙色	オリーブ黒色	○	○			○	○	
	105	B	14	V	8698	D10	底部		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○			○		
	106	B	12	V	6815	D10	底部		ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
		B	13	V	6698,6708,7068														
		B	13	V	7116,7117,8835														
	107	C	11	V	4964,4987,5005	E	口縁部		ナデ	ミガキ	黒褐色	暗灰黄色	○	○			○		
		C	11	V	5009,5230														
	108	E	6	V	12437	E	口縁部		ナデ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		炭化物
	109	A	17	V	7925	E	口縁部		ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○	○		○		炭化物
		A	17	V	8353														
28	110	E	7	V	12800	E	口縁部		ナデ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		炭化物
	111	B	10	I	一括	E	口縁部		ナデ	ミガキ	灰褐色	褐灰色	○	○			○	○	
	112	D	10	V	3198	E	口縁部		ナデ	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		炭化物
	113	A	1・2	Ⅳa	一括	E	口縁部		ナデ／組織痕	不明	明黄褐色	浅黄橙色	○	○	○		○		
	114	C	7	Ⅳa	一括	E	口縁部		ナデ／組織痕	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○			○	○	
	115	D	9	V	10461	E	口縁部		ナデ	ミガキ	暗褐色	黒褐色	○	○	○		○		炭化物
	116	D	9	V	10239,10316	E	口縁部		ナデ	条痕後丁寧なナデ	にぶい黄橙色	黒色	○	○	○		○		
	117	B	11	V	6271	E	口縁部		ナデ	ミガキ	明黄褐色	黒色	○	○	○		○		
		B	10	V	6290														
	118	A	17	V	8400	E	胴部		ナデ	ミガキ	明黄褐色	黒色	○	○	○	○	○		
29	119	B	8	Ⅳb	1495	E	胴部		ナデ	ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	120	A	17	V	9628	E	胴部		ナデ／組織痕	ミガキ	褐灰色	灰褐色	○	○	○		○		
		A	17	V	一括														
	121	a	17	V	7901	E	胴部		ナデ／組織痕	ミガキ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	122	B	12	V	9121	E	胴部		組織痕	貝殻条痕後ミガキ	橙色	黒褐色	○	○	○		○		
	123	C	10	V	5582	E	胴部		組織痕	ミガキ	にぶい黄橙色	暗灰色	○	○	○		○		
	124	B	14	V	9424	E	胴部		組織痕	ヘラナデ	橙色	灰黄褐色	○	○			○		
	125	A	1・2	Ⅳa	一括	E	胴部		組織痕	不明	橙色	黒褐色	○	○	○		○		
	126	B	7		トレンチ一括	E	胴部		ナデ／組織痕	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○	○	
	127	B	13	V	9255	E	底部		ミガキ	布目圧痕	にぶい赤褐色	黒色	○	○			○		
	128	B	13	V	9790	F 1	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○			○		
	129	C	10	V	5877	F 1	口縁部		ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	○		○		
	130	A	8	Ⅳb	1514	F 1	口縁部		ミガキ	不明	黒褐色	橙色	○	○			○		
	131	A	9	V	1421	F 1	口縁部		ミガキ	ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○	○	○	○	
	132	D	8	V	11964	F 1	口縁部	沈線	不明	不明	橙色	橙色	○	○					
	133	A	9	V	一括	F 1	口縁部	沈線	不明	不明	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	134	C	6		一括	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○	○	○	○		
	135	C	8		セクベル一括	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	灰色	褐灰色	○	○		○	○		
	136	A	16	V	8053	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
		A	16	V	8098														
	137	C	10	V	4154	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	黒褐色	○	○			○		
	138	B	15	V	8486	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	オリーブ黒色	○	○	○		○	○	
	139	B	7		水田跡埋土一括	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	140	D	8	V	10790	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	141	D	8	V	10809	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	142	B	12	V	6631	F 1	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		
	143	E	8	V	10917	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○			○	○	
	144	E	7	V	11799	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○			○	○	
31	145	E	6	V	12430	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	146	E	7	V	11802	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	147	C	10	V	5509	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○			○		
	148	E	7	V	12514	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色						○	
	149	D	8	V	11155	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		
	150	C	9	V	4025	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○			○		
	151	E	7	V	12882	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○					
	152	A	8	Ⅳb	1500	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙／黒褐色	灰黄褐色	○	○			○	○	
	153	B	7		トレンチ一括	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰褐色	黒色	○	○			○		
	154	A	11	V	7	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○		○	○		
	155	C	11	V	5023	F 2	口縁部		不明	不明	にぶい黄橙色	黄灰色	○	○			○		
	156	E	8	V	12194	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○				○	
	157	C	11	V	5000	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	淡黄色	にぶい黄橙色						○	
	158	E	7	V	11873	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒色	灰黄褐色	○	○				○	
	159	A	11	V	425	F 2	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	黒褐色	○	○			○		

表11　縄文時代晩期土器観察表(3)

挿図	番号	区		層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	備考
									外	内	外	内							
32	160	D	8	V	11192	F 3	口縁部		ミガキ	ミガキ／指頭圧痕	橙色	橙色	○	○			○		
	161	D	6	V	トレンチ一括	F 3	口縁部		ミガキ	ナデ／ミガキ	にぶい褐色	にぶい橙／黒色	○	○			○		
	162	C	11	V	4583,5170	F 3	口縁部		ナデ／ミガキ	ナデ／ミガキ	褐色	にぶい褐色	○	○			○		
		C	10	V	5508														
	163	A	9	V	963	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○			○	○	
	164	A	8	Ⅳb	1502,1506,1507	F 4	口縁部		不明	ミガキ	灰黄褐色	黄灰色	○	○			○		
	165	C	9	V	トレンチ一括	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○					
	166	E	8	V	11292	F 4	口縁部		ミガキ	ナデ	黒褐色	暗灰黄色	○	○			○		
	167	A	16	V	9989	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	168	D	9	V	8900	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐灰色	○	○			○		
	169	E	6	V	12849	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			○		
	170	E	9	V	12184	F 4	口縁部		不明	ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			○		
	171	B	7	Ⅳa	一括	F 4	口縁部		ナデ	ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	172	D	8	Ⅰ	一括	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい橙色	褐灰色	○	○			○		
	173	B	8	Ⅳa	一括	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	橙色	褐灰色	○	○			○		
	174	E	8	V	11283	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	黒褐色	○	○				○	
	175	E	8	V	11485	F 4	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	灰黄褐色	○	○			○		
	176	A	16	V	8014	F 5	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	177	C	10	V	4835	F 5	口縁部	凹線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	178	a	17	V	7759	F 5	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	179	a	18	V	7717	F 5	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	180	A	1・2	Ⅳ	一括	F 5	口縁部	沈線	不明	不明	にぶい黄褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		
	181	D	10	V	3175,4205,4206	F 5	口縁部	沈線	ナデ／ミガキ	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	○	○			○		赤彩
33	182	A	15	V	9553	F 5	胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒色	○	○			○		赤彩
	183	A	16	V	8424	F 5	胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	灰黄色	○	○	○		○		赤彩
	184	A	16	V	8437	F 5	胴部	沈線	ナデ	ミガキ	にぶい黄褐色	黒色	○	○			○		
	185	A	16	V	8076	F 5	胴部	沈線	ミガキ	ナデ	浅黄色	黒褐色	○	○			○		赤彩
	186	B	11	V	6365	F 5	底部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	187	E	6	V	12418	F 5	底部		ミガキ	ミガキ	灰黄色	黄灰色	○	○			○		
	188	D	10	V	10981	F 5	底部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○			○		
	189	B	9	V	860,1240	F 6	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○			○	○	
	190	B	13	V	5764	F 6	口縁部		ナデ	ミガキ	褐灰色	黒褐色	○	○			○		
	191	A	16	V	8095	F 6	口縁部		ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	192	B	12	V	9146	F 6	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	193	C	13	V	6584	F 6	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○	○	
	194	C	10	V	5880	F 6	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	○	○			○		
	195	a	17	V	7764	F 6	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	196	A	8	Ⅳa	一括	F 6	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	197	A	10	V	1414	F 6	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	198	E	9	V	10441	F 6	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰黄褐色	○	○			○		
	199	A	16	V	9592	F 6	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	浅黄橙色	淡黄色	○	○			○		
	200	A	17	V	9650	F 6	口縁部	凹線	ミガキ	ミガキ	褐灰色	灰黄褐色	○	○	○		○		
	201	B	15	V	8485	F 6	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	202	D	9	V	10202	F 7	口縁部		丁寧なナデ	丁寧なナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	203	C	11	V	4877	F 7	口縁部		ミガキ	ミガキ	浅黄色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	204	D	10	V	10111	F 7	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			○		
34	205	D	8	V	13288	F 8	口縁～胴部		ミガキ	ミガキ	橙色	灰黄褐色	○	○	○		○		
	206	C	8	V	一括	F 8	口縁～胴部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○			○		
	207	C	11	V	6373	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	208	B	10	V	551,1170	F 8	口縁～胴部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○			○		
	209	B	14	V	7491	F 8	口縁～胴部		ミガキ	ミガキ	灰黄色	にぶい黄色	○	○	○		○	○	
		B	13	V	8752,8753,8956														
	210	D	10	V	10545	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	211	C	11	V	4579	F 8	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	浅黄色	灰黄色	○	○			○	○	
	212	C	7	Ⅳa	一括	F 8	口縁～胴部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	○	○	○	○	○		
	213	E	8	V	11484	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	○	○			○	○	
	214	B	12	V	6127	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○			○		
	215	D	8	V	11576	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	浅黄色	○	○			○	○	
	216	D	11	V	4903	F 8	口縁部	凹線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄色	○	○	○		○		
	217	D	10	V	10092	F 8	口縁部	凹線	ミガキ	ミガキ	黄灰色	黄灰色	○	○	○		○		
	218	B	10	V	588	F 8	口縁～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	にぶい黄色	○	○			○		赤彩
	219	a	18	Ⅰ	一括	F 8	口縁～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○			○		煤
	220	A	17	V	7885	F 8	口縁～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	浅黄色	黄灰色	○	○	○		○	○	
	221	B	14	V	7648	F 8	口縁～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	黄灰色	黄灰色	○	○			○		
	222	A	16	V	8025	F 8	口縁～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黄灰色	○	○			○		
	223	a	17	V	7868	F 8	口縁～胴部	沈線	粗いミガキ	粗いミガキ	にぶい黄色	黒褐色	○	○			○		
	224	A	17	V	一括	F 8	口縁～胴部	沈線	ナデ	粗いナデ	浅黄色	にぶい黄色	○	○			○		
	225	D	8	V	13246	F 8	口縁～胴部	沈線	丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	226	A	10	V	694	F 8	口縁～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	黒色	○	○			○		
	227	E	9	V	11031	F 8	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	灰褐色	黒色	○	○			○		
	228	E	7	V	11851	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい黄褐色	○	○			○		
	229	A	17	V	7920	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	褐灰色	褐灰色	○	○			○		
		A	17	V	8361														
	230	D	9	V	10357	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	黒褐色	○	○					
	231	A	16	V	8088	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	明黄褐色	褐灰色	○	○	○		○		
	232	B	11	V	1086	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	黒色	○	○			○		赤彩
	233	A	17	V	9619	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○	○		○		
	234	B	15	V	8283	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	暗灰黄色	黄灰色	○	○			○		
	235	E	7	V	11852	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄色	○	○			○		
	236	E	8	V	11457	F 8	口縁部		ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○			○		
	237	B	10	V	5905	F 8	胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗灰黄色	○	○			○		
	238	a	17	V	8331	F 8	胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		赤彩
	239	B	14	V	7576	F 8	底部		ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	240	B	11	V	9712	F 8	底部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	241	A	16	V	9957	F 8	底部		ミガキ	ミガキ	黒色	黒色	○	○			○		
	242	D	10	V	10954	F 8	底部		ミガキ	ミガキ	暗灰黄色	にぶい黄色	○	○	○		○		

表12　縄文時代晩期土製品観察表

挿図	番号	出土区		層位	取上番号	器種	法量				色調	
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	表	裏
35	243	B・C	7・8		水田跡一括	円盤形土製加工品	4.24	3.99	1.21	23.02	褐色	暗灰黄色
	244	C	6	Ⅳa	一括	円盤形土製加工品	4.34	3.91	0.96	19.74	灰黄褐色	にぶい黄橙色

イ　石器

石鏃（第38図245～264）

70点が出土し，そのうち20点を図化した。245～247は，正三角形で，基部に顕著な抉りが見られない。248～254は，長身形で，基部に緩やかな抉りが見られる。255は，基部の明瞭な抉りを持つ。しかし，この抉りと先端の方向軸が一致せず，均整がとれてない。256は，両側が反るため中央横幅が細くなる。257～261は両側に突起もしくは屈曲を持つ。特に，257～259は抉りと脚部の作り出しから基部の正面観が「W」の字のようになっている。262～264は，石鏃の製作過程にあるものと想定した。262は，先端部の作り出しは十分であるが厚みがあり過ぎる。263・264は，先端部の作り出しが不十分であるため，使用に耐えられるとは思えない。

石匙（第38図265）

２点が出土し，そのうち１点を図化した。横広剥片の両面に粗い二次加工を施したもので，つまみ部の抉りは浅く，刃部がやや斜めに作られている。

スクレイパー（第39図266）

２点が出土し，そのうち１点を図化した。大型の横長剥片に手を加えたもので，全幅10.8㎜を図る。明確な刃部加工は認められないが，使用による剥離痕が下縁部に残される。

使用痕剥片（第39図267）

31点が出土し，そのうち１点を図化した。縦長剥片の上端を除く部分に微細な剥離が見られる。

二次加工剥片（第40図268～270）

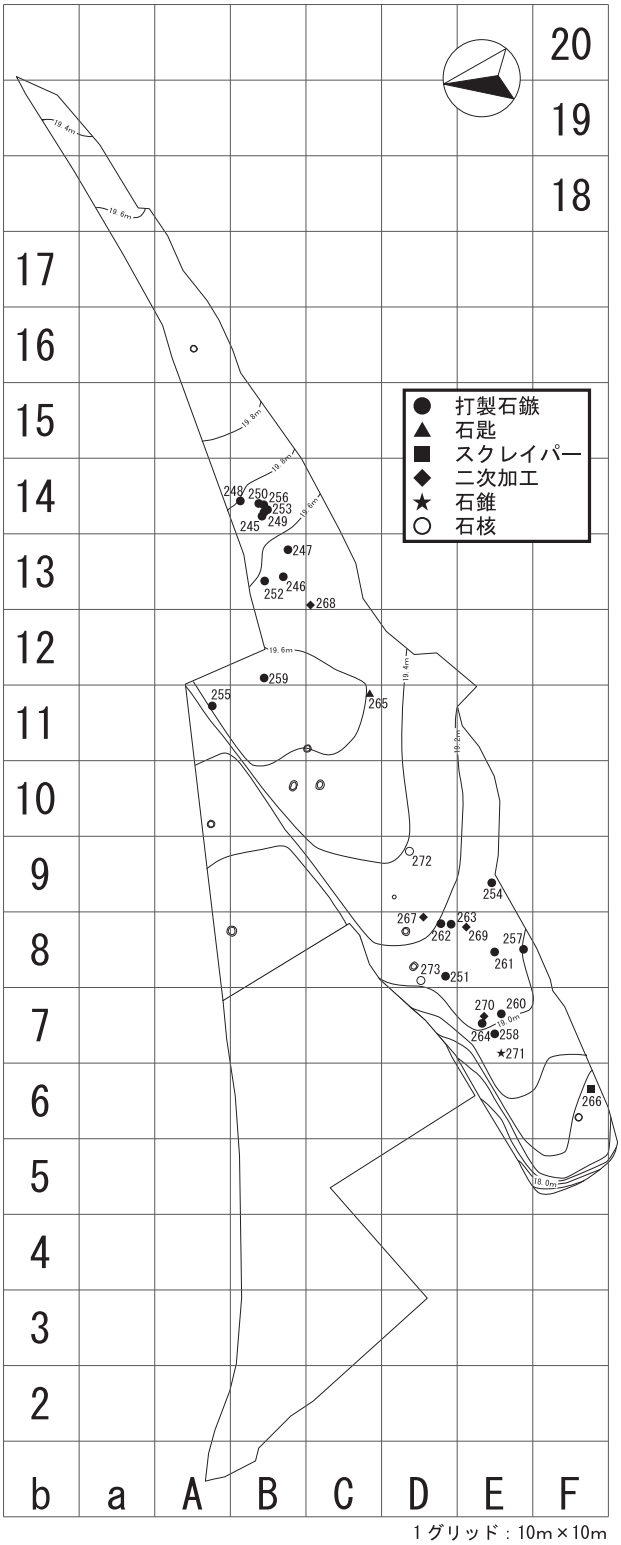
112点が出土し，そのうち３点を図化した。いずれも刃器として有効であると考えられる。268は，外形が二等辺三角形で，すべての辺に正面からの押圧剥離が見られる。269も268と同様に正面からの押圧剥離が見られるが，外形が撥形である。270は，左側に表裏からの交互の押圧剥離が施される。

石錐（第40図271）

２点が出土し，そのうち１点を図化した。厚みのある体部に短く小さい錐部が作出されている。

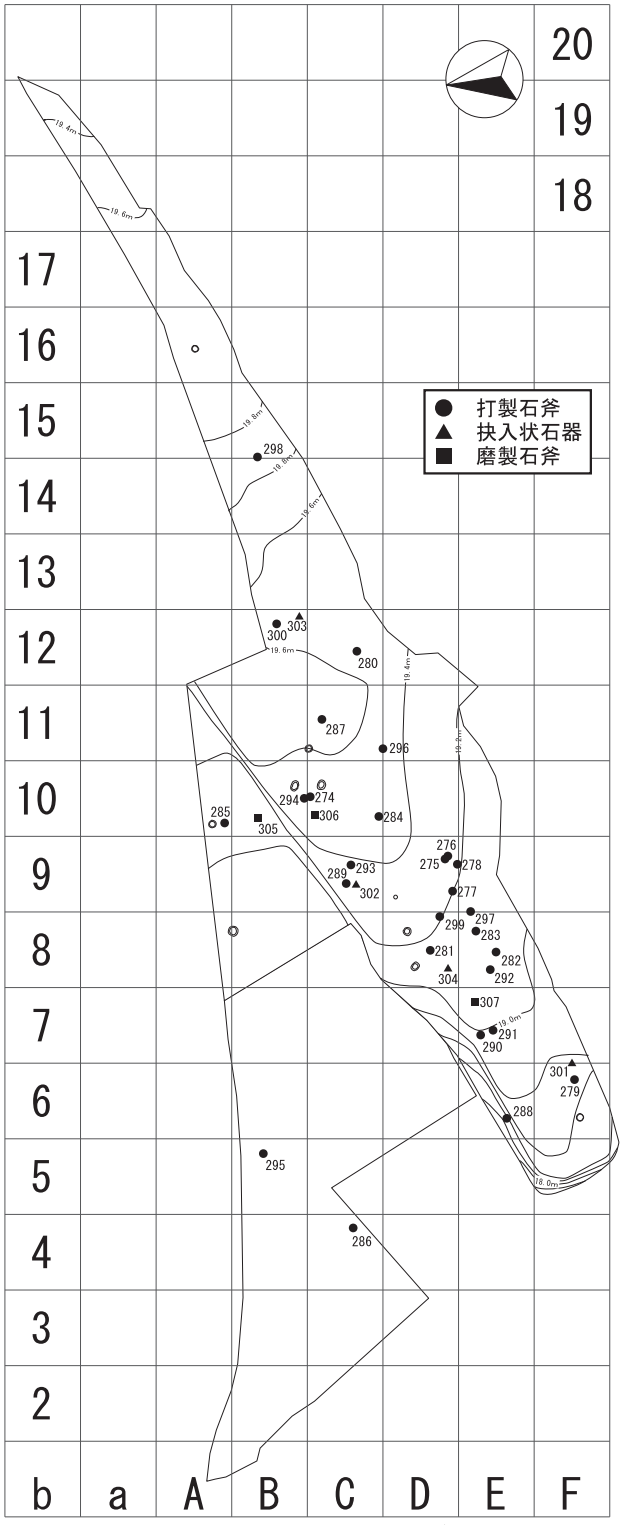
石核（第40図272・273）

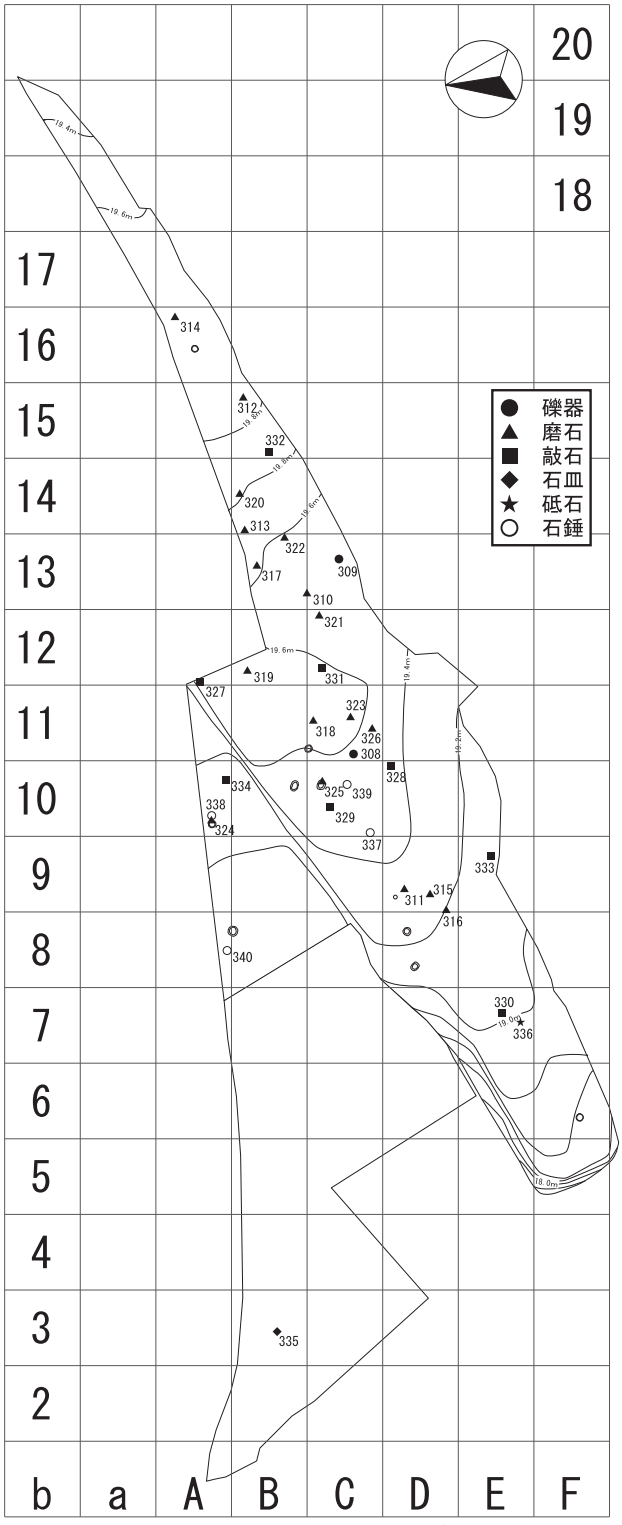
145点が出土し，そのうち２点を図化した。272は，作業面を一定とせず，多方向から剥片を剥いでいる。273は，平坦な礫面を打面とし，左側縁，正面，右側縁部を作業面とし，連続して剥片を取り出している。



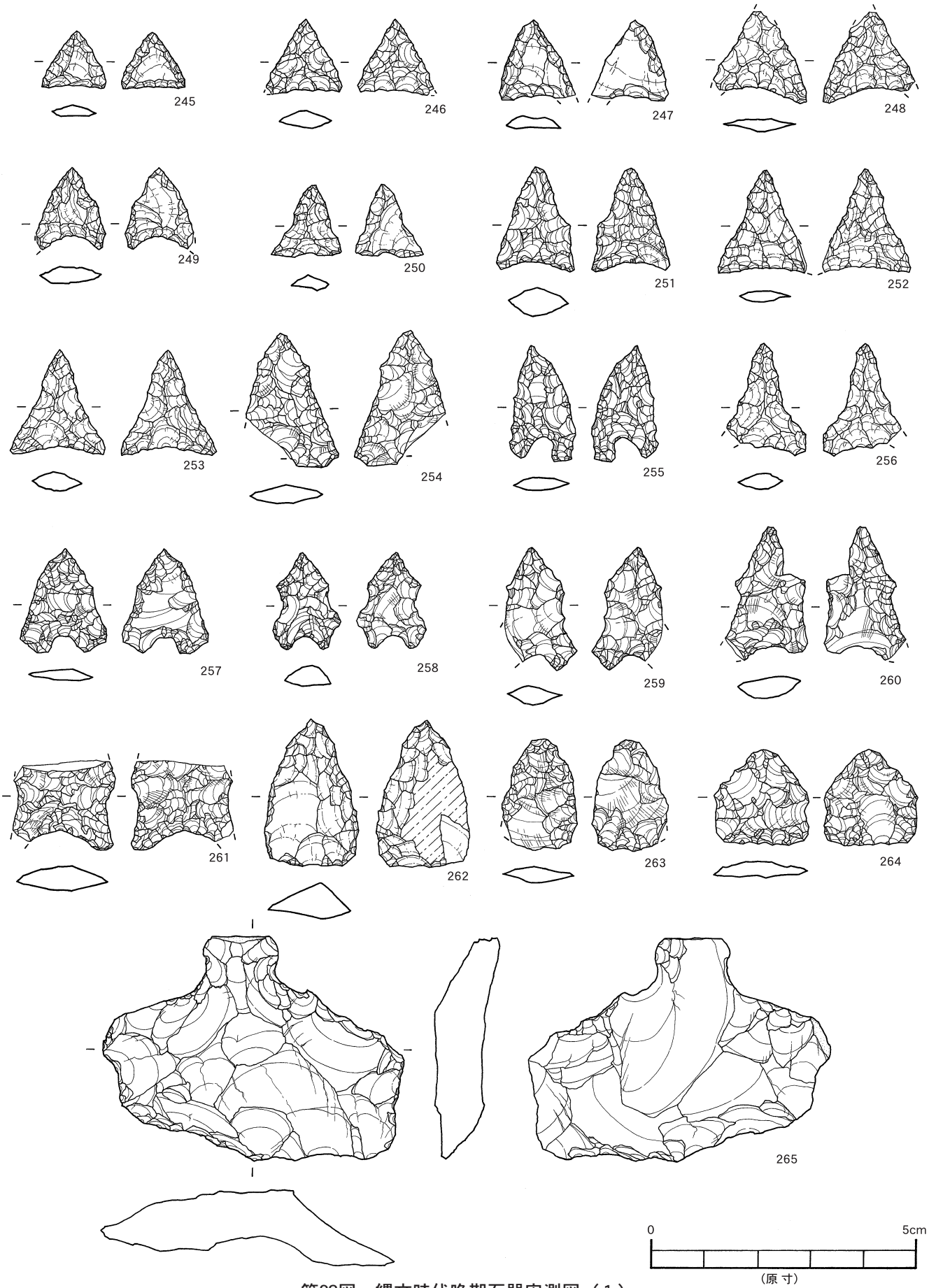
1グリッド：10m×10m

第36図　縄文時代晩期石器出土状況（１）





第37図　縄文時代晩期石器出土状況（２）



第38図　縄文時代晩期石器実測図（１）

打製石斧（第41図274～第43図300）

299点出土し，27点を図化した。274～281は，外形が撥形である。274は，最大長20.9㎝を測る。大型の打製石斧であるが厚みは薄い。275は，刃部を水平に作出している。279は，剥離が両側縁に連続し，単一の剥離で作出された下縁をそのまま刃部としている。281は，薄い礫に若干の手を加えて撥形を作出している。282～291は基部の左右に抉りを有するものである。282は，礫皮面を有する横長剥片を縦にし，基部に大きな抉りを作出している。284は，刃部が斜めに作出される。285は，基部の両側縁部に比較的細かい剥離が密に見られる。288は，厚みのある比較的大きな剥片を用い，抉りで基部を作出している。基部から下位は幅広になり，下縁の刃部が水平にならない。289～291は，刃部が欠損しているが，残存する部分から両側縁が下縁に向かってすぼまり，先端が尖ると思われる。292～298は，中型から小型で，細身の外形を持つものである。292は，外形が両側縁の中央付近で幅が狭くなっている。294は，礫皮面を有し，厚みのある剥片を素材としている。298は，比較的小さい剥片を素材とし，下縁部を尖らせている。299・300は，側縁が弯曲しているものである。

抉入状石器（第43図301～第44図304）

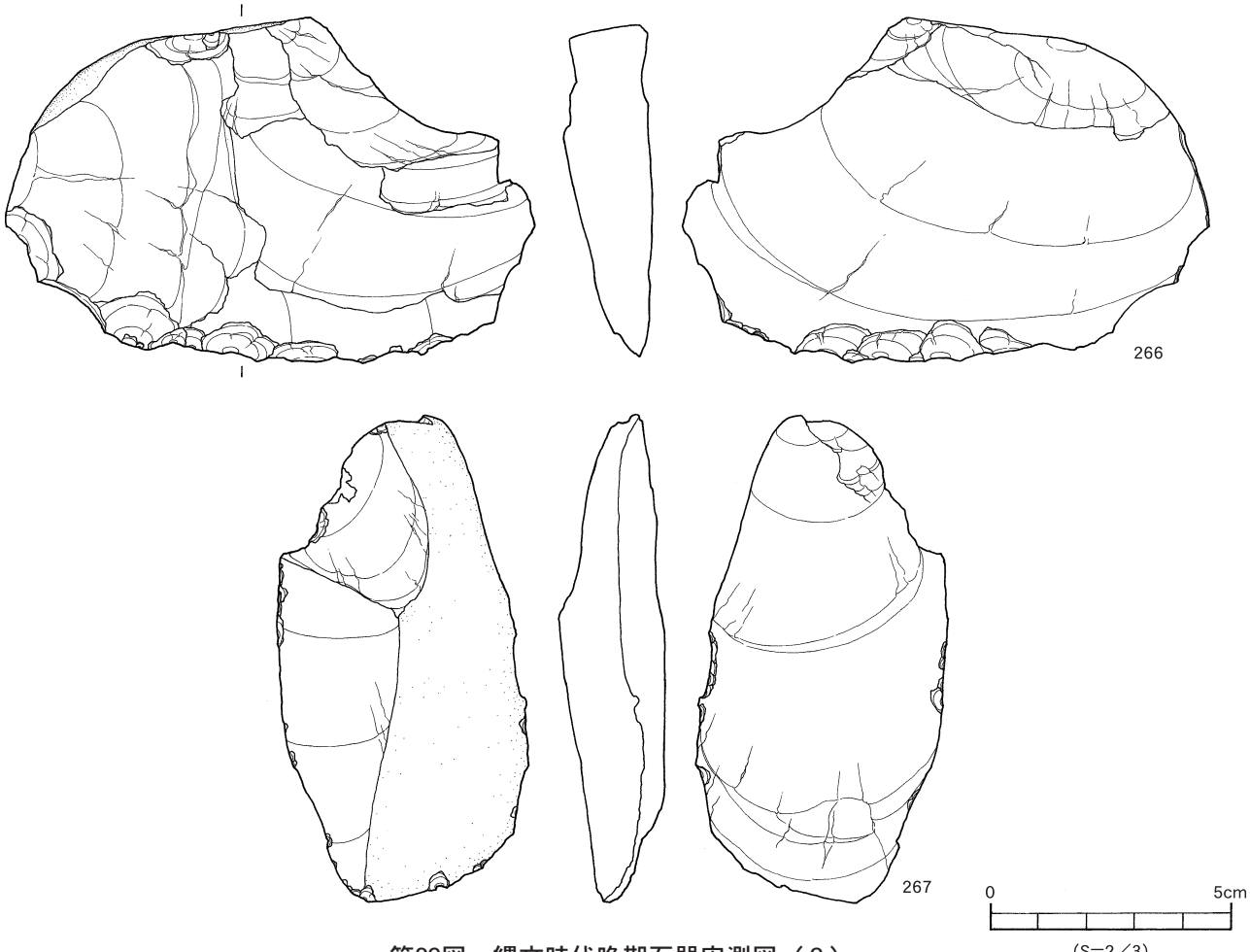
厚みのある剥片の両側辺に二次加工を施し，抉りが入るため，外形が弯曲したものを一括した。打製石斧の可能性も否定できない。301は，右側の抉りの下位から下縁部に刃部確認できる。302は，右側に弯曲し，左側下位に使用に伴う刃こぼれが確認できる。303は，緩やかに右側に弯曲する。縁部は304は，抉りで左右に弯曲し，下端が欠損している。

磨製石斧（第44図305～307）

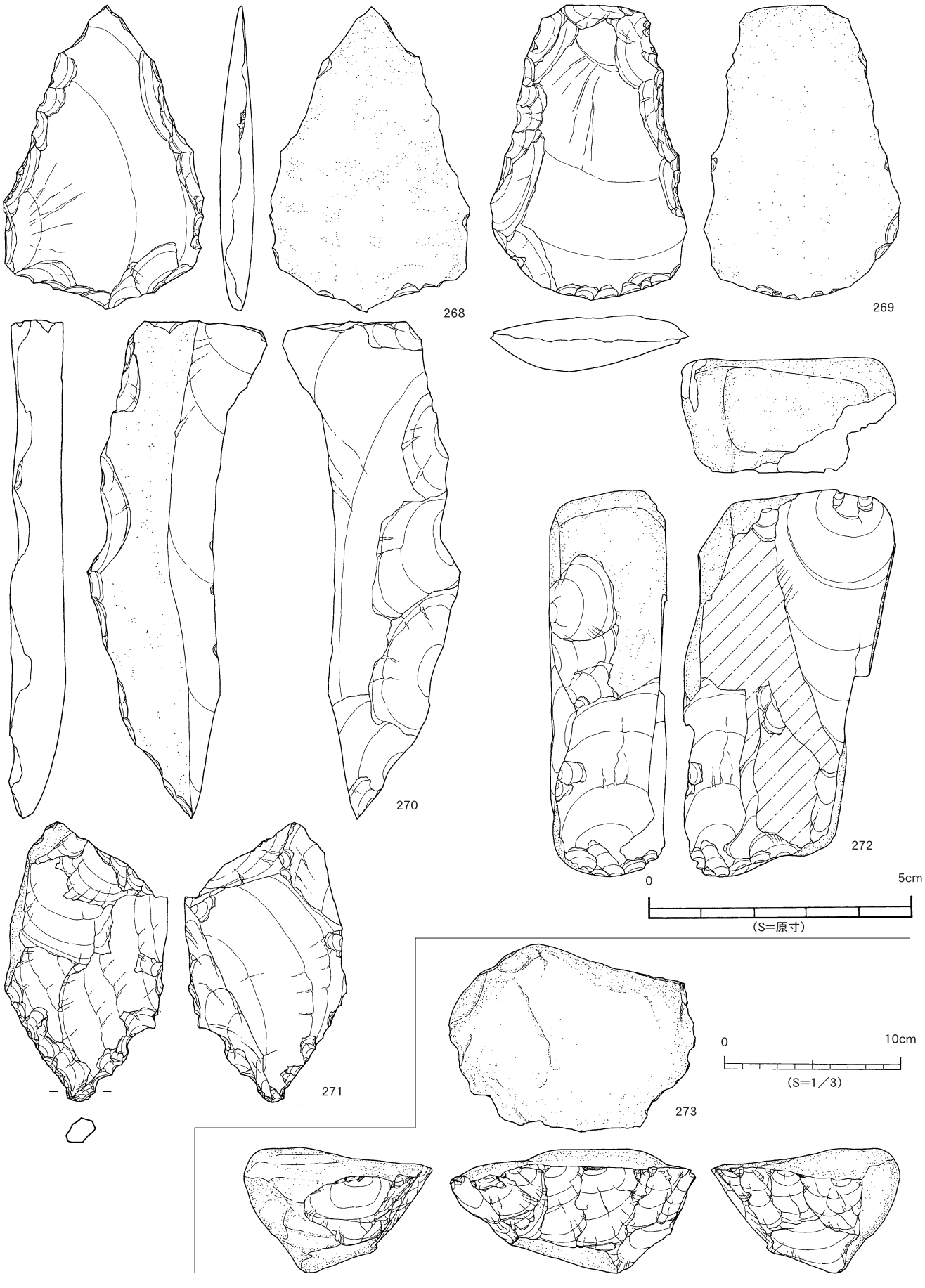
７点出土し，3点を図化した。305は，基部に集中して敲打による整形が明瞭に残る。306は，使用による刃こぼれが少ない。刃部を研いでほとんど使用していないと思われる。307は，基部であるが，整形が不完全で大きな剥離の面が残存する。

礫器（第44図308・309）

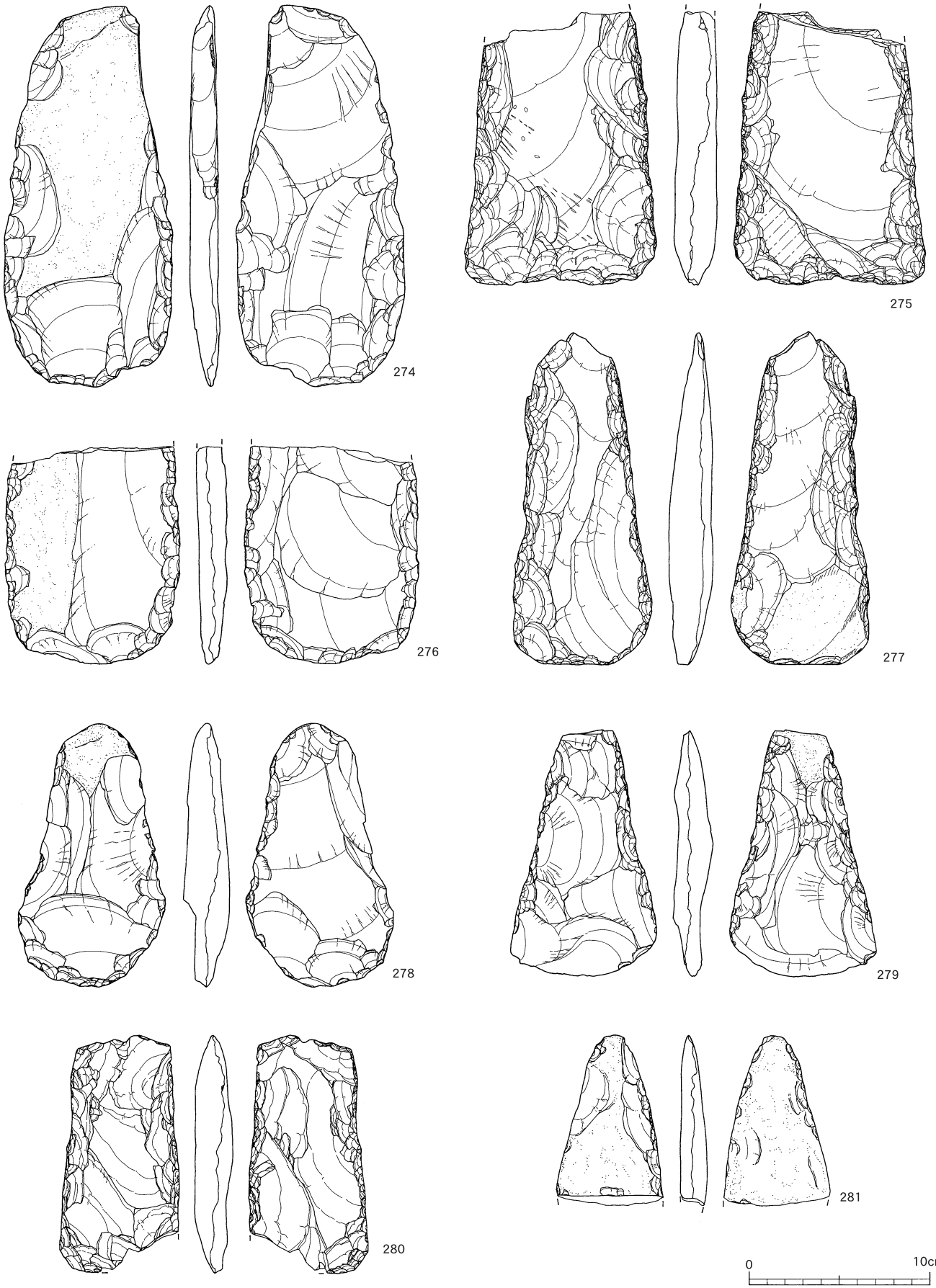
37点出土し，2点を図化した。308は，右側と下端を使用したと考えられる。309は，左側と下端を使用したと考えられる。



第39図　縄文時代晩期石器実測図（２）



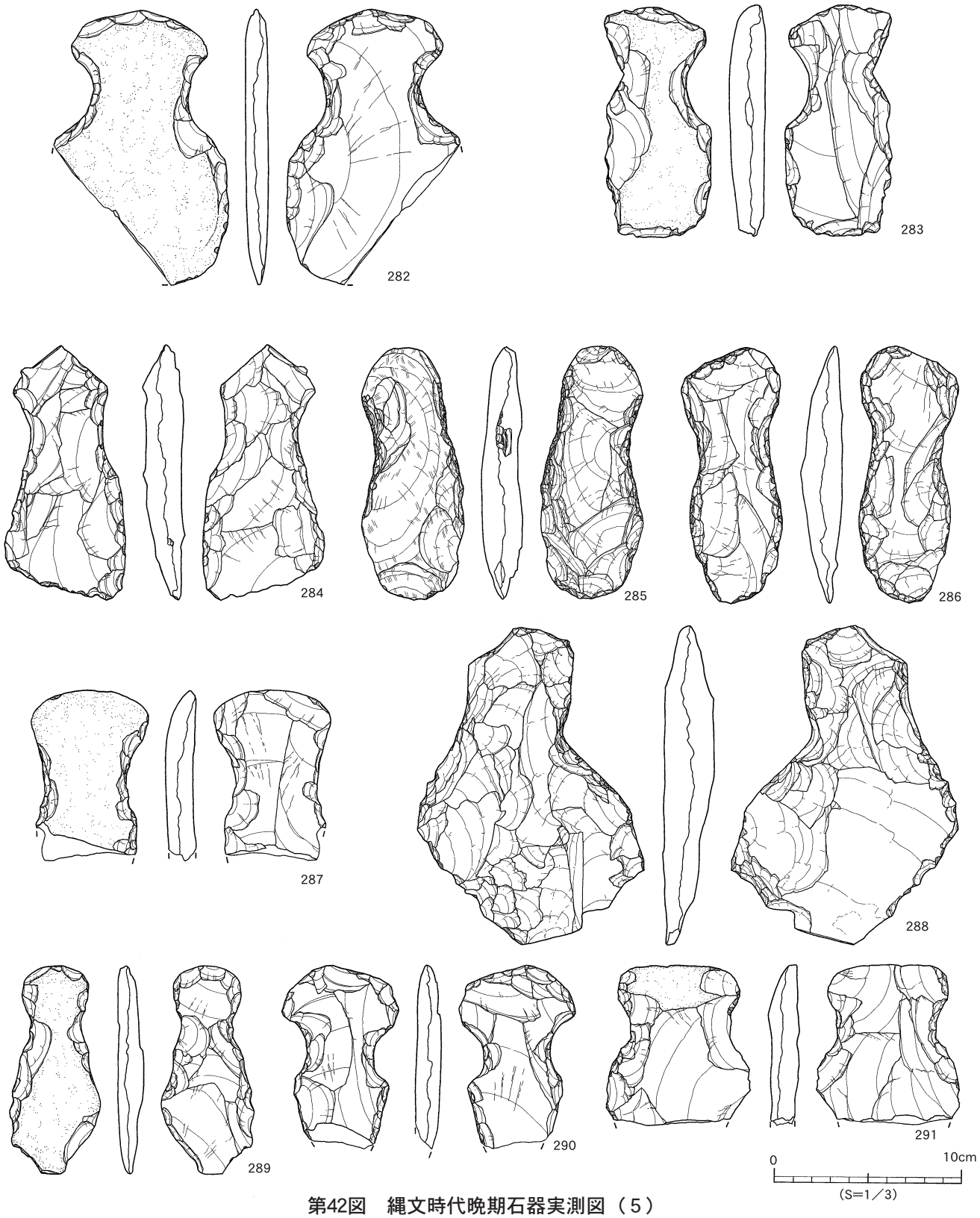
第40図　縄文時代晩期石器実測図（３）



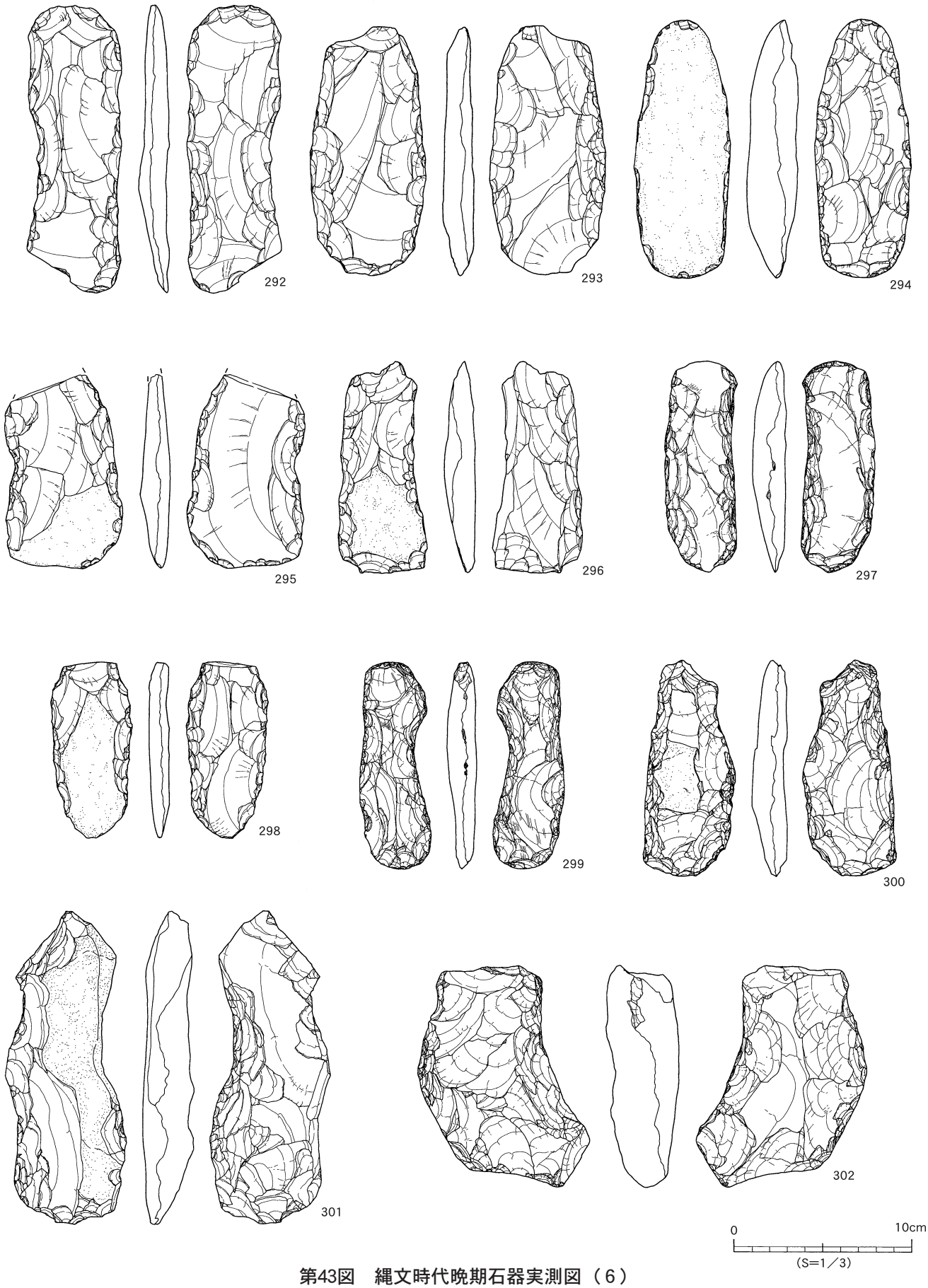
第41図　縄文時代晩期石器実測図（４）

磨石（第44図310～第46図326）

159点出土し，17点を図化した。310・311は，縁辺部に切れ間なく明瞭な敲打痕を有する。さらに，311は，表裏の作業面以外が赤化し，所々煤の付着が見られる。312～321は縁辺部に明瞭な敲打痕が確認できるが連続しない。313は，左側縁と下縁が欠損し，敲石への転用も考えられる。315は，直径が約60㎜の小型の磨石である。317は，作業面が明瞭に確認で，使い込まれた印象を受ける。



第42図　縄文時代晩期石器実測図（５）

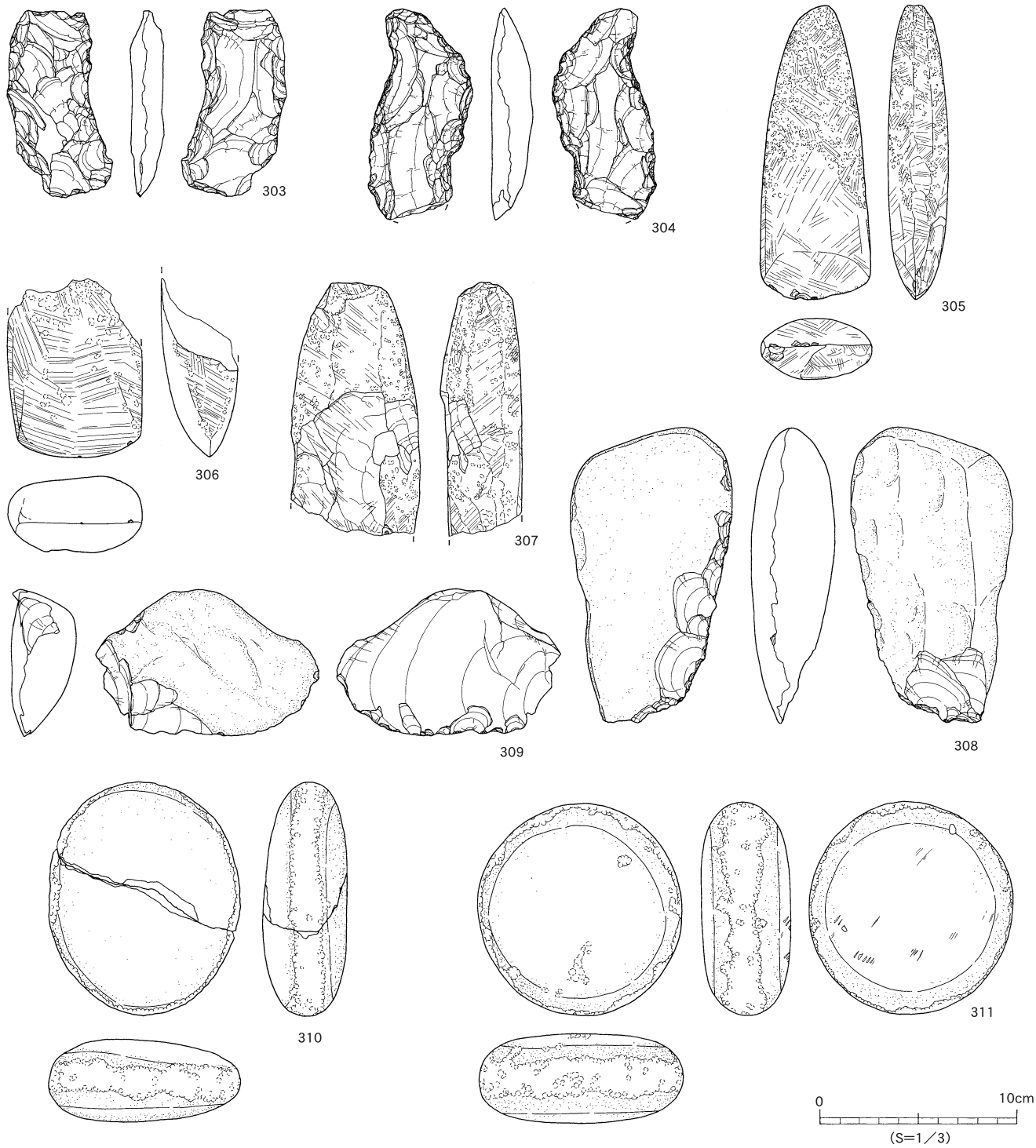


第43図　縄文時代晩期石器実測図（６）

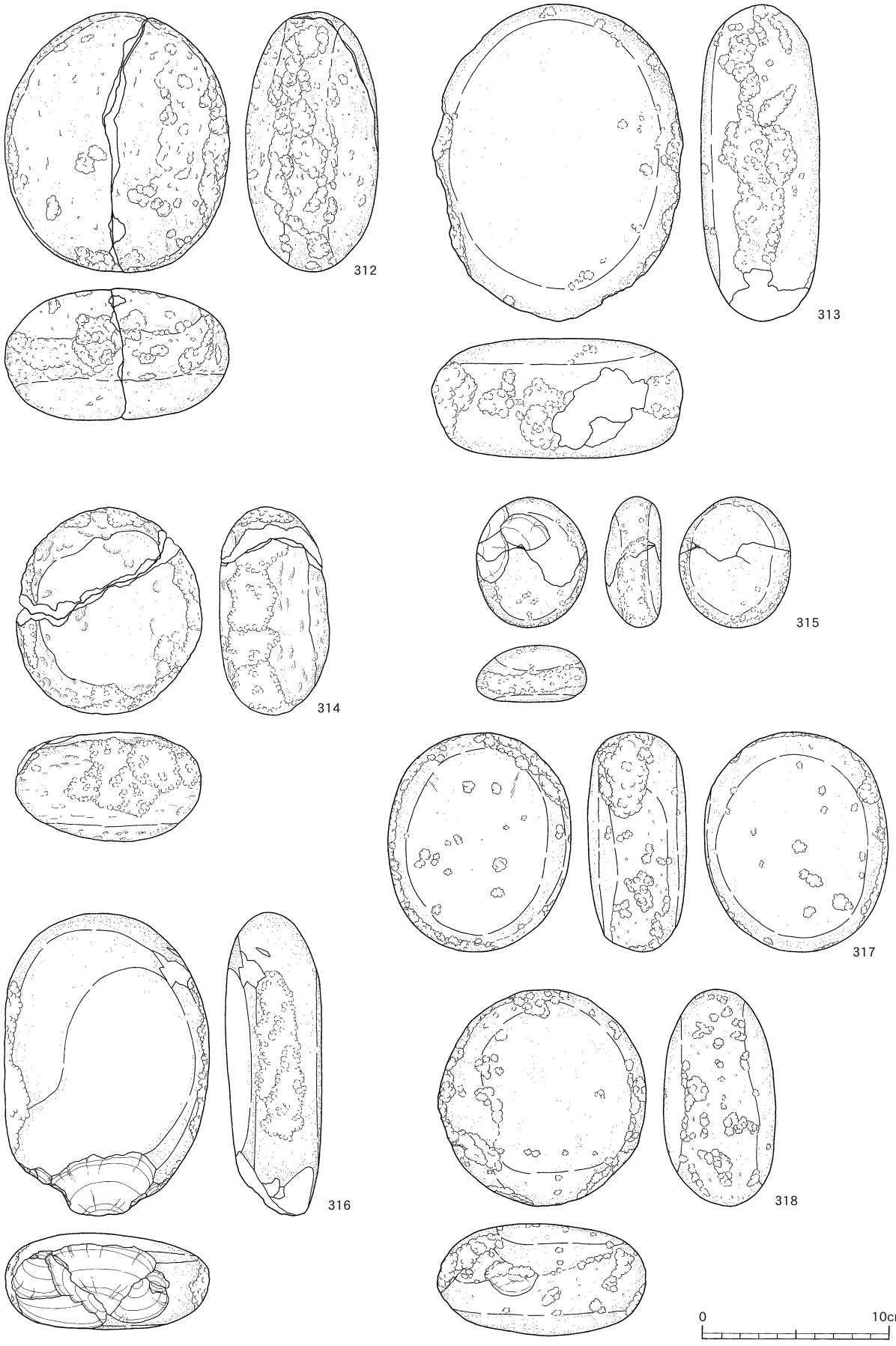
319の表裏と320の表は，作業面が著しく平滑である。322～326は，縁辺部に僅かに敲打痕が確認できる。

敲石（第47図327～第48図334）

151点出土し，8点を図化した。327～329は，重量が約2～3㎏超の大型の敲石である。327は，上下端部に明瞭な敲打痕が確認できる。328は，最大長が約27㎝で重量も敲石の中で最も重い。下端部に明瞭な敲打痕が確認できる。329は，右側辺の角に明瞭な敲打が見られる。一般的な敲石の用途と異なる可能性がある。330～334は，小型の敲石である。333は縁辺部に連続して，他4点は端部に敲打痕をもつ。

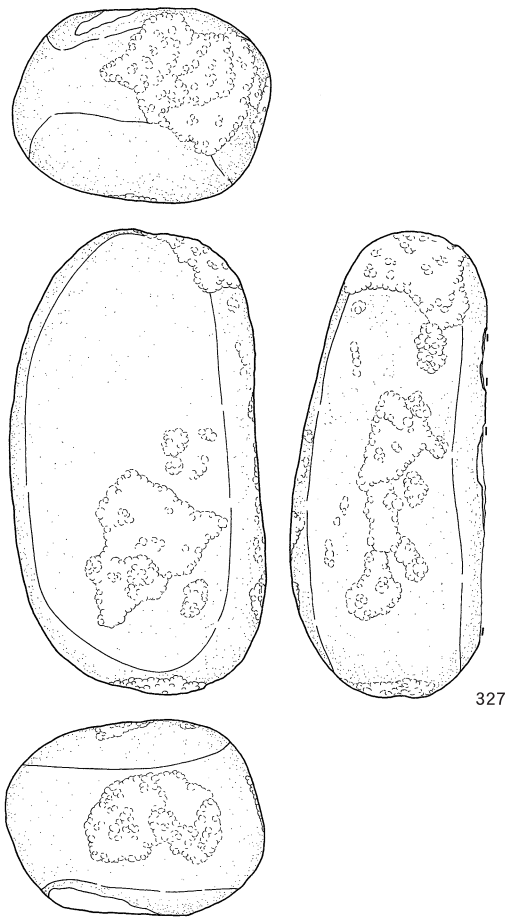


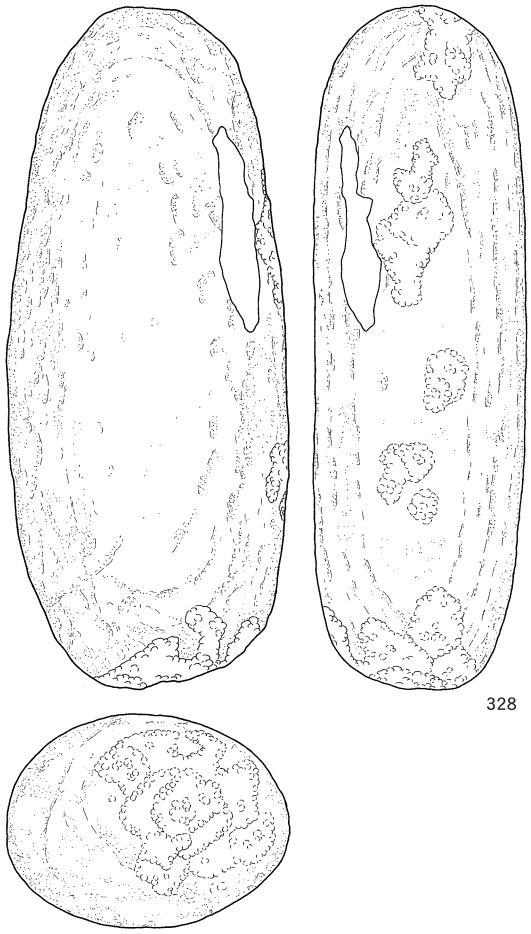
第44図　縄文時代晩期石器実測図（7）

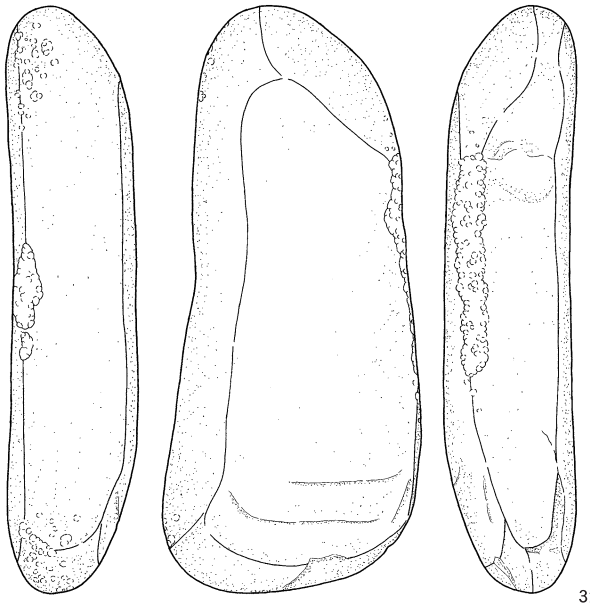


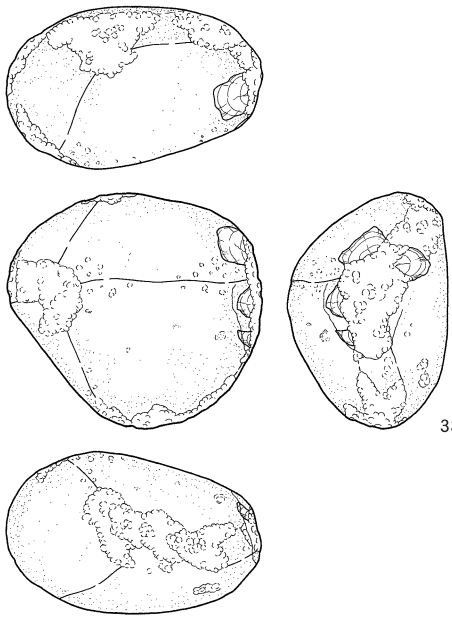
第45図　縄文時代晩期石器実測図（８）

第46図　縄文時代晩期石器実測図（９）









0 10cm
(S=1／3)

第47図　縄文時代晩期石器実測図（10）

石皿（第48図335）

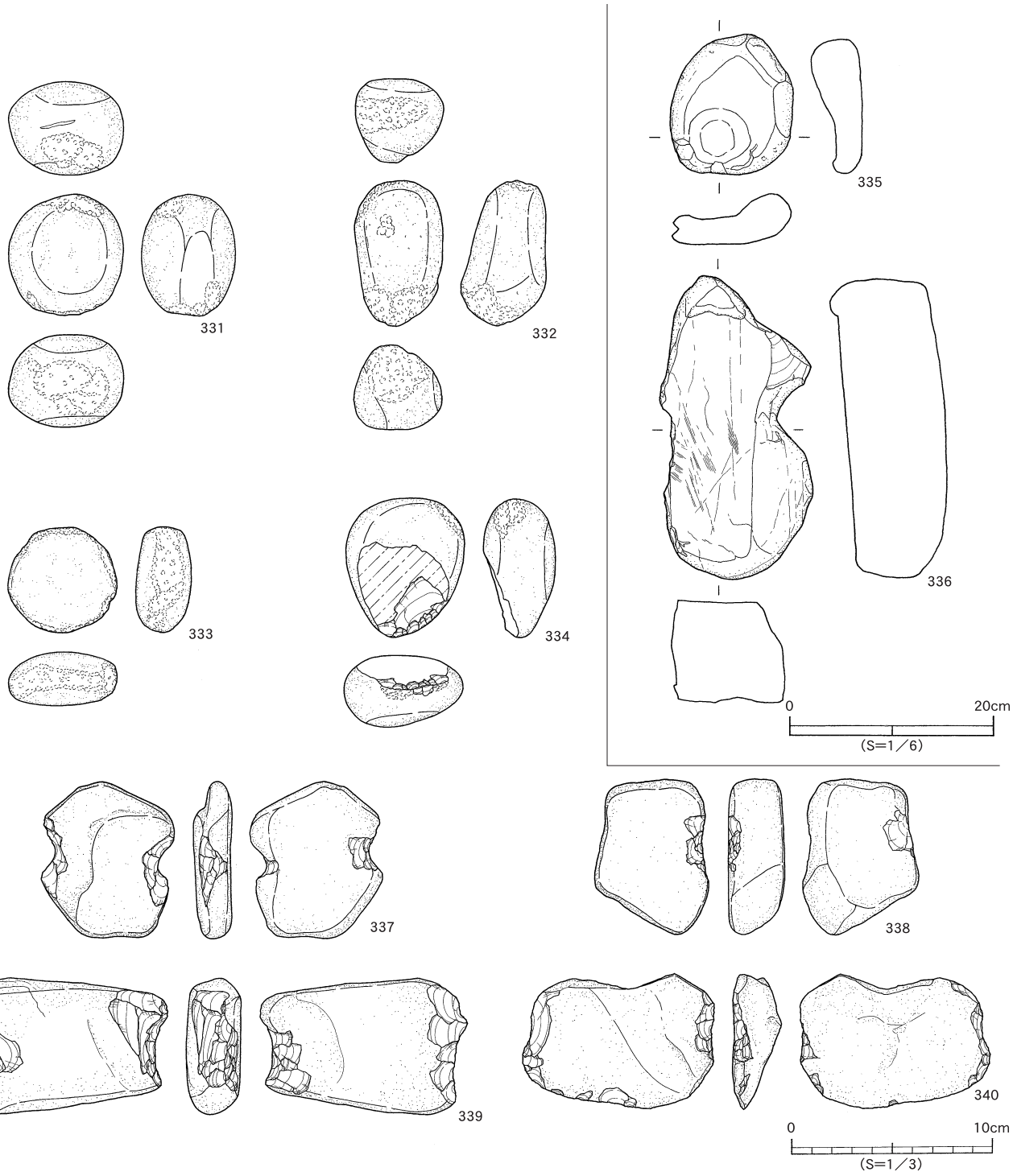
93点出土し，1点を図化した。小型の石皿で作業面が傾斜している。その作業面の最も低い端に直径約50㎜の窪みをもつ。

砥石（第48図336）

13点出土し，1点を図化した。縦横の断面がいずれも四角形で安定して作業が行える形状をもつ。節理面を作業面として使用している。

石錘（第48図337～340）

18点出土し，4点を図化した。337・338は，縦横比がほぼ同じで，左右を打ち欠き，結束の位置を造り出している。339は長軸方向の両端を打ち欠き，結束の位置を造り出している。340は，長軸方向に加え，短軸方向においても結束の可能性が伺える。



第48図　縄文時代晩期石器実測図（11）

表13　縄文時代晩期石器観察表

挿図	番号	出土区		層位	取上番号	器種	分類	石材Ⅰ	石材Ⅱ	法量			
										最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
13	6	BC	11		2号土坑	砥石		安山岩		22.50	12.50	19.00	8300.00
14	15	A	10		3号土坑	磨石		花崗岩		(11.45)	(11.85)	(5.90)	930.00
15	17	A	8		4号土坑	砥石		安山岩		28.80	9.70	11.70	4320.00
	21	B	10		5号土坑	磨製石斧		ホルンフェルス		13.00	5.10	3.00	299.00
	22	B	10		5号土坑	磨石		花崗岩		10.45	9.15	5.45	770.00
	23	B	10		5号土坑	磨石		砂岩		14.90	9.40	5.70	1080.00
38	245	B	14	V	8580	打製石鏃	Ⅰ	安山岩		1.05	1.20	0.25	0.20
	246	B	13	V	8863	打製石鏃	Ⅰ	瑪瑙系	瑪瑙	1.40	(1.40)	0.35	0.40
	247	B	13	V	7396	打製石鏃	Ⅰ	安山岩		(1.50)	(1.40)	(0.25)	0.60
	248	B	14	V	7579	打製石鏃	Ⅱ	安山岩		(1.70)	(1.70)	0.25	0.60
	249	B	14	V	7514	打製石鏃	Ⅱ	安山岩		1.55	(1.30)	0.30	0.60
	250	B	14	V	8680	打製石鏃	Ⅱ	安山岩		1.35	1.30	0.30	0.40
	251	D	8	V	11594	打製石鏃	Ⅱ	チャート		1.95	1.45	0.50	1.00
	252	B	13	V	6768	打製石鏃	Ⅱ	安山岩		1.95	(1.65)	0.25	0.60
	253	B	14	V	9005	打製石鏃	Ⅱ	安山岩		1.95	1.75	0.35	0.60
	254	E	9	V	11098	打製石鏃	Ⅱ	黒曜石	Ⅳ	(2.50)	(1.70)	0.35	1.00
	255	A	11	V	5334	打製石鏃	Ⅲ	黒曜石	Ⅳ	2.15	1.25	0.25	0.60
	256	B	14	V	7546	打製石鏃	Ⅲ	安山岩		(2.10)	(1.50)	0.30	0.60
	257	E	8	V	11477	打製石鏃	Ⅳ	黒曜石	Ⅳ	1.90	1.60	0.20	0.60
	258	E	7	V	12723	打製石鏃	Ⅳ	黒曜石	Ⅳ	1.78	1.25	0.40	0.60
	259	B	12	V	9734	打製石鏃	Ⅳ	黒曜石	Ⅳ	2.30	1.35	0.35	0.80
	260	E	7	V	12859	打製石鏃	Ⅳ	黒曜石	Ⅰ	(2.50)	1.55	0.40	1.40
	261	E	8	V	11702	打製石鏃	Ⅳ	黒曜石	Ⅳ	(1.65)	(1.90)	0.45	1.40
	262	D	8	V	10740	打製石鏃	Ⅴ	鉄石英		2.75	1.80	0.70	2.60
	263	D	8	V	11297	打製石鏃	Ⅴ	黒曜石	Ⅳ	2.05	(1.40)	0.30	0.80
	264	E	7	V	12685	打製石鏃	Ⅴ	黒曜石	Ⅳ	1.80	1.75	0.30	0.80
	265	C	11	V	4911	石匙		安山岩		4.18	5.66	1.28	25.45
39	266	F	6	V	13035	スクレイパー		安山岩		7.10	10.80	1.80	119.80
	267	D	8	V	10714	使用痕剥片		ホルンフェルス		9.95	5.15	2.20	89.10
40	268	C	13	V	9791	二次加工剥片		ホルンフェルス		5.75	3.80	0.65	14.10
	269	E	8	V	10861	二次加工剥片		ホルンフェルス		5.55	3.75	1.05	23.40
	270	E	7	V	12376	二次加工剥片		安山岩		9.40	3.40	1.05	25.50
	271	E	7	V	12737	石錐		チャート		5.26	3.10	1.60	24.50
	272	D	9	V	10331	石核		チャート		7.25	4.05	2.20	89.60
	273	D	8	V	13199	石核		ホルンフェルス		7.00	13.90	10.60	990.00
41	274	C	10	V	5942	打製石斧	Ⅰ	安山岩		20.90	9.30	1.75	400.00
	275	D	9	V	10363	打製石斧	Ⅰ	安山岩		(14.95)	10.60	2.35	494.00
	276	D	9	V	11003	打製石斧	Ⅰ	砂岩		(11.90)	9.60	1.70	230.00
	277	D	9	V	11065	打製石斧	Ⅰ	ホルンフェルス		18.30	7.70	2.50	338.20
	278	D	9	V	10286	打製石斧	Ⅰ	安山岩		15.40	8.15	2.50	270.00
	279	F	6	V	12970	打製石斧	Ⅰ	頁岩		15.50	8.10	2.20	181.70
	280	C	12	V	6711	打製石斧	Ⅰ	頁岩		13.50	7.05	2.25	232.00
	281	D	8	V	11551	打製石斧	Ⅰ	砂岩		(9.30)	(5.90)	(1.52)	102.50
42	282	E	8	V	11696	打製石斧	Ⅱ	安山岩		(14.55)	(9.25)	(1.25)	180.20
	283	E	8	V	10893	打製石斧	Ⅱ	安山岩		12.25	5.70	1.95	174.20
	284	C	10	V	3224	打製石斧	Ⅱ	安山岩		13.50	6.45	2.25	180.90
	285	A	10	V	129	打製石斧	Ⅱ	頁岩		13.30	5.40	2.30	193.80
	286	C	4	V	340	打製石斧	Ⅱ	安山岩		13.55	5.35	2.20	158.20
	287	C	11	V	3870	打製石斧	Ⅱ	安山岩		(9.05)	(6.20)	(1.65)	121.60
	288	E	6	V	13157	打製石斧	Ⅱ	ホルンフェルス		16.80	12.10	2.75	407.80
	289	C	9	V	4061	打製石斧	Ⅱ	安山岩		11.00	4.90	1.40	72.90
	290	E	7	V	12398	打製石斧	Ⅱ	安山岩		(9.70)	6.20	1.40	90.10
	291	E	7	V	11775	打製石斧	Ⅱ	安山岩		(8.45)	7.65	1.70	120.50
43	292	E	8	V	11350	打製石斧	Ⅲ	安山岩		16.05	5.35	1.85	162.10
	293	C	9	V	4805	打製石斧	Ⅲ	安山岩		13.90	6.55	1.80	190.30
	294	B	10	V	5949	打製石斧	Ⅲ	安山岩		14.40	5.45	2.90	240.00
	295	B	5	Ⅳ	331	打製石斧	Ⅲ	安山岩		(10.75)	6.60	1.75	139.80
	296	D	11	V	3419	打製石斧	Ⅲ	安山岩		11.80	5.05	1.75	123.10
	297	E	8	V	11500	打製石斧	Ⅲ	ホルンフェルス		12.35	4.30	2.00	134.20
	298	B	14	V	9431	打製石斧	Ⅲ	安山岩		9.80	4.60	1.20	61.00
	299	D	8	V	10732	打製石斧	Ⅳ	ホルンフェルス		11.50	4.00	1.70	87.60
	300	B	12	V	9148	打製石斧	Ⅳ	ホルンフェルス		12.00	5.20	2.00	135.20
	301	F	6	V	11949	抉入状石器	Ⅴ	頁岩		17.50	6.80	2.90	358.00
	302	C	9	V	4750	抉入状石器	Ⅴ	ホルンフェルス		12.40	9.60	4.10	488.40
44	303	B	12	V	6613	抉入状石器	Ⅴ	ホルンフェルス		9.85	5.60	1.80	98.60
	304	D	8	V	10764	抉入状石器	Ⅴ	ホルンフェルス		(10.60)	5.30	2.10	113.60
	305	B	10	V	171	磨製石斧	Ⅰ	安山岩		15.55	5.85	3.20	383.20
	306	C	10	V	6050	磨製石斧	Ⅰ	安山岩		(9.00)	(6.85)	(3.85)	260.00
	307	E	7	V	12367	磨製石斧	Ⅰ	頁岩		(12.75)	(6.60)	(4.15)	535.40
	308	C	11	V	5166	礫器	Ⅰ	ホルンフェルス		14.80	8.20	4.25	570.00
	309	C	13	V	7399	礫器	Ⅰ	サヌカイト		7.40	11.30	3.30	250.00
	310	C	13	V	6746ほか	磨石	Ⅰ	安山岩		11.75	9.70	4.20	520.00
	311	D	9	V	10422	磨石	Ⅰ	安山岩		10.70	10.30	4.50	810.00
45	312	B	15	V	8250ほか	磨石	Ⅱ	花崗岩		14.35	12.35	7.30	1850.00
	313	B	14	V	8925	磨石	Ⅱ	安山岩		16.80	13.25	6.25	2120.00
	314	A	16	V	9997ほか	磨石	Ⅱ	花崗岩		10.90	9.75	5.80	890.00
	315	D	9	V	10162	磨石	Ⅱ	安山岩		6.85	5.90	3.00	170.00
	316	D	9	V	10808	磨石	Ⅱ	安山岩		15.95	10.75	5.10	1230.00
	317	B	13	V	8799	磨石	Ⅱ	花崗岩		11.60	9.78	5.24	960.00
	318	C	11	V	3852	磨石	Ⅱ	砂岩		11.45	11.05	5.93	1000.00
46	319	B	12	V	5615	磨石	Ⅱ	砂岩		12.10	9.80	6.30	1060.00
	320	B	14	V	9061	磨石	Ⅱ	安山岩		13.45	11.35	5.15	1130.00
	321	C	12	V	6574	磨石	Ⅱ	安山岩		9.90	8.35	4.80	570.00
	322	B	13	V	7451	磨石	Ⅲ	安山岩		13.85	11.20	7.30	1680.00
	323	C	11	V	4990	磨石	Ⅲ	砂岩		11.20	10.90	6.60	1090.00
	324	A	10	V	1412	磨石	Ⅲ	安山岩		13.25	10.35	5.00	1080.00
	325	C	10	V	6232	磨石	Ⅲ	安山岩		14.05	10.00	6.90	1460.00
	326	C	11	V	4613	磨石	Ⅲ	砂岩		8.60	7.00	4.55	390.00
47	327	A	12	V	9653	敲石		安山岩		18.90	10.20	7.70	2270.00
	328	D	10	Ⅳ	10010	敲石		花崗岩		26.95	11.20	8.45	3380.00
	329	C	10	V	5585	敲石		砂岩		23.20	10.25	5.30	1880.00
	330	E	7	V	12509	敲石		安山岩		9.35	11.00	6.40	750.00
48	331	C	12	V	5060	敲石		砂岩		5.95	5.65	4.60	230.00
	332	B	15	V	9425	敲石		花崗岩		7.15	4.35	4.15	171.60
	333	E	9	V	11088	敲石		砂岩		5.15	5.35	2.70	98.70
	334	A	10	V	1364	敲石		チャート		6.80	5.85	3.55	174.60
	335	B	3	Ⅳb	2969	石皿		砂岩		13.95	12.35	5.51	1210.00
	336	E	7	V	12524	砥石		安山岩		30.35	15.25	10.30	7590.00
	337	C	10	V	4166	石錘		安山岩		7.65	6.52	1.92	121.80
	338	A	10	V	709	石錘		安山岩		7.60	5.68	2.78	170.30
	339	C	10	V	5494	石錘		砂岩		6.70	10.18	2.70	260.00
	340	A	8	4	1477	石錘		安山岩		6.60	9.45	2.40	151.80

3　弥生時代の調査成果

⑴　概要

平成21年度の調査範囲（A～C－10～18区）において，Ⅴ層から該期の土器片が出土した。遺構は，確認できなかった。

⑵　土器

ア　早期

甕（第50図341～353）

突帯が口唇部に接して貼付される特徴をもつ。総数で65点出土し，そのうち13点を図化した。341～345は，上胴部で屈曲する器形を呈する。343は，無刻目突帯文が口唇部につく。344は，刻み目の無い断面三角形の突帯が２条巡る。345は，巻き貝の殻頂部を用いた刺突が施される突帯が方形の区画を作る。346～349は，上胴部で屈曲しない砲弾形の器形と考えられる。347は，外面に炭化物の付着が確認され放射性炭素年代測定を試みた。その結果，紀元前800年から紀元前751年の年代が示されている。詳細については，第５章第３節と第６章第１節３に記載した。350～353は，つまみ出しで突帯を作り出し，細かい刻み目が入る。

鉢（第51図354～359）

総数で28点出土し，そのうち６点を図化した。354～356は，口唇部を外につまみ出し，口縁部が内傾し，上胴部で強く屈曲する器形である。355・356は，内外面共にミガキ調整が確認できる。357～359は，上胴部での屈曲がなく緩やかにすぼまり底部へ至る器形である。357は，口唇部が薄く，口縁部が内弯する。358は，ナデ調整，359は，ミガキ調整が施される。

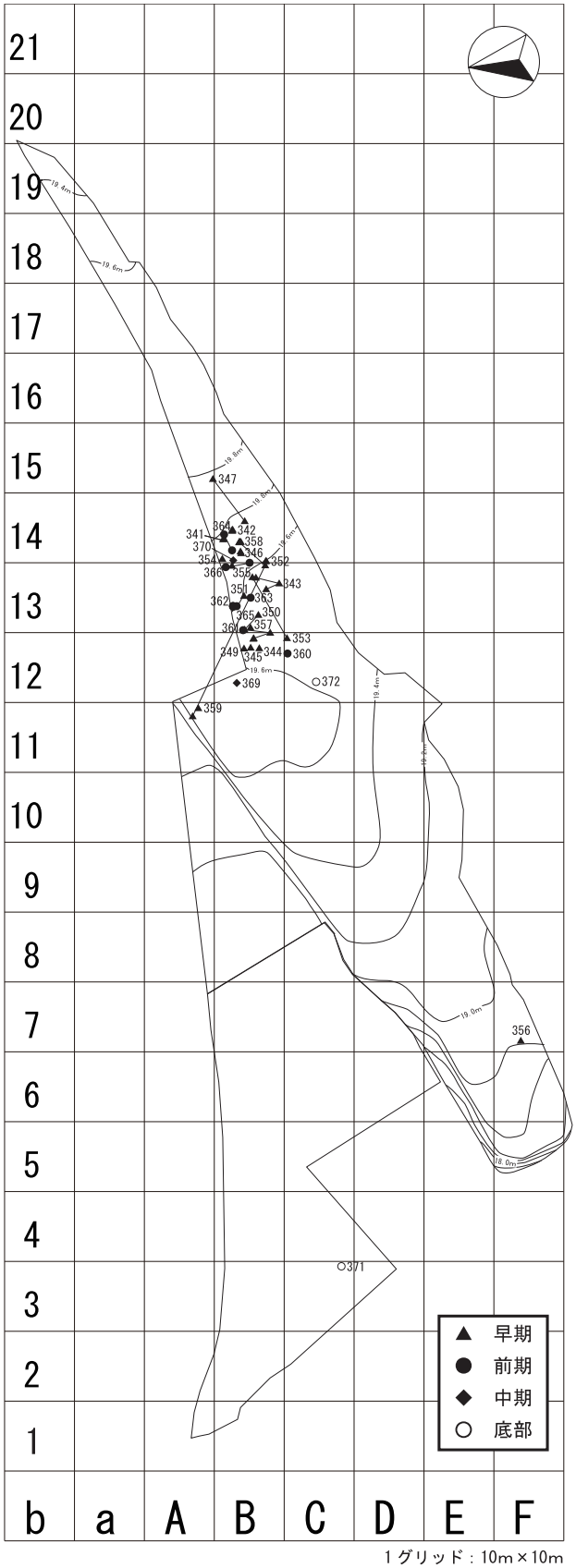
イ　前期

甕（第51図360・361）

総数で３点出土し，そのうち２点を図化した。360・361は，大きな断面三角形の突帯が平坦な口縁部を形成する。360は，突帯に刻み目が入る。

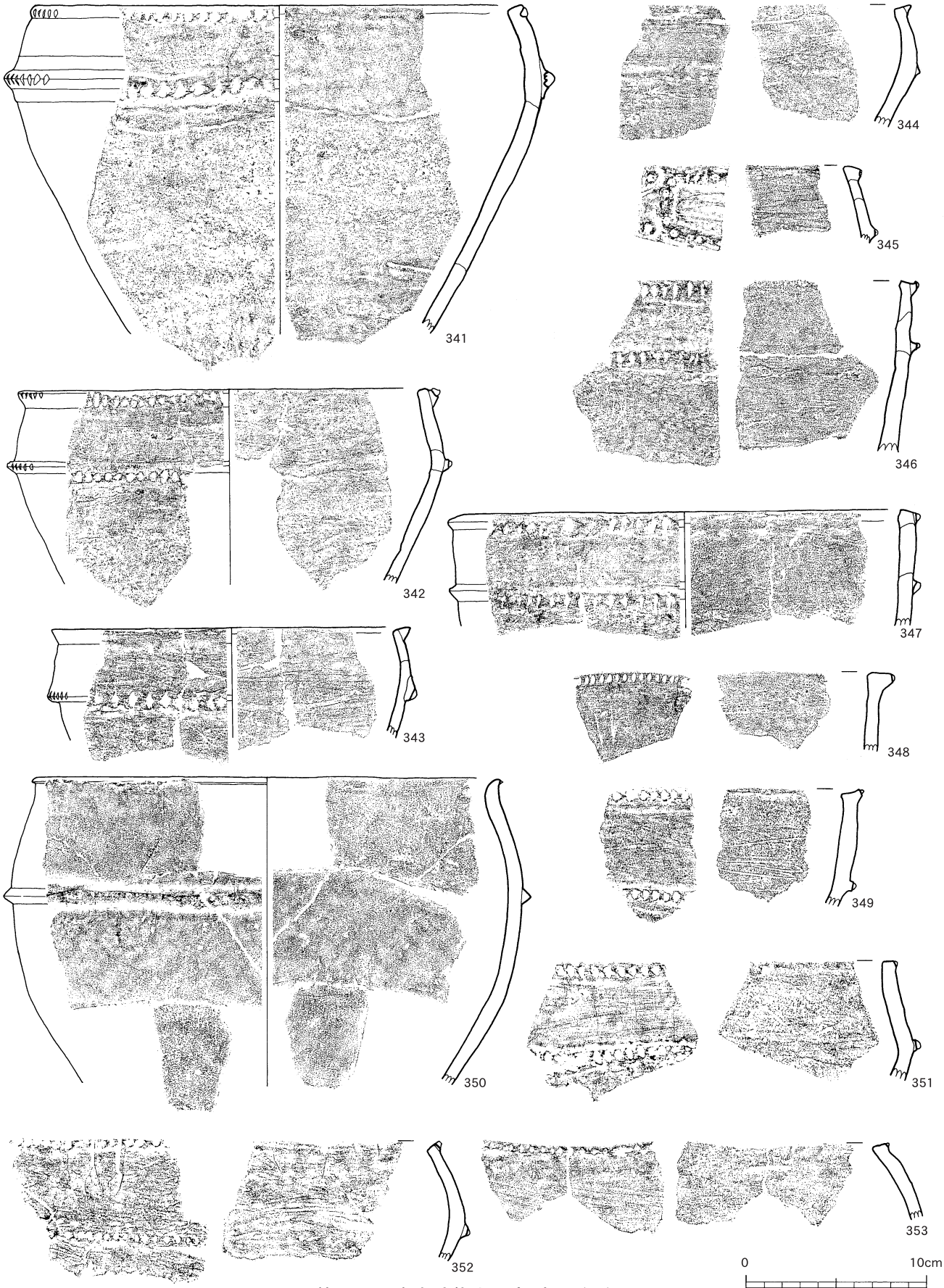
壺（第51図362～366）

総数で77点出土し，そのうち５点を図化した。362・363は，肩部破片である。いずれも４条，2条の沈線が巡る。364～366は，いずれも肩部に沈線が巡り，その沈線の下位胴部の状況がわかる。364は，左上から右下に引かれた複数の沈線によって鋸歯状の文様が描かれている。365は，3条の沈線によって重孤文が描かれている。366は，肩部沈線下位に文様が描かれていない。



1グリッド：10m×10m

第49図　弥生時代土器出土状況



第50図　弥生時代土器実測図（１）

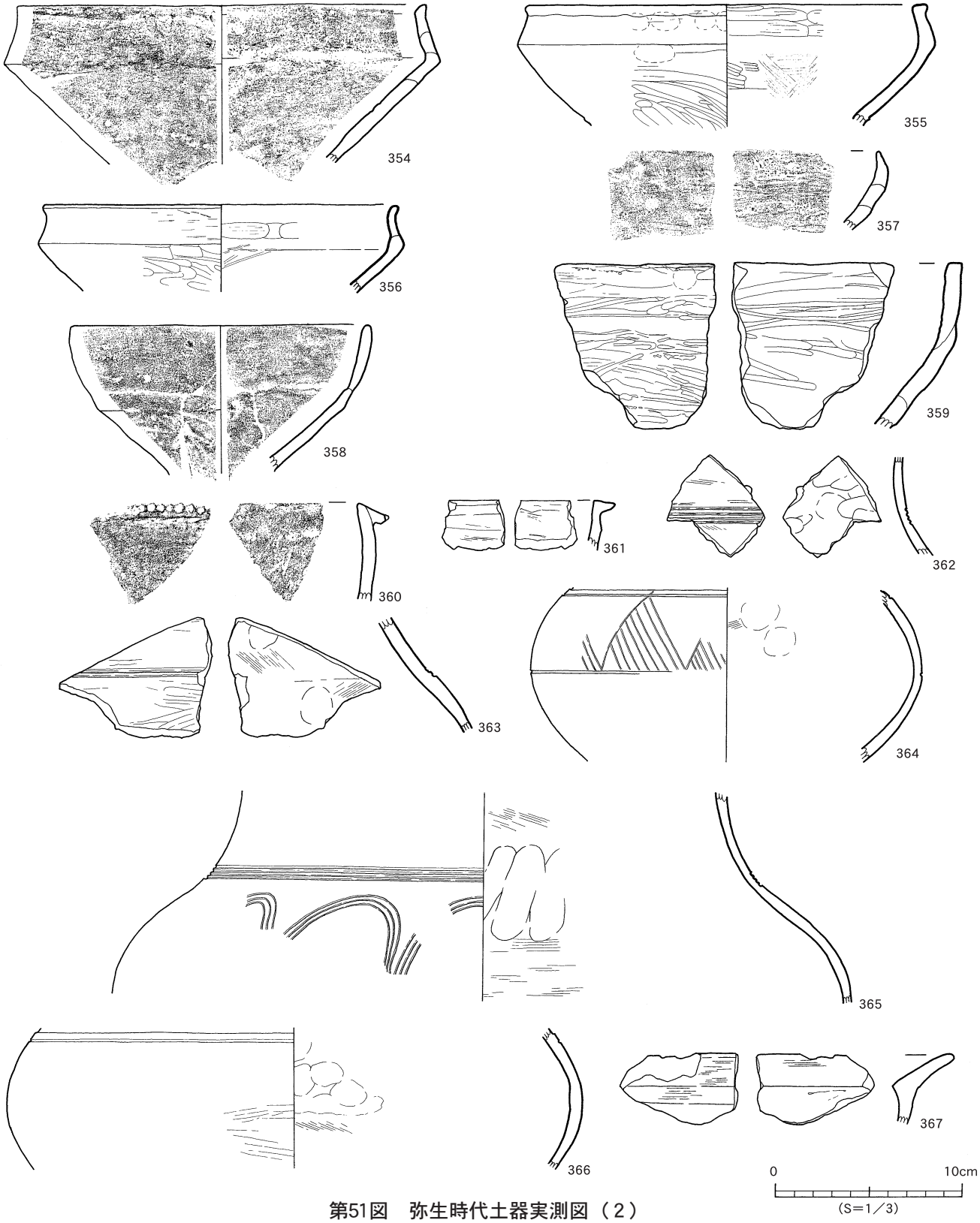
ウ　中期

甕（第51図367）

総数で４点出土し，そのうち１点を図化した。367は，口縁部上面が上方へ反り，内面に強く張り出す。黒髪式の甕と考えられる。

鉢（第52図368）

368は，胎土に砂粒を多く含む。胴部下位の器壁が薄い特徴をもつ。



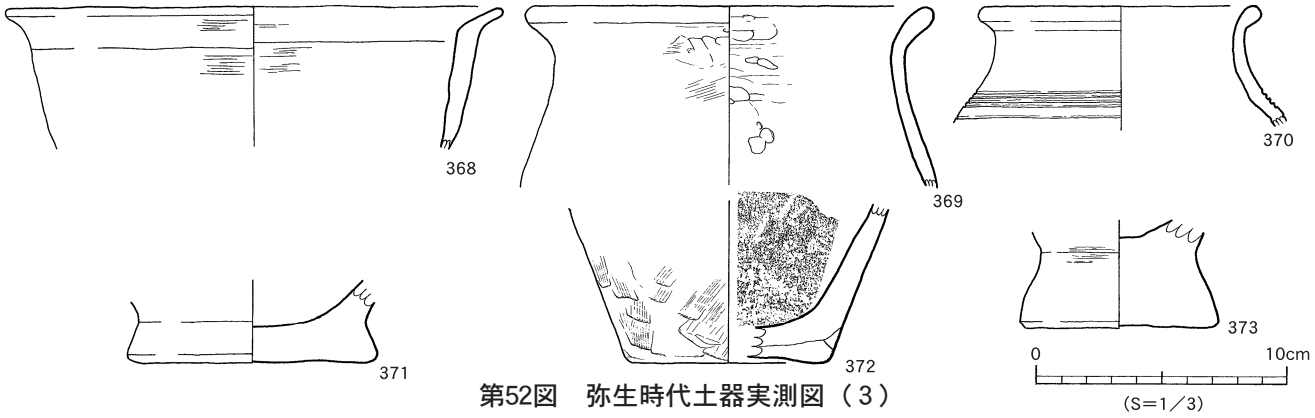
第51図　弥生時代土器実測図（２）

壺（第52図369・370）

総数で５点出土し，そのうち２点を図化した。369・370は口縁部である。短い口縁部で長い頸部をもつ器形を呈する。370は，頸部下位に沈線をもつ。弥生時代中期前葉のものと考えられる。

エ　底部（第52図371～373）

371は，低い充実高台が特徴の弥生時代前期甕の底部と考えられる。ただし，縄文時代晩期の深鉢底部である可能性も否定できない。372は，壺の底部，373は，甕の底部と考えられる。



第52図　弥生時代土器実測図（３）

表14　弥生時代土器観察表

挿図	番号	区		層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	焼成	備考
									外	内	外	内								
50	341	B	14	V	7574	早期甕	口縁～胴部		ナデ	ナデ	褐色	橙色	○	○	○		○			炭化物
		B	14	V	7575															
	342	B	14	V	8699	早期甕	口縁～胴部		粗いヘラナデ	粗いヘラナデ	橙色	明黄褐色	○	○	○		○			
		B	14	V	8700															
		B	14	V	9045															
	343	B	13	V	6897	早期甕	口縁部		粗いヘラナデ	粗いヘラナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○			
		B	13	V	6920															
		B	13	V	7017															
	344	B	12	V	5706	早期甕	口縁～胴部		粗いヘラナデ	粗いヘラナデ	にぶい黄色	灰オリーブ色	○	○	○		○			
	345	B	12	V	5713	早期甕	口縁部		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	褐灰色	○	○	○		○			工字文
	346	B	14	V	7504	早期甕	口縁～胴部		ナデ	ナデ	黒褐色	明黄褐色	○	○	○	○	○			
		B	14	V	8537															
	347	A	15	V	8298	早期甕	口縁部		ナデ	ナデ	黒褐色	明赤褐色	○	○	○		○			
		B	14	V	8691															
	348	B	13	V	一括	早期甕	口縁部		ナデ／指頭圧痕	ナデ／指頭圧痕	黒褐色	褐灰色	○	○			○			
	349	B	12	V	6936	早期甕	口縁部		粗いヘラナデ	粗いヘラナデ	黒褐	にぶい赤褐	○	○	○		○		良好	
	350	B	12	V	5721	早期甕	口縁～胴部		ナデ	ナデ／指頭圧痕	明黄褐色	橙色	○	○	○		○			
		B	12	V	5722															
		B	12	V	5736															
		B	12	V	6670															
		B	13	V	6812															
	351	B	13	V	8810	早期甕	口縁部		ミガキ	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○			
	352	B	14	V	7129	早期甕	口縁～胴部		ナデ	ナデ	褐色	にぶい赤褐色	○	○	○		○			
		B	14	V	7196															
	353	C	12	V	6610	早期甕	口縁部		粗いヘラナデ	粗いヘラナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○			
		B	13	V	7407															
51	354	B	14	V	8957	早期鉢	口縁～胴部		ナデ	ナデ	明黄褐色	橙色	○	○	○		○			
	355	B	13	V	8760	早期鉢	口縁～胴部		ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○			
	356	F	7	V	12913	早期鉢	口縁～胴部		ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	○	○	○		○	○		
	357	B	13	V	9194	早期鉢	口縁部		ナデ	ナデ	褐灰色	橙色	○	○	○		○			
	358	B	14	V	7454	早期鉢	口縁～胴部		ナデ	ナデ	黒褐色	橙色	○	○	○		○			
		B	14	V	8601															
		B	14	V	8606															
		B	14	V	8607															
		B	14	V	8608															
		B	14	V	8609															
		B	14	V	9369															
		B	14	V	9823															
	359	A	11	V	9681	早期鉢	口縁～胴部		ミガキ	ミガキ	橙色	黒褐色	○	○	○		○	○		
	360	C	12	V	6505	前期甕	口縁部		ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○			
	361	B	13	V	6967	前期甕	口縁部		ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○	○	○			
	362	B	13	V	8843	前期壺	肩部	沈線	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○		○	○		良好	
	363	B	13	V	8832	前期壺	肩部	沈線	ミガキ	ナデ／指頭圧痕	橙色	橙色	○	○		○	○	○	不良	
	364	B	14	V	7497	前期壺	胴部	沈線	ミガキ	指頭圧痕	灰褐色	にぶい黄褐色	○	○			○	○	良好	
		B	14	V	9017															
	365	B	13	V	8843	前期壺	肩～胴部	沈線	ミガキ	指頭圧痕	暗赤褐色	橙色	○	○		○	○		良好	
		B	13	V	8845															
		B	13	V	9287															
	366	B	13	V	7443	前期壺	胴部	沈線	ナデ／ミガキ	ナデ／指頭圧痕	橙色	にぶい黄色	○	○		○	○			
		B	13	V	8751															
	367	C	4	Ⅳb	一括	中期甕	口縁部		ナデ	ナデ	浅黄橙色	灰白色	○	○			○		不良	
52	368	B	3	Ⅳa	一括	中期鉢	口縁部		ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	○	○	○		○		不良	
	369	B	12	V	5638	中期壺	口縁部		ミガキ	ミガキ	橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○	○	良好	
	370	B	14	V	8509	中期壺	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○		○				
	371	C	3	Ⅳb	2504	底部	底部		ナデ	ナデ	明赤褐色	褐灰色	○	○	○		○		不良	
	372	C	12	V	3528	底部	底部		ナデ	ナデ	にぶい褐色	橙色	○	○			○	○		
	373	A	12	Ⅳa	一括	底部	底部		ナデ	ナデ	橙色	にぶい橙色	○	○	○		○		不良	

4　古墳時代の調査成果

⑴　概要

本遺跡では古墳時代の遺物包含層は確認されていない。また，遺構の検出もできなかったが，古代の遺物包含層であるⅣ層，縄文時代晩期の遺物包含層であるⅤ層から少量出土しているので記録することとした。

⑵　土器

ア　甕（第53図374～378）

総数で26点出土し，そのうち５点を図化した。374は口縁部破片である。375・376は胴部破片である。375は，刻み目を有する突帯をもつ。376は，貼り付けの薄い突帯をもつ。377は脚部破片である。378は口縁部から胴部下位までの破片である。口縁部が外反し，胴部はやや膨らむものである。胴部外面に広く煤が付着している。

イ　壺（第53図379・380）

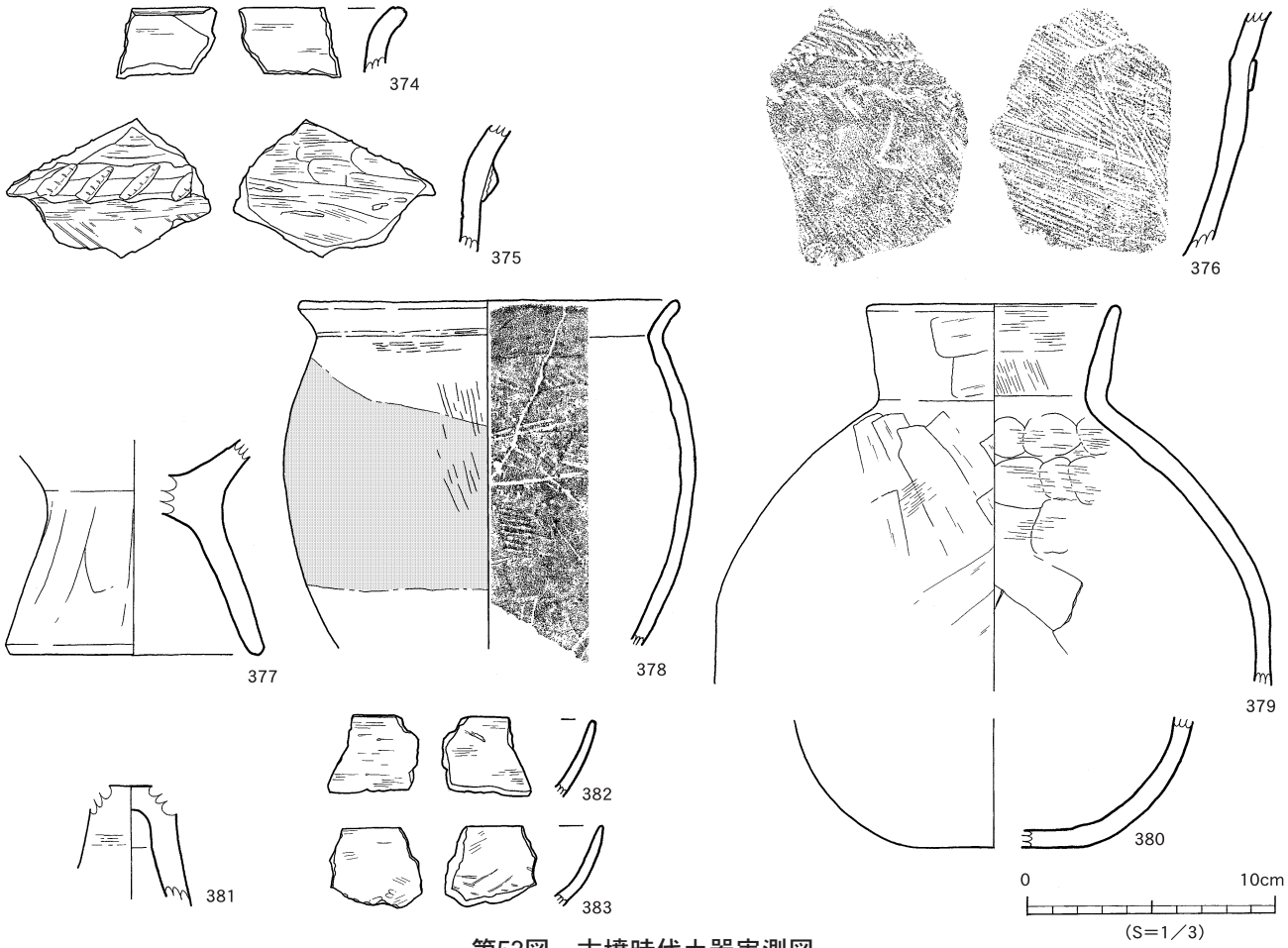
総数で23点出土し，そのうち２点を図化した。379は，口縁部から胴部までの破片である。口縁部は直行気味で，胴部は球形状に膨らむ。380は，底部破片である。

ウ　高坏（第53図381）

総数で５点出土し，そのうち１点を図化した。381は，高坏の脚部破片である。

エ　坩（第53図382・383）

総数で３点出土し，そのうち２点を図化した。382・383は，口縁部である。口径と器面調整から坩の口縁と判断したが，小型土器の可能性も捨てきれない。



第53図　古墳時代土器実測図

表15　古墳時代土器観察表

挿図	番号	区		層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	焼成	備考
									外	内	外	内								
53	374	B	13	Ⅴ	一括	甕	口縁部		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○			○			
	375	C	11	Ⅴ	3312	甕	胴部	突帯	ナデ／ハケ目	ナデ	にぶい黄橙色	橙色	○	○	○		○			
	376	D	6	Ⅳa	一括	甕	胴部	突帯	ヘラナデ	ヘラナデ	橙色	浅黄橙色	○	○	○		○	○		
	377	B	2	Ⅳb	2893	甕	脚部		ヘラナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○	○	○		不良	
		B	2	Ⅳb	一括															
	378	E	7	Ⅴ	11903～11906	甕	口縁～胴部	無紋	ハケ目	ケズリ／ハケ目	橙色	橙色	○	○	○	○	○			煤
					12517															
					12519															
					12520															
	379	C	10	Ⅴ	3237	壺	口縁～胴部	無紋	ヘラナデ	指頭圧痕	黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○		○	○		
	380	B	3	Ⅳa	一括	丸底壺	底部		ナデ	不明	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		○	○		
	381	B	11	Ⅴ	3755	高坏	脚部		ナデ	ハケ目	橙色	橙色	○	○				○		
	382			Ⅳ	10040	坩	口縁部		ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	○		○			
	383	C	8	Ⅴ	4686	坩	口縁部		ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○			○	○		

5　古代の調査成果

⑴　概要

平成19年度の調査範囲（A～D－1～7区，B・C－8区）である自然堤防の後背地部分において，古代の遺物包含層であるⅣ層から遺構・遺物が見つかった。B・C－3・4区において土坑5基と調査範囲全域において柱穴状遺構（ピット）78基を検出し，土師器，須恵器，青磁，土製品が出土した。ただし，調査当初にⅣ層はａ，ａ’，ｂと細かく分層されていたが，調査の進捗で各層において同じように古代の遺物が出土した。また，調査箇所において分層できない状況が確認できたのでⅣ層として一括りにした。また，平成21年度の調査において遺物包含層は確認できなかった。

⑵　遺構

ア　土坑

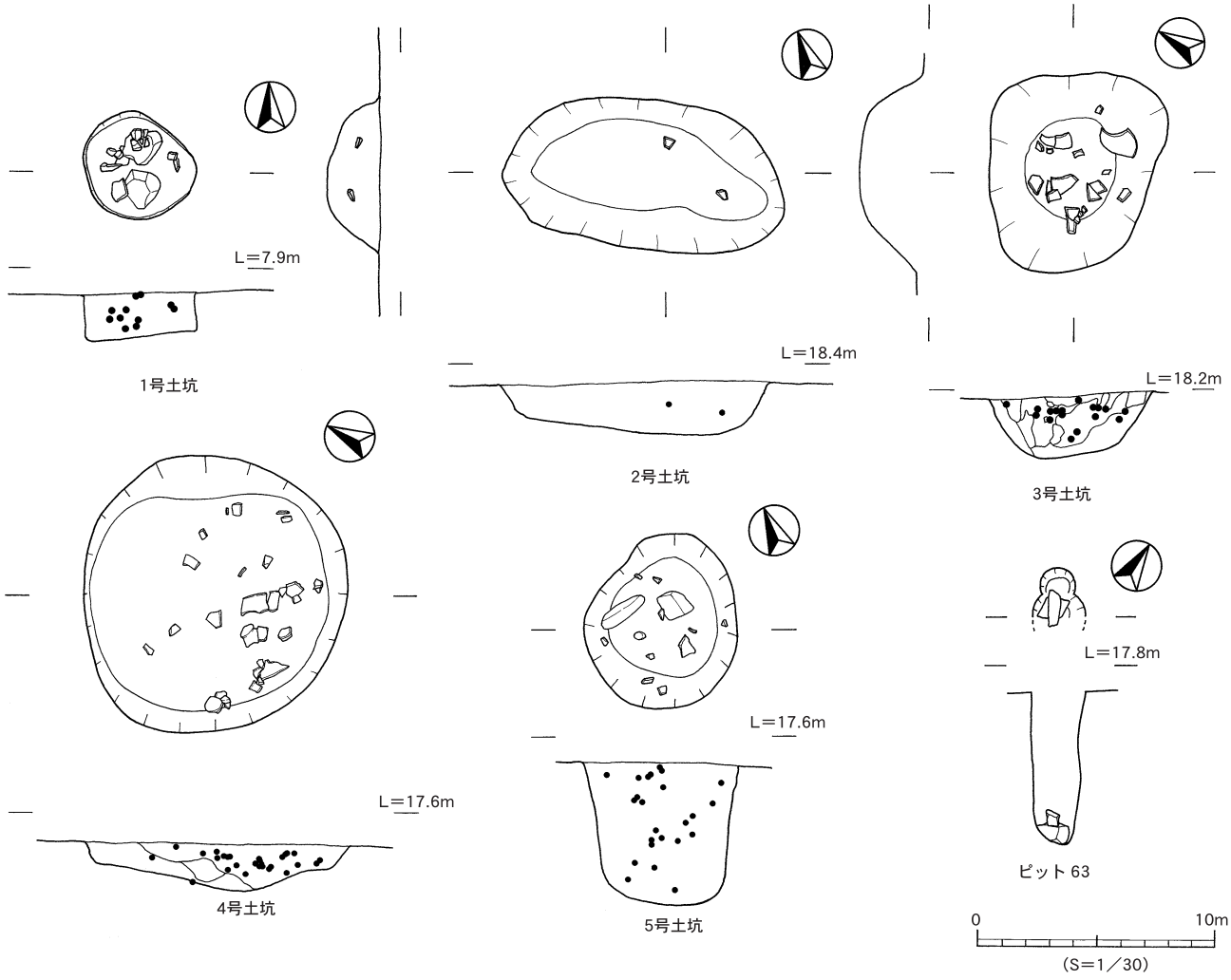
Ⅳ層上面において遺物包含層より暗い色調の円形ないし楕円形プランを5基検出した。調査の結果，形態・埋土状況・出土遺物に差が見られたが，いずれも土坑と認定できる遺構であった。また，古代に該当する土器片等が埋土から出土し，それらの一部を資料化した。

1号土坑（第54図，第56図384）

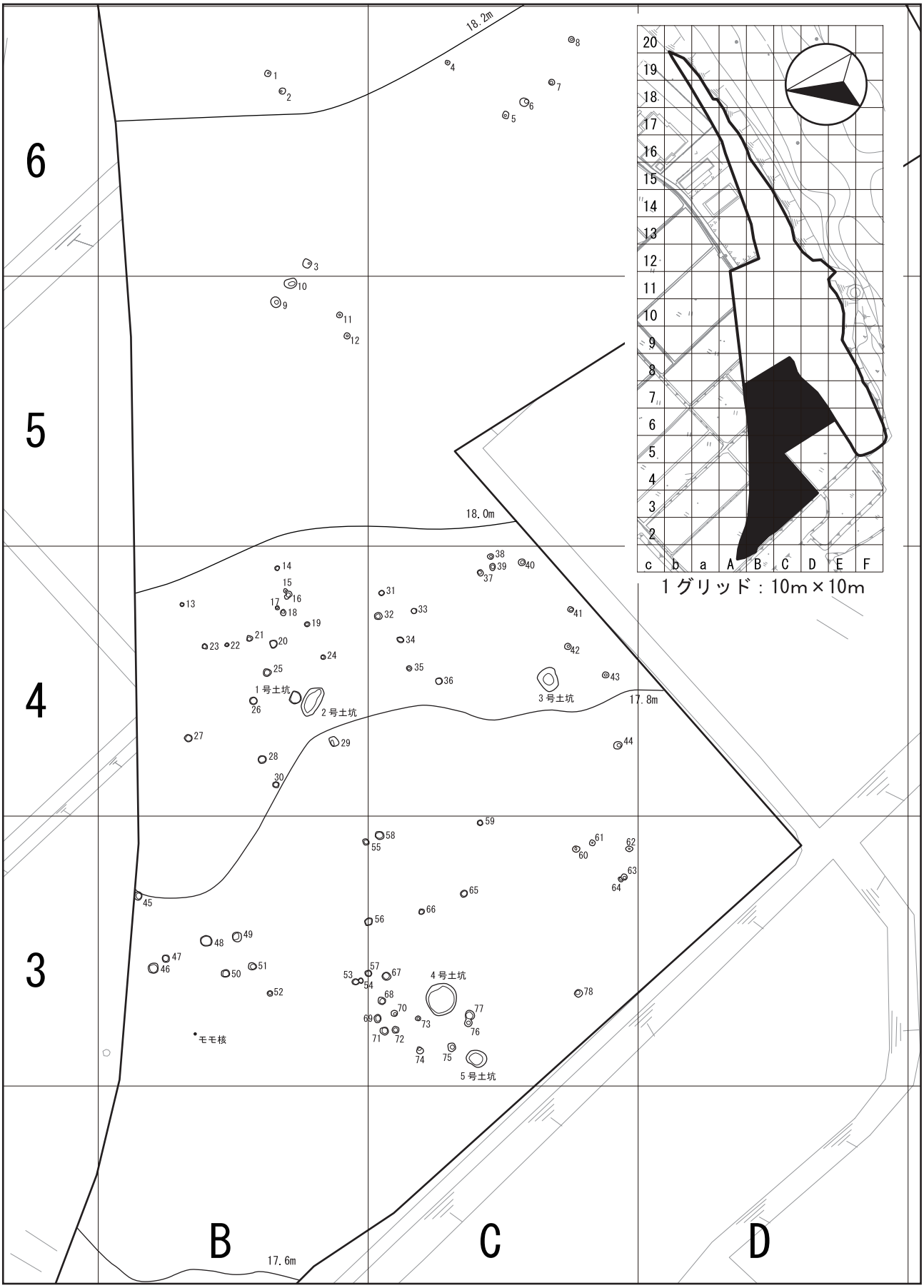
B－4区Ⅳ層で検出した。平面形は若干歪みが見られるが円形で，直径は45㎝である。また，検出面からの深さは，約20㎝であった。埋土は灰褐色粘質土である。土器片が9点出土した。384は，土師甕の口縁部である。口縁部は逆「L」字に近く外反し，胴部はあまり張らない。内面は口縁部近くまで明瞭なヘラケズリが認められる。

2号土坑（第54図）

B－4区Ⅳ層で検出した。平面形は楕円形で，長径約1.2m，短径0.7mである。また，検出面からの深さは，約22㎝であった。埋土は灰褐色粘質土である。土器1点と礫1点が出土した。小破片であったため，図化できなかった。



第54図　Ⅳ層検出古代土坑・ピット実測図



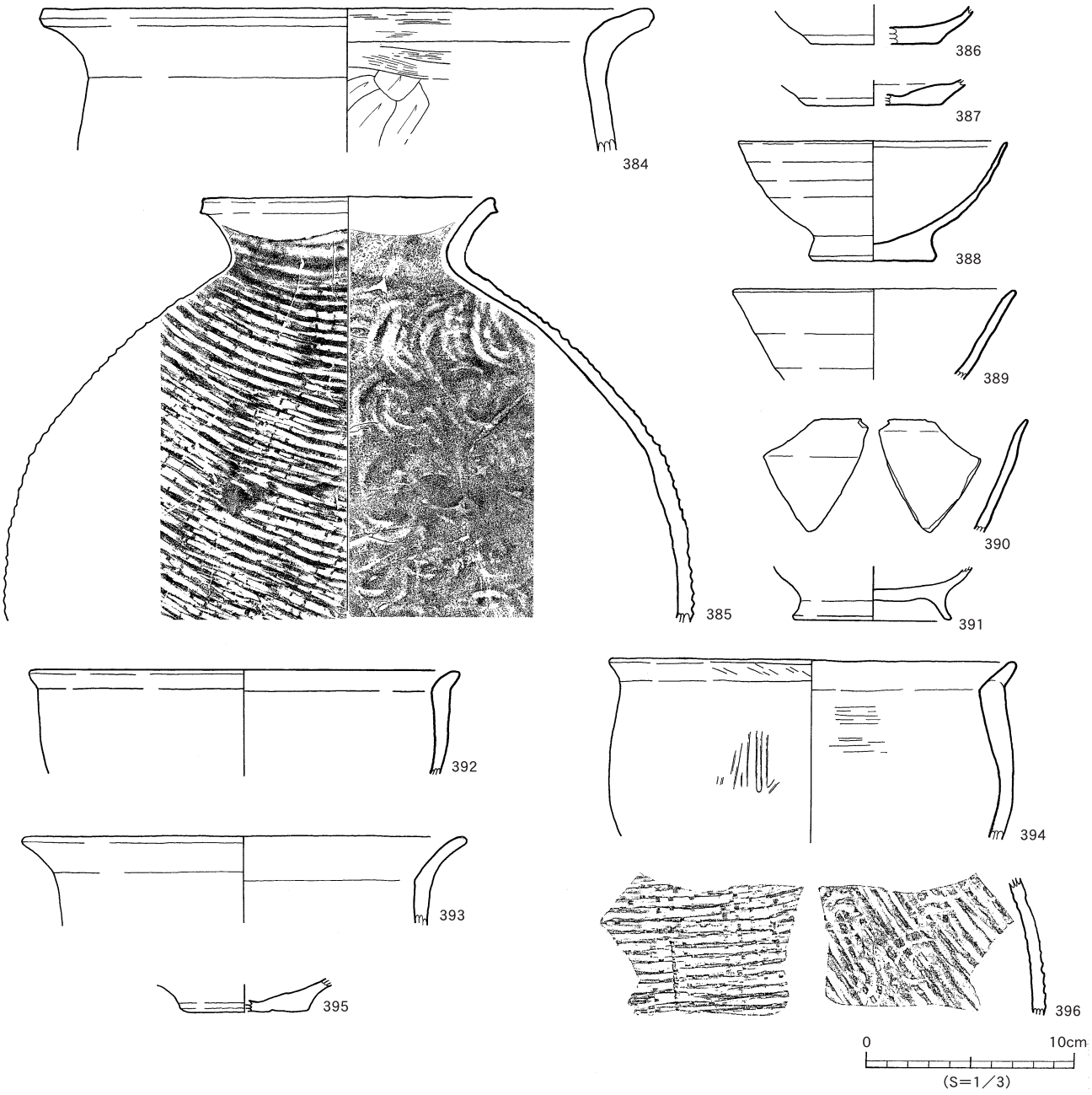
第55図　Ⅳ層検出古代土坑・ピット配置図

3号土坑（第54図，第56図385）

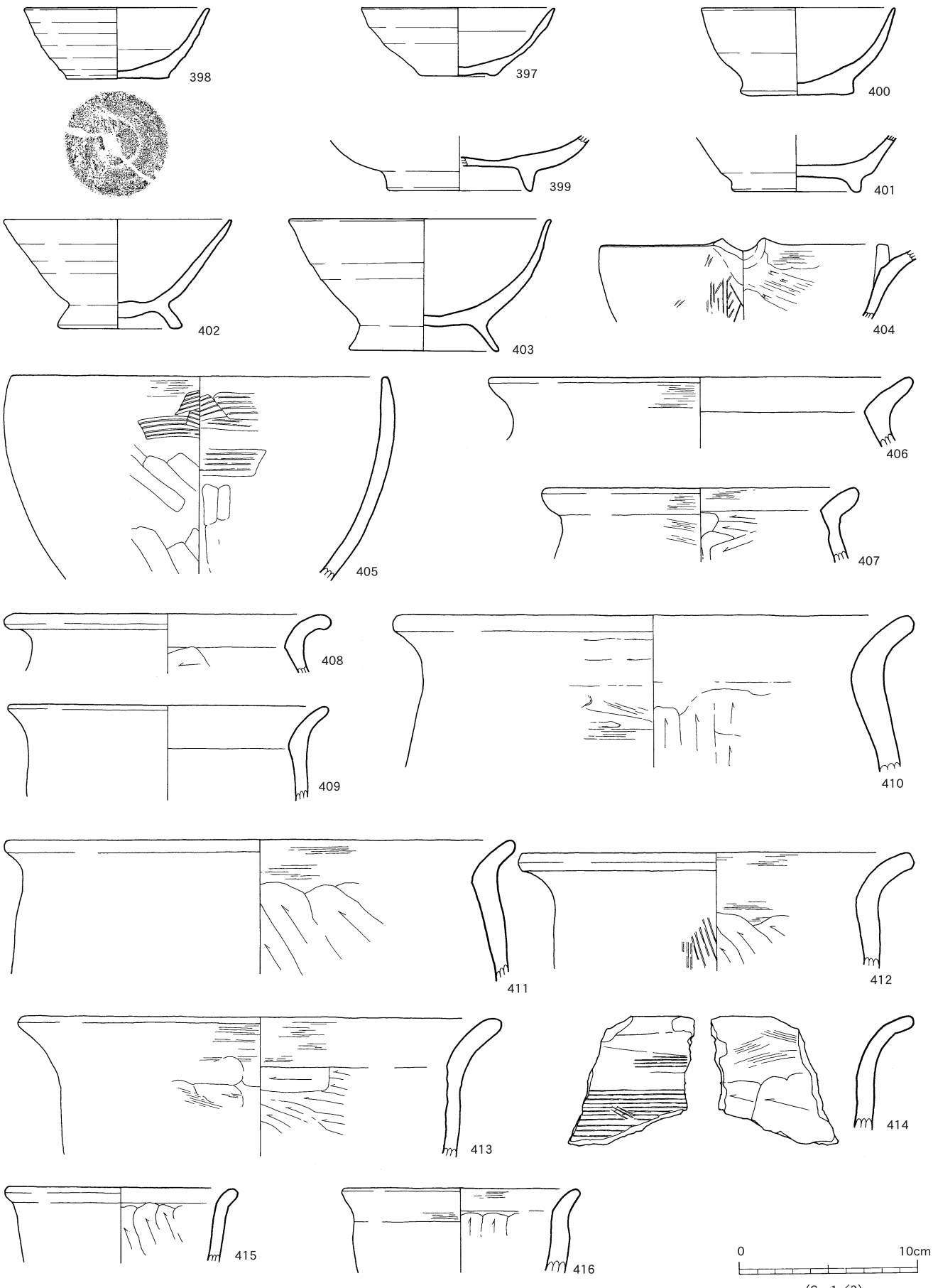
C－4区Ⅳ層で検出した。平面形は略円形で，直径が約0.8mである。また，検出面からの深さは約30㎝であった。調査の結果，暗褐色粘質土を埋土とし，そのなかに多くの炭化物と16点の須恵器を包含する土坑であることが判明した。385は，須恵器の甕の口縁部から胴部までの破片である。外面は格子目タタキ，内面は同心円タタキが認められる。遺構の使われた年代の特定を目的に炭化物の^{14}C年代測定を実施した。その結果，9世紀末から10世紀頃に使用された可能性の高いことが示された。なお，分析結果の詳細については，第5章第2節に記載した。

4号土坑（第54図，第56図386～394）

C－3区Ⅳ層で検出した。プランは直径約1.1mの円形である。また，検出面からの深さは約20㎝であった。埋土は3枚に分層できた。土師器・須恵器の破片が28点出土した。埋土中には炭化物も含まれていた。386・387は，土師器の坏の底部である。388～391は，土師の埦である。388は口径12.6㎝，器高5.6㎝を測る。底部は充実高台気味で，体部は内弯気味に立ち上がり，口縁部へ至る。392～394は土師甕の口縁部である。



第56図　古代土坑内遺物実測図



第57図　古代包含層出土遺物実測図（１）

５号土坑（第54図，第56図395・396）

Ｃ－３区Ⅳ層で検出した。プランは直径約0.7mの略円形である。また，検出面からの深さは約60㎝であった。埋土は，暗灰色粘質土に炭化物とⅣ層の明褐色土のブロックが混入しており，自然堆積は見られなかったことから，土坑が一気に埋められたものと考えられる。土師甕破片など20点と表面が赤化した軽石２点が出土した。395は，土師器の坏の底部である。396は，須恵器の甕の胴部上部である。外面は格子目タタキ，内面は平行タタキと同心円あて具痕が認められる。

イ　ピット（柱穴状遺構）（第54図）

ピット（柱穴状遺構）は，78基確認した。いずれもⅣ層で検出した。検出位置は第55図に示したとおりである。全数のピットを半裁し，埋土状況と断面形状を調査した。Ｃ－３区で検出した１基のピットに根石を確認した。また，Ｂ－３区のピットからは該期の遺物が出土した。形状計測の記録については，表16の観察表を参照されたい。

⑶　遺物

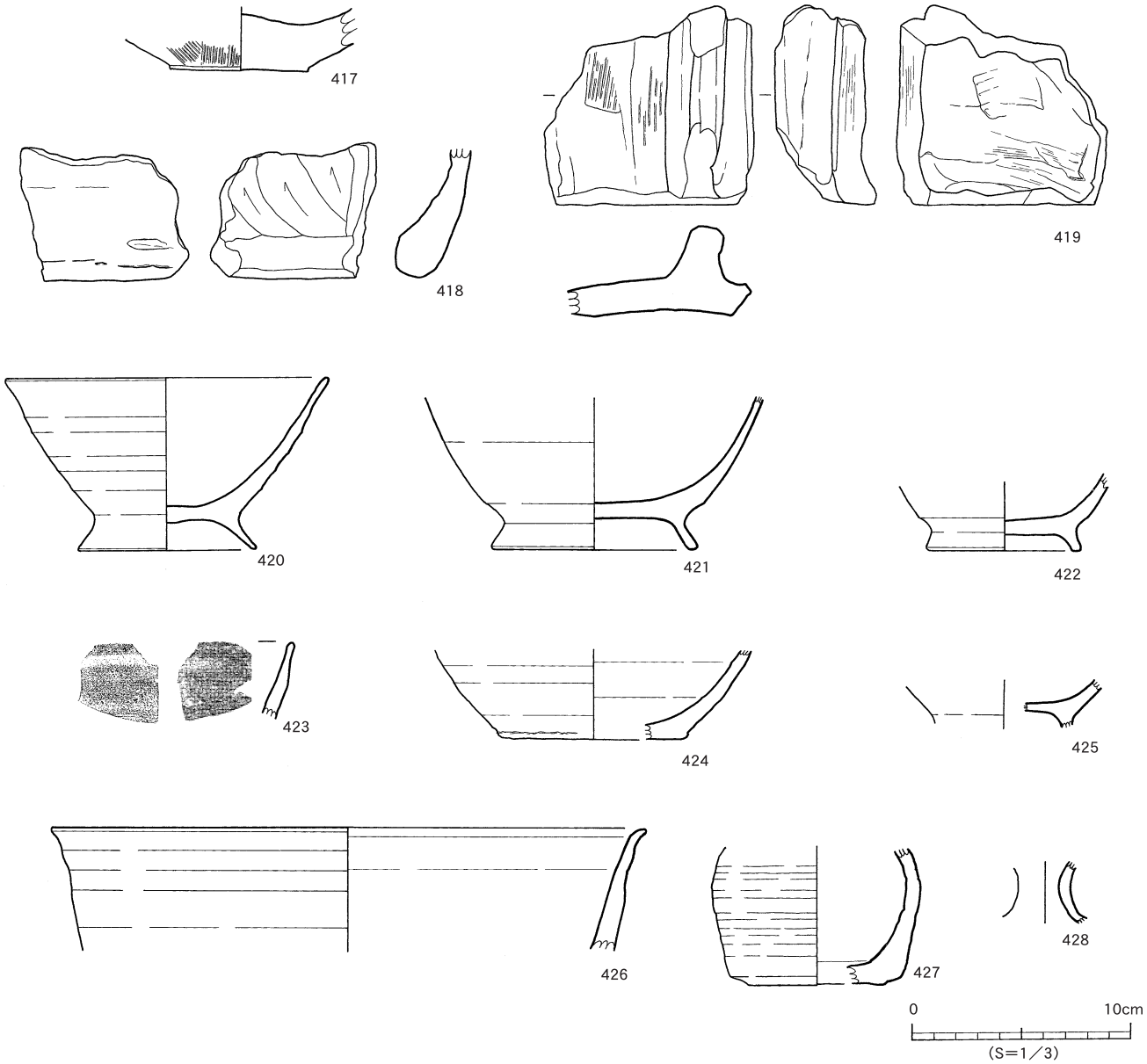
ア　土師器（第57図・第58図）

坏（第57図397・398）

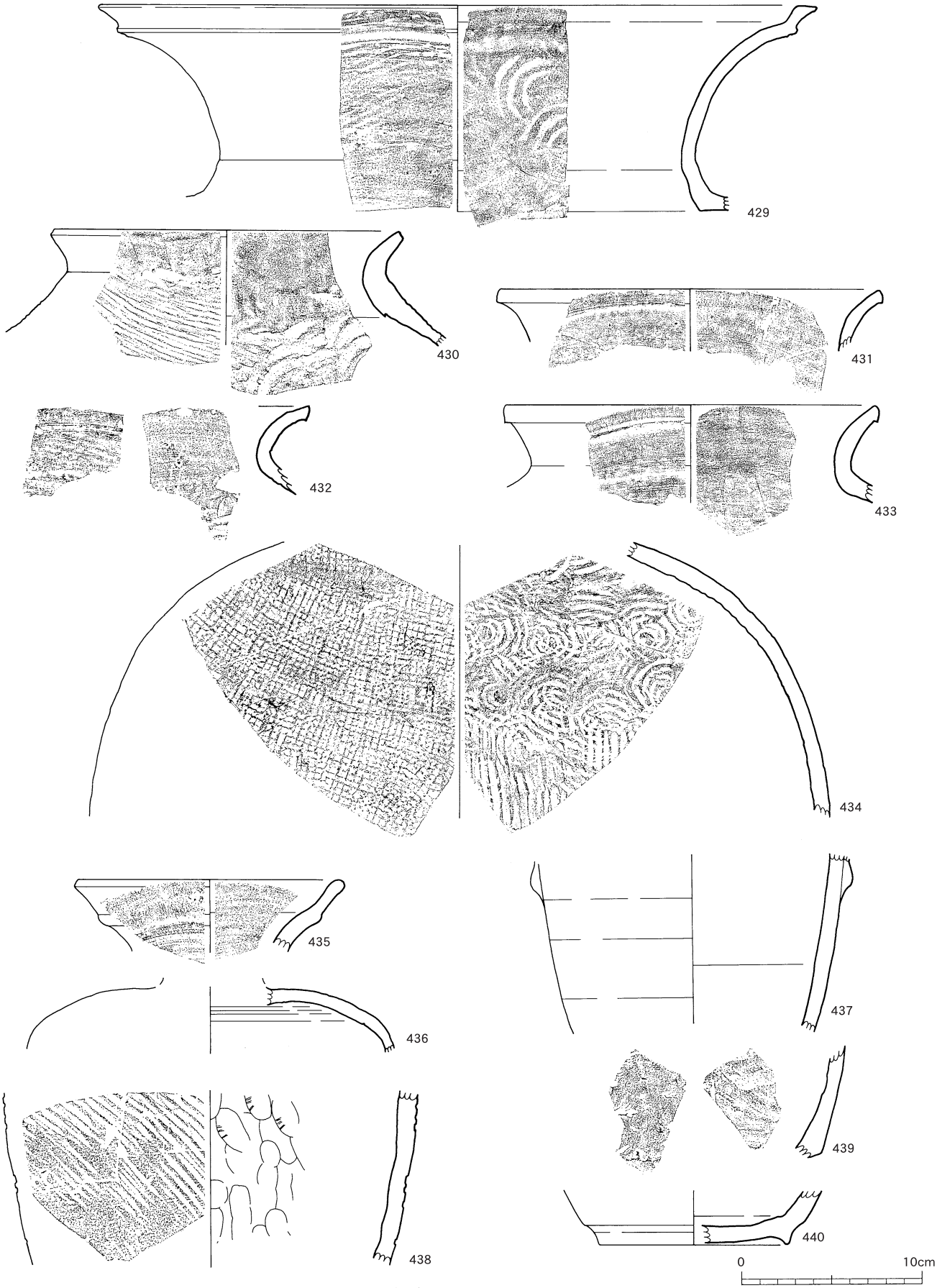
総数で10点が出土し，そのうち２点を図化した。397は，低い高台をもつ。398は，充実高台で，ヘラ切りの底部をもつ。

椀（第57図399～403）

総数で55点が出土し，そのうち５点を図化した。399は，体部と比較して見込みの厚みが薄い特徴をもつ。400は，



第58図　古代包含層出土遺物実測図（２）



第59図　古代包含層出土遺物実測図（３）

(S=1／3)

充実高台をもつ。401は，低い高台をもつ。402・403は，高台の脚部が外へ開く。402は見込みの厚みが膨らむ。403は高台脚部が体部の厚さと比較して薄い。

鉢（第57図404・405）

総数で７点が出土し，そのうち２点を図化した。404は片口の注ぎ口がある。405は内外面にハケ目が残る。

甕Ⅰ類（第57図406～409）

総数で12点が出土し，そのうち４点を図化した。406・407は，内面で鍵状に屈曲する口縁をもつ。408は，内面で屈曲し，大きく外反する口縁をもつ。409は，内面で屈曲し，小さく外反する口縁をもつ。

甕Ⅱ類（第57図410～第58図417）

総数で27点が出土し，そのうち８点を図化した。410・411は，胴部が膨らむ。412～414は，口縁部が如意状に開き胴部がおよそ直立する。415・416は小振りな甕である。417は，底部である。類は不明である。

甑（第58図418）

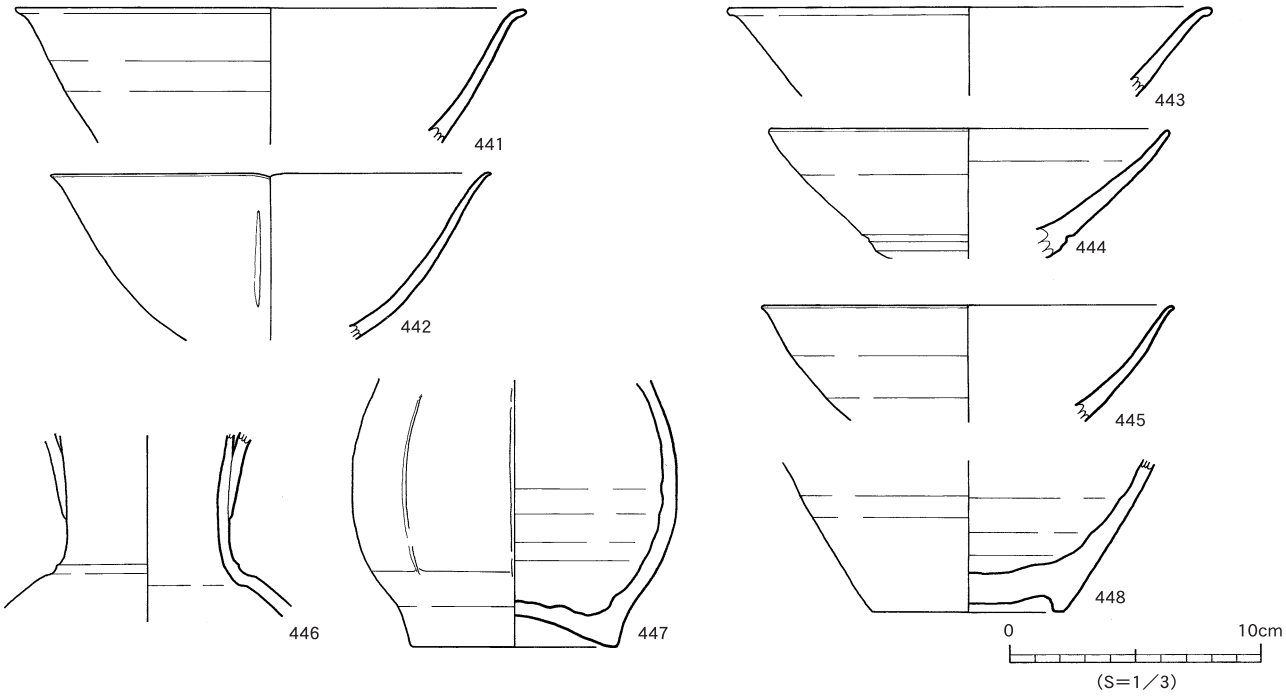
総数で２点が出土し，そのうち１点を図化した。下端の破片である。

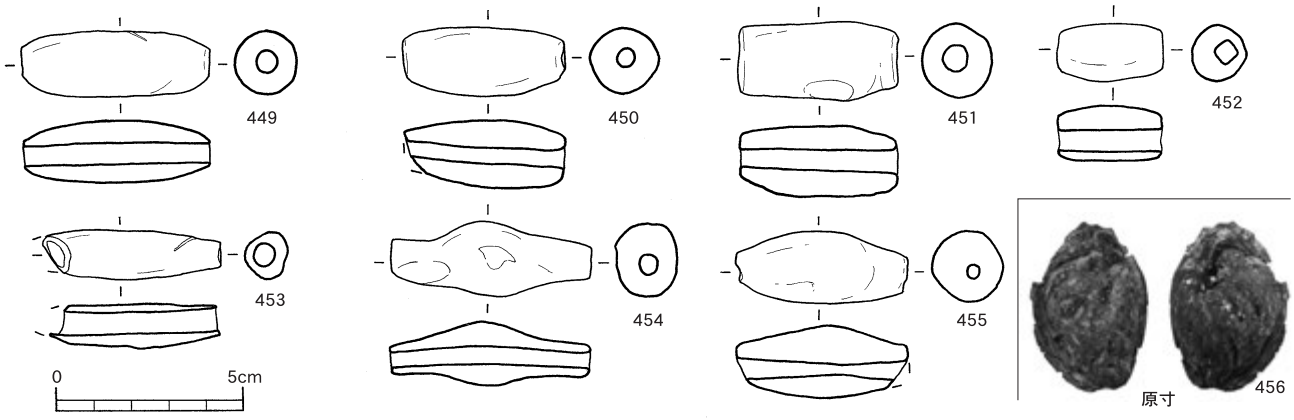
竈（第58図419）

総数で２点が出土し，そのうち１点を図化した。移動式竈の正面観で確認できる焚き口左側下端部の破片である。

イ　内黒土師器（第58図420～422）

総数で54点が出土し，そのうち３点を図化した。420は，見込みがやや膨れ，外に開く高台が薄手で高い。421は，見込みが扁平で，外に開く高台が厚く高い。422は，外に開く高台が厚く低い。





第60図　古代包含層出土遺物実測図（４）

ウ　須恵器（第58図423～第59図440）

坏（第58図423・424）

総数で３点が出土し，そのうち２点を図化した。423は，口唇部に向かうにつれて急に薄くなる口縁部である。424は胴部から底部にかけての破片で，平安時代の須恵器と思われる。

碗（第58図425）

総数で２点が出土し，そのうち１点を図化した。425は，Ｂ－７区の水田と思われる遺構埋土から出土した。平安時代の須恵器と思われる。

鉢（第58図426）

総数で２点が出土し，そのうち１点を図化した。426は，口唇部が小さく外反する。平安時代の須恵器の鉢である。

小型壺（第58図427・428）

総数で３点が出土し，そのうち２点を図化した。427は，Ｂ－７区で出土した底部である。428は，頸部破片である。いずれも平安時代の須恵器と思われる。

甕（第59図429～434）

総数で327点が出土し，そのうち６点を図化した。429～433は，口縁部破片である。434は，胴部上部の破片である。

壺（第59図435～440）

総数で126点が出土し，そのうち６点を図化した。435は，口縁部破片である。436は，肩部破片である。外面は粗く，タタキが確認できない。437・438は，胴部破片である。439・440は，底部破片である。

エ　青磁（第60図441～448）

総数で19点が出土し，そのうち８点を図化した。441～443は，越州窯Ⅰ類と呼ばれる碗である。442は，口唇部に浅い切れ込みと外面に条が見られる。破片の状況から，この切れ込みと条は４セットある輪花碗と思われる。444・445は，越州窯Ⅱ類と呼ばれる碗である。446～448は，壷である。446は，頸部肩部の破片で取っ手が確認できる。447・448は底部破片である。447は，胴部に条が確認できる。

オ　土錘（第60図449～455）

総数で75点が出土し，そのうち７点を図化した。449～452は，長さに長短あるが，中央と両端部の外径に差がなく均一で太い。また，449～451は，孔の断面形状が丸い。452は，孔の断面形状が正方形である。453は，孔の大きさと外径の差が小さく，華奢な作りである。454は，中央に比べ両端部の外径が小さい。455は，孔の両端部に比べ中央が細く窄まっている。

カ　炭化種子（第60図456）

１点出土した。自然科学分析の結果，該期の桃核であることがわかった。詳細は，第５章第４節に記載した。

表16　古代ピット計測表

遺構番号	区	長径（ｃｍ）	短径（ｃｍ）	深さ（ｃｍ）	床面標高（m）	遺構番号	区	長径（ｃｍ）	短径（ｃｍ）	深さ（ｃｍ）	床面標高（m）
1	Ｂ－6	41	－	35.0	18.004	40	Ｃ－4	21	－	25.0	17.989
2	Ｂ－6	40	－	89.0	17.532	41	Ｃ－4	17	－	31.0	17.679
3	Ｂ－6	21	－	19.0	18.012	42	Ｃ－4	26	－	50.0	17.657
4	Ｃ－6	20	－	19.0	18.184	43	Ｃ－4	24	－	20.0	17.986
5	Ｃ－6	26	－	25.0	17.992	44	Ｃ－4	25	－	26.0	17.833
6	Ｃ－6	30	－	36.0	17.897	45	Ｂ－3	30	28	47.1	17.081
7	Ｃ－6	21	－	25.0	17.957	46	Ｂ－3	40	38	9.0	17.468
8	Ｃ－6	29	－	30.0	18.014	47	Ｂ－3	26	25	9.0	17.470
9	Ｂ－5	36	－	49.0	17.711	48	Ｂ－3	43	39	11.0	17.385
10	Ｂ－5	32	－	56.0	17.646	49	Ｂ－3	35	32	41.2	17.068
11	Ｂ－5	22	－	30.0	17.941	50	Ｂ－3	30	28	12.4	17.370
12	Ｂ－5	20	－	15.0	18.087	51	Ｂ－3	30	26	16.0	17.325
13	Ｂ－4	15	14	10.2	17.565	52	Ｂ－3	20	19	5.5	17.415
14	Ｂ－4	19	16	5.2	17.628	53	Ｂ－3	25	22	6.1	17.415
15	Ｂ－4	17	14	36.7	17.310	54	Ｂ－3	20	16	5.3	17.425
16	Ｂ－4	33	21	38.0	17.302	55	Ｂ－3	24	21	12.5	17.317
17	Ｂ－4	16	15	8.0	17.590	56	Ｂ・Ｃ－3	28	25	5.8	17.388
18	Ｂ－4	24	19	13.5	17.530	57	Ｂ・Ｃ－3	25	23	9.2	17.376
19	Ｂ－4	20	18	12.8	17.540	58	Ｃ－3	34	29	14.0	17.340
20	Ｂ－4	29	27	9.3	17.555	59	Ｃ－3	20	19	11.4	17.376
21	Ｂ－4	22	20	10.9	17.541	60	Ｃ－3	25	－	32.0	17.506
22	Ｂ－4	16	13	29.1	17.355	61	Ｃ－3	24	－	32.0	17.465
23	Ｂ－4	22	18	7.3	17.572	62	Ｃ－3	20	－	36.0	17.502
24	Ｂ－4	17	15	8.8	17.542	63	Ｃ－3	22	－	64.4	17.146
25	Ｂ－4	30	28	15.4	17.468	64	Ｃ－3	15	－	19.0	17.600
26	Ｂ－4	28	26	10.0	17.540	65	Ｃ－3	27	24	39.0	17.065
27	Ｂ－4	28	26	7.8	17.512	66	Ｃ－3	19	18	9.5	17.365
28	Ｂ－4	31	29	8.0	17.480	67	Ｃ－3	33	29	23.9	17.227
29	Ｂ－4	37	30	72.7	16.888	68	Ｃ－3	28	25	13.8	17.336
30	Ｂ－4	24	23	14.0	17.405	69	Ｃ－3	28	25	10.1	17.374
31	Ｃ－4	20	19	6.0	17.660	70	Ｃ－3	23	21	27.6	17.198
32	Ｃ－4	29	25	12.0	17.575	71	Ｃ－3	30	28	51.0	16.962
33	Ｃ－4	21	18	4.5	17.660	72	Ｃ－3	24	23	28.4	17.190
34	Ｃ－4	25	19	12.2	17.538	73	Ｃ－3	19	17	21.2	17.260
35	Ｃ－4	20	19	9.0	17.555	74	Ｃ－3	24	24	53.1	16.944
36	Ｃ－4	25	24	12.6	17.505	75	Ｃ－3	31	26	48.2	17.004
37	Ｃ－4	23	20	17.0	17.552	76	Ｃ－3	28	27	40.8	17.040
38	Ｃ－4	23	21	15.2	17.572	77	Ｃ－3	34	34	18.0	17.258
39	Ｃ－4	25	20	15.0	17.572	78	Ｃ－3	29	27	32.5	17.247

表17　古代遺物観察表

土器

挿図	番号	区		層	取上番号	種別	器種	部位	法量(cm)				調整		色調		備考
									口径	底径	器高	胴径	外	内	外	内	
56	384	B	4		1号土坑	土師器	甕	口縁部	28.8	−	−	−	ナデ	ケズリ	にぶい赤褐色	橙色	
	385	C	4		3号土坑	須恵器	甕	口縁～胴部	14.1	−	−	32.2	格子目タタキ	同心円あて具	灰色	灰白色	
	386	C	3		4号土坑	土師器	坏	底部	−	6.2	−	−	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	
	387	C	3		4号土坑	土師器	坏	底部	−	6.4	−	−	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	
	388	C	3		4号土坑	土師器	埦	口縁～底部	12.6	6.0	5.6	−	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	
	389	C	3		4号土坑	土師器	埦	口縁～体部	13.2	−	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	
	390	C	3		4号土坑	土師器	埦	口縁～体部	−	−	−	−	ナデ	ナデ	灰白色	黄灰色	
	391	C	3		4号土坑	土師器	埦	底部	−	7.6	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙色	褐灰色	
	392	C	3		4号土坑	土師器	甕	口縁部	19.1	−	−	−	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	
	393	C	3		4号土坑	土師器	甕	口縁部	20.4	−	−	−	不明	不明	赤色	にぶい褐色	
	394	C	3		4号土坑	土師器	甕	口縁部	21.0	−	−	−	ナデ	ケズリ	明赤褐色	明赤褐色	
	395	C	3		5号土坑	土師器	坏	底部	−	6.0	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	
	396	C	3		5号土坑	須恵器	甕	胴部	−	−	−	−	格子目タタキ	平行・同心円あて具	黄灰色	灰色	
57	397	B	4	Ⅳb	2063	土師器	坏	口縁～底部	10.8	4.2	3.8	−	ナデ	ナデ	灰白色	浅黄色	
	398	B	3	Ⅳb	2726	土師器	坏	口縁～底部	10.4	5.8	4.0	−	ナデ	ナデ	浅黄色	浅黄色	
	399	B	2	Ⅳb	一括	土師器	埦	底部	−	8.2	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	
	400	B	3	Ⅳa	一括	土師器	埦	口縁～底部	11.0	6.4	5.0	−	ナデ	ナデ	橙／灰白色	橙／灰白色	
	401	D	3	Ⅳa	389	土師器	埦	底部	−	7.3	−	−	ナデ	ナデ	橙色	橙色	
	402	A	12	Ⅳa	一括	土師器	埦	口縁～底部	12.8	7.0	6.2	−	ナデ	ナデ	橙色	橙色	
	403	B	3	Ⅳb	3089	土師器	埦	口縁～底部	14.7	8.4	7.4	−	ナデ	ナデ	黄橙色	にぶい黄橙色	
	404	C	4	Ⅳa	一括	土師器	鉢	口縁部	16.2	−	−	−	ナデ／ハケ目	ナデ／ケズリ	明赤褐色	にぶい橙色	片口
	405	C	4	Ⅳ	337	土師器	鉢	口縁～胴部	21.0	−	−	−	ヘラナデ／ハケ目	ヘラナデ／ハケ目	明赤褐色	橙色	
	406	B	5	Ⅳb	2474	土師器	甕	口縁部	23.8	−	−	−	ナデ	不明	橙色	橙色	
	407	C	3	Ⅳb	2180	土師器	甕	口縁部	17.8	−	−	−	ナデ	ケズリ	橙色	橙色	
	408	C	9	Ⅰ	一括	土師器	甕	口縁部	18.4	−	−	−	ナデ	ケズリ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
	409	B	3	Ⅳa	一括	土師器	甕	口縁部	18.0	−	−	−	不明	不明	橙色	橙色	
	410	B	3	Ⅳb	3007	土師器	甕	口縁部	29.2	−	−	−	ナデ	ケズリ	オリーブ褐色	にぶい黄色	
		B	3	Ⅳb	3015												
	411	B	3	Ⅳb	3006	土師器	甕	口縁部	28.6	−	−	−	ナデ	ケズリ	橙色	橙色	
	412	B	14	Ⅴ	7471	土師器	甕	口縁部	22.2	−	−	−	ナデ／ハケ目	ナデ／ケズリ	橙色	橙色	
	413	D	6	Ⅳa	1676	土師器	甕	口縁部	27.1	−	−	−	ナデ	ケズリ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
	414	B	12	Ⅴ	6688	土師器	甕	口縁部	−	−	−	−	ハケ目	ケズリ	明黄褐色	明黄褐色	
	415	B	3	Ⅳa	一括	土師器	甕	口縁部	13.0	−	−	−	ナデ	ケズリ	黒褐色	黒褐色	
	416	B	3	Ⅳa	一括	土師器	甕	口縁部	13.4	−	−	−	ナデ	ケズリ	橙色	淡橙色	
58	417	a	17	Ⅴ	7832	土師器	甕	底部	−	6.2	−	−	ハケ目	ナデ	橙色	橙色	
	418	B	6	Ⅳa	一括	土師器	甑	底部	−	−	−	−	ナデ	ケズリ	橙色	橙色	
	419	D	3	Ⅳ	一括	土師器	竈	焚き口部	−	−	−	−	ハケ目	ヘラナデ	橙色	橙色	
	420			Ⅰ	一括	内黒土師器	埦	口縁～底部	14.6	8.0	7.8	−	ナデ	ナデ	浅黄橙色	黒褐色	
	421	B	3	Ⅳb	3087	内黒土師器	埦	体～底部	−	9.3	−	−	ナデ	ナデ	灰白色	黒色	
	422	C	3	Ⅳa	一括	内黒土師器	埦	底部	7.0	−	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙色	黒褐色	
	423	B	2	Ⅳb	一括	須恵器	坏	口縁部	−	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰色	
	424	D	6	Ⅳb	一括	須恵器	坏	底部	−	8.2	−	−	ナデ	ナデ	浅黄色	灰黄色	
	425	B	7	Ⅳb	一括	須恵器	碗	底部	−	6.2	−	−	ナデ	ナデ	灰色	オリーブ黄色	
	426	B	2	Ⅳ	一括	須恵器	鉢	口縁部	26.8	−	−	−	ナデ	ナデ	灰黄色	にぶい橙色	
	427	B	7	Ⅳa	一括	須恵器	小型壺	胴～底部	−	7.8	−	9.4	ナデ	ナデ	黒褐色	青灰色	
	428	B	2	Ⅳa	一括	須恵器	小型壺	頸部	−	−	−	−	ナデ	不明	青灰色	青灰色	
59	429	B	2	Ⅳ	一括	須恵器	甕	口縁～頸部	40.0	−	−	−	平行タタキ	同心円あて具	灰白色	灰色	
		B	4	Ⅳa	一括												
	430			Ⅵ	10027	須恵器	甕	口縁～頸部	19.6	−	−	−	平行タタキ	同心円あて具	黄色	灰褐色	
	431	B	2	Ⅳb	2912	須恵器	甕	口縁部	21.4	−	−	−	ナデ	ナデ	黒褐色	灰白色	
		B	2	Ⅳb	一括												
	432	B	2	Ⅳ	一括	須恵器	甕	口縁部	−	−	−	−	格子目タタキ	同心円あて具	灰白色	灰白／赤褐色	
	433	B	5	Ⅳa	一括	須恵器	甕	口縁～頸部	20.8	−	−	−	ナデ	ナデ	灰オリーブ色	灰黄色	
	434	B	4	Ⅳ	339	須恵器	甕	胴部	−	−	−	41.0	格子目タタキ	同心円あて具	灰黄色	浅黄色	
		C	3	Ⅳb	1798												
	435	B	3	Ⅳb	3138	須恵器	壺	口縁部	15.0	−	−	−	ナデ	ナデ	灰白色	にぶい黄橙色	
		C	3	Ⅳa	一括												
	436	B	3	Ⅳb	3098	須恵器	壺	肩部	−	−	−	−	不明	ナデ	オリーブ黄色	黄灰色	
	437	D	8	Ⅰ	一括	須恵器	壺	胴部	−	−	−	17.9	ナデ	ナデ	にぶい黄色	灰白色	
	438	C	3	Ⅳa	一括	須恵器	壺	胴部	−	−	−	23.0	平行タタキ	指頭圧痕	灰白／オリーブ黒色	にぶい褐色	
		C	4	Ⅳ	一括												
		C	4	Ⅳa	一括												
	439	C	4	Ⅳa	一括	須恵器	壺	底部	−	−	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐色	灰褐色	
	440	B	6	Ⅳa	121	須恵器	壺	底部	−	10.4	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙色	灰白色	
60	441				3087	青磁	碗	口縁～体部	20.1	−	−	−	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	越州窯Ⅰ無紋
	442	B	2	Ⅳb	2869	青磁	碗	口縁～体部	17.4	−	−	−	ナデ	ナデ	灰黄色	灰黄色	越州窯Ⅰ-2b輪花径
		B	2	Ⅳb	一括												
		B	3	Ⅳb	一括												
	443	B	3	Ⅳb	2739	青磁	碗	口縁～体部	19.2	−	−	−	ナデ	ナデ	オリーブ黄色	オリーブ黄色	越州窯Ⅰ無紋
		B	3	Ⅳb	2795												
	444	B	3	Ⅳb	一括	青磁	碗	口縁～体部	16.0	−	−	−	ナデ	ナデ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	越州窯Ⅱ体部下位が露胎
		B	5	Ⅳa	一括												
	445	B	4	Ⅳb	2034	青磁	碗	口縁～体部	16.2	−	−	−	ナデ	ナデ	灰オリーブ色	にぶい黄色	越州窯Ⅱ
		C	3	Ⅳb	2243												
	446	B	3	Ⅳb	2709	青磁	壺	頸部	−	−	−	−	ナデ	ナデ	浅黄色	にぶい橙色	C期の四耳壺？
		B	2	Ⅳa	一括												
		B	3	Ⅳa	一括												
	447	B	3	Ⅳb	1921	青磁	壺	胴～底部	−	8.2	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄色	にぶい橙色	C期の四耳壺
		C	3	Ⅳb	2251												
		B	3	Ⅳb	2587												
		B	3	Ⅳb	2613												
		C	3	Ⅳb	2849												
		B	3	Ⅳb	2975												
		B	2	Ⅳa	一括												
		B	3	Ⅳa	一括												
	448	D	7		一括	青磁	壺	底部	−	7.4	−	−	ナデ	ナデ	灰黄色	灰白色	越州窯

土製品

挿図	番号	区		層	取上番号	器種	外径 (mm)	内径 (mm)	長さ (mm)	胎土						色調	焼成	備考
										石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒			
60	449	B	3	Ⅳa	一括	土錘	16.85	4.80	49.95	○	○			○	○	浅黄色	不良	
	450	B	3	Ⅳb	2984	土錘	18.80	4.45	42.45	○						灰黄色	良	
	451	C	3	Ⅳa	一括	土錘	20.05	6.05	42.10	○	○					灰白色	良	
	452	C	4	Ⅳa	一括	土錘	15.45	4.85	27.00	○	○	○		○	○	にぶい橙色		孔断面が正方形
	453	B	4	Ⅳa	一括	土錘	12.90	4.70	(46.90)	○						淡黄色		
	454	B	5	Ⅳb	1659	土錘	20.10	4.40	53.15	○	○					黄灰色	良	
	455	B	3	Ⅳb	1942	土錘	19.65	5.40	45.65	○	○	○		○		黄灰／灰黄色		孔両端内径が大

炭化種子

挿図	番号	区		層	取上番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
60	456	B	3	Ⅳa		22.60	16.70	13.00

6　中世から近世の調査成果

⑴　概要

主な調査範囲は，平成19年度に調査を行った自然堤防の後背地部分である。Ⅳ層が該期の遺物包含層である。礫集積４基を検出した。ただし，Ⅳ層下位において古代の遺構・遺物が該期の遺物と混在した。また，平成21年度の調査範囲において遺物包含層は確認できなかったが，該期相当と考えられる礫集積３基を検出した。遺物は，土器，陶磁器，石器，石製品が出土した。

⑵　遺構（第62図）

ア　１号礫集積

自然堤防上のＣ－11区Ⅴ層で検出した。長さ約85㎝，幅約30㎝の範囲に42個の角礫が積まれ，高さ約25㎝になる。角礫の重さが最大で1900ｇであった。石材は，安山岩が最も多く，砂岩が次に続き，少ないが硬質安山岩が３個含まれる。須恵器破片が礫に紛れて出土している。

イ　２号礫集積

自然堤防上のＤ－11区Ⅴ層で検出した。長さ約１ｍ，幅約35㎝の範囲に35個の角礫が積まれ，高さ約35㎝になる。角礫の重さが最大で約24㎏であった。石材は，安山岩が最も多く，砂岩が次に続き，少ないが凝灰岩，頁岩，滑石が含まれる。土器底部が礫に紛れて出土している。

ウ　３号礫集積

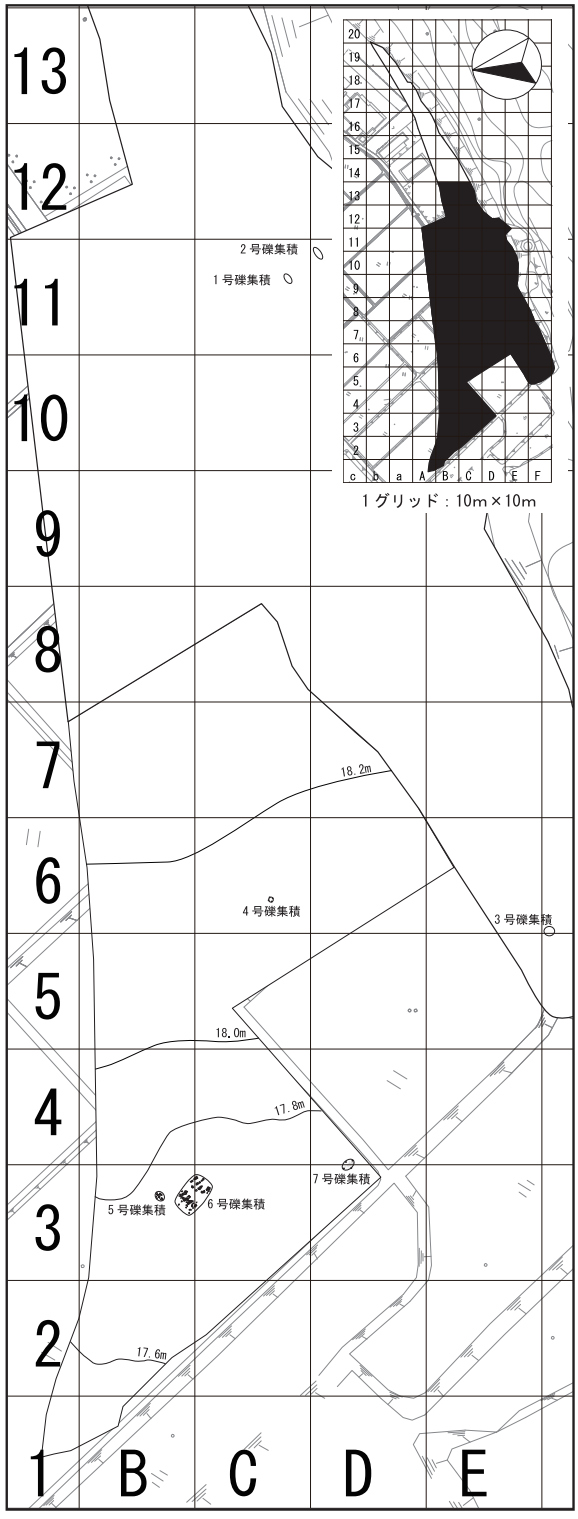
自然堤防上のＦ－５・６区Ⅴ層で検出した。長径70㎝，短径50㎝のほぼ円形に扁平な礫を敷き詰める状態であった。礫の数は17を数えたが，明らかに破断しているために数が増えてしまっている。最初は６個程度であったと思われる。石材は，安山岩が最も多く，砂岩が次に続く。プランの検出を試みたが確認できなかった。礫の広がりは他の遺構と異なり，上面が平坦である。上部に重量物を安定しておくことができる状況であったと考えられる。

エ　４号礫集積

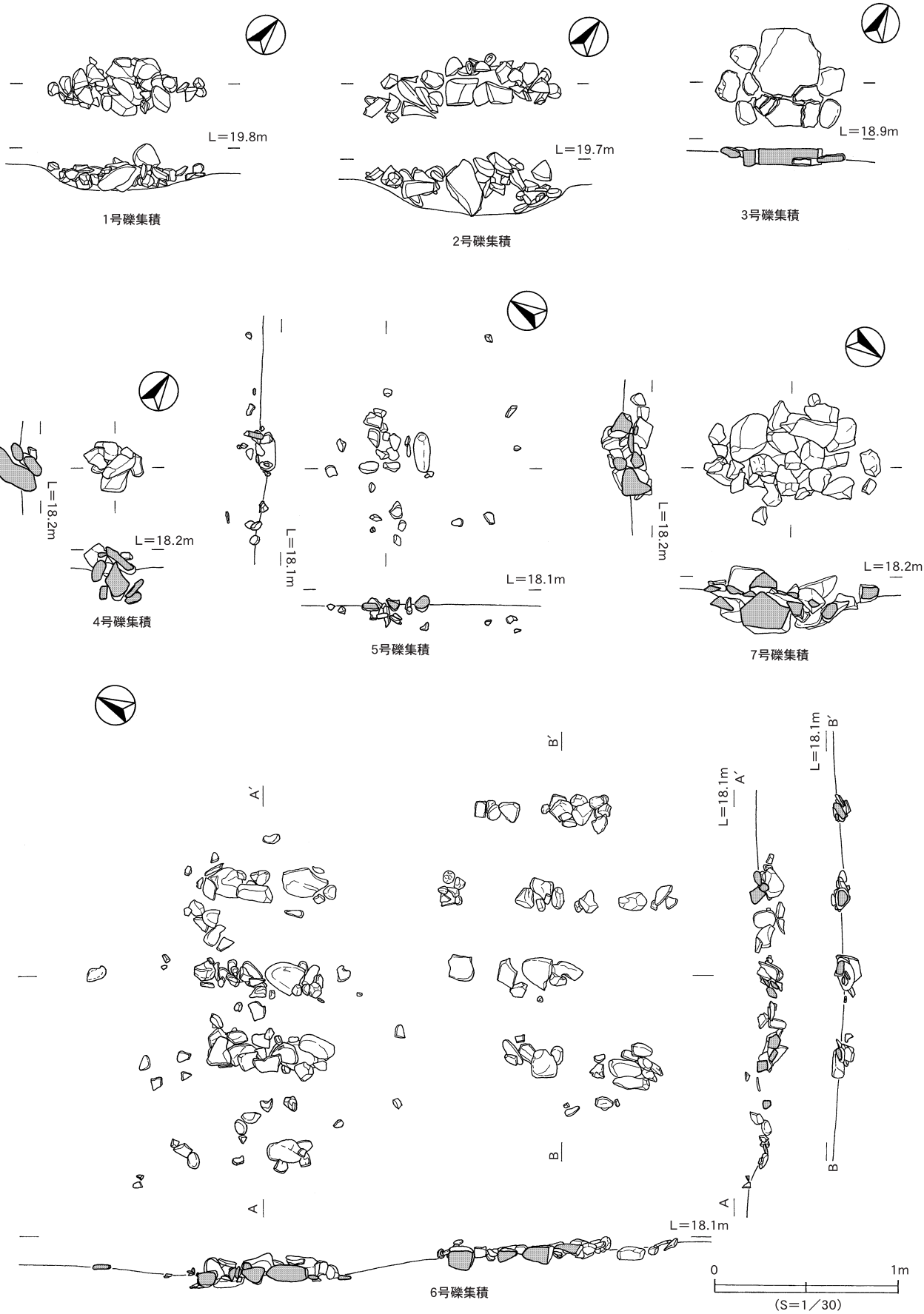
自然堤防の後背地でＣ－６区Ⅳａ層で検出した。縦横約30㎝前後の範囲に10個の角礫が積み重なり，高さ約30㎝になる。角礫の重さが最大で約5.8㎏であった。石材は，砂岩が最も多く，礫岩・頁岩が同数であった。

オ　５号礫集積

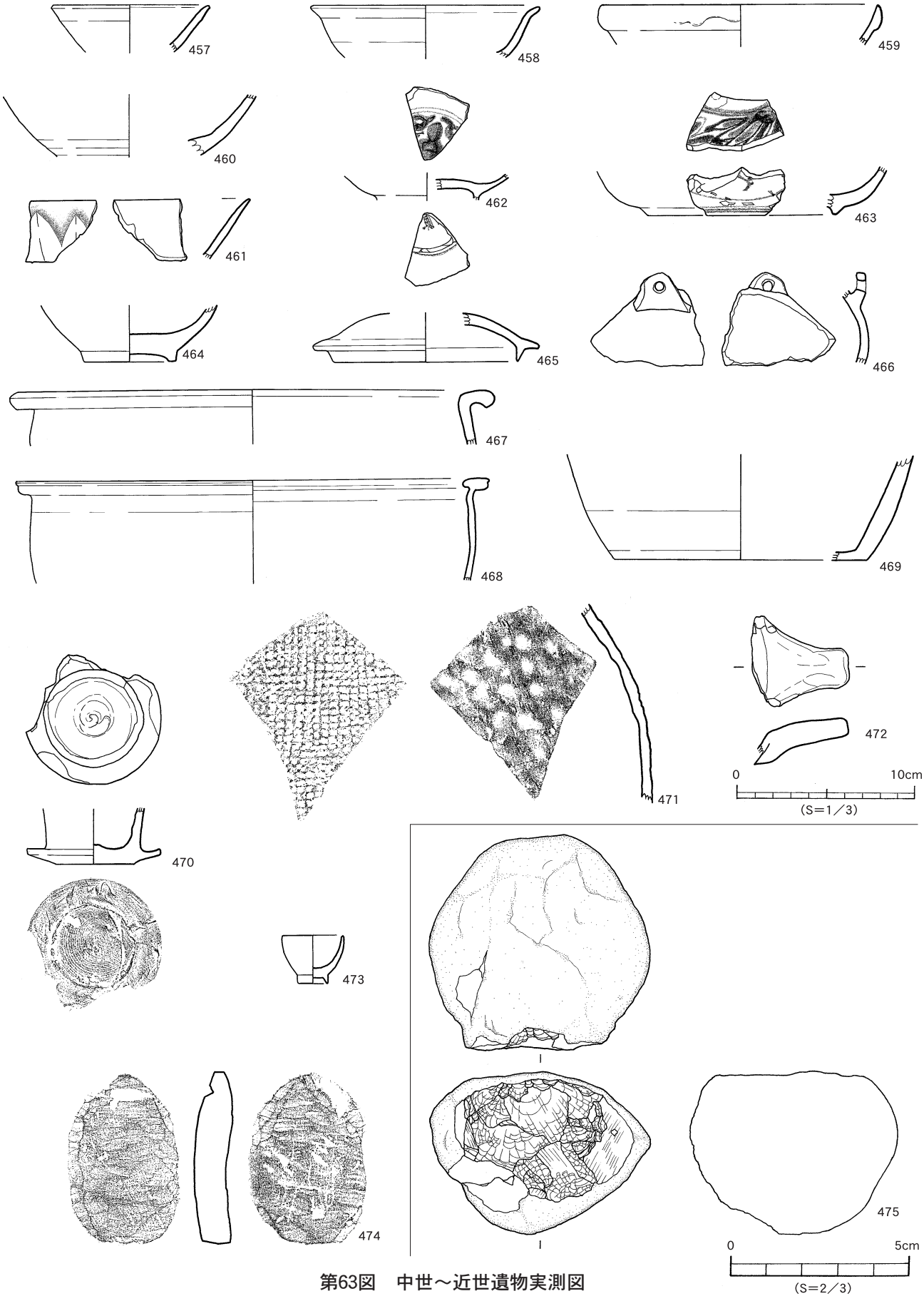
自然堤防の後背地でＢ－３区Ⅳａ層で検出した。縦横約１ｍ前後の範囲に29個の角礫が散在し，最も礫が集中しているところで高さ約20㎝になる。角礫の重さが最大で820ｇであった。石材は頁岩が１個で残りはすべて砂岩であった。須恵器破片が礫に紛れて出土している。



第61図　中世～近世遺構配置図



第62図　中世～近世遺構実測図



第63図　中世～近世遺物実測図

カ　6号礫集積

自然堤防の後背地でＢ・Ｃ－３区Ⅳａ層で検出した。縦横約３ｍの傾斜がほとんどない地形の範囲に，およそ南北方向に５条の角礫の並びを確認した。角礫の総数は159個，1個の重さが最大で約4.3㎏であった。角礫が集中し最も高さがあるところで約20㎝を測る。石材は，砂岩が最も多く，頁岩・礫岩が続く。また，角礫の表面が赤化しているものが多い。他にも土師器，須恵器の破片炭化物が角礫に紛れて出土した。

この遺構は，該期の遺構の中で最も規模が大きく，特徴的な要素を多く含んでいる。そのため，遺構の使われた時代を特定することを目的に，遺構内から出土した炭化物の^{14}Ｃ年代測定を実施した。その結果，16世紀と17世紀頃の範囲が示された。なお，分析結果の詳細については，第５章自然科学分析を参照されたい。

キ　7号礫集積

自然堤防の後背地でＤ－３・４区Ⅳａ層で検出した。長さ95㎝，幅70㎝の範囲に40個の角礫が積まれ，高さ約45㎝になる。角礫の重さが最大で約８㎏を越える。石材は，砂岩の占める割合が９割で，残りは頁岩，安山岩，礫岩が見られた。

⑶　遺物

ア　白磁（第63図457～460）

総数で30点出土し，そのうち４点を図化した。457は，小型の皿で口唇部を尖らせ,口禿げになっている。458は，外反する口縁部をもつ皿である。時期は16世紀後半頃と考えられる。459は，玉縁口縁の特徴をもつ碗である。時期は11世紀後半～12世紀前半頃と考えられる。460は，459の口縁特徴をもつ碗の胴部破片である。

イ　青磁（第63図461）

総数で26点出土し，そのうち１点を図化した。461は，鎬連弁の文様をもつ碗の口縁部である。時期は14・15世紀頃と考えられる。

ウ　青花・染付（第63図462・463）

総数で57点出土し，そのうち２点を図化した。462は，器形が碗で，見込みが脹れる饅頭心の青花である。小野分類によるＥ類に属し，時期は16世紀後半と考えられている。463は，肥前系の皿で，時期は18世紀後半頃と考えられている。

エ　陶器（第63図464～470）

総数で107点出土し，そのうち７点を図化した。464は，蛇の目釉剥ぎがある龍門寺系の丸碗である。465は，土瓶の蓋である。466は，苗代川系の土瓶の胴部片で，時期は18世紀後半～19世紀と考えられている。467は小壷の口縁で，468は片口の注ぎ口のある甕の口縁である。469は甕の底部である。470は，灯明皿受台である。

オ　須恵質土器（第63図471）

総数で８点出土し，そのうち１点を図化した。中世の甕の胴部片である。

カ　土師質土器（第63図472）

総数で６点出土し、そのうち１点を図化した。焙烙の把手である。

キ　白磁の小坏（第63図473）

１点のみ出土した。肥前系の小坏で近世以降の新しいものと思われる。

ク　石製品（第63図474）

総数で43点出土し，そのうち１点を図化した。滑石製の舟形石製品と考えられる。石鍋を転用したもので右側に口唇部が確認できる。

ケ　火打ち石（第63図475）

総数で３点出土し，そのうち１点を図化した。円礫の一端を大きく割り，割れ口の端部一か所に火打ち金を当てていることが形状の観察からわかる。石材は，水晶と考えられる。

表18　中世～近世遺物観察表

陶磁器等

挿図	番号	区		層	取上番号	種別	分類	器種	産地	法量（cm） 口径	底径	器高	胴径	胎土の色調	釉薬の種類／色調	施釉部位	時期	備考
63	457	B	7	Ⅳａ	一括	白磁	皿		－	8.8	－	－	－	灰白	透明釉／灰白	口唇部無釉	13Ｃ後半～14Ｃ前半	口禿げ
	458	B	3	Ⅳ	一括	白磁	皿		－	12.7	－	－	－	灰白	透明釉／灰白	残存部全面施釉	16Ｃ後半	
	459	C	4	Ⅳａ	一括	白磁	碗		－	15.8	－	－	－	灰白	透明釉／灰白	残存部全面施釉	11Ｃ後半～12Ｃ前半	
	460	C	3	Ⅳａ	一括	白磁	碗		－	－	－	－	－	灰白	透明釉／灰白	外面腰部以下無釉	11Ｃ後半～12Ｃ前半	
	461	B	4	Ⅳ	一括	青磁	碗	碗	龍泉窯系	－	－	－	－	灰黄	青磁釉／緑灰	残存部全面施釉	14・15Ｃ	鎬連弁
	462	D	6	Ⅳ	遺構26一括	青花	碗		景徳鎮窯系	－	5.6	－	－	灰白	透明釉／灰白	畳付釉剥ぎ	16Ｃ後半	饅頭心
	463	C	8	Ⅴ	3059	染付	皿		肥前系	－	10.6	－	－	灰白	透明釉／灰白	畳付釉剥ぎ	18Ｃ後半	
	464	B	8	Ⅳａ	一括	陶器	碗	丸碗	龍門寺系	－	5.1	－	－	橙	鉄釉／黒褐	蛇目釉剥ぎ畳付から高台内定面無釉	18Ｃ後半	
	465	E	7		一括	陶器	蓋	土瓶蓋	苗代川系	庇径：	12.6	－	－	赤褐	鉄釉／極暗赤褐	上面施釉色	18Ｃ後半～19Ｃ	
	466	D	6	Ⅳ	遺構26一括	陶器	水注	土瓶	苗代川系	－	－	－	－	明赤褐	鉄釉／赤褐	残存部全面施釉	18Ｃ後半～19Ｃ	
	467	BC	7	Ⅳ	水田跡一括	陶器	壷	小壷	苗代川系	27.0	－	－	－	にぶい橙	鉄釉／暗赤褐	口唇部釉剥ぎ	18Ｃ後半	
	468	C	3	Ⅳａ	一括	陶器	鉢	片口	苗代川系	26.4	－	－	－	赤灰	鉄釉／灰黄褐	口唇部釉剥ぎ	17Ｃ後半	
	469	C	8	Ⅴ	3060	陶器	甕		苗代川系	－	14.0	－	－	褐灰	鉄釉／黒褐	不明	18Ｃ後半	
	470	D	7	Ⅰ	一括	陶器	灯明具	灯明皿受台	龍門寺系	－	7.4	－	－	明赤褐	鉄釉／灰オリーブ	外底面無釉	18Ｃ後半	
	471	C	3	Ⅳｂ	2522	須恵器	甕		熊本荒尾	－	－	－	－	灰白	灰白		13Ｃ	内面ケズリ
	472	BC	8	Ⅳａ	一括	土師器	土師質土器	焙烙		－	－	－	－	にぶい黄橙	浅黄橙		15Ｃ	
	473	B	7	Ⅳａ	一括	白磁		小坏	肥前系	3.5	1.8	2.8	－	灰白	透明釉／白	畳付釉剥ぎ	近世以降	

石製品

挿図	番号	出土区		層位	取上番号	器種	石材Ⅰ	石材Ⅱ	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（ｇ）	備考
63	474	B	3	Ⅳｂ	2995	舟形石製品	滑石		9.58	6.27	2.04	213.00	
	475	D	3	Ⅳａ	395	火打ち石	瑪瑙	水晶	5.98	5.98	4.61	191.00	

7　近代の調査成果

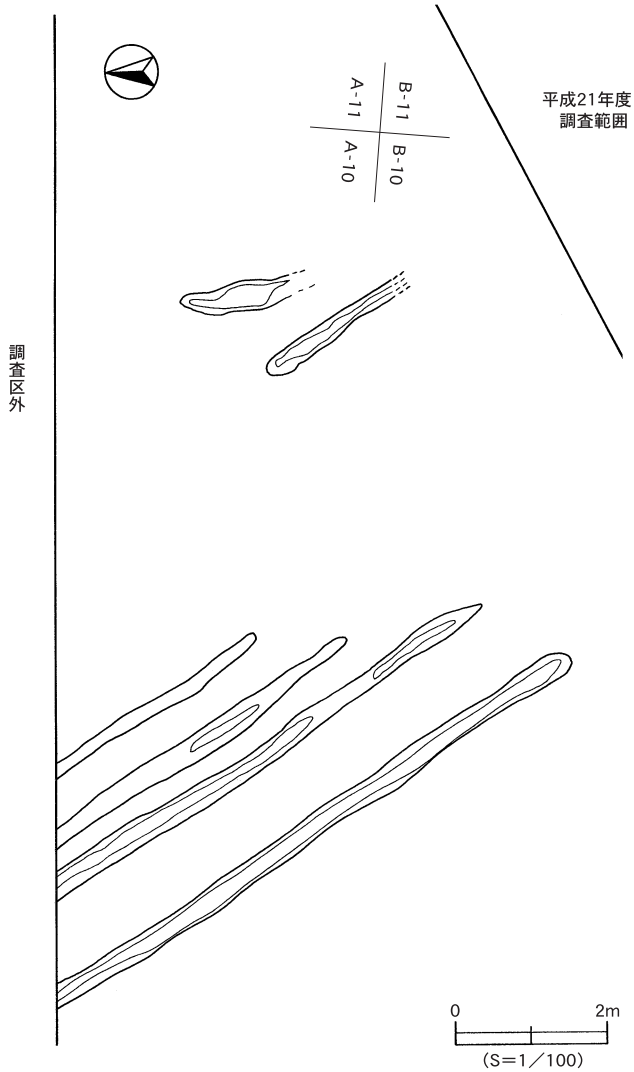
⑴　概要

調査範囲は平成19年度に調査を行った自然堤防の後背地部分である。生活面は耕作等によってほとんど残存していない。遺物も表土から出土しているだけで，該期のみを包含する地層はない。遺構は表土直下のⅣ及びⅤ層で検出した。居住に伴うような遺構等は検出できなかったが，耕作等での土地利用がうかがわれる畝状遺構や水田跡などの遺構を検出できた。各遺構の配置は第67図のとおりである。

⑵　遺構

ア　畝状遺構（第64図）

Ａ・Ｂ－10区及びＡ－９区のⅤ層で検出した。埋土は灰色土のⅢ層である。６つの畝間状の掘り込みが幅約７ｍにわたり，最長約８ｍから最短約1.5ｍで確認した。各畝間の伸びる方向は，およそ東西方向である。埋土を掘り下げたところ，いずれの遺構も底面が不安定で硬化面はなく，凹凸が激しい状況であった。底面から検出面までの高さが著しく低いことから，後世の耕作等によって遺構上部は削平されていると思われる。遺物の出土は，土器の小片が数点のみで，特記するものはない。また，検出面と同じレベルの一部分においてマンガン分を含む水田基盤の広がりを確認した。



第64図　近代畝状遺構実測図

イ　水田跡（第67図）

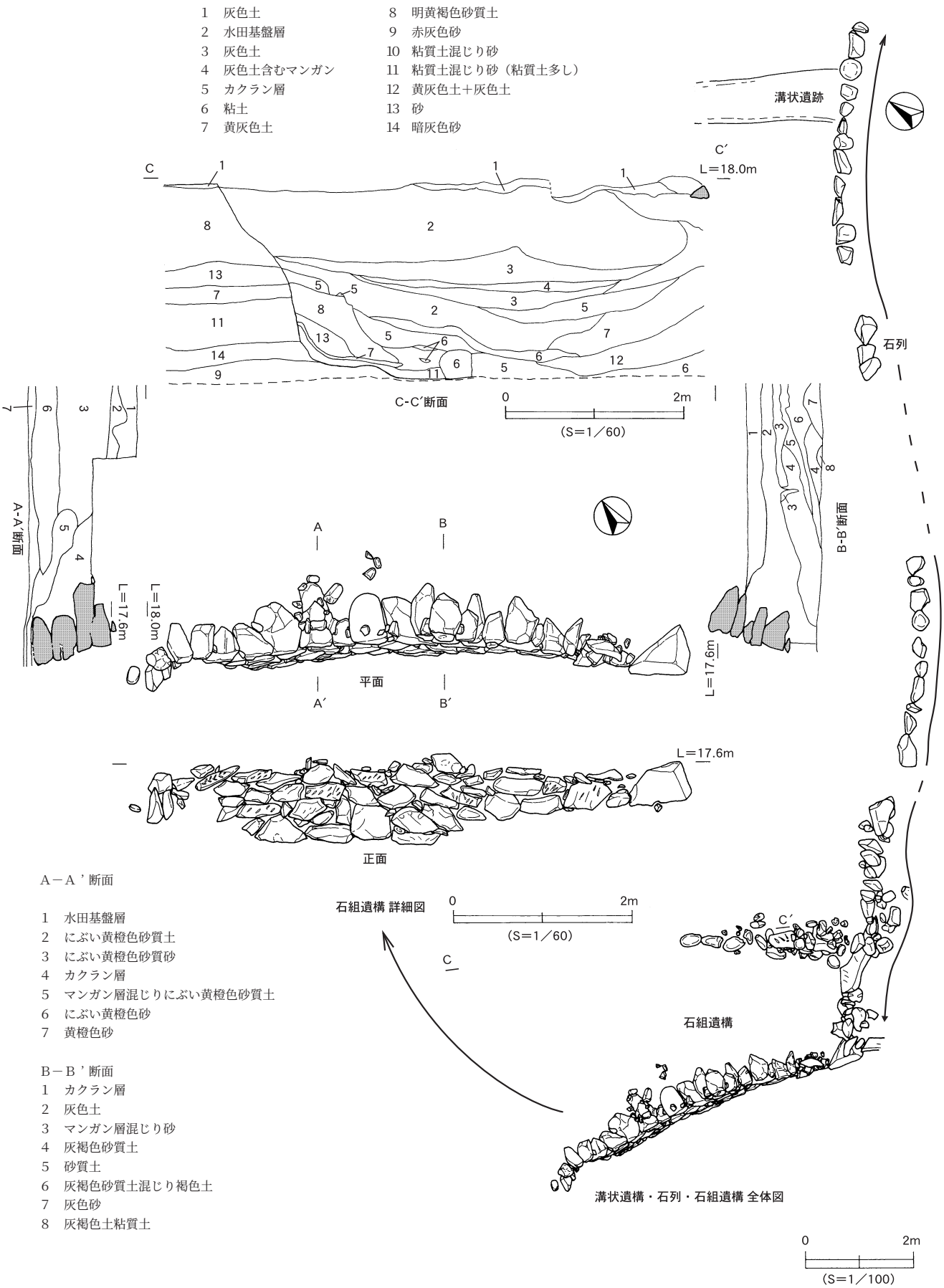
Ｂ・Ｃ－７・８区Ⅴ層で検出した。埋土は灰色土のⅢ層である。埋土は，若干の水分を含み粒度が細かく均一で粘質が強い。プランはおよそ東西方向に15ｍ，南北方向に8.5ｍを測る。プランの南端には後世の耕作等によって削平されたと思われる段差があり，調査前から確認していた。削平される以前は，おそらく長方形の遺構であったと思われる。ベルトを残して掘り下げると埋土内に埋土とは異なる土壌がブロック状に混在していることが明らかになった。また，底面近くには，マンガン分の多く含むと思われる基盤が安定して形成しているのを確認した。これらのことからこの遺構は水田跡と判断した。また，北端は，レベルが南端に比べ若干高く，拳より大きめの円礫が北端近くに散在していた。これらの円礫は，おそらく北端に沿って並べてあったと思われる。遺構内からは若干の遺物が出土したが，縄文時代から近代のものが混在していた。

ウ　溝状遺構（第65図）

Ｃ－８区Ⅳ層で検出した。この遺構は，埋土上に石列が載っている状況にあり石列が作られる以前に存在していた遺構である。しかし，無色透明のガラス瓶の破片が出土した近接する畝間埋土と同じ色調の埋土であることから畝間と同時期で，なおかつ新しい時代の遺構と判断し，近代の調査に掲載した。

エ　石列・石組遺構（第65図）

Ｃ－８区，Ｄ－６・７区Ⅳ層において検出した。Ｃ－８区からＤ－７区にかけての約18ｍの石列部分とＤ－６区の幅約７ｍ，高さ約1.6ｍの石組の部分で構成される遺構である。石列は，川内川の自然堤防とその後背地の境部分に沿うように並び，1つの石の大きさは，大きいもので50㎝を越える。石組は，石列より川内川の下流方向に位置し，地形的に石列の位置から石組の位置へ緩やかに傾斜しているところに立地する。石組を構成している石のいくつかには鑿痕が確認できる。ただし，石組みの技法には規則性は見られず，野面積みに近い。石組の最下端は，中心部が深く，左右両端が浅い。最下端が水平になっていない石組は，構築物として不自然な印象を受ける。石組の背後には，およそこぶし大の円礫が入れ



A－A’断面

1 水田基盤層
2 にぶい黄橙色砂質土
3 にぶい黄橙色砂質砂
4 カクラン層
5 マンガン層混じりにぶい黄橙色砂質土
6 にぶい黄橙色砂
7 黄橙色砂

B－B’断面
1 カクラン層
2 灰色土
3 マンガン層混じり砂
4 灰褐色砂質土
5 砂質土
6 灰褐色砂質土混じり褐色土
7 灰色砂
8 灰褐色土粘質土

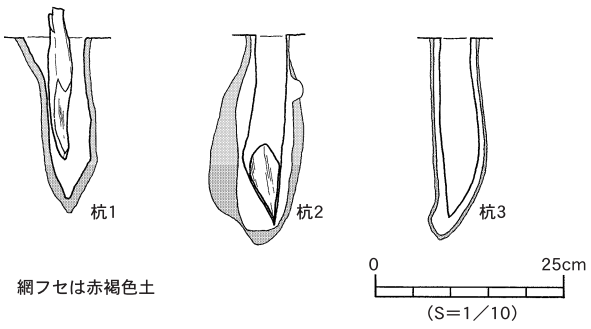
第65図　近代石組遺構実測図

られている状況を確認した。これらは，水分を含んだ土砂によって石組に働く圧力を弱め，石組の崩壊を防ぐために入れた裏込め石と思われる。さらに背後の土層を確認したところ石組の正面に対応する位置に不安定な地層が断面で確認できた。これらのことを総合的に考えると，この遺構は応急的な土木工事の手法によって構築された石組と判断した。なお，Ｃ－８区の石列部分の周辺から青色のガラス瓶破片が出土し，溝状遺構との関係から新しい時代の遺構と判断し，近代の調査に掲載した。

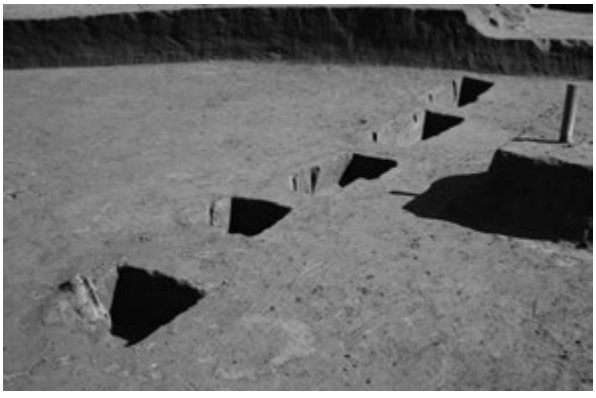
オ　杭痕（第66図）

表土剥ぎ直後に検出し，最下部はⅣ・Ⅴ層上面に達していた。また，時代を示す遺物や他の遺構との関連が認められないことから，杭を打たれた時代の特定が困難であるため近代の調査に掲載した。

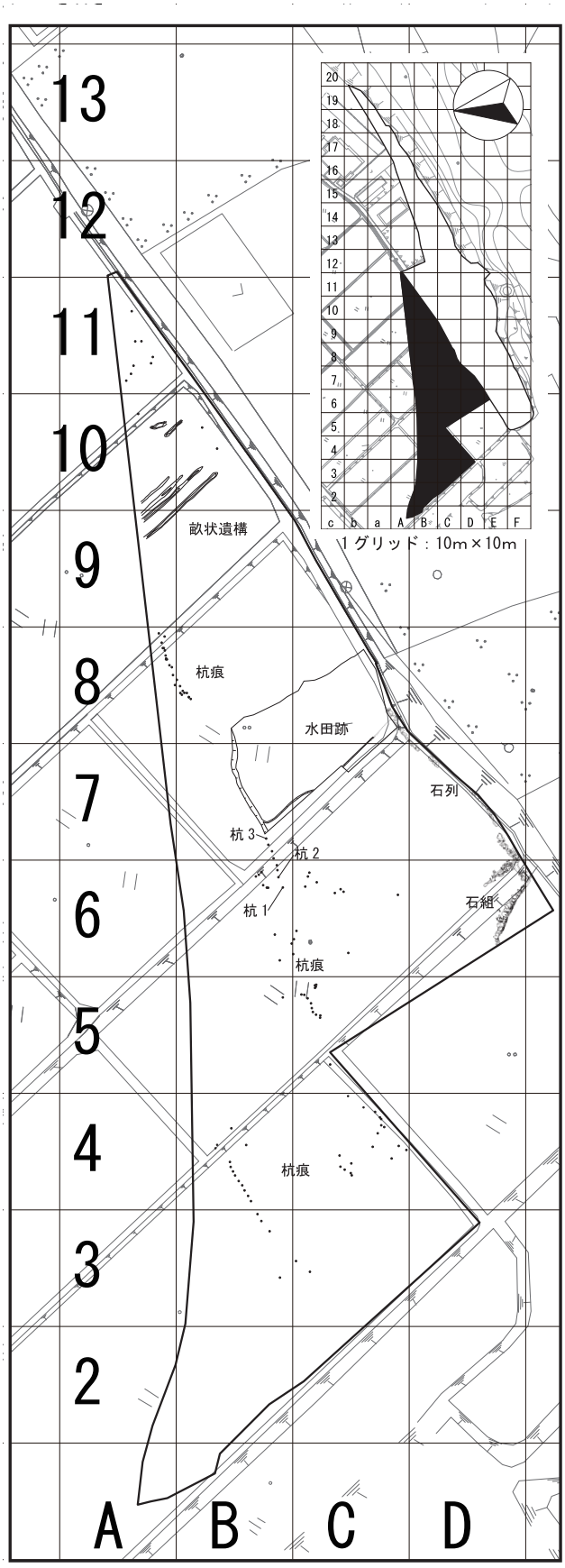
これらの杭は，平成19年度に調査した範囲全体にわたって直線上に並ぶような傾向が見られた。また，杭と杭の間隔は，およそ0.5m以上１m未満であった。さらに，杭の直径は，その痕跡から約５㎝程度であると推定した。Ｂ－６・７区においては，8つの杭痕をほぼ直線上に検出し，半截を試みるなどして詳細な記録を行った。これらの中で杭１・２の杭痕から杭が出土した。杭２は先端部のみであるが，どちらも木質の杭で，先端部を鋭利に尖らせる加工が施されていた。



第66図　近代杭痕実測図



杭痕（手前が杭１）



第67図　近代遺構配置図

第４章　山崎野町跡Ａの調査

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

山崎野町跡Ａは，およそ60mを隔てて調査区が南北に分かれている。両調査区を，それぞれ北側・南側調査区として，平成21年11月の試掘調査（計８トレンチ）結果をもとに，本調査を平成22年１月～３月と７月に実施した（実働58日）。

調査にあたっては，公共座標をもとにグリッドを設定し，10m単位で南から北方向に1，2，3 …，東から西方向にＡ，Ｂ，Ｃ…とした。座標の基準は山崎橋架け替え工事のために設定された道路杭223Ｋ Ｅ.1－２と225№13とし,同杭227№14で入力値及び測定値が正しいことを確認したのち，調査区内にグリッド杭を設置した。

それぞれの調査区を並行する形で調査を進めたが,1月～３月は北側を，7月は南側を重点的に調査した。

北側調査区では，近世以降の建築物の基礎や客土等の影響のため広い範囲で層が乱れていることや，礎石と思われる遺構があることが試掘調査で判明していたため，長軸方向に大きくトレンチを設定し，遺構を検出したところから調査範囲を広げていった。

南側調査区は，北側に比べて層の乱れは少なく縄文時代の包含層が残っていることが判明していたため，層の色調や土質の差を見ながら層ごとに調査を進めた。

２　遺構の認定と検出方法

北側調査区では，表土除去開始後すぐにまとまった石列やピットが現れた。平面で調査範囲を広げながら，色調の違いや土質の差を見極め，平板で配置を確認した上で掘立柱建物跡１棟，礎石建物跡３棟，布基礎２基（１基は大型の礎石建物跡の中に位置する。）を検出した。これらの遺構は，層位から建築時期を特定することはできなかったが，周辺の出土遺物をもとに掘立柱建物跡は中世，その他は近世の遺構と判断した。

南側調査区では北側調査区のような規模の大きい遺構の検出はなかったが,Ｊ－８区で袋状口縁を持つ壺(662)が押しつぶされたような状況で出土した。周囲を精査したが掘込みは確認できなかった。

３　発掘調査経過

調査経過については，調査日誌をもとに主な出来事を月単位で示す。

平成21年度

〈１月〉

調査開始，表土剥ぎ，両調査区掘下げ
公共座標値確認，グリッド杭打ち

〈２月〉

北側調査区

トレンチ設定（９Ｔ・10Ｔ）
掘下げ，土層断面写真撮影，実測
拡張掘下げ，出土状況写真撮影
縄文土器，近世遺物等取上げ
ピット群検出，周辺精査，配置実測，写真撮影
掘立柱建物跡検出，実測，半截
井戸検出，実測，写真撮影，周辺掘下げ
石垣検出，写真撮影
Ｐ－16区石列検出

南側調査区

グリッド杭打ち，表土剥ぎ，掘下げ

〈３月〉

鹿児島大学森脇宏教授調査指導（３／８）
国交省川内川河川事務所との引渡し協議（３／18）

北側調査区

拡張掘下げ，井戸・礎石建物跡実測
集石写真撮影・実測
掘立柱建物跡完掘・写真撮影・実測
押型文土器出土状況実測
掘立柱建物跡配置図実測
遺構配置図実測
空撮準備・空撮（３／12）
11Ｔ・12Ｔ掘下げ，土層断面実測
布基礎，礎石建物跡検出・実測
Ⅱ層上面コンターデータ収集
完掘状況写真撮影
礎石建物跡実測
遺跡内，境界等養生

南側調査区

グリッド杭打ち，表土剥ぎ，掘下げ，遺物取上げ
遺跡内，境界等養生

平成22年度

〈７月〉

国交省川内川河川事務所との引渡し協議（７／22）

北側調査区

礎石写真撮影・実測
Ｑ－15区下層確認トレンチ設定・掘下げ
埋戻し

南側調査区

グリッド杭打ち
下層確認トレンチ設定・掘下げ
Ⅱ～Ⅲ層掘下げ，遺物取上げ，写真撮影
Ｋ８石斧出土状況写真撮影
土層断面図作成
Ⅳ層上面コンターデータ収集
埋戻し

4　遺物の分類

⑴　土器

本遺跡では，縄文時代早期から古代にかけての土器2,000点あまりが出土した。遺物は，各時代の特徴を持つ土器が同じ層位に混在する状態で出土しており，明確に分層することが困難であった。そのため，器形と文様などの特徴をもとに，縄文時代から古墳時代までの土器を16の類に分けて報告する。

表19　土器分類表

類	実測図	特　徴
1		楕円又は山形の縄文原体を回転施文する。 【押型文土器】
2		口縁部に貝殻等による連続刺突を施し，胴部に貝殻で条線や押引などの文様を施す。押引・貼付けの有無で細分した。 【無し：塞ノ神式土器， 有り：苦浜式土器】
3		櫛描き状の幾何学文様を器面全体に施す。 【曽畑式土器】
4		貝殻による連点文や幾何学的な微細突帯による文様を施す。 【深浦式土器】
5		口縁端部内外面に粘土紐を貼付し，そこに「Σ」字状刺突を施す。また，肉厚の口縁上にも「Σ」字状刺突を施し，内面には縄文を描く。 【大歳山式土器】
6		内外面に貝殻による条痕を施す。 【条痕文土器】
7		キャリパー状の口縁を持ち，全体に粗く硬い撚りの縄文を施す。口縁には刺突を施した突帯を有する。 【船元式土器】
8		貼り付け文，沈線，刺突による多彩な文様が描かれる。口縁部に突帯を巡らし，口唇部にも刺突を施す。 【春日式土器】

類	実測図	特　徴
9		胎土に滑石を多く含み，銀色っぽい色調でなめらかな触感をもつ。指ナデ文様の間に二叉状の刺突具で押し引き文様を施す。 【並木式土器】
10		指あるいは工具等を用いて太い沈線・凹線を描く。赤褐色系の胎土のものが多い。 【出水式土器】
11		断面が「く」字状の口縁を持ち，胴部に磨消し縄文が見られる。 【西平式土器】
12		器面内外に貝殻条痕やナデなどの調整を施す。全体として粗いつくりである。深鉢が多い。 【粗製深鉢】
13		内外面共に丁寧なミガキ調整を施す。器種は浅鉢である。 【精製浅鉢】
14		口縁部から胴部にかけて，二条あるいは一条の刻目突帯を持つ。 【刻目突帯文土器】
15		上げ底の底部から胴部・口縁部にかけて直線的に広がり，内外面に工具によるナデ調整を施す。 【甕形土器】
16		尖底の底部から胴部へ大きくふくらみ，締まった頸部を経て袋状の口縁を持つ。 【壺形土器】

⑵ 陶磁器類

陶磁器類は，主に北側調査区で約2,150点出土した。器類・器種・器形については，『四谷三丁目遺跡』別冊「江戸遺跡検出のやきもの分類」（東京消防庁1991）を基本とし，細部については地域性や民族例を考慮して分類した。また，釉薬・胎土の色調については客観性を持たせるため『新版標準土色帖（2000年版）』農林水産省（農林水産技術会議事務所）を参考にした。

⑶ 石器

石器は，南北両調査区で約900点出土した。時代ごとの区分は層が乱れていることもあり困難であった。土器の出土状況を見ると北側調査区では大半が早期，南側調査区では早期はなく，前期から晩期までの土器形式がⅡ層からⅢ層にかけて混在する状況であった。そこで，北側調査区出土の石器は縄文時代早期として，南側調査区については前期から晩期までを一括して掲載した。

これらの石器を，器種により表20のように分類した。また，石材については石材産地を推定できる黒曜石については細分化を試み，表５に示すとおり分類した。

表20　石器器種分類表

器　種	定　義
打製石鏃	矢の先端に装着する狩猟具。ガラス質石材から安山岩まで多種の石材を使用し，素材剥片に押圧剥離により二次加工を施し整形しているもの。多様な形態がみられ細分できる。
石匙	つまみ部を有することを第一の特徴とする。素材剥片に押圧剥離により整形され刃部はていねいな二次加工が施されたもの。
スクレイパー	剥片の縁片に二次加工を施して刃部としたもの。多様な石材が使用され，形態も多種である。
二次加工剥片	剥片の縁辺の一部に二次加工が認められるもの。スクレイパーと判断した以外のもの。
石核	素材剥片を剥離したもの。礫素材のものや剥片素材のものがあり，打面と作業面との関係も含めて多種の形態がある。
石斧	全体あるいは刃部を剥離や研磨により形成した伐採具あるいは木材の加工具。
敲石	河原の円礫等を使用し，敲打の結果と考えられる割れや敲打痕を持つもの。
磨石	河原の円礫等を使用し，「磨る」作業によってできたと考えられる平滑な面を持つもの。
石錘	扁平な小円礫の両端に敲打や小剥離による抉りをつけた石器。
石皿	植物質食料加工具。磨石類により堅果類の製粉作業化に使用されたもの。厚みのある大型礫のほか，使用により中央部が皿状に凹むものがある。
軽石製品	軽石に穿孔や何らかの道具を使用して凹線などを施したもの。
礫器	扁平な礫の縁辺に，粗雑な剥離で刃部を形成したもの。

第２節　層序

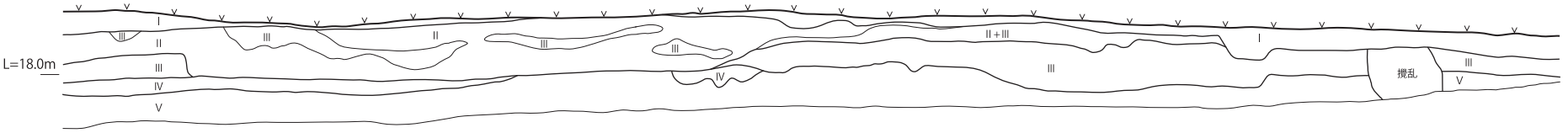
山崎野町跡Ａは，川内川の中流域で久冨木川と合流する地点に所在し，三方を川で囲まれた河岸段丘上に位置する。

北側調査区は，20年ほど前に製材所の解体工事が行われた際も含め，過去に広範囲な攪乱を受けている。また，河川の氾濫による砂泥の堆積層が多数混在しており，遺物の出土状況も縄文時代から近世までの遺物がほぼ同レベルで検出される状況で，明確な分層が困難であった。一方南側調査区では，部分的に良好な堆積状況が見られたが，表土除去後すぐに縄文時代晩期相当の遺物がみられ，各層の土質や色調なども北側調査区とは異なる印象を受けた。そのため，平成21年度調査の概要報告では，遺跡全体をとらえて表土，淡黄褐色砂質土，淡灰褐色土，灰褐色砂質土の４層で報告していたものを，平成22年７月の調査結果を踏まえて，北側調査区と南側調査区をそれぞれ別のものとして表21のように設定した。

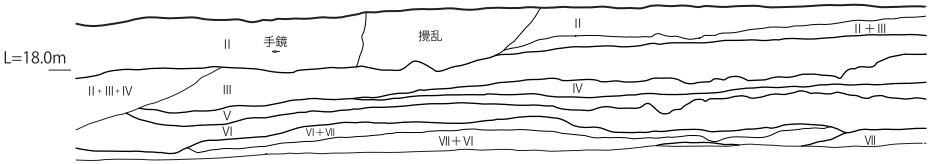
また，南側調査区の調査ではⅥ層に含まれる粒子中に火山灰と思われるものを確認した。この粒子は，科学分析によりアカホヤ火山灰と推定された。詳細は第５章で述べる。

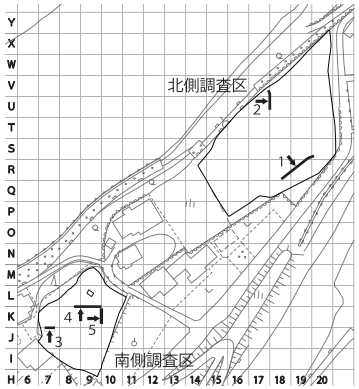
発掘作業の様子

1　北側調査区　南南西側



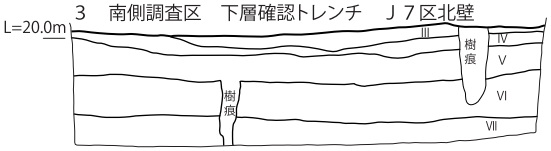
2　北側調査区　下層確認トレンチ　U17区東壁



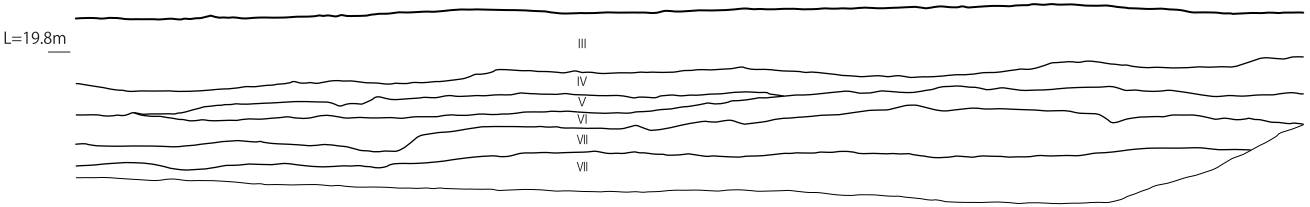


南側調査区北西側土層

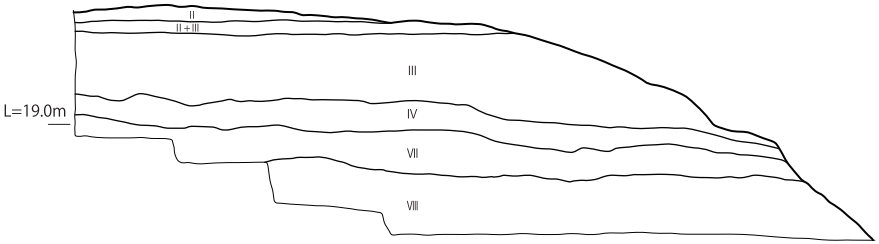
3　南側調査区　下層確認トレンチ　Ｊ７区北壁



4　南側調査区　下層確認トレンチ　Ｋ７・８区北壁



5　南側調査区　下層確認トレンチ　Ｋ８区東壁



第68図　土層断面図

0　2m
（S=1/80）

表21　山崎野町跡Ａ基本土層

調査区	層	色調・土質	備　考
北側調査区	Ⅰ層	表土	シラス，砂利等の搬入土砂層
	Ⅱ層	黄褐色土	砂質と土質が広範囲にわたりまだらに分布
	Ⅲ層	茶褐色砂質土	砂粒多
	Ⅳ層	灰褐色砂質土	砂粒少
	Ⅴ層	茶褐色土	
	Ⅵ層	黒褐色砂質土	
	Ⅶ層	黒褐色粘質土	
南側調査区	Ⅰ層	表土	
	Ⅱ層	暗褐色土	
	Ⅲ層	褐色砂質土	
	Ⅳ層	灰白色砂質土	
	Ⅴ層	褐色砂質土	アカホヤ火山灰含む
	Ⅵ層	明褐色砂質土	
	Ⅶ層	灰白色砂質土	
	Ⅷ層	灰白色砂質土	ラミナ

第３節　調査成果

１　縄文時代早期の調査成果

⑴　概要

縄文時代早期の遺構は集石１基のみで，遺物は北側調査区で出土した１類，2類の土器である。南側調査区では早期の土器を確認できなかったことや，北側調査区で出土した土器は早期がほとんどで，前期以降はわずかしか出土しなかったことから，早期の分布範囲は北側調査区内と考えた。石器については北側調査区のものを早期，南側調査区のものを前期から晩期の遺物として掲載する。

⑵　遺構（第70図）

集石

Ｒ－17区で検出され，52個の石を確認した。被熱による赤変した石がみられたが，炭化物や掘込みは確認できなかった。石材は主に安山岩で，転礫が多い。礫は60㎝×70㎝の範囲内に集中し，最大のものは15㎝×10㎝，平均的なものでこぶし大程度であった。平地に礫を集めたような状態で，調理など生活の場として使用された可能性は低い。周辺では２－ａ類土器が出土している。

⑶　遺物

ア　土器

早期土器は北側調査区から出土した。器形的特徴を確実につかめる口縁部が少ないため，押型文以外の土器は貝殻文土器で，3つの類に細分した。これらの中から接合・復元できたものも含めて22点を図化した。

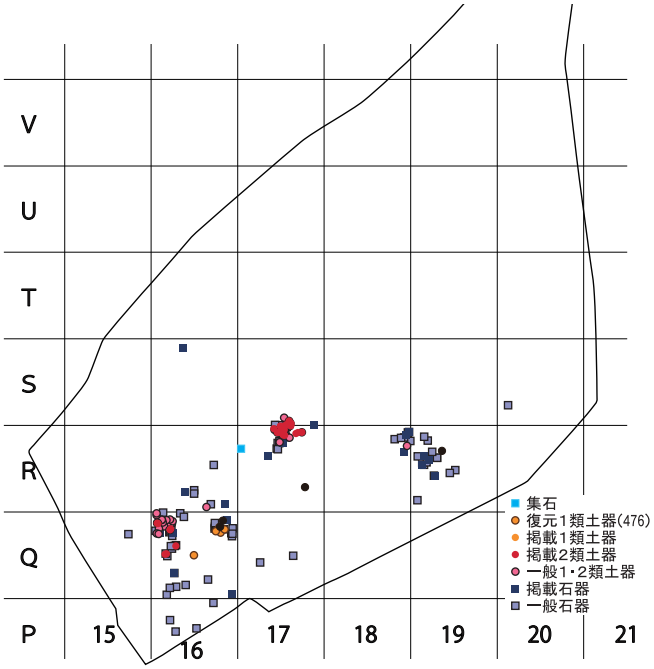
第１類土器（第71図476～479）

外面に楕円・山形の押型文を施すものである。476はＱ－16区で検出され，口縁部付近から底部までがまとまって出土した。胴部の最大径はおよそ35㎝で，外面全体に山形・楕円の押型丈を交互に施文している。内面はヘラケズリ後にナデ調整，底部は径7.5～8.0㎝でやや上げ気味の平底である。477は山形，478は楕円押型文の胴部，479は楕円押型文の底部である。

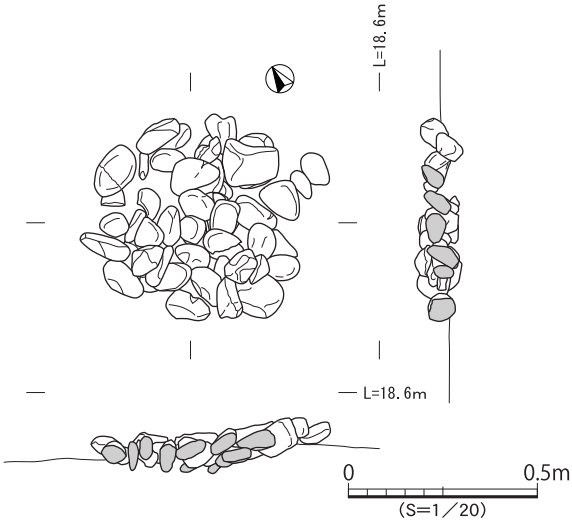
第２類土器（第71図480～第72図497）

２－ａ類

胴部のみである。直線的な貝殻条痕が残る。480・481は２条の貝殻条痕を横位に巡らせるものであるが，480には上部に貝殻で押引した部分が一部残る。482～484は横位・縦位の条痕が認められる。485～487は480と同様の押引を施す。488は胴部への刺突と角度をつけて曲がる条痕を施し，さらにその上に工具等によるナデが薄く残る。



第69図　縄文時代早期遺構配置・遺物出土状況図



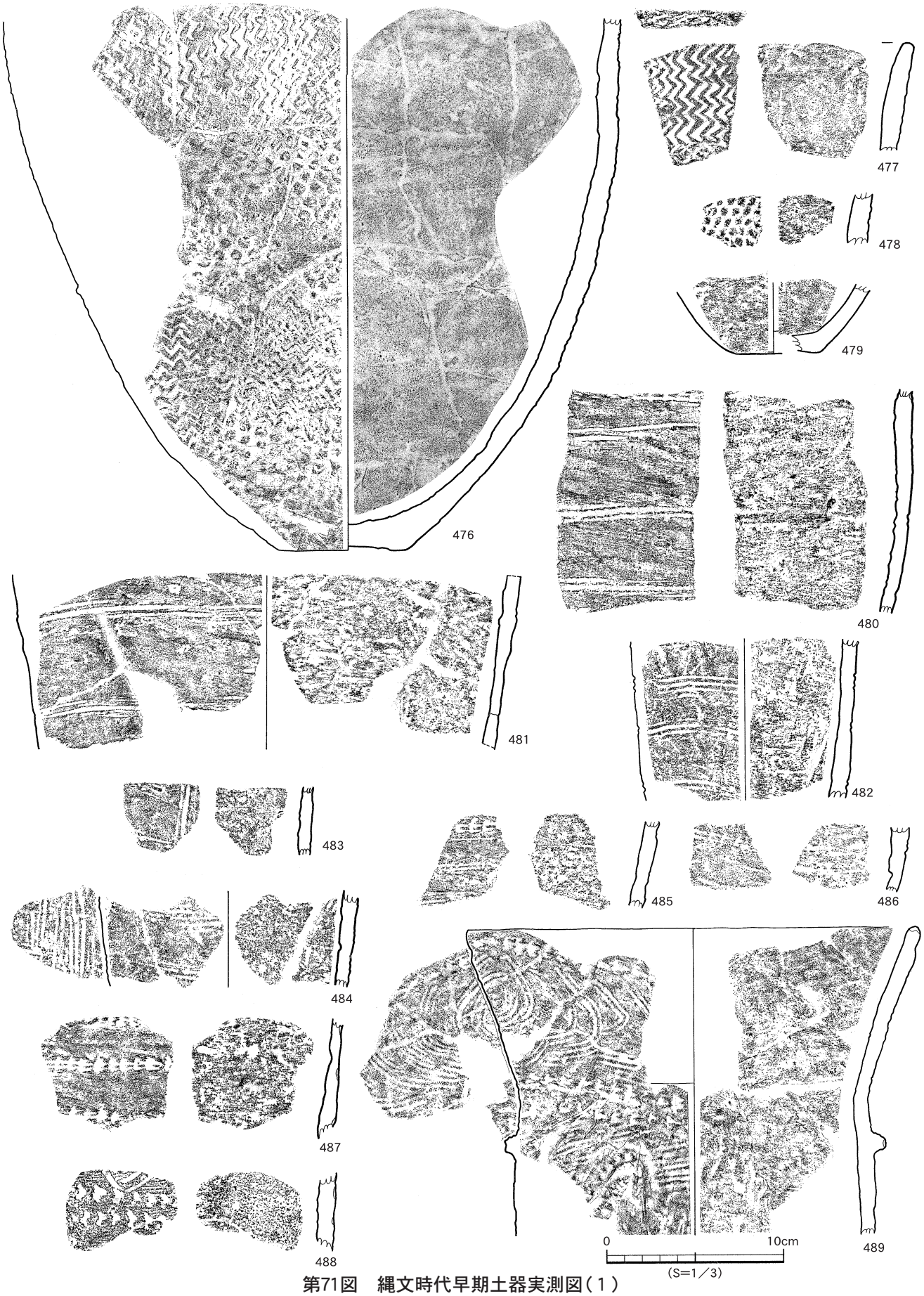
第70図　縄文時代早期集石遺構実測図

２－ｂ類

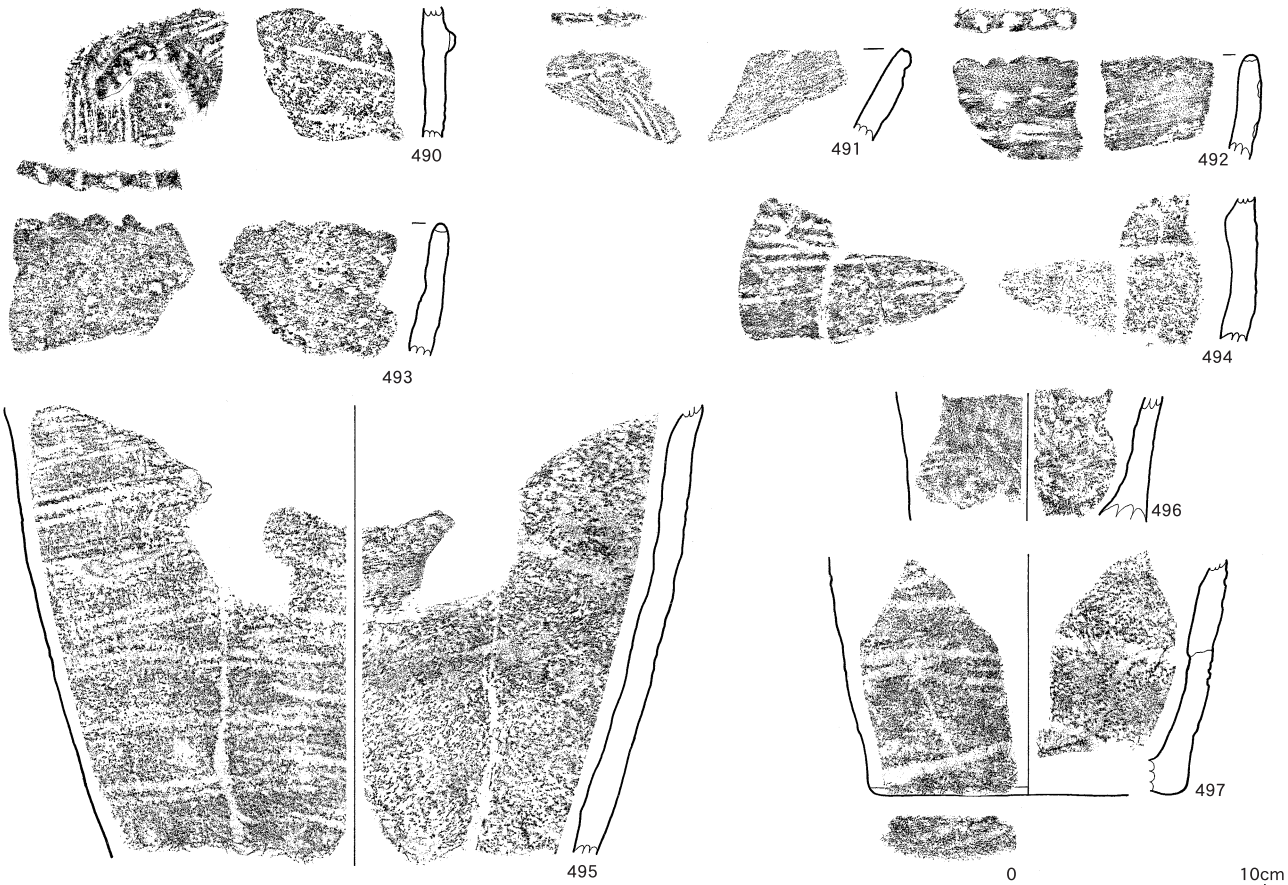
曲線的な貝殻条痕を施し，口唇部に刺突が残るものである。489～491は同一個体のものと思われる。頸部から口縁部にかけて条痕が残り，その上下に押引で境界を作る。口唇部にはかすかだが刺突が認められる。492・493は刺突を持つ口縁部である。

２－ｃ類

494～496は２－ａ類よりも密に直線的な貝殻条痕を施すが，雑な印象を受ける。497は磨滅しているがかすかに同様の条痕が残る。



第71図　縄文時代早期土器実測図（１）



第72図　縄文時代早期土器実測図（２）

表22　縄文時代早期土器観察表

挿図	番号	出土区	層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		胎土						備考
								外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	
71	476	Q－16	Ⅳ	一括	1	胴～底部	山形・楕円押型文	ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい橙色	浅黄橙色	○	○	○		○		
	477	Q－16	Ⅳ	98		口縁～胴部	山形押型文	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
	478	R－19	Ⅳ	70		胴部	楕円押型文	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		
	479	R－17	Ⅳ	202		底部	楕円押型文	ナデ	ナデ	明褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		
	480	R－17	Ⅳ	230	2 a	胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		火山ガラス
				232														
	481	R－17	Ⅳ	237		胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黄褐色	○	○	○		○		火山ガラス
				238														
				241														
				264														
	482	R－17	Ⅳ	222		胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	赤褐色	暗赤褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	483	S－17	Ⅳ	259		胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	484	R－17	Ⅳ	212		胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	○		○		火山ガラス
				220														
	485	R－17	Ⅳ	242		胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	486	R－17	Ⅳ	225		胴部	貝殻押引文	ナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	487	R－17	Ⅳ	233		胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○			○		火山ガラス
	488	Q－16	Ⅳ	80		胴部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	暗褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	489	R－17	Ⅳ	213	2 b	口縁～底部	貝殻条痕／押引文	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	褐色	○	○	○		○		火山ガラス
				249														
		S－17		250														
				251														
				252														
				255														
				257														
72	490	R－17	Ⅳ	223		胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	明赤褐色	黒褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	491	R－19	Ⅳ	214		口縁部	貝殻押引／条痕文	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	492	R－17	Ⅳ	262		口縁部	工具刺突文	ナデ	ナデ	暗灰黄色	黒褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	493	R－17	Ⅳ	173		口縁部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	494	Q－16	Ⅳ	81	2 c	胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	495	Q－16	Ⅳ	72		胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	496	Q－16	Ⅳ	42		底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	○	○			○		
				43														
	497	Q－16	Ⅱ	12		底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	明褐色	黒褐色	○	○	○		○		
				13														

イ　石器

石器は南北調査区合わせて900点あまり出土した。これらの中で，土器の出土状況から考えて北側調査区で出土しているものを早期石器とし，20点を図化した。

打製石鏃（第73図498～500）

498・499は基部がわずかに弯曲するもので，498では右側縁，499では左側縁の一部が抉られる。この抉りは着装と関連する可能性も考えられ，注目したい。500の基部は深く抉られ，先端も鋭利に仕上げている。

石匙（第73図501・502）

501は刃部の一部を欠くが，正面右側が折れている両面調整がなされ，つまみもしっかりしており丁寧に仕上げられている。502は素材剥片の形状を生かしたもので，つまみを形成する抉りを結ぶ線と刃部の線が斜めに交わる形状である。刃部は直線状に仕上げている。

二次加工剥片（第73図503～505）

503は腹面下部から背面先端部に二次加工，504は正面下部に微細な剥離が認められる。505は右側縁，下端部に二次加工跡があり，レンズ状の断面形を呈している。

原礫（第74図506）

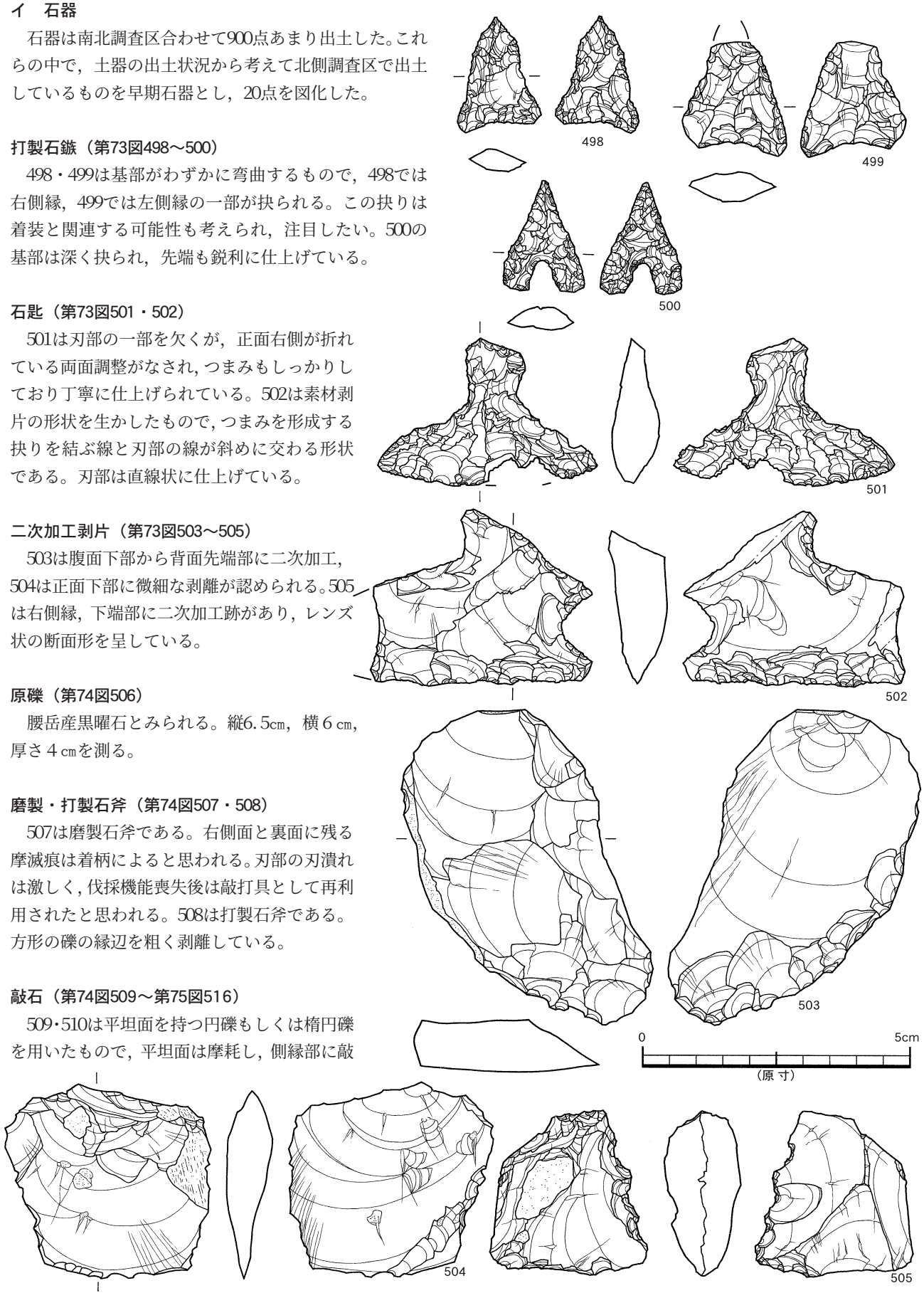
腰岳産黒曜石とみられる。縦6.5㎝，横６㎝，厚さ４㎝を測る。

磨製・打製石斧（第74図507・508）

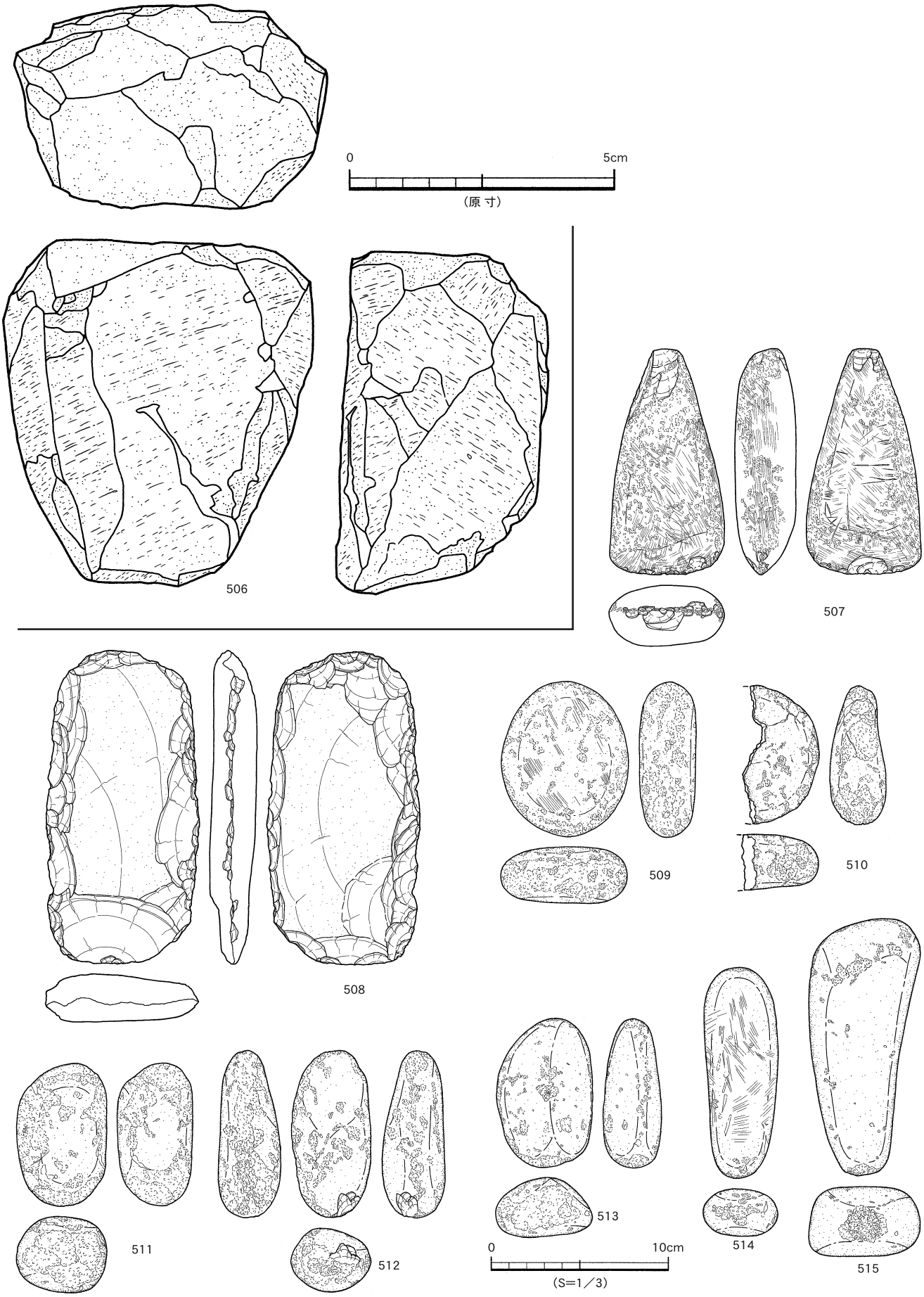
507は磨製石斧である。右側面と裏面に残る摩滅痕は着柄によると思われる。刃部の刃潰れは激しく，伐採機能喪失後は敲打具として再利用されたと思われる。508は打製石斧である。方形の礫の縁辺を粗く剥離している。

敲石（第74図509～第75図516）

509・510は平坦面を持つ円礫もしくは楕円礫を用いたもので，平坦面は摩耗し，側縁部に敲



第73図　縄文時代早期石器実測図（１）

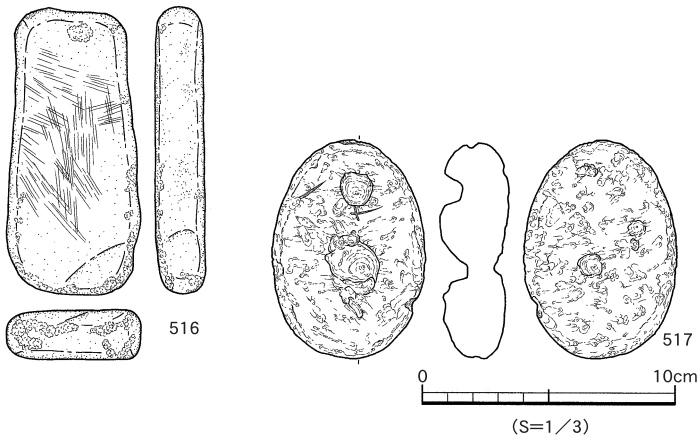


第74図　縄文時代早期石器実測図（２）

打痕が残る。511～513は棒状に近い礫の両端を敲打面としている。514・515は棒状の礫を研磨し，手になじむ形状に仕上げている。いずれも両端に敲打痕が残る。516は厚さ１㎝の板石を隅丸方形状に加工したもので，下部に敲打痕が残る。

軽石製品（第75図517）

517は軽石を楕円の円盤状に加工し，平坦部に２か所の穿孔を試みている。中央に近い方は，裏面からも穿孔を試みた痕跡が残り，製作途中のものと思われる。



第75図　縄文時代早期石器実測図（３）

表23　縄文時代早期石器観察表　　※重量の（　）は欠損しているものを示す。

挿図	番号	出土区	層	取上番号	器種	石材Ⅰ	石材Ⅱ	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量　※（g）	備考
73	498	Q－16	Ⅳ	99	打製石鏃	OB	Ⅰ	2.1	1.5	0.4	1.0	
	499	R－16	Ⅳ	180	打製石鏃	砂岩	－	2.1	1.9	0.6	(1.9)	
	500	Q－16	Ⅳ	95	打製石鏃	OB	Ⅲ	2.1	1.5	0.4	0.7	
	501	R－19	Ⅱ	26	石匙	OB	Ⅳ	2.8	4.1	0.9	(5.1)	
	502	S－16	Ⅱ	25	石匙	チャート	－	3.3	4.2	1.1	(13.2)	
	503	S－17	Ⅱ	74	二次加工剥片	チャート	－	5.9	4.7	1.0	24.8	
	504	R－19	Ⅱ	148	二次加工剥片	OB	Ⅰ	3.7	3.8	9.0	11.0	
	505	R－18	Ⅱ	65	二次加工剥片	タンパク	－	3.1	2.9	1.4	9.8	
74	506	R－17	Ⅳ	52	原礫	OB	Ⅳ	6.5	5.8	3.8	190.0	
	507	R－19	Ⅲ	40	磨製石斧	砂岩	－	12.7	6.4	3.4	390	
	508	Q－16	Ⅱ	3	打製石斧	頁岩	－	17.7	8.5	2.6	580	
	509	Q－16	Ⅱ	一括	敲石	安山岩	－	9.3	7.1	3.1	300	
	510	R－17	Ⅳ	206	敲石	安山岩	－	7.7	4.3	3.1	(120.0)	
	511	3T	Ⅰ	一括	敲石	安山岩	－	8.0	5.1	4.1	240	
	512	R－19	Ⅲ	34	敲石	安山岩	－	9.9	4.5	3.5	180.0	
	513	R－16	Ⅳ	174	敲石	安山岩	－	8.3	5.4	3.2	210	
	514	R－18	Ⅱ	58	敲石	砂岩	－	11.8	4.2	2.2	210	
	515	R－18	Ⅱ	67	敲石	安山岩	－	14.3	6.2	3.9	480	
75	516	Q－16	Ⅲ	53	敲石	安山岩	－	11.2	5.3	2.0	230	
	517	Q－16	Ⅳ	141	軽石製品A	軽石	－	8.5	6.0	2.7	60.0	

２　縄文時代前期から晩期の調査成果

⑴　概要

縄文時代の前期以降については，遺構は検出されず，遺物も北側調査区ではわずかに見られた程度であった。南側調査区では前期から後期にかけての遺物が主にⅢ層から，後期から晩期にかけての遺物が主にⅡ層から出土した。しかし，層位的には同等のレベルでも前期の遺物と晩期の遺物が見られるため，前期から晩期を一括りにして，器形と文様などの特徴をもとに13の類に分けてみた。ここではその中から63点を図化した。

⑵　遺物

ア　土器

３類土器（第77図518～520）

口縁～胴部に櫛描き状の文様が見られるものである。518は口縁部である。明瞭な沈線が施され，口唇部には細かい連続刺突が施される。 519・520は胴部で，四角文と思われる沈線を施す。

４類土器（第77図521～第78図530）

貝殻による連点文や幾何学的な微細突帯による文様を施すもので，115点出土した。

521・522は貝殻腹縁による刺突で連点文をつけるものである。共に外面に縦位・横位と斜位の各方向に２列の連点文を施す。522は破片の縁が摩滅していることから，壊れたあとに流水の影響を受けたと考えられる。523･524は微隆起突帯とその周囲に巡らす数条の沈線で幾何学文様を作る。525・526は口縁・胴部の破片である。沈線の描き方からこの類が近いと判断したが，出土区が北側調査区であるため，この類に属さない可能性もある。沈線内に白色の微粒子粘質土が残存している。遺跡周辺や包含層内の土壌とは異なるもので，白色顔料の可能性もある。527・528は，工具による条痕をつけた後に微隆起突帯を口縁・胴囲に巡らす。527の口縁付近内面には，抉るような条痕が見られる。外面には煤が付着している。529・530は，文様及び胎土からこの類に属すると思われるものである。529はやや内傾する口縁部，530は尖底の底部である。

5類土器（第78図531）

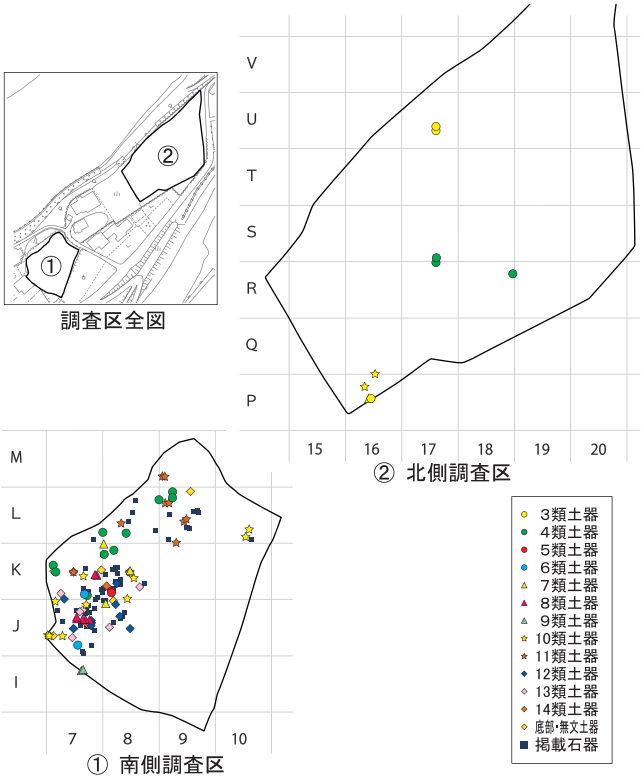
口縁部だけ5点出土した中から，接合した1点を図化した。口縁部が肥厚し，口唇部には「Σ」字状刺突を施し，口縁内面には縄文，外面には三角突帯に「Σ」字状刺突を施す。胎土にはわずかながら細かい雲母や火山ガラスが含まれており，在地の土を用いた可能性も考えられる。

6類土器（第78図532～534）

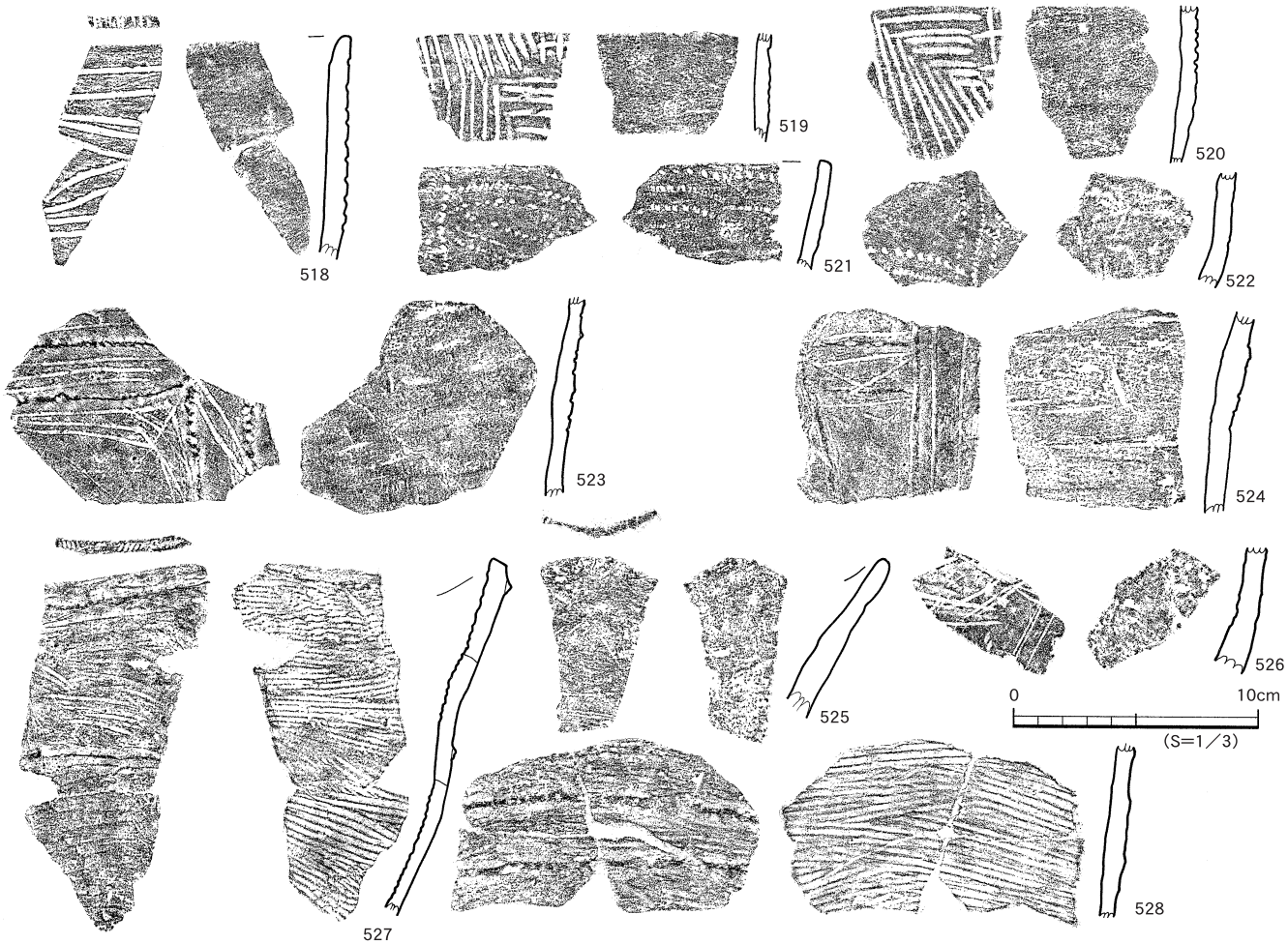
内外面に条痕を施すもので，外面には縦位の深い条痕，内面には横位・斜位の条痕が見られる。532・533は外面の条痕内に煤が付着していた。534から試料を採取し^{14}C年代測定をしたところ相応の時期判定が得られた（第5章参照）。

7類土器（第78図535・536）

全体に粗く硬い撚りの縄文を施す。535は内弯する口縁部で，工具による刺突を持つ突帯が1条巡り内側には斜位の縄文が施される。536は頸部で，殻頂圧痕を施す。



第76図　縄文時代前期～晩期遺物出土状況図



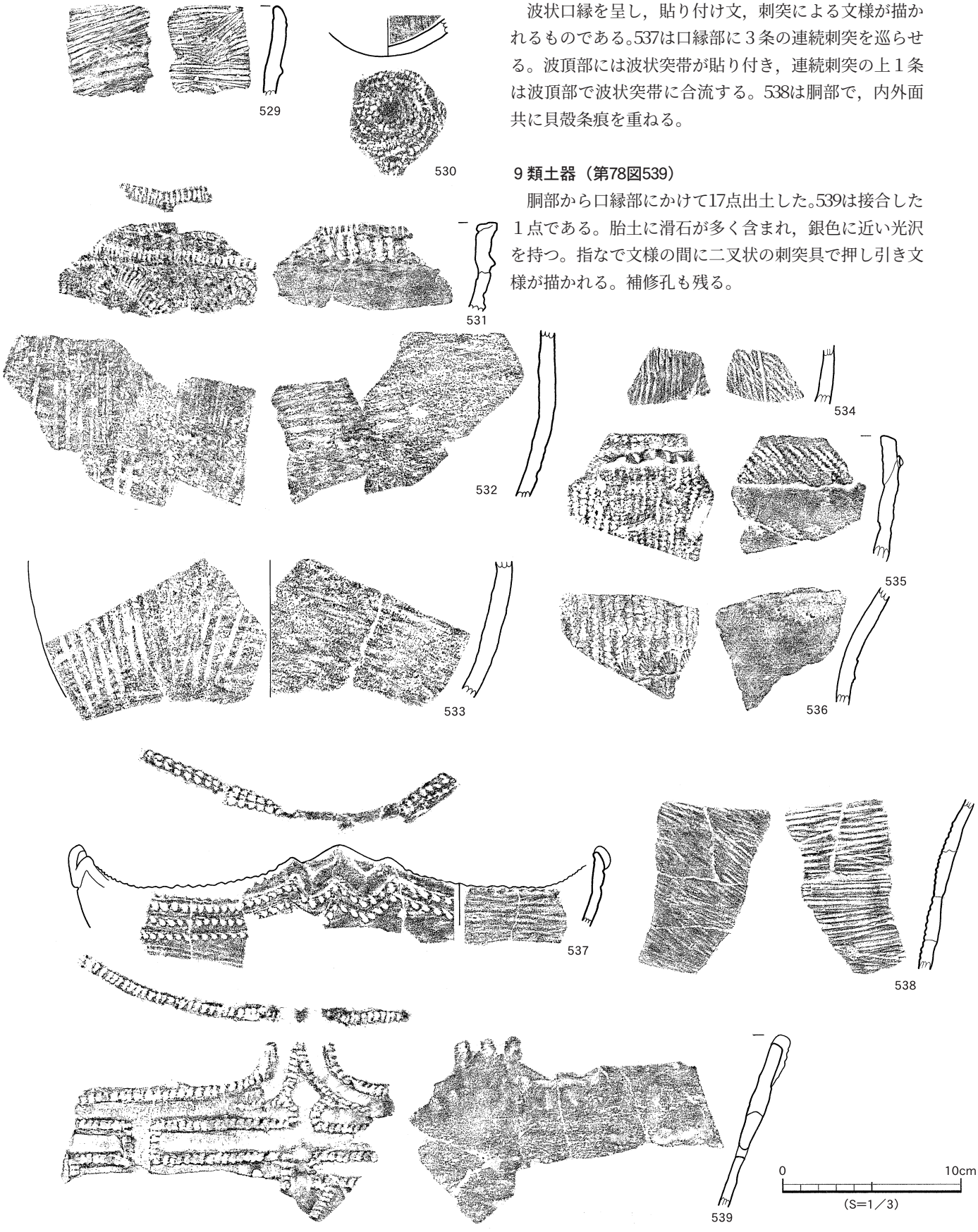
第77図　縄文時代前期～晩期土器実測図（1）

8類土器（第78図537・538）

波状口縁を呈し，貼り付け文，刺突による文様が描かれるものである。537は口縁部に３条の連続刺突を巡らせる。波頂部には波状突帯が貼り付き，連続刺突の上１条は波頂部で波状突帯に合流する。538は胴部で，内外面共に貝殻条痕を重ねる。

9類土器（第78図539）

胴部から口縁部にかけて17点出土した。539は接合した１点である。胎土に滑石が多く含まれ，銀色に近い光沢を持つ。指なで文様の間に二叉状の刺突具で押し引き文様が描かれる。補修孔も残る。



第78図　縄文時代前期～晩期土器実測図（２）

10類土器（第79図540～548）

指あるいは工具等を用いて太い沈線・凹線を描くものを一括した。540ははっきりとした横位の沈線で「口」を描き，中にも数条の沈線を残す。541はヘラなどにより流線型の凸部を描く。口唇部には爪または竹管による刻みが入る。542は口縁から頸部にかけて太い凹線が入る。543は口唇部に爪形の連続刺突を施す皿である。544はねじり紐状の口唇を持ち，口縁部に短く深い沈線を斜位に刻む。545は１条の沈線で楕円に近い文様を描く。546～548は底部である。546は網代底で，立ちあがりは少しくびれた後直線状に開く。547は立ちあがりに斜位の条痕が認められる。548はやや丸底で立ちあがりにヘラ等で押えた跡が残る。

11類土器（第79図549～554）

口縁部に縄文を施し，さらに沈線を巡らせるものと，それにつながると思われる胴部・底部をまとめた。549は内外面をミガキ調整し，口縁部にそれぞれ工具を使い分けた２条の沈線を施す。上位の沈線は太く，波状で，継ぎ目を潰すような刺突が入る。下位の沈線は細く，直線状に巡る。下位の沈線の下には弧状の烈点が加えられる。550は胴部で，2条の細かい沈線を１つの単位として横位・斜位に走らせる。551・552は，549・550よりも時期的に新しいと思われる口縁部である。551は口縁部が大きく外反し，断面は逆「く」字状に作られる。口縁外部は縄文を施した後，3条の沈線を巡らす。口縁内部は指押えによる凹線が入る。552は，口縁外部に細い沈線が

第79図　縄文時代前期～晩期土器実測図（３）

５条入るが，互いに平行ではなく，端が切れるものもある。口縁内部は剥落し，外部は接合面で剥離している。剥離面には接合痕が明瞭に残る。553・554はいずれも上げ底の底部である。立ち上がりはそれぞれ内弯・直立と異なるが，いずれも縦位の貝殻腹縁による条痕が施される。底部にも全面に同様の条痕が施され，553の方が大きめの貝を使用している。

12類土器（第80図555～561）

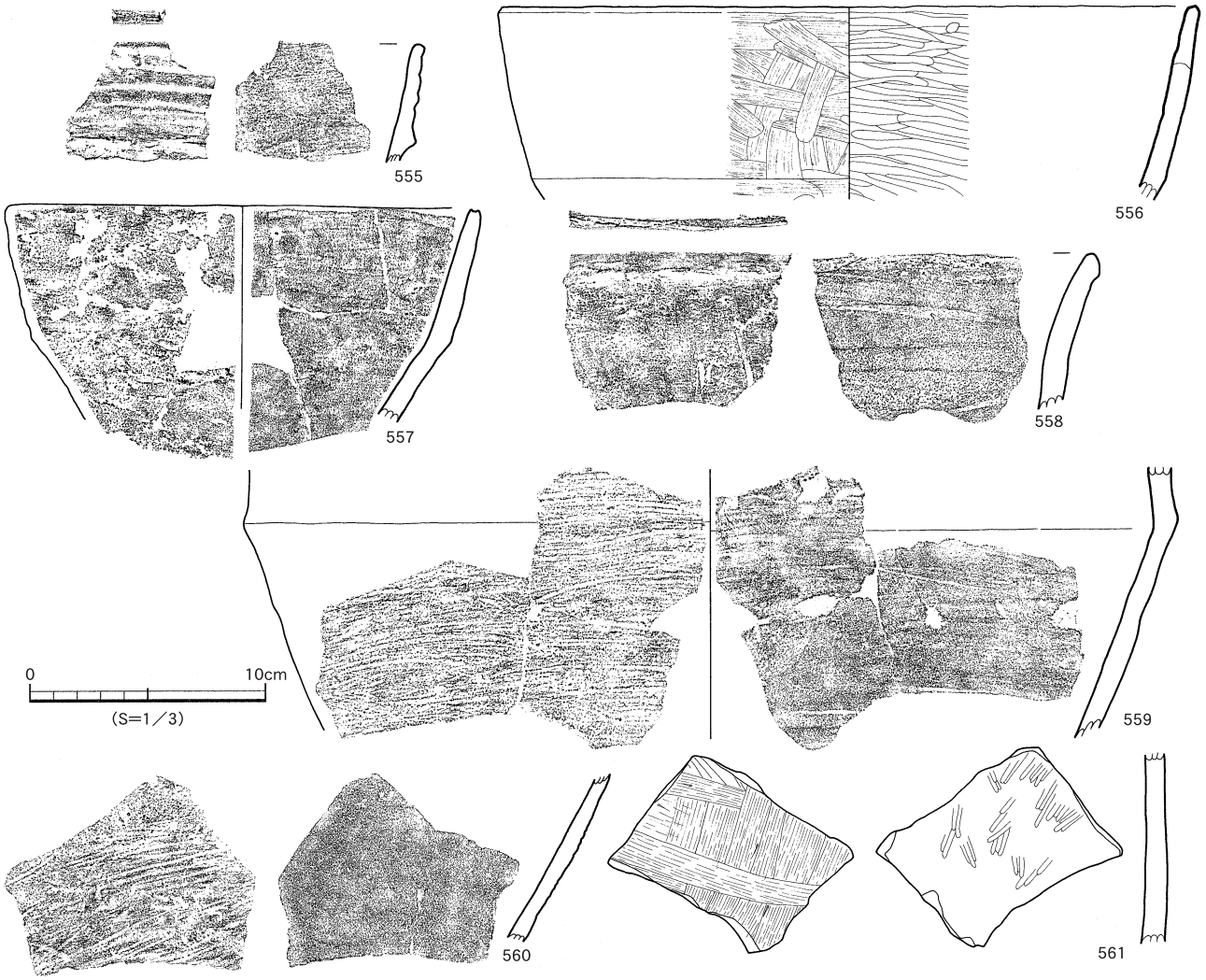
器面内外に貝殻条痕やナデなどの調整を施すものを一括した。555は玉縁状の口縁で粗い３条の沈線と突帯が残る。556～558は口唇部をナデているが，556は平坦に仕上げられ，ほかはやや粗い仕上げである。559は胴部最大径部で逆「く」字状に屈曲する。内面に一部削った跡が残る。560・561は内面にミガキ調整が施される半粗半精土器の胴部である。561は内面が煤で丁寧に磨きあげられている。

13類土器（第81図562～572）

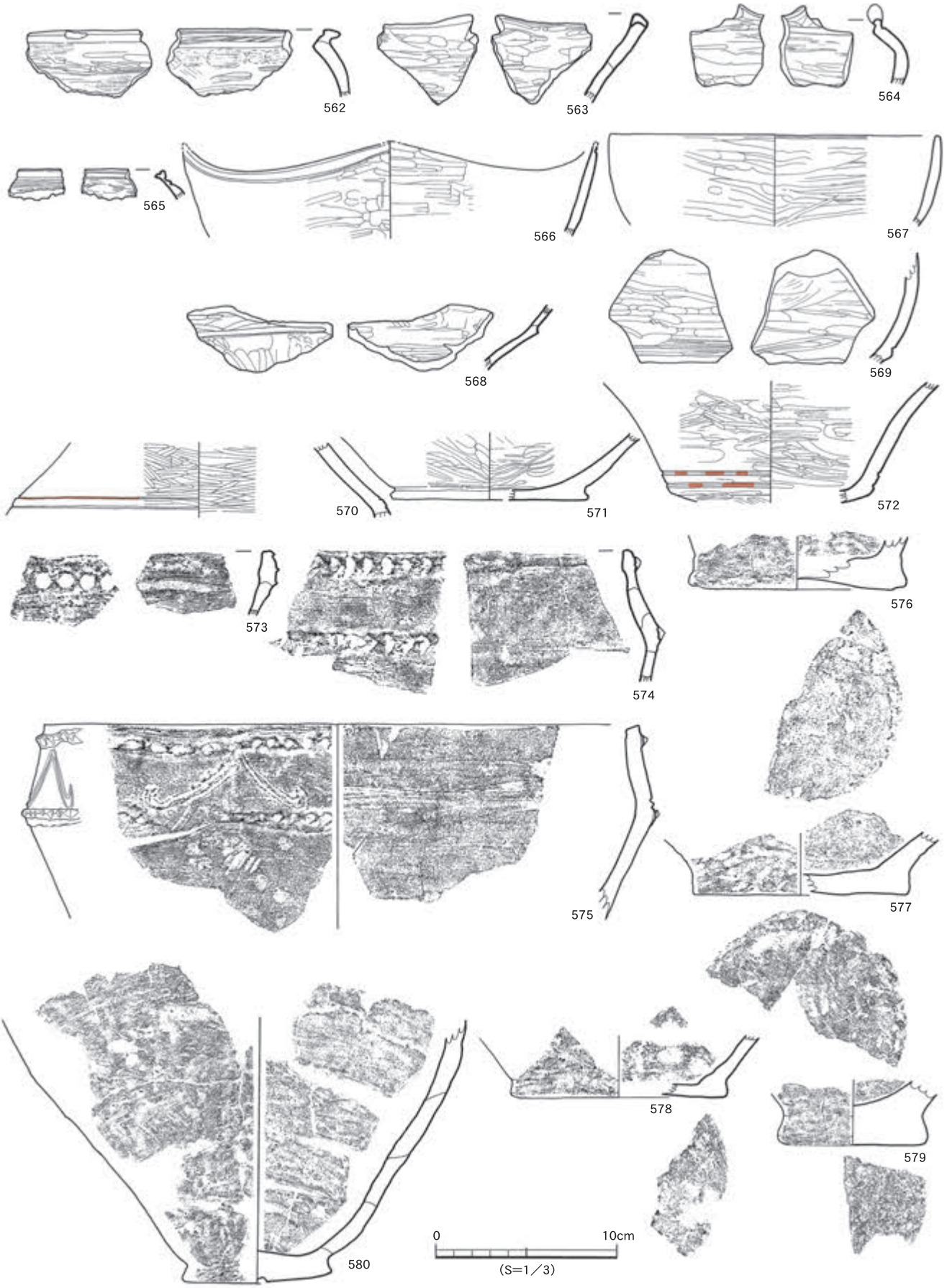
器面内外面共にミガキが施されるものである。562は玉縁状の口縁部を有し，頸部までが短い。頸部で「く」字状に屈曲し，胴部は丸みを帯び，口径よりも胴部径が大きい。563・564はリボン状の口縁部を持つ。564は玉縁状で直立する口縁部から胴部が大きく膨らむ。565は小型の鉢で，玉縁状の口縁と屈曲する頸部から胴部へ膨らむ。頸部を水平に削る形で２条の沈線を施す。566は波状口縁を有し口唇に沿って１条の沈線が入る。567は膨らんだ胴部から口縁部へと直立する。568・569は外反・内弯する胴部で，底部からせり出す形で段を作る。570は内傾する胴部で，2条の沈線を施す。沈線内に赤色顔料が残っており，電子顕微鏡観察によりパイプ状のベンガラであることが判明した。571は立ちあがりが深く括れる底部である。572は胴部下位に２条の沈線が巡り，わずかに赤色顔料が残る。

14類土器（第81図573～575）

刻目突帯を巡らす甕形土器の口縁部である。573は口縁部直下に刻目突帯を巡らす。574は口縁端部及び胴部上位の屈曲部に刻目突帯を巡らすが，口縁端部の刻みは櫛状工具，胴部の刻みはヘラ状工具によるものと思われる。



第80図　縄文時代前期～晩期土器実測図（４）

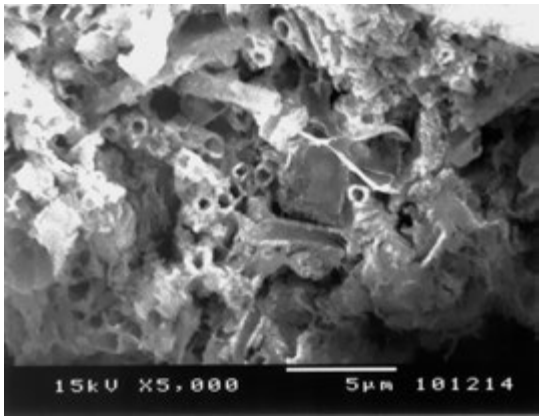


第81図　縄文時代前期～晩期土器実測図（５）

575は復元口径約33.2㎝を測る。口縁部直下及び胴部上位の屈曲部に刻目突帯を巡らすものであるが，突帯間に先端部を鈎状に描く沈線が施される。

底部・無文土器（第81図576～580）

縄文時代晩期に相当すると考えられる土器底部と，復元した無文土器である。立ち上がりは577が直立，578は内傾する。579は底部が厚く，立ち上がりは緩やかに内傾する。580は立ちあがりが内にくびれた後開いていく。器形はかなり歪んでいるが，粘土紐を巻いた様子が良く分かる資料である。



沈線内赤色顔料の電子顕微鏡画像（570）

表24　縄文時代前期から晩期土器観察表

挿図	番号	出土区	層	取上番号	分類	部位	文様	調整 外	調整 内	色調 外	色調 内	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 赤粒	備考
77	518	P－16	Ⅱ	一括	3	口縁～胴部	条痕文	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○				
	519	U－17	Ⅳ	158		口縁～胴部	条痕文	条痕	ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	○	○	○		○		
	520	U－17	Ⅳ	160		胴部	－	条痕	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	○	○	○				
	521	K－7	Ⅲ	1727		口縁部	刺突連続文	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	522	K－7	Ⅲ	1832		胴部	刺突連続文	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	523	L－8	Ⅲ	1129		胴部	条痕文	ナデ	ナデ	黒褐色	褐色	○	○			○		
	524	K－7	Ⅲ	1750		胴部	条痕文	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	灰黄褐色	○	○			○		
	525	R－17	Ⅳ	258		口縁部	条痕文	ナデ	ナデ	黄褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		沈線内に粘質白色土
	526	R－17	Ⅳ	246		胴部	条痕文	ナデ	ナデ	にぶい橙色	褐色	○	○	○		○		沈線内に粘質白色土
	527	R－18	Ⅱ	66	4	口縁～胴部	微隆起突帯／条痕文	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
		K－8	Ⅲ	526														
		L－8		1138														
	528	L－9	Ⅲ	857		胴部	微隆起突帯／条痕文	ナデ	ナデ	褐色	黄褐色	○	○	○		○		
				859														
				984														
				985														
78	529	L－9	Ⅲ	1219		口縁部	微隆起突帯	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	○	○	○		○		
	530	K－8	Ⅲ	689		底部	刺突	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	黒褐色	○	○	○		○		
	531	K－8	Ⅲ	1817	5	口縁部	「Σ」字状刺突文	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄色	○	○		○			火山ガラス
				1903														
	532	J－8	Ⅲ	1852		胴部	条痕文	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	オリーブ褐色	○	○	○		○		
	533	K－8	Ⅲ	1700	7	胴部	条痕文	条痕	ナデ	黄褐色	褐色	○	○	○		○		
				一括														
	534	P－16	Ⅱ	一括		胴部	条痕文	条痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○	○		○		
	535	K－7	Ⅲ	1813	6	胴部	縄文／刻目突帯	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	○	○			○		
	536	J－7	Ⅲ	1321		胴部	縄文／殻頂押圧文	ナデ	ナデ	黒褐色	黄褐色	○	○	○		○		
	537	J－7	Ⅲ	1271	8	口縁部	突帯／貝殻刺突文	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	○	○	○		○		
				1304														
				1595														
				1314														
				1315														
	538	K－7	Ⅲ	799		胴部	条痕文	ナデ	ナデ	暗褐色	暗灰黄色	○	○	○				
				801														
	539	J－7	Ⅲ	1335	9	口縁部	凹線文／二叉刺突連続文	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	○	○					
				1337														
				1677														
79	540	J－7	Ⅲ	1359	10	口縁部	条痕文	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	541	K－8	Ⅲ	1536		口縁部	凹線文	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい褐色	○	○	○		○		
	542	J－7	Ⅱ	311		口縁部	凹線文	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	明黄褐色	○	○	○				
	543	J－7	Ⅲ	1905		口縁部	－	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい褐色	○	○	○	○	○		
				1910														
				1911														
				1914														
	544	K－7	Ⅱ	434		口縁部	凹線文	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	545	K－8	Ⅱ	382		胴部	沈線文	ナデ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	○	○	○				
	546	P－16	Ⅱ	23		底部	網代	網代	ナデ	褐色	褐色	○	○			○		
				24														
	547	L－10	Ⅲ	131		底部	条痕文	ナデ	ナデ	暗赤褐色	にぶい赤褐色	○	○			○		
				132														
	548	J－7	Ⅲ	1734		底部	－	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	○	○	○		○		
	549	L－8	Ⅲ	1143	11	口縁部	沈線文	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○				○		
	550	L－9	Ⅲ	617		胴部	沈線文	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	○	○			○		
				618														
	551	K－8	Ⅰ	一括		口縁部	沈線文	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○	○	○		
	552	K－7	－	一括		口縁部	沈線文	ナデ	ナデ	浅黄色	明黄褐色	○	○	○		○		
	553	L－9	Ⅲ	400		底部	網代	網代	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○		○	○		
				625														
				626														
				882														
	554	K－9	Ⅲ	1705		底部	網代	網代	ナデ	にぶい黄色	暗灰黄色	○	○	○	○	○		
				1706														
				1707														
80	555	J－8	Ⅱ	503	12	口縁部	－	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	556	J－7	－	一括		口縁部	－	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○				
	557	J－7	Ⅲ	1249		口縁部	－	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○		○		
				1250														
				1253														
				1584														
				1586														
	558	K－7	Ⅱ	486		口縁部	－	ケズリ	ナデ	黒褐色	黄褐色	○	○	○		○		
	559	J－7	－	一括		口縁部	条痕文	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○	○		○		
	560	J－8	Ⅱ	952		胴部	条痕文	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	にぶい黄色	○	○	○		○		
				一括														
	561	K－8	Ⅲ	568		胴部	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	黒色	○	○	○		○		
81	562	K－7	Ⅱ	1451	13	口縁部	－	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	563	J－8	Ⅱ	1861		口縁部	－	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○			○		リボン状
	564	K－8	Ⅲ	553		口縁部	－	ミガキ	ミガキ	黄褐色	黒褐色	○	○	○		○		リボン状
	565	J－7	Ⅲ	1309		口縁部	沈線文	ミガキ	ミガキ	暗褐色	褐色	○	○			○		
	566	J－7	－	一括		口縁部	沈線文	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	にぶい黄色	○	○			○		
	567	J－7	Ⅲ	1655		口縁部	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	黄灰色	○	○			○		
	568	J－7	－	一括		胴部	－	ミガキ	ミガキ	黒色	黒褐色	○	○			○		
	569	J－7	－	一括		胴部	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	黄灰色	○	○			○		
	570	J－7	Ⅱ	304		胴部	沈線文	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	暗灰黄色	○	○	○		○		赤色顔料
	571	J－7	－	一括		底部	－	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	○	○			○		
	572	K－8	－	一括		底部	沈線文	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	○	○	○		○		赤色顔料
	573	J－7	Ⅲ	1255	14	口縁部	－	ケズリ	ナデ	褐色	黄褐色	○	○			○		
	574	K－7	－	一括		口縁部	－	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	○		○		火山ガラス
	575	K－8	Ⅱ	518		口縁部	－	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○		○		
	576	L－9	Ⅲ	868	底部	底部	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	褐色	○	○			○		火山ガラス
	577	J－7	Ⅲ	1408		底部	－	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	578	K－7	Ⅱ	769		底部	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	○	○			○		
	579	J－8	Ⅱ	988		底部	－	ナデ	ナデ	にぶい褐色	暗灰黄色	○	○	○		○		火山ガラス
	580	K－7	Ⅲ	1720		胴～底部	－	ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい黄橙色	○	○			○		

イ　石器

南側調査区出土の石器を縄文時代前期以降の遺物とした。主となる包含層はⅢ層であるが，一部Ⅱ層も含まれる。ここでは68点を図化した。

打製石鏃（第82図581～594）

14点出土した。581・582の基部は平基，583～586はわずかに内弯し，587～593は抉りが入る。594は未製品あるいは石錐の可能性もある。581は基部・側面の調整も施されており，使用時に折れたものと思われる。582は側縁部の一部を欠き中央部にまだ厚みを残すが，完形品と見られる。583の右側縁上部の１か所，584・585の両側縁下部の２か所に残る深い抉りは，着装と関連する可能性として注目しておきたい。583は右側面から左脚部にかけて大きな剥離が見られる。仕上げの段階で左脚部が折れたと考えられる。586は基部の調整がなされておらず，製作途中で破棄したとも考えられる。592・593は脚部も鋭く尖り，両側縁は鋸歯状に仕上げる。594は周縁部と裏面先端部に刃つぶし加工を施したもので，表面には使用によると思われる摩滅面がみられることから，石錐の可能性も考えられる。

石匙（第82図595～598）

上部を欠損するが，595・596は，いわゆるサブマリーンタイプで，刃部の縦断面形は凸レンズ状を呈し，刃部は直線状に仕上げている。596はつまみと刃部右側が折れているが，形状から石匙と判断した。周縁の調整も丁寧に施されている。597・598は素材剥片の形状を生かしたもので，素材剥片の剥離面が多く残されている。器種の認定については，刃部が両刃であることや，つまみとなる抉りを形成しつつあることから判断した。

スクレイパー（第83図599～601）

599は肉厚の縦長剥片の右側面に刃部形成，600は扁平な不定形剥片の左側縁から下端の両面に平坦剥離による刃部を形成したものである。601は縁辺に粗い刃部加工が見られ，制作途中のものとも考えられる。

剥片（第83図602～第84図608）

602･603は白色系のチャートの剥片で，602は縦長剥片，603は打点移動を繰り返す剥片剥離技術の存在が看取できる。604～608は，刃部形成を試みた跡がみられる。この種の剥片は多く見られたが，二次加工を確認できる資料は少なく，石器と認定できるものは多くない。

二次加工剥片（第84図609～613）

609は主に腹面側の側面に二次加工の痕跡が残る。610･611はチャートを用いたもので，610は両側縁に，611は下部を中心に両面加工状の成形が認められる。特に，610の右側縁は両面方向から加工している。612は磨製製品の二次利用と考えられ，下部に片面の微細な剥離が見られる。613は下部にわずかながら剥離が見られる。

石核（第85図614～618）

614は剥離面や背面が礫面で構成されることから，分割礫素材の石核と見られる。分割面に調整を加えながら剥片剥離が進行したと考える。615～617は礫面の平坦部を打面とし，分割面を作業面として剥離作業を行っている。また，616・617では打点移動が繰り返される。いずれも小さな礫を用いたもので，617・618は日東産あるいは三船産，615・616は上牛鼻産，614は腰岳産黒曜石と思われる。

原礫（第86図619・620）

いずれも一部を打ち欠いてあることから，石材の質の確認を行った可能性がある。

石錘（第87図621）

扁平な楕円礫の短軸の両端に抉りを入れているが，軸の中心線からはずれている。

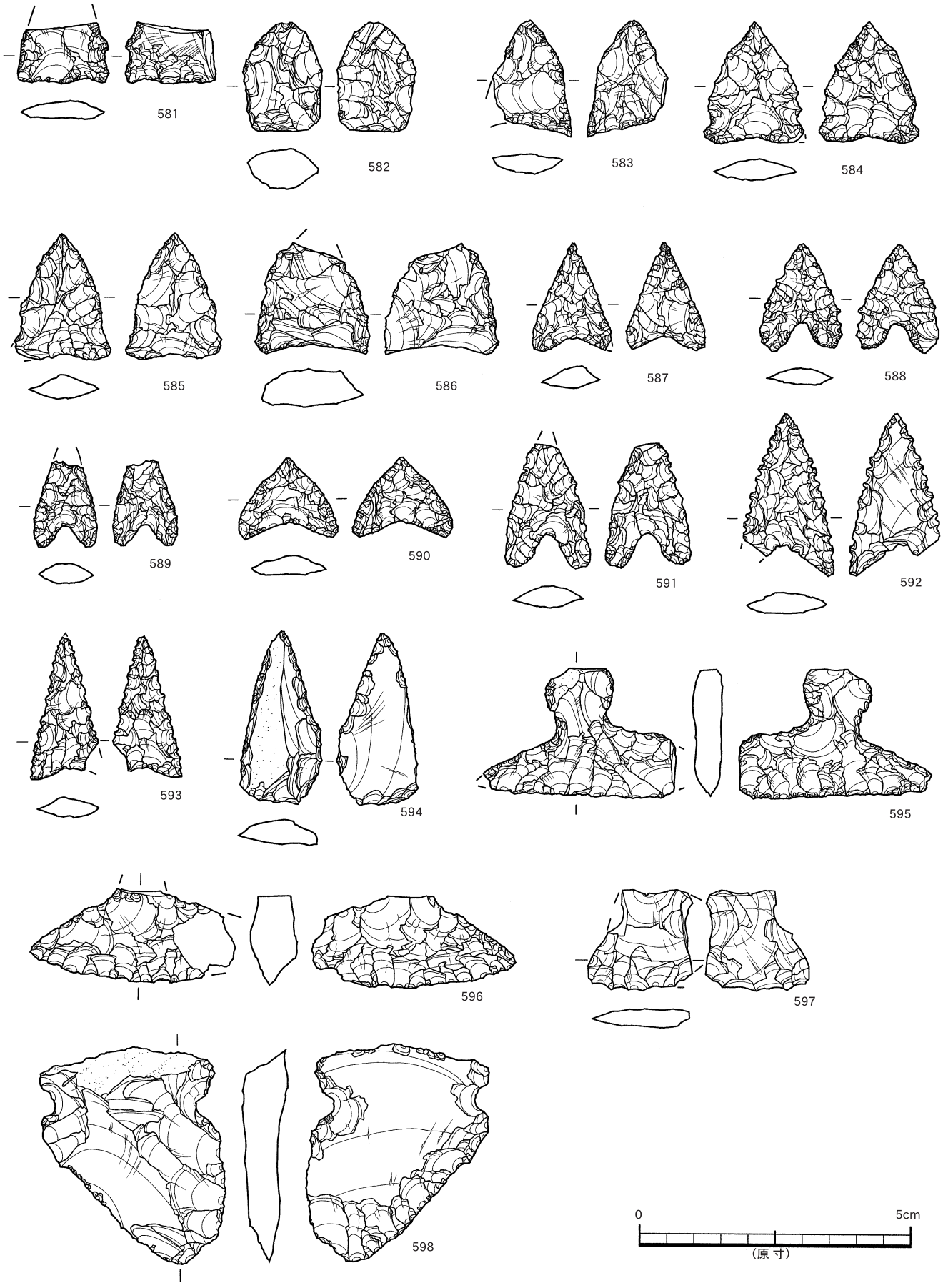
磨製・打製石斧（第87図622～629）

622～627は磨製石斧である。622はホルンフェルスを短冊状に加工し，長軸の両端を両面研磨して刃部をつけている。両側面も手になじむよう研磨しており，丁寧に作られている。623は上端を強く研磨しており，両側面にも軽く研磨した跡がある。切先部は緩やかに弧状を成し，裏面を中心に研ぎ直しを実施している。624は，破損した刃部の再生を試みた可能性が読み取れる。625は花崗岩を石材として非常に丁寧に仕上げており，断面は歪みのない楕円形となっている。626は基部を鋭利に仕上げたものである。背面は平坦に研磨されている。627は大型の磨製石斧の下部で，両面を平坦に研磨している。刃部の調整も丁寧である。

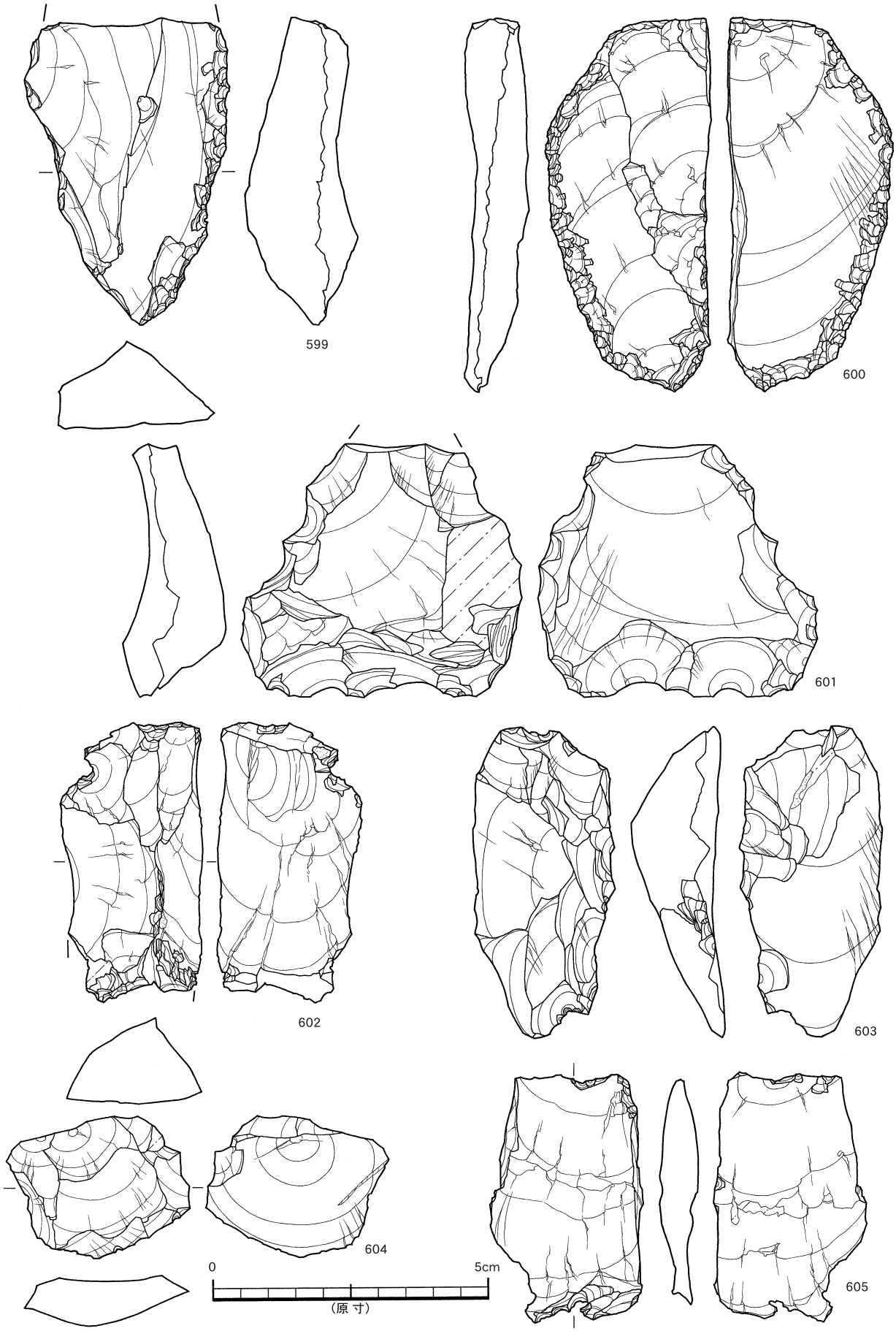
628・629は打製石斧である。628は上部に抉りを入れており下部を半円形に仕上げる分銅形。629は縦長扁平な素材を粗い調整で，短冊状に仕上げている。刃部には細かい剥離が認められる。

敲石（第87図630～第88図639）

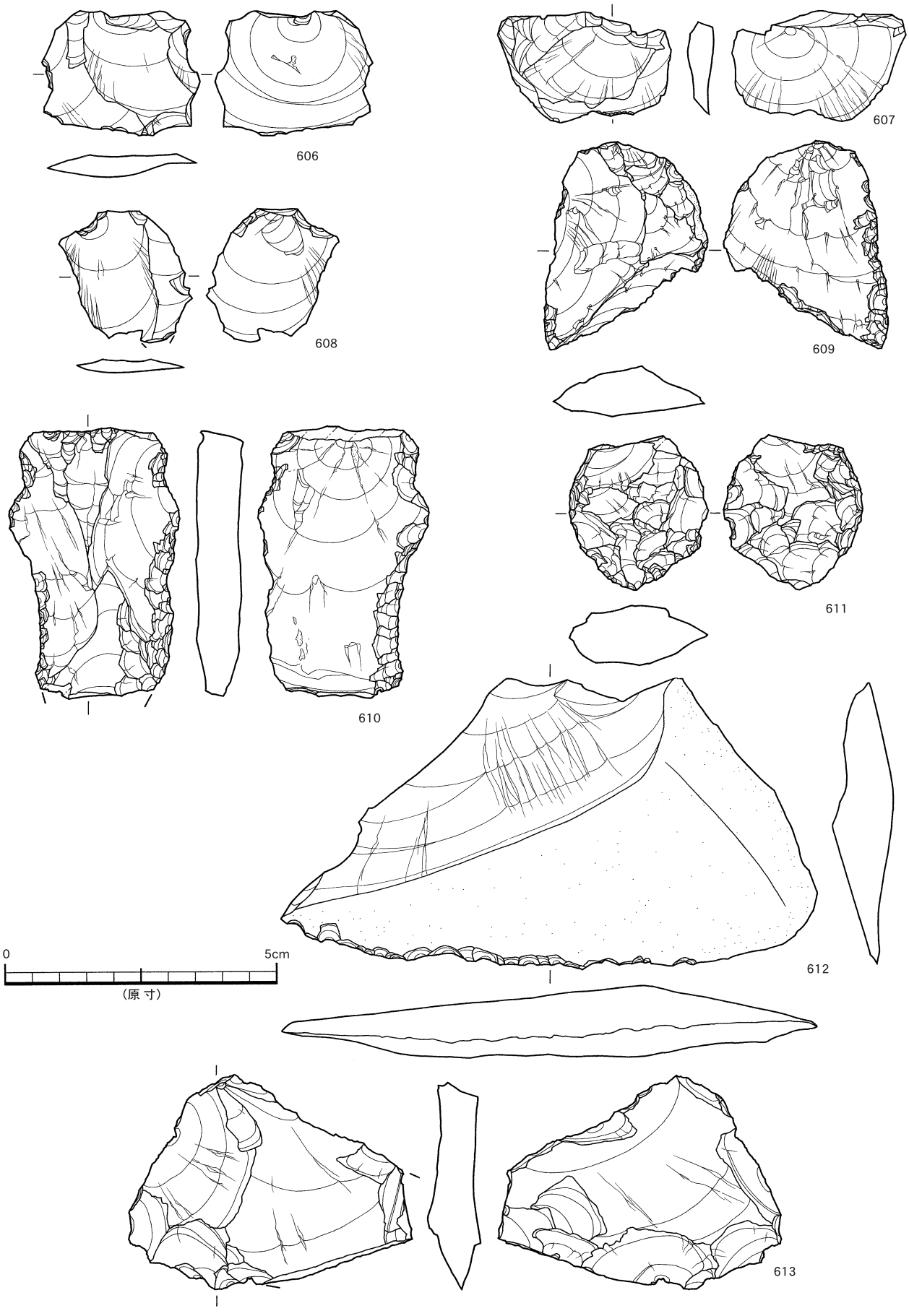
630～633は円礫を使用したもので，いずれも明瞭な敲打痕が残る。631･633の上側面には摩滅痕も見られる。632の下側面の敲打痕には赤変が見られるが，顔料によるものか被熱によるものかは判断できない。634は長めの楕円礫を用いたもので，長軸の両端に明瞭な敲打痕が残る。



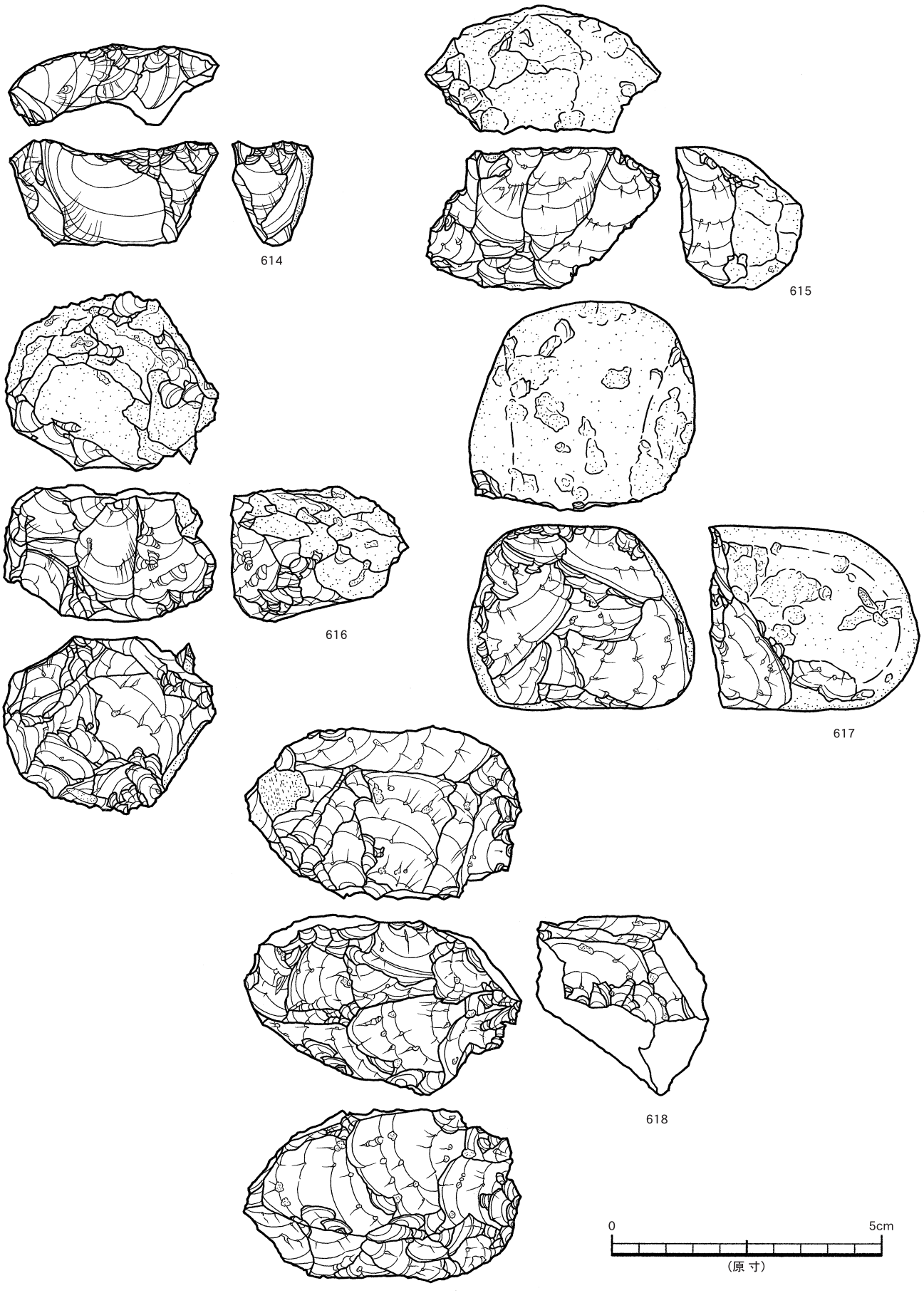
第82図　縄文時代前期～晩期石器実測図（１）



第83図　縄文時代前期～晩期石器実測図（２）

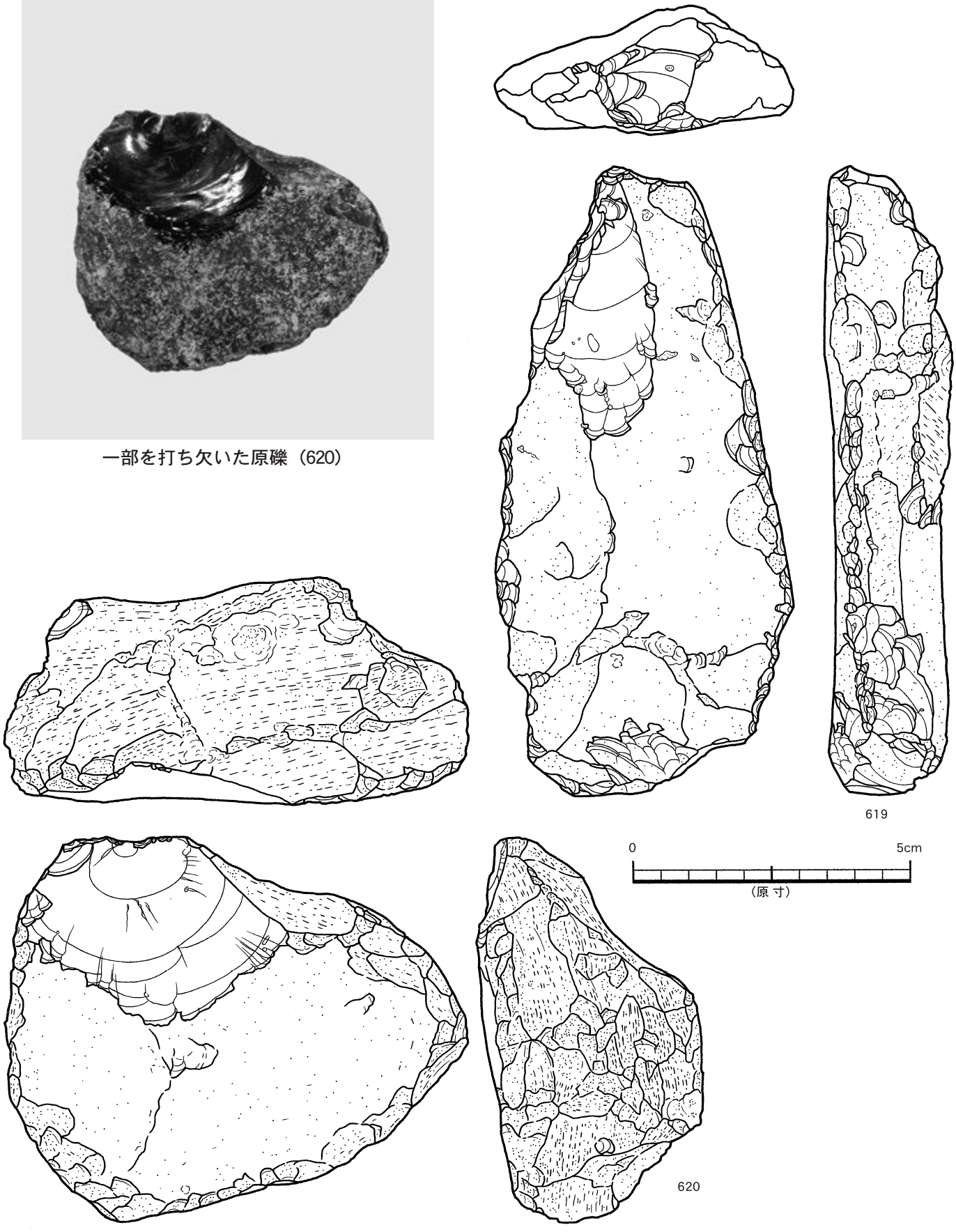


第84図　縄文時代前期～晩期石器実測図（３）

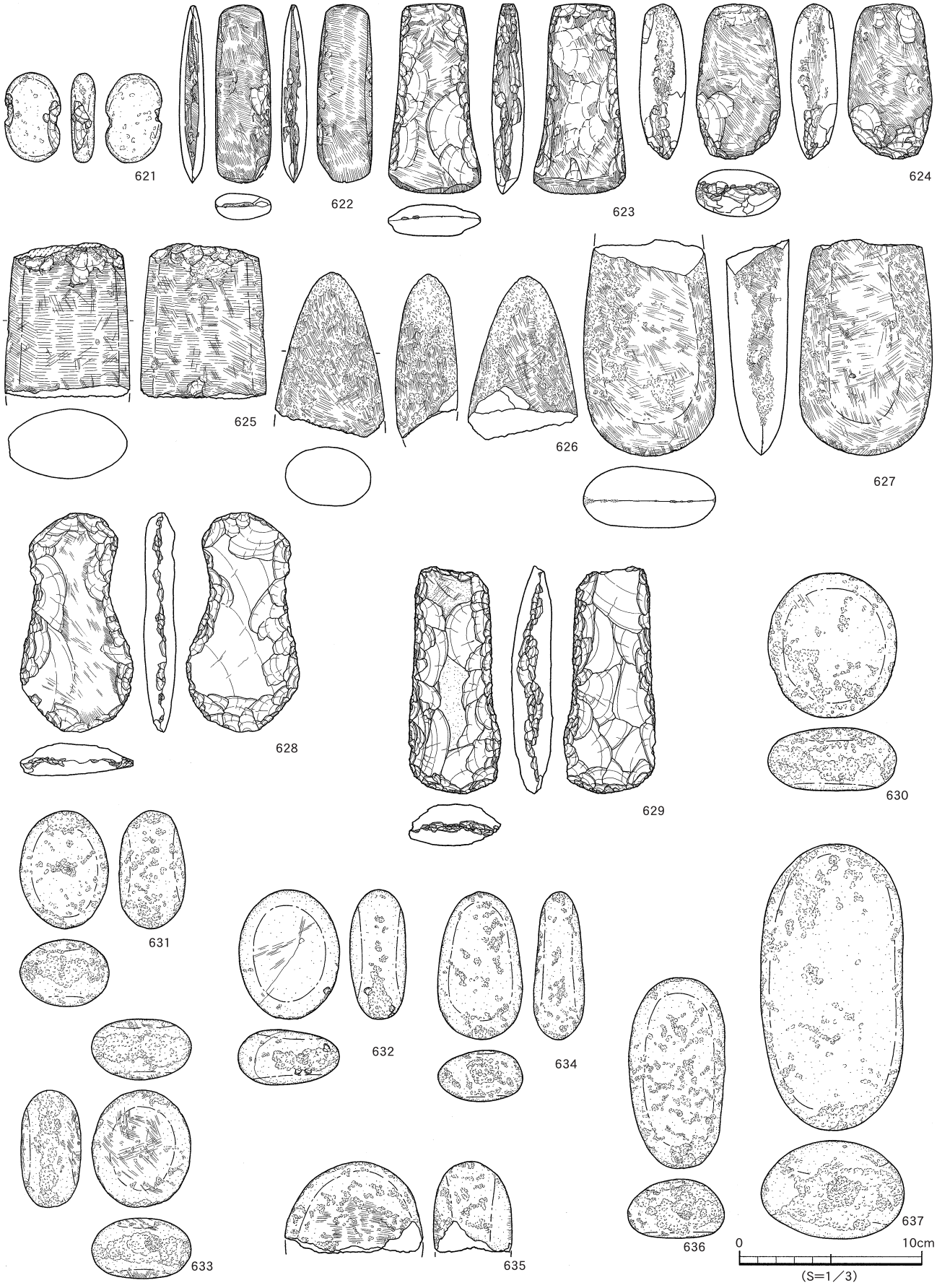


第85図　縄文時代前期～晩期石器実測図（４）

一部を打ち欠いた原礫（620）



第86図　縄文時代前期～晩期石器実測図（５）



第87図　縄文時代前期～晩期石器実測図（６）

638は扁平な礫を使用したもので両端に敲打痕が残り，下部には煤が付着している。639は扁平な三角礫を使用し，３つの角に敲打痕が残る。特に２つの角には敲打による凹みが見られる。

磨石（第88図640～642）

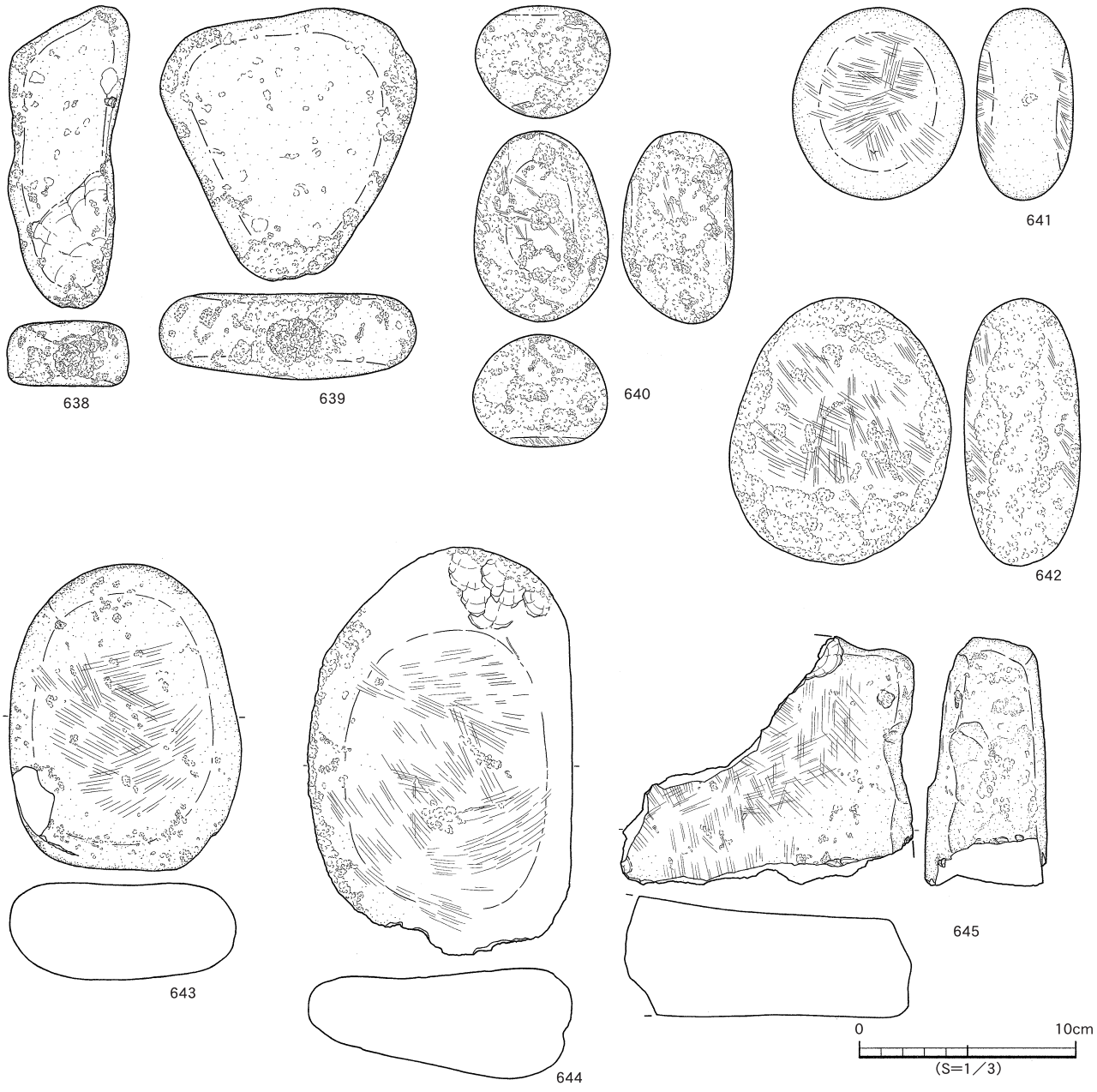
640は卵状の礫の両端に摩滅痕が残る。641は平滑面・側面すべてが磨き上げられたように磨れている。642は側面に摩滅や敲打の痕跡が見られるが，全体的に風化を受けており使途の断定は困難である。

石皿（第88図643～第89図646）

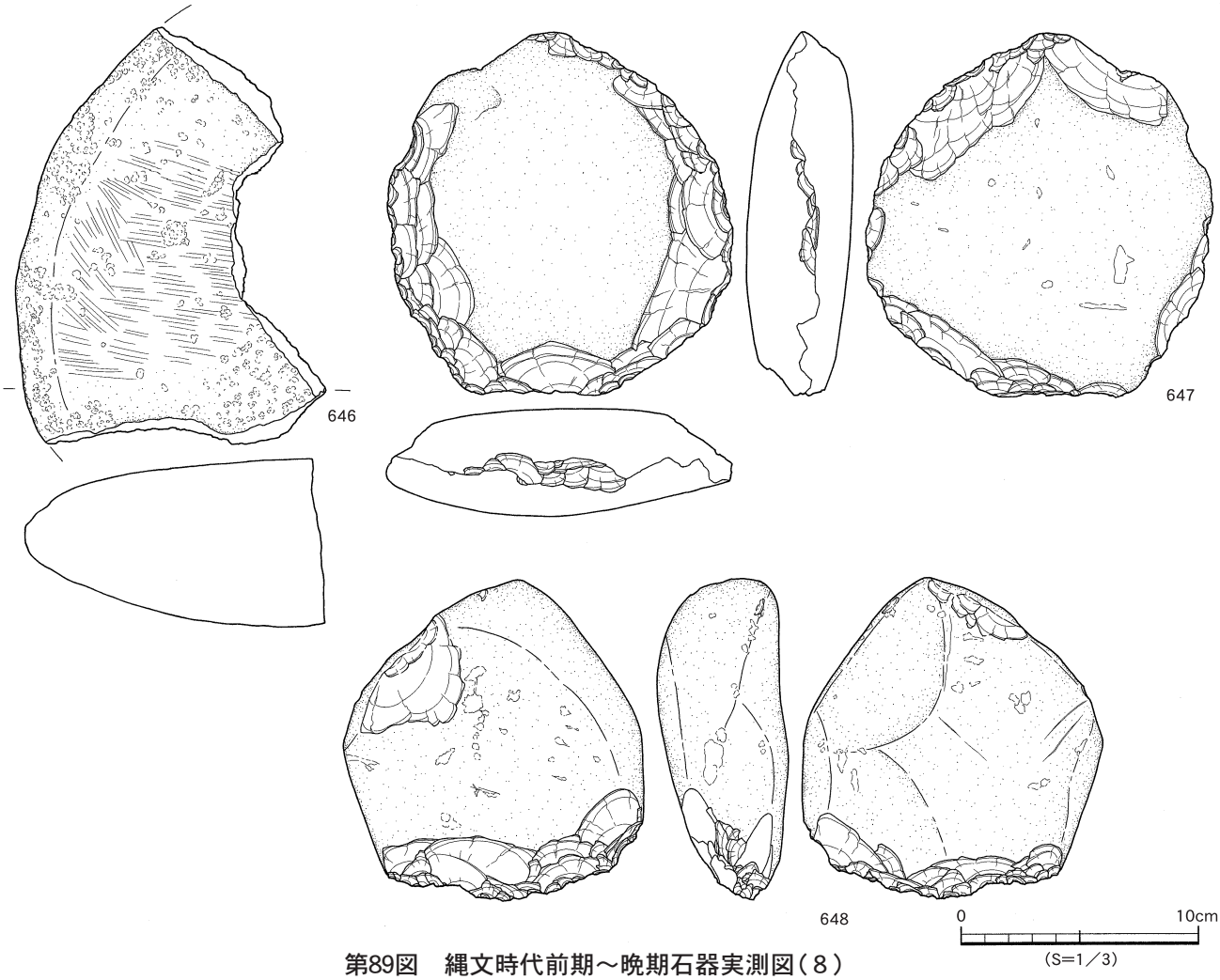
643・645は中央部がなめらかに凹む。いずれも縁辺の一辺に研磨により生じた平滑面がある。645は両面共に使用による摩滅が見られ，板状のものと思われるが大きく欠損しているため全体の形状は不明である。646は円盤状と思われるものの一部で，最大厚７㎝を測る大型のものである。

礫器（第89図647・648）

ホルンフェルスを素材としている。647は円礫の縁辺を両面から粗く調整している。648は扁平な礫の下部に両面から粗く剥離を加えている。



第88図　縄文時代前期～晩期石器実測図（７）



第89図　縄文時代前期～晩期石器実測図（８）

表25　縄文時代前期～晩期石器観察表（１）　※重量の（　）は欠損しているものを示す。

挿図	番号	出土区	層	取上番号	器種	石材Ⅰ	石材Ⅱ	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量　※（g）	備考
82	581	J－7	Ⅲ	1637	打製石鏃	OB	Ⅳ	1.1	1.7	0.4	(0.7)	
	582	K－8	Ⅲ	707	打製石鏃	砂岩	－	2.0	1.4	0.8	(1.9)	
	583	K－7	Ⅱ	1493	打製石鏃	OB	Ⅲ	2.1	1.5	0.4	(0.8)	
	584	J－7	Ⅲ	1390	打製石鏃	OB	Ⅲ	2.2	1.8	0.4	1.2	
	585	K－7	Ⅲ	797	打製石鏃	砂岩	－	2.3	1.8	0.5	1.2	
	586	J－7	Ⅲ	1266	打製石鏃	OB	Ⅰ	2.0	2.1	0.7	(2.8)	
	587	K－8	Ⅲ	525	打製石鏃	チャート	－	2.0	1.5	0.4	0.7	
	588	J－8	Ⅲ	1802	打製石鏃	OB	Ⅲ	2.0	1.5	0.3	0.6	
	589	K－7	Ⅲ	1487	打製石鏃	OB	Ⅴ	1.6	1.2	0.4	(0.5)	
	590	J－7	Ⅰ	一括	打製石鏃	OB	Ⅰ	1.5	1.8	0.4	0.6	
	591	K－8	Ⅲ	1497	打製石鏃	OB	Ⅴ	2.3	1.6	0.4	(1.0)	
	592	K－8	Ⅲ	1530	打製石鏃	砂岩	－	3.0	1.7	0.4	(1.2)	
	593	L－8	Ⅲ	1148	打製石鏃	OB	Ⅴ	2.6	1.3	0.4	(0.7)	
	594	J－7	Ⅲ	1669	打製石鏃	頁岩	－	3.1	1.5	0.5	2.2	
	595	L－10	Ⅱ	134	石匙	OB	Ⅳ	2.4	3.5	0.6	(3.3)	
	596	L－8	Ⅲ	1191	石匙	OB	Ⅴ	1.7	3.8	0.9	(4.4)	
	597	J－7	Ⅲ	1735	石匙	チャート	－	1.9	1.9	0.3	(1.7)	
	598	L－8	Ⅲ	1185	石匙	OB	Ⅴ	4.0	3.4	0.8	10.1	
83	599	K－8	Ⅰ	一括	スクレイパー	チャート	－	5.6	3.7	1.6	32.3	
	600	L－8	Ⅲ	1163	スクレイパー	OB	Ⅱ	6.7	3.0	1.2	21.0	
	601	L－9	Ⅲ	878	スクレイパー	ホルンフェルス	－	4.6	5.1	1.9	37.3	
	602	L－8	Ⅲ	1150	剥片	チャート	－	5.0	2.6	1.6	20.8	
	603	K－8	Ⅲ	663	剥片	チャート	－	5.6	2.6	1.7	16.4	
	604	L－8	Ⅲ	1764	剥片	チャート	－	2.6	3.3	0.9	6.3	
	605	K－8	Ⅲ	679	剥片	チャート	－	4.5	2.8	0.7	9.4	
84	606	L－8	Ⅲ	1691	剥片	チャート	－	2.3	2.9	0.5	3.2	
	607	L－8	Ⅲ	1157	剥片	チャート	－	2.0	3.2	0.5	2.9	
	608	L－8	Ⅲ	1221	剥片	チャート	－	2.4	2.4	0.2	1.5	
	609	J－7	Ⅲ	721	二次加工剥片	OB	Ⅱ	3.9	3.0	0.9	8.2	
	610	K－8	Ⅲ	1525	二次加工剥片	チャート	－	5.0	3.2	0.9	16.1	
	611	J－7	Ⅲ	333	二次加工剥片	チャート	－	2.8	2.5	1.1	7.4	
	612	L－9	Ⅲ	865	二次加工剥片	砂岩	－	5.4	9.9	1.1	56.2	
	613	K－8	Ⅲ	673	二次加工剥片	ホルンフェルス	－	4.0	5.2	1.0	19.1	

表26　縄文時代前期～晩期石器観察表（２）　　※重量の（　）は欠損しているものを示す。

挿図	番号	出土区	層	取上番号	器種	石材Ⅰ	石材Ⅱ	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量　※（g）	備考
85	614	L－9	Ⅲ	855	石核	OB	Ⅳ	1.9	3．9	1.5	8.9	
	615	J－7	Ⅲ	1281	石核	OB	Ⅰ	2.5	4.4	2.3	24.3	
	616	L－9	Ⅱ	647	石核	OB	Ⅰ	2.5	4.0	3.3	34.6	
	617	L－9	Ⅲ	646	石核	OB	Ⅱ	3.4	4.2	3.8	75.5	
	618	L－9	Ⅱ	613	石核	OB	Ⅱ	3.3	5.1	3.1	49.2	
86	619	K－8	Ⅲ	697	原礫	OB	Ⅳ	11.4	5.4	2.2	137.5	
	620	K－8	Ⅲ	698	原礫	OB	Ⅳ	6.9	8.4	4.2	220	
87	621	J－8	Ⅱ	1796	石錘	安山岩	－	4.8	3.0	1.3	22.3	
	622	L－7	Ⅲ	1714	石鏨	ホルンフェルス	－	9.6	3.0	1.4	59.4	
	623	K－8	Ⅱ	517	磨製石斧	砂岩	－	10.3	5.0	1.7	124.2	
	624	K－8	Ⅱ	393	磨製石斧	ホルンフェルス	－	8.4	4.5	2.6	143.9	
	625	J－7	Ⅲ	1254	磨製石斧	花崗岩	－	8.4	6.8	3.8	410	
	626	J－7	Ⅲ	1240	磨製石斧	安山岩	－	8.9	6.0	3.2	210	
	627	J－7	Ⅲ	1620	磨製石斧	砂岩	－	11.7	7.2	3.4	440	
	628	J－7	Ⅰ	5003	打製石斧	砂岩	－	11.9	6.1	1.8	144.1	
	629	J－7	Ⅲ	1254	打製石斧	砂岩	－	12.5	5.0	2.3	167.1	
	630	K－8	Ⅱ	379	敲石	安山岩	－	7.8	8.0	3.4	280	
	631	J－7	Ⅲ	1579	敲石	安山岩	－	6.4	4.8	3.6	131.0	
	632	K－8	Ⅲ	1818	敲石	安山岩	－	7.0	5.5	3.0	162.0	
	633	J－7	Ⅲ	1640	敲石	安山岩	－	6.3	5.4	3.2	173.8	
	634	K－8	Ⅲ	761	敲石	安山岩	－	8.0	4.6	2.8	115.0	
	635	K－7	Ⅲ	1478	敲石	安山岩	－	4.9	7.5	4.2	(181.5)	
	636	L－9	Ⅱ	399	敲石	安山岩	－	10.4	5.3	3.2	210	
	637	J－7	Ⅲ	724	敲石	安山岩	－	15.5	7.7	5.0	890	
88	638	J－7	Ⅲ	1288	敲石	安山岩	－	13.9	5.5	2.9	350	
	639	K－7	Ⅲ	1757	敲石	安山岩	－	12.5	11.8	3.9	850	
	640	J－8	Ⅲ	1896	磨石	安山岩	－	8.8	6.2	5.1	320	
	641	K－8	Ⅲ	564	磨石	砂岩	－	8.7	7.8	4.4	440	
	642	J－7	Ⅲ	1327	磨石	安山岩	－	12.3	11.1	5.2	870	
	643	K－8	Ⅲ	1758	石皿	安山岩	－	14.1	10.6	4.4	1130	
	644	L－9	Ⅲ	614	石皿	安山岩	－	18.8	12.1	5.1	(1850)	
	645	J－8	Ⅲ	1899	石皿	安山岩	－	11.3	13.2	4.5	(970)	
89	646	K－7	Ⅲ	1756	石皿	安山岩	－	17.5	12.6	7.1	(1690)	
	647	J－8	Ⅱ	1800	礫器	ホルンフェルス	－	15.0	14.5	4.1	1200	
	648	J－8	Ⅲ	1864	礫器	ホルンフェルス	－	13.6	12.6	5.5	1150	

3　弥生時代から古墳時代の調査成果

⑴　概要

弥生時代及び古墳時代の包含層は，南側調査区のⅡ層，主にＫ・Ｊ－７・８区である。遺構は検出されず，遺物の出土量も多くはなかったが，ある程度まとまった単位で出土しており古墳時代の甕形土器２点，壺形土器２点が復元できた。

⑵　遺物（第90・91図）

15類・甕形土器と16類・壺形土器及び高坏等について，器形の特徴をもとに時代ごとに整理した。

弥生時代については前期の土器の土器片４点と中期と思われる土器片１点を図化した。

649～652はいずれも内外面に丁寧なヘラ磨き調整を施した壺形土器である。649は頸部から緩やかに口縁部へ内傾するもので，肩部が張るものと思われる。650は肩部に２条の沈線を巡らすものである。651は，頸部がゆるやかに内傾し，口縁部は短く外反するものである。652は壺形土器の底部と思われる。底部内面にわずかな凹みを有し，大きく開きながら胴部へと立ち上がるものである。

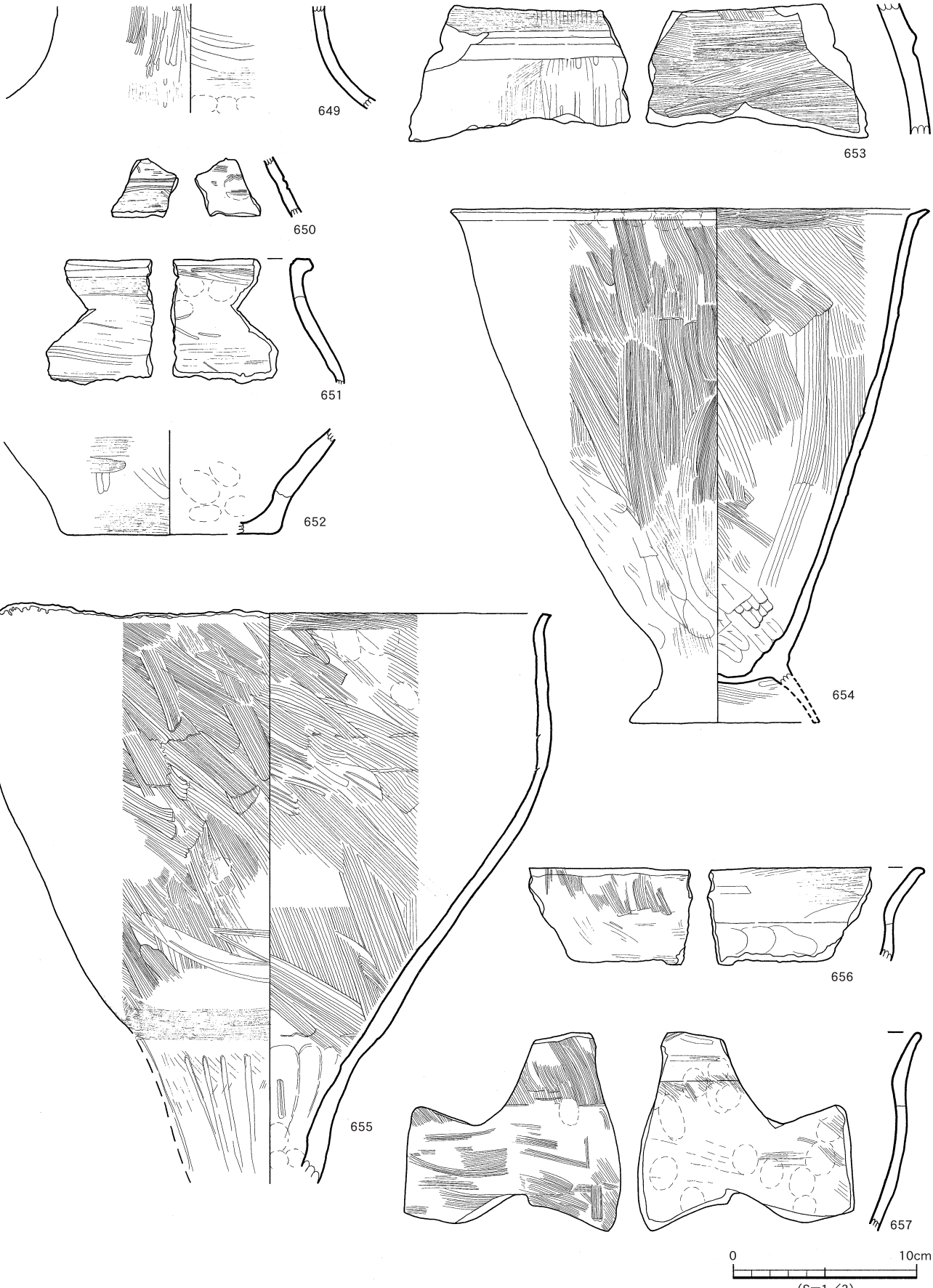
653は肩部に三角突帯を巡らす甕形土器で，弥生中期と思われる。外面はヘラミガキ，内面は細かいハケ目が認められるが，ミガキのような仕上がりになっている。

654～662は古墳時代に位置づけられるものと思われる。

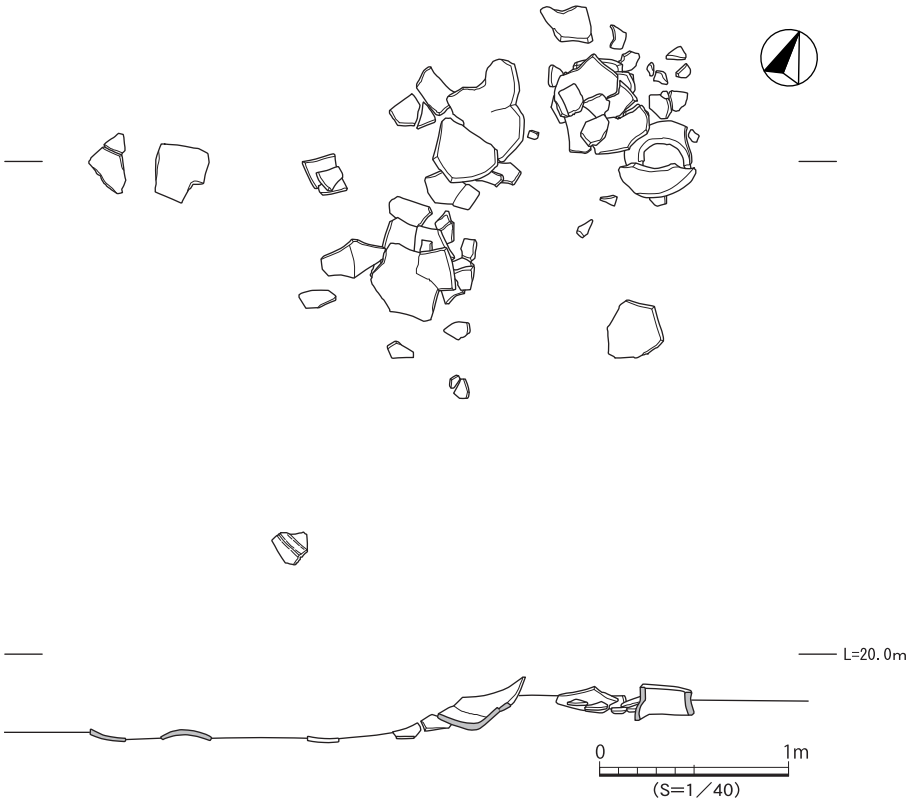
654～658は甕形土器である。654は口縁径26㎝，底部径10.3㎝，器高28㎝を測る。底部は中空の脚台であるが，脚台の高さが低いという特徴がある。胴部は直線的に立ち上がり，膨らまない。口縁部は「く」の字状に短く外反し，内面には稜線を有する。655は口径30.6㎝を測る。細くすぼまった底部から外方へ立ち上がり，最大径の口縁部下位からやや内傾気味に口縁部へ至るが，端部でわずかに外反する。底部のすぼまり具合などこれまでにあまり見ない器形で，甑の可能性も考えられるものである。654・655ともに内外面に丁寧なハケ目調整が施されているが，654は縦位の仕上げが目立つ。656・657は口縁部が「く」の字状に外反するが，内面に稜線は認められない。658は底部で中空の脚台であるが，やや小ぶりの甕形土器である。

659～661は高坏である。659は口縁径20.4㎝を測る坏部である。大きく外反した体部は中間に接合痕が認められ，段を有する。口縁部はやや内弯する。660・661は脚柱部である。660は緩やかに開きながら裾部へ至るものである。

662は壺形土器である。第91図に示したように，土器片が集中して出土し，ほぼ完形に復元されたものである。口縁径17.8㎝，胴部径32.5㎝，器高51.2㎝と大型の壺である。やや尖り気味の底部から緩やかに立ち上がり，胴部はあまり張らない。締まった頸部からわずかに外反した後，口縁部上位は袋状を呈する二重口縁である。肩部にやや広めの刻目突帯を巡らし，頸部にも刻目突帯を巡らすものである。外面には粗いハケ目調整が見られるが，胴部にも同一の工具による刻みが施される。また，頸部の突帯の刻みは，斜め方向の刻みと格子目の刻みが見られる。



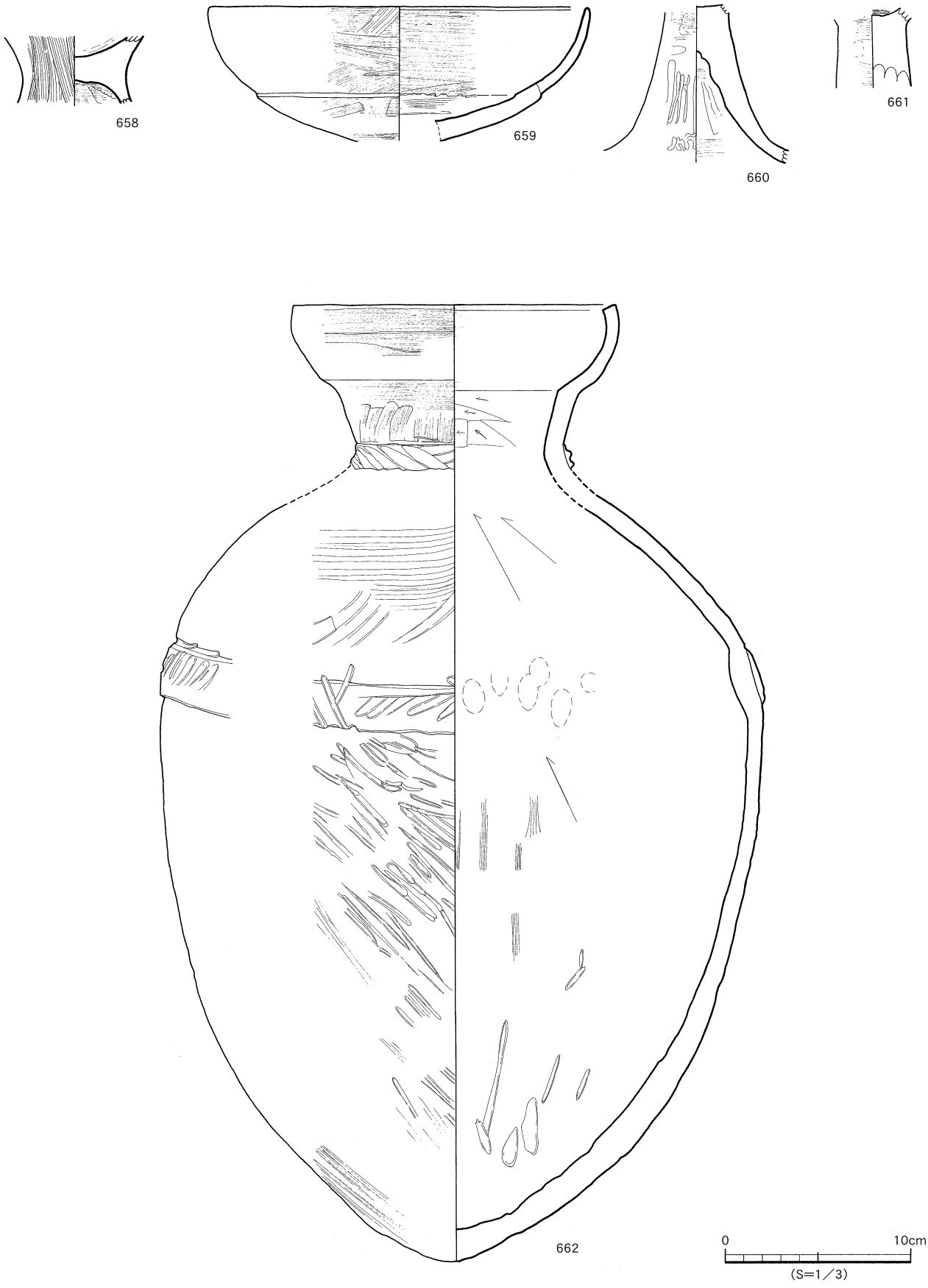
第90図　弥生・古墳時代土器実測図（１）



第91図　壺形土器（662）出土状況実測図

表27　弥生・古墳時代土器観察表

挿図	番号	出土区	層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		胎土						備考
								外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	赤粒	
90	649	J－7	Ⅱ	1056	16	頸部	－	ミガキ	ミガキ	褐色	黄褐色	○	○			○		
		K－7		1445														
	650	J－8	Ⅱ	1040		胴部	－	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	明黄褐色	○	○	○				
	651	K－7	Ⅱ	453		口縁部	－	ナデ	ナデ	明赤褐色	赤褐色	○	○	○		○		火山ガラス
				491														
			Ⅲ	796														
	652	R－19	Ⅱ	157		底部	－	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄橙色	○	○	○				
	653	－	－	一括	15	胴部	－	ミガキ	ミガキ	黒色	褐色	○	○					煤付着
	654	J－8・9	Ⅱ	1079		完形	条痕文	ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい黄橙色	○	○			○		
	655	J－7・8	Ⅱ・Ⅲ	1093		口縁～底部	条痕文	ナデ	ナデ	橙色	黄橙色	○	○			○		煤付着
	656	J－8	Ⅱ	1065		口縁部	－	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	明黄褐色	○	○					煤付着
			Ⅲ	1543														
	657	J－8	Ⅱ	1049		口縁～胴部	－	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	○				
				1566														
		J－7	Ⅲ	1654														
92	658	J－7	－	一括		胴部	－	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	○				
	659	J－8	Ⅱ	1034	高坏	口縁～胴部	－	ナデ	ナデ	明赤褐色	橙色	○	○			○		
				1067														
				1778														
				1791														
	660	J－8	Ⅱ	1098		胴部	－	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	暗灰黄色	○	○	○		○		
	661	J－8	Ⅲ	1554		胴部	－	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	にぶい黄色	○	○					
	662	J－8	－	一括	16	完形	－	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○			○		

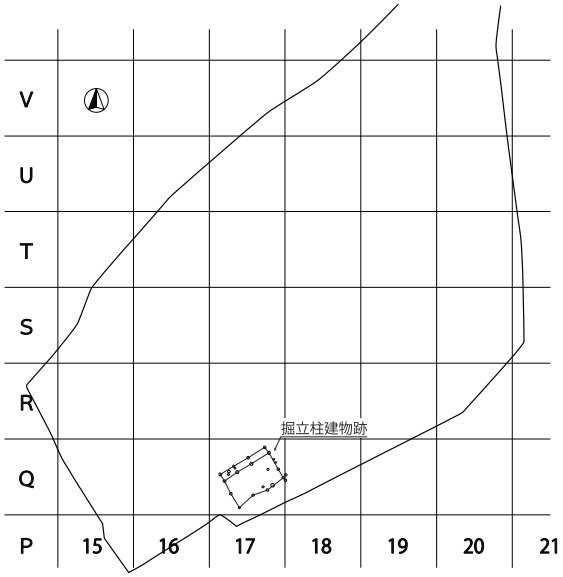


第92図　弥生・古墳時代土器実測図（２）

4　古代から中世の調査成果

⑴　概要

古代から中世の調査もⅡ層を中心に行った。遺構については，中世のものと考えられる掘立柱建物跡１棟を北側調査区で検出した。検出面は，弥生・古墳時代の遺物層や後述する近世以降の遺構検出面とほぼ同じで，層位的に判断できないところであるが，既知の事例と比較して当該期と判断した。遺物については南北両調査区でそれぞれ数点の土師器等を確認した程度であり，5点の図化に留まった。



第93図　古代～中世遺構配置図

⑵　遺構

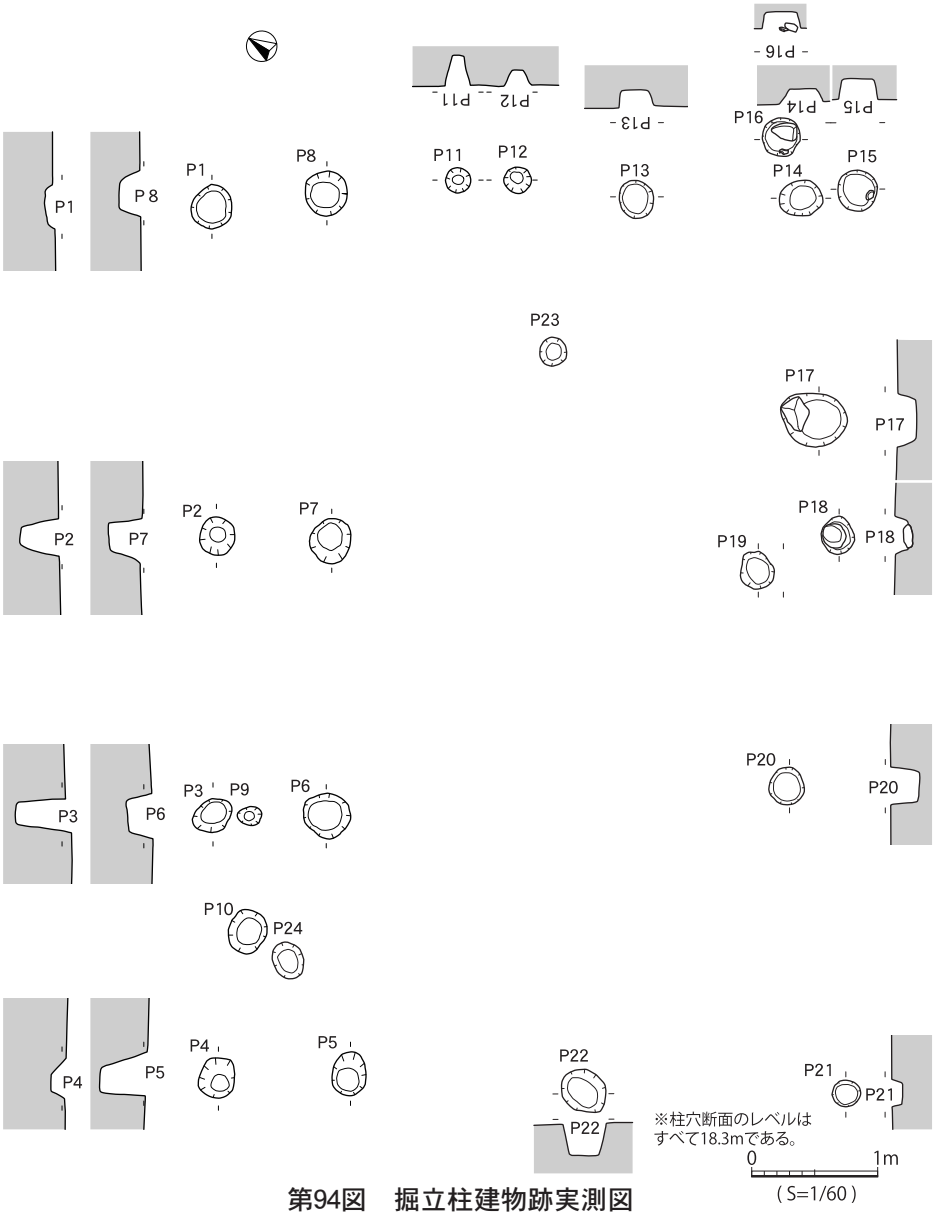
掘立柱建物跡

Q－17区で検出した。上屋は３間×２間の建物で，主軸方向はおよそN60°Eで，川内川に沿っている。北西方向に半間の距離を置いて上屋と同程度の柱穴が並んでおり，庇と考えられる。Ｐ８とP13間に２つの小さな柱穴が見られるが，軸に沿っていることから補強等の束柱の可能性がある。P18とP17では後者の方がやや大きいが，配列と周囲の柱穴の規模から，前者の方が柱跡と考えた。

⑶　遺物

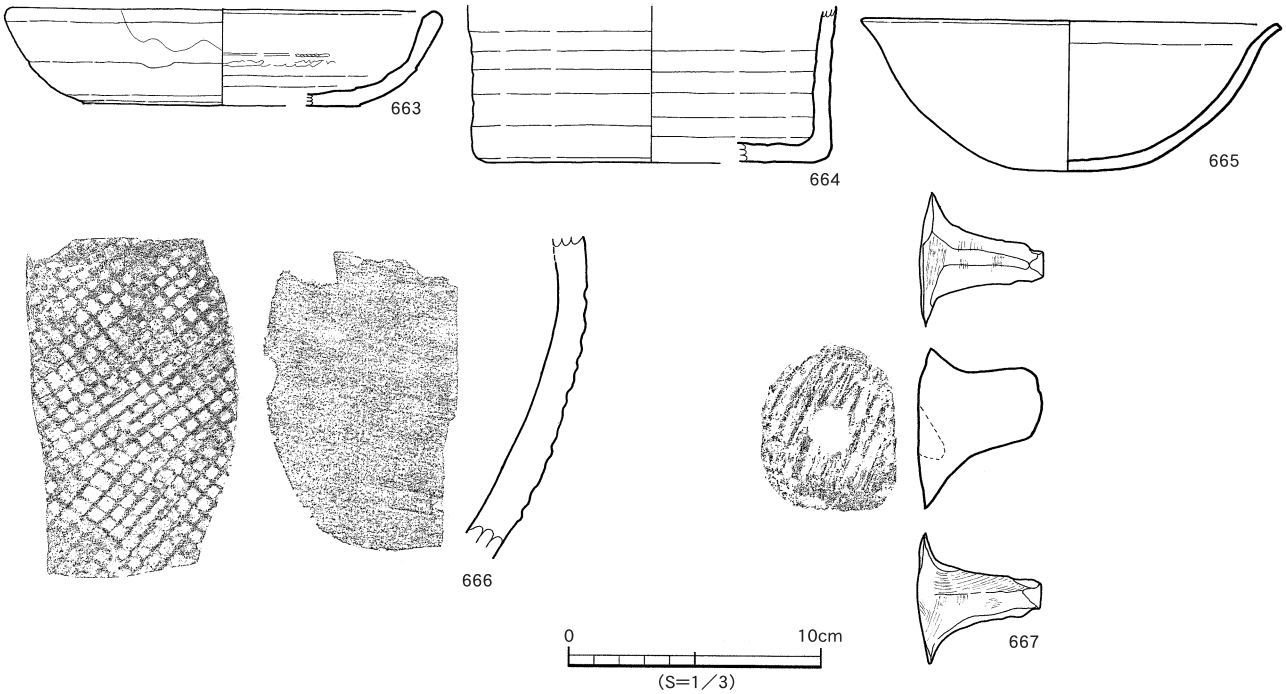
663はやや大型の皿である。口縁径17.3㎝，器高3.8㎝を測る。体部は丸みを帯び，口縁端部は厚く仕上げている。器外面には煤の付着が認められる。664･665は鉢である。664は底部径14.4㎝を測り，平底から直行気味に立ちあがるものである。665は口縁径16.6㎝，器高6.0㎝を測るやや浅いものである。平底から大きく膨らんだ体部は口縁部で外反し，口縁内面には稜線を有する。

666は須恵器の甕の胴部である。外面は明瞭な格子目タタキ，内面は丁寧なナデ仕上げである。667は土師器の把手と思われる



第94図　掘立柱建物跡実測図

ものである。把手部分は４㎝とやや短いもので，装着状況はほぼ平行になると思われる。接着面には接着を強化するためと思われるタタキの痕跡が認められる。



第95図　古代～中世土器実測図

表28　掘立柱建物跡計測表

柱穴番号	計測値（cm）		
	長径	短径	深さ
P１	35	32	6
P２	31	27	31
P３	33	25	41
P４	33	27	11
P５	35	27	36
P６	38	33	19
P７	37	35	26
P８	36	33	17
P９	19	15	20
P10	35	30	13
P11	20	19	25
P12	22	20	12
P13	31	27	13
P14	34	28	11
P15	33	31	16
P16	31	29	14
P17	53	42	14
P18	30	26	10
P19	31	26	25
P20	30	28	23
P21	23	21	8
P22	39	33	25
P23	23	21	13
P24	30	24	11

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	梁行柱間(m)
P８－P14	4.0	P８－P７	2.8
P７－P18	4.1	P７－P６	2.2
P６－P20	3.7	P６－P５	2.1
P５－P21	3.9	P14－P18	2.7
P１－P８	0.9	P18－P20	2.0
P２－P７	0.9	P20－P21	2.5
P３－P６	0.9	P１－P２	2.6
P４－P５	1.1	P２－P３	2.2
		P３－P４	2.1

表29　古代・中世土器観察表

挿図	番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	部位	法量（cm）				調整		色調		備考
								口径	底径	器高	胴径	外	内	外	内	
95	663	P－16	Ⅱ	一括	土師器		口縁～底部	17.3	10.8	3.8	－	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	ヘラ切り
	664	P－16	Ⅱ	一括	土師器		底部	－	14.4	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	明黄褐色	ろくろ
	665	J－８	Ⅱ	948 1019 1025 1027 1029 一括	土師器	鉢	口縁～底部	16.2	－	6.0	－	ナデ	ナデ	淡黄色	灰白色	
	666	北	Ⅱ	一括	須恵器			－	－	－	－	タタキ	ナデ	灰色	灰黄色	
	667	Q－16	Ⅱ	一括	土師器	焙烙		－	－	－	－	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	

5　近世以降の調査成果

⑴　概要

近世以降の遺構・遺物は，北側調査区のみで確認できた。表土除去後すぐにまとまった石列が現れた。調査を進める中で礎石建物跡３棟，布基礎２基（１基は大型の礎石建物跡の中に位置する）を検出した（第96図）。当該区は数10年前まで製材所等が建っており，建築時やその後の解体などの際かなりの削平・攪乱を受けている。そのため遺構検出面の層位の特定が困難であった。

今回の調査では，周辺住民への聞き込みや出土遺物をもとに，これらの遺構は近世のものと判断した。このほか，現代も使用されていたと思われる井戸（図版11）も現れたが，調査を進める中で建築時期を推定するまでは至らなかった。そのため，図化はせず画像での記録にとどめる。

遺物は17世紀から19世紀にかけての陶磁器類が多数出土した。

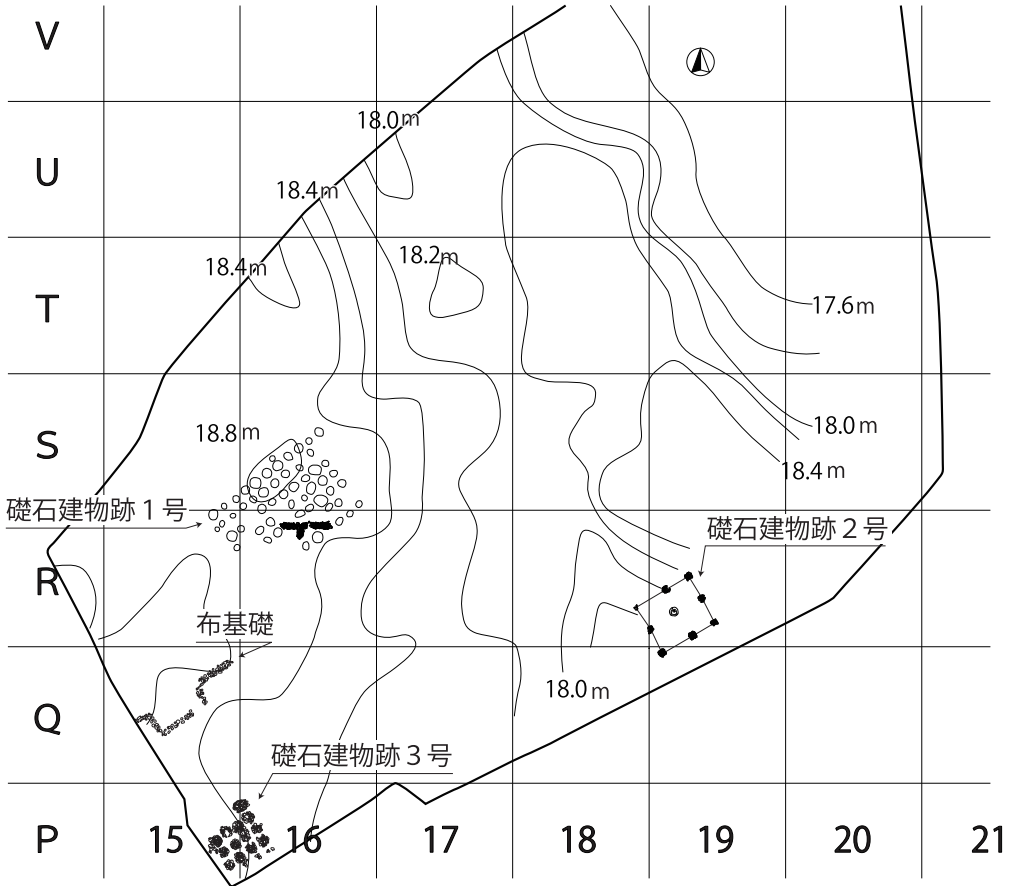
製材所跡（Ⅱ層上面）

⑵　遺構

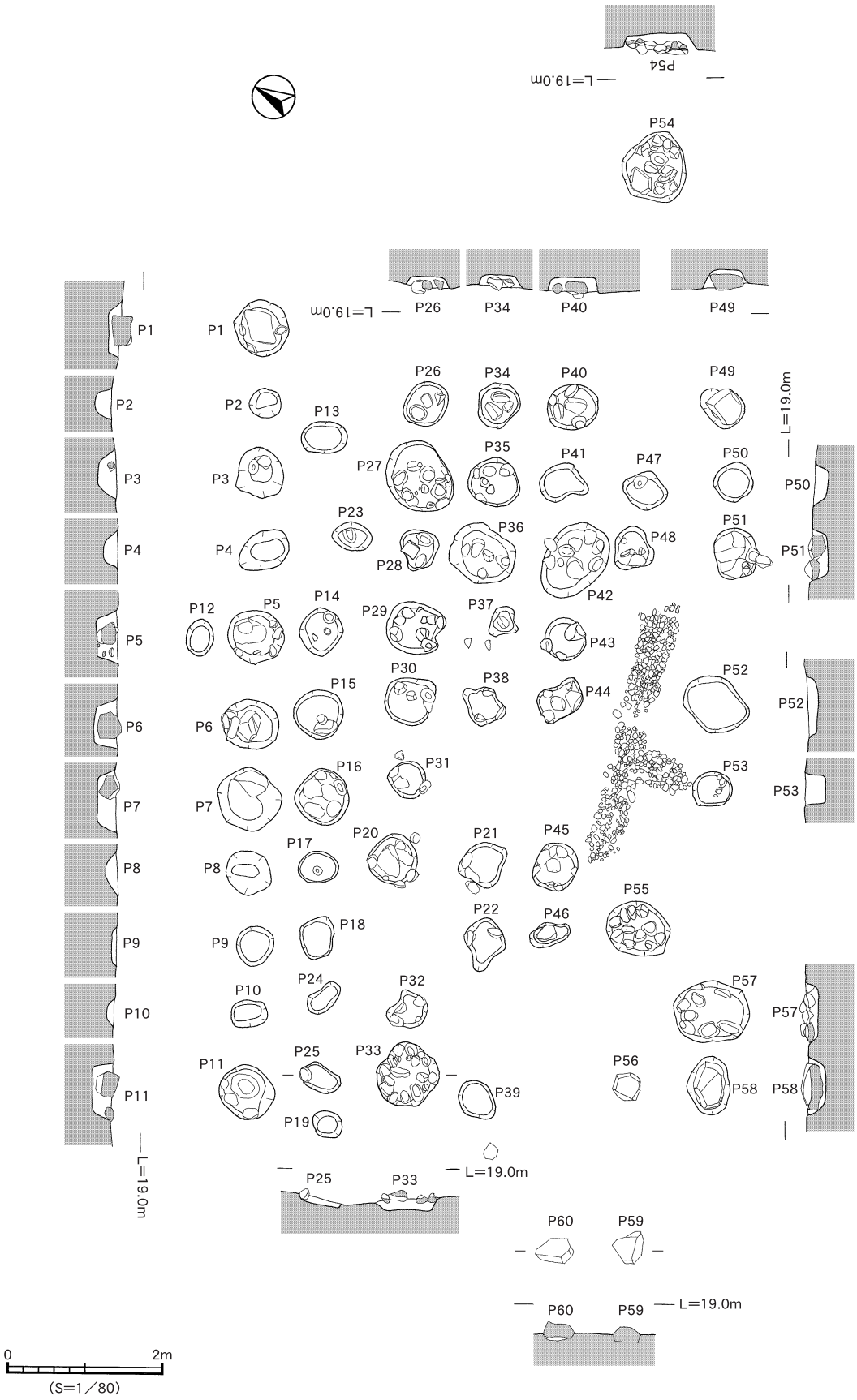
礎石建物跡１号

Ｒ・Ｓ－15・16区で検出した。およそ10m×６mの範囲に９間×６間の礎石を配置した大型の建物を建造していたものと思われる。南側部分は想定する位置に礎石を確認できないものが多い。削平の影響を受けた可能性もあるが，検出面の状況から土間など構造上礎石が必要ない空間であったことも考えられる。掘り込みを確認できたピットが26あり，手のひらほどの大きさの栗石を集めたものや，人頭ほどの大きさの束石を据えたものなど様々な礎石が見られた。

中心よりやや南の位置に，周囲の礎石と比較すると違和感のある布基礎のような石列を検出した。この建物との位置関係から直接は関係がないとも思われるが，断定



第96図　近世以降遺構配置図



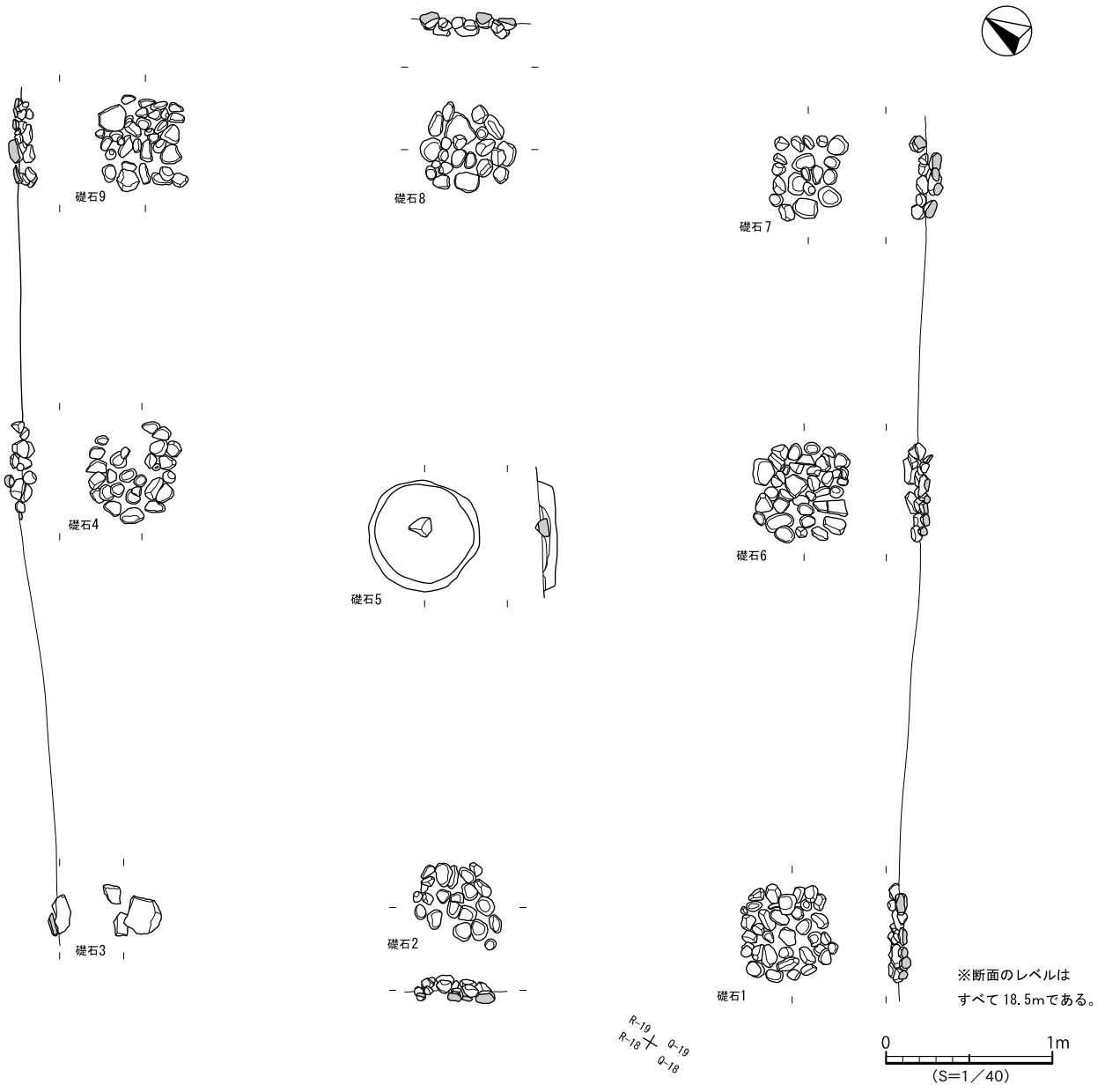
第97図　礎石建物跡１号実測図

はできない。こぶし大ほどの河原石をおよそ400個敷き詰めたもので，礎石建物の軸とはややずれた方向に幅約0.5m，長さ3.5mの石列と，その中心よりやや西にそれた位置から南へ0.6mほど延びる石列を確認した。周囲の礎石とのつながりや掘込み，礎石建物跡周辺での石列など，構造上，あるいは時期的な両者の関係を明らかにするような痕跡は確認できなかった。

礎石建物跡２号

Ｒ－19区で検出した。

２間×２間，梁間，桁行間ともに4.5mほどのほぼ正方形である。礎石2，8が桁の中央にあるのに対して礎石4，6は梁のやや北東寄り（礎石9，7側）にある。直径60㎝ 前後の範囲にこぶし大ほどの栗石を20～40個集めているが，礎石３だけは３個の石しか確認できなかった。後世の撹乱で破壊された可能性も考えられる。下層確認を行ったが，いずれも土質・色調の違いなどは認められず，掘込みは検出できなかった。



第98図　礎石建物跡２号実測図

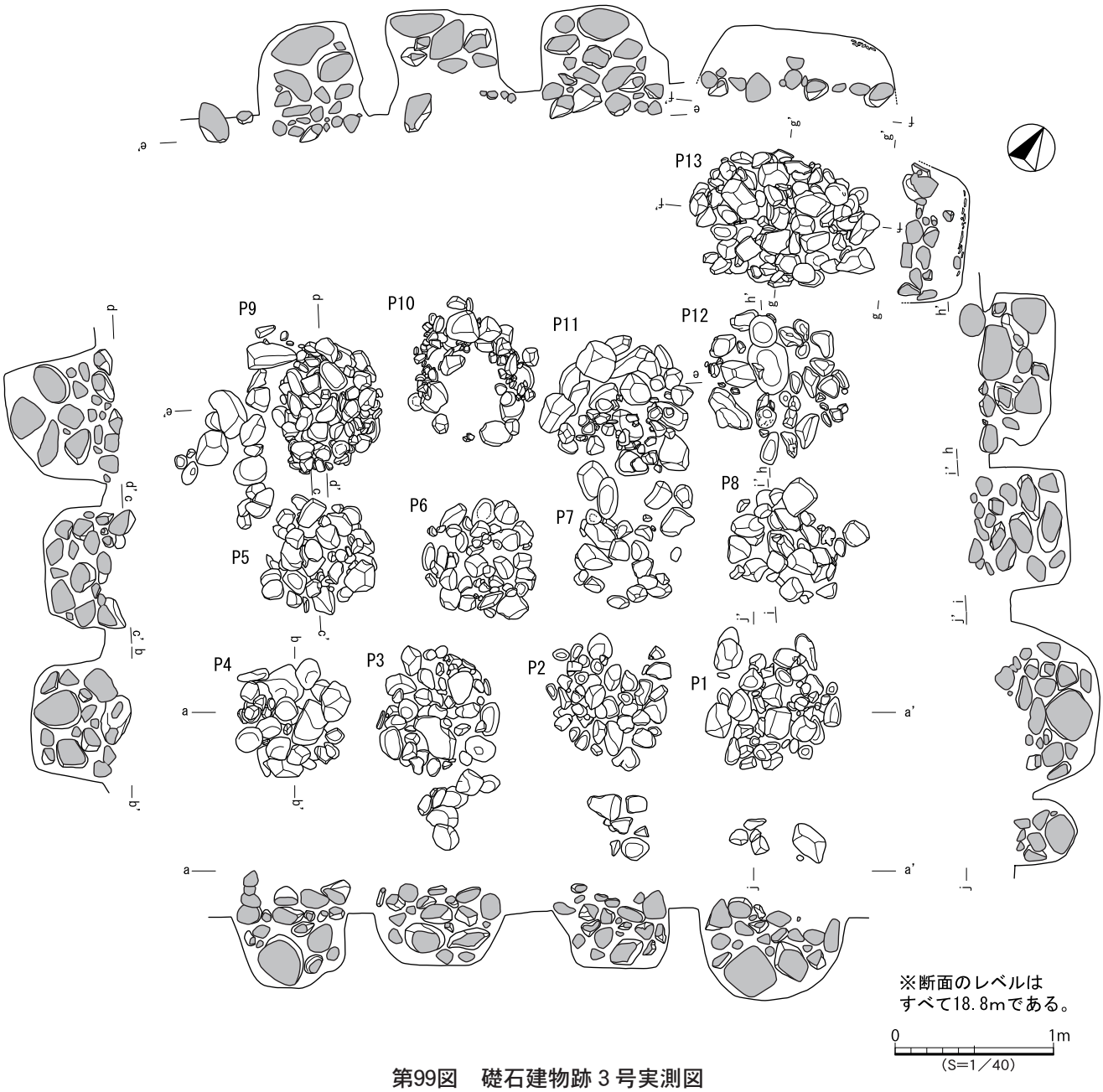
中心から南西方向にややずれた位置に焼土跡を検出した。若干の堀込みが見られ，その下層に10㎝程度の土の赤変を確認できた。しかし，これらの状況から建物の規模と焼土の関連や，礎石建物跡１号との時期的な関係を明らかにすることはできなかった。

礎石建物跡３号

Ｐ－15区で検出した。

３間×２間で，柱間は礎石建物跡２号のほぼ半分程度にもかかわらず，石数は格段に多く，長径30㎝を超えるものも多い。また，ほかの２棟の礎石建物跡と異なり，直径・深さともに70㎝ほどの掘り込みを持つ。地盤が砂質であることも影響していると思われるが，相応の重量を支える必要があったことがうかがえる。

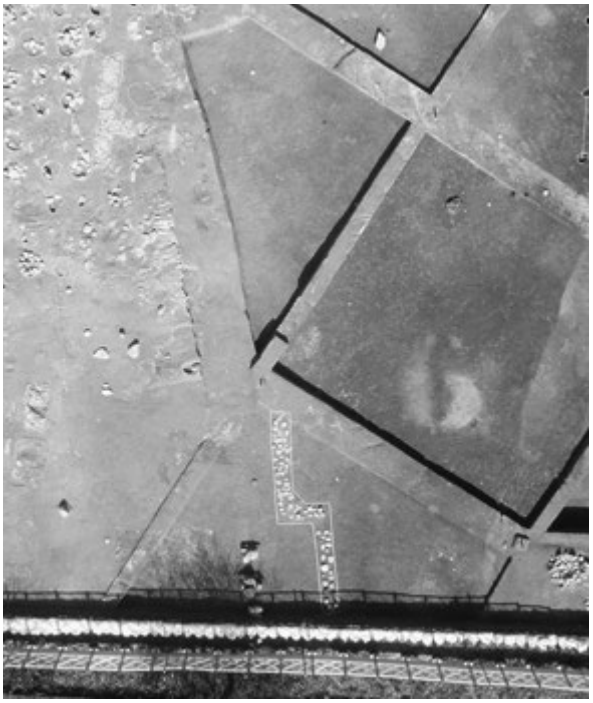
検出状況から南方向にさらに伸びる可能性もあるが，調査範囲外へ広がることから，これ以上は調査できなかった。



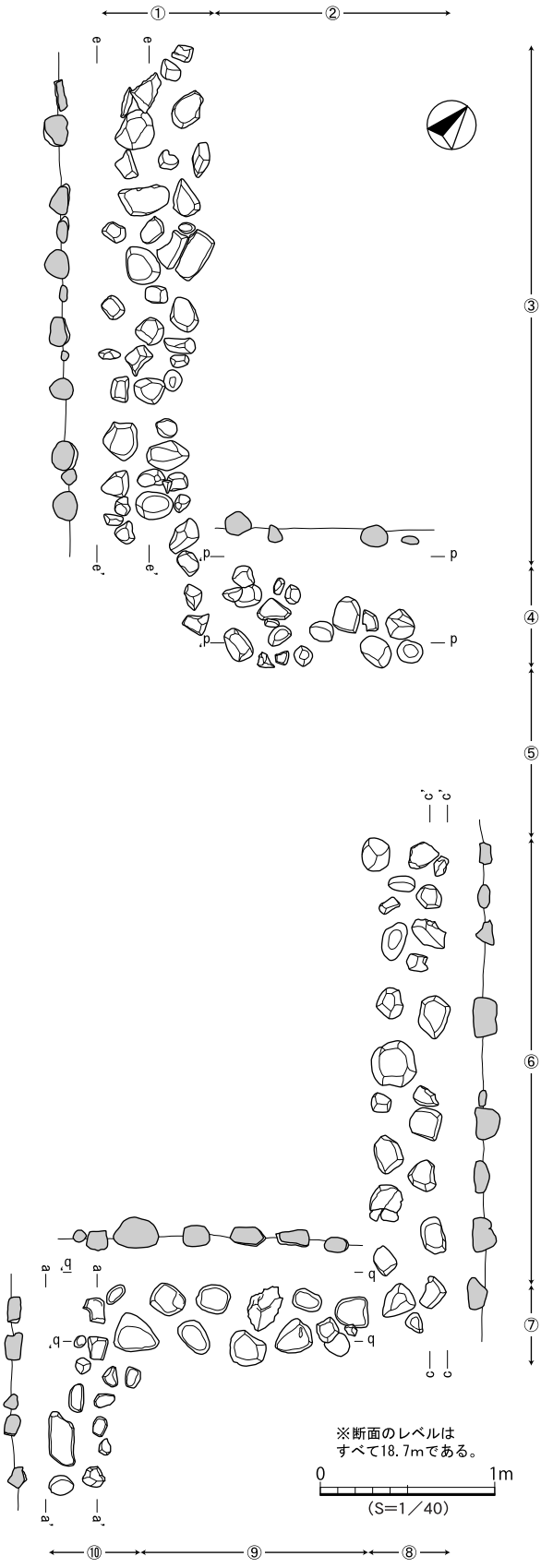
第99図　礎石建物跡３号実測図

布基礎

Q－15区で検出した。ほとんどが川原石のような転礫で，こぶし大程度のものから，大きなものでは40㎝角ほどの石列がクランク状に並ぶ。北側調査区の南際に位置し，その形状から南方向にさらに延びると思われる。今回の調査分でも全長は10mあり，礎石建物跡１号に迫る規模にもなり得る。しかし，検出できたのは石列部分だけで，柱穴等は確認できなかった。検出できた状況での中央部分から北側には，幅１m弱の空白部分がある。これが出入口にあたるのかどうかは定かではないが，可能性としては高いと思われる。また，この布基礎から北西側（川内川方向）には，ひと回り大きなサイズの石列が見られた。この石列との関係も現地では判断がつかなかった。今回，検出できた形状をもとに布基礎と推定したが，県内では類例がなく，詳細については今後の研究に委ねたい。



布基礎の様子



第100図　布基礎実測図

表30　礎石建物跡１号計測表

柱穴番号	計測値（cm）			柱穴番号	計測値（cm）		
	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ
P１	74	70	18	P30	72	62	－
P２	44	38	22	P31	50	48	－
P３	66	60	24	P32	54	46	－
P４	70	50	20	P33	82	74	14
P５	74	68	28	P34	60	70	16
P６	78	64	32	P35	70	64	－
P７	86	74	24	P36	88	70	－
P８	64	76	16	P37	38	36	－
P９	54	48	8	P38	62	40	－
P10	50	36	10	P39	58	44	－
P11	74	66	26	P40	70	60	20
P12	48	38	－	P41	66	44	－
P13	62	42	－	P42	108	78	－
P14	64	54	－	P43	56	52	－
P15	66	62	－	P44	62	40	－
P16	74	70	－	P45	70	54	－
P17	54	42	－	P46	54	32	－
P18	60	44	－	P47	60	52	－
P19	42	34	－	P48	58	44	－
P20	66	62	－	P49	62	48	22
P21	68	58	－	P50	54	46	18
P22	72	48	－	P51	68	46	24
P23	52	40	－	P52	90	66	14
P24	50	26	－	P53	52	46	28
P25	56	32	10	P54	92	82	20
P26	64	54	14	P55	88	70	－
P27	100	80	－	P56	44	36	－
P28	54	50	－	P57	102	80	－
P29	80	68	－	P58	78	58	－

柱穴番号	梁行柱間（m）
P49－P２	6.0
P51－P４	6.1
P52－P６	6.1
P58－P11	6.1
P49－P40	2.0
P40－P26	1.9
P26－P２	2.1
P51－P42	2.1
P42－P28	2.1
P28－P４	1.9
P52－P44	2.0
P44－P30	2.1
P30－P６	2.1
P58－P33	4.0
P33－P11	2.1

柱穴番号	桁行柱間（m）
P58－P49	8.9
P33－P26	8.8
P11－P２	9.0
P52－P49	3.9
P44－P40	3.9
P30－P26	3.9
P６－P２	4.1
P58－P52	5.0
P33－P30	5.0
P11－P６	4.9
P52－P51	2.0
P51－P49	1.9
P44－P42	1.9
P42－P40	2.0
P30－P28	2.0
P28－P26	1.9
P６－P４	2.2
P４－P２	1.9

表31　礎石建物跡２号計測表

柱穴番号	計測値（cm）		
	長径	短径	深さ
P１	65	55	－
P２	65	45	－
P３	40	30	－
P４	60	55	－
P５	67	65	－
P６	70	65	－
P７	65	50	－
P８	60	50	－
P９	60	43	－

柱穴番号	梁行柱間（m）
P１－P７	4.7
P２－P８	4.5
P３－P９	4.7
P１－P６	2.7
P６－P７	1.9
P３－P４	2.7
P４－P９	2.0

柱穴番号	桁行柱間（m）
P３－P１	4.0
P４－P６	4.0
P９－P７	4.0
P３－P２	2.0
P２－P１	2.0
P９－P８	2.0
P８－P７	2.0

表32　礎石建物跡３号計測表

柱穴番号	計測値（cm）		
	長径	短径	深さ
P１	110	95	30
P２	80	74	28
P３	84	80	15
P４	80	74	46
P５	88	70	38
P６	80	70	－
P７	100	70	－
P８	80	70	50
P９	82	56	58
P10	100	80	60
P11	90	82	50
P12	92	90	45
P13	130	90	40

柱穴番号	梁行柱間（m）
P12－P１	2.0
P11－P２	2.0
P10－P３	2.1
P９－P４	1.9
P12－P８	1.0
P８－P１	1.0
P９－P５	1.0
P５－P４	1.1
P３－P12	1.0

柱穴番号	桁行柱間（m）
P９－P12	2.9
P５－P８	2.9
P４－P１	3.0
P９－P10	1.0
P10－P11	1.0
P11－P12	1.0
P４－P３	1.0
P３－P２	1.1
P２－P１	1.0

表33　布基礎計測表

測点	計測値（cm）	測点	計測値（cm）
①	65	⑥	257
②	120	⑦	48
③	298	⑧	47
④	60	⑨	130
⑤	98	⑩	55

⑶ 遺物

北側調査区は攪乱の影響で層位が乱れており，Ⅱ層とした層の中で古代・中世の土器と近世以降の陶磁器類が混在する状況であった。その中で，瓦質の土器１点が出土し，形状・使途を検討した結果，近世の遺物として掲載した。陶磁器類は攪乱の影響もあり，1,900点を超える破片が出土した。碗，鉢，皿，土瓶，擂鉢など種類も多く，製糸関連の陶器も出土している。この中から接合できたものを含めて陶磁器類71点を図化した。

ア　瓦質土器（第101図668）

668は瓦質土器の口縁部である。口唇部が平坦で，内側は丁寧に丸みを持たせており，胴部にかけて直線的に開く形状である。内面から口唇部にかけて煤が付着しており，器内部で火を扱ったと見られることや口唇部が丁寧に仕上げられていることから火鉢や焜炉などの一部と考えられる。

イ　磁器

磁器は染付，白磁の碗，皿，鉢，蓋，酒注，瓶，仏飯器が出土しており，28点を図化した。

碗（第102図669～683）

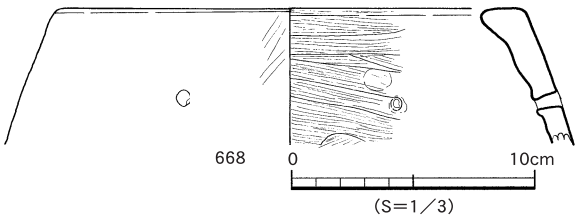
669～674は丸形の碗である。669は腰が張る形状を呈し，見込みに手書き五弁花が描かれる。670は，外面に雪の輪花文が描かれる。671は一重網目文が描かれる。672は宝文と思われる文様が描かれる。673・674は器壁が厚手のもので，673はコンニャク印判による印花文が押される。674は折れ松葉文が描かれる。675は朝顔形の碗で，白磁である。676は小広東碗である。外面に梵字文が描かれる。677は広東形の碗であるが，高台はやや低い。678は半筒形の碗である。外面に雪持ち笹文が描かれる。679・680は端反碗である。680は見込みに幅広の蛇の目釉剥ぎが施される。681～683は小坏である。681は口縁部が端反形を呈する。682・683は胴部と高台の境にくびれを有さず，一直線につくられる。

皿（第102図684～690）

684～687は小皿である。685・686は見込みに幅広の蛇の目釉剥ぎが施される。687はやや深めのものである。688～690は中皿である。688・689は見込みにコンニャク印判五弁花が描かれる。

鉢（第103図691～693）

691～693は鉢である。692の外面には家紋と思われる文様が描かれる。



第101図　近世以降瓦質土器実測図

蓋・酒注・仏飯器（第103図694～696）

694は上面中央にアーチ状のつまみが付く蓋物の蓋である。695は南九州で一般的に「からから」と称される焼酎用の酒注である。欠損しているが，注口が付く。696は白磁の仏飯器である。

ウ　陶器

陶器も碗，皿，徳利など日用品のほか製糸関連の鍋などが出土した。これらの中から43点を図化した。

碗（第104図697～706）

697は京焼である。上絵付けが剥落している。698･699は京焼風陶器である。どちらも外面腰部以下は露胎する。700は煎じ碗形を呈するもので，外面に笹文が描かれる。701は肥前陶器で内野山窯産である。外面腰部まで銅緑釉がかかり，内面は透明釉がかかる。701・702は陶胎染付である。701は家紋と思われる文様が描かれる。703～705は龍門司系の碗である。703・705は白化粧土の上から透明釉がかけられる。704は鉄釉がかかる。706は碗としたが，鉢の可能性も考えられる。

皿（第104図707～712）

707は肥前陶器の皿で，唐津焼である。見込みに胎土目が残る。708は肥前陶器で内野山窯産の皿である。709は龍門司系の灯明皿で，見込みにゴマ目が残る。710～712は肥前陶器の大皿である。711・712は内野山窯産である。710は鉄絵唐津焼である。710・712は大皿としたが，鉢の可能性も考えられる。

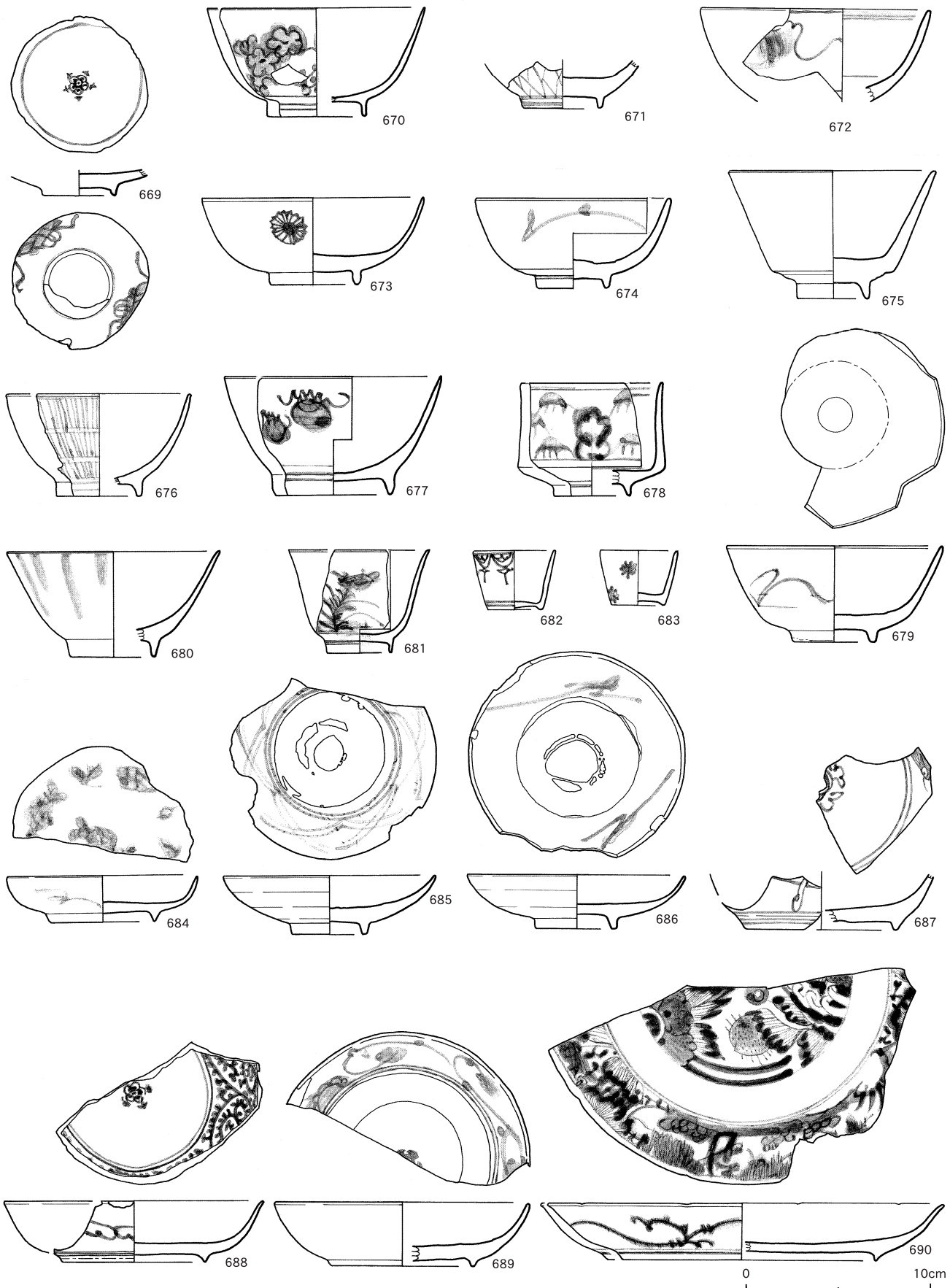
片口・鉢（第104図713～第105図716）

713・714は苗代川系の片口である。どちらも片口部が欠損している。

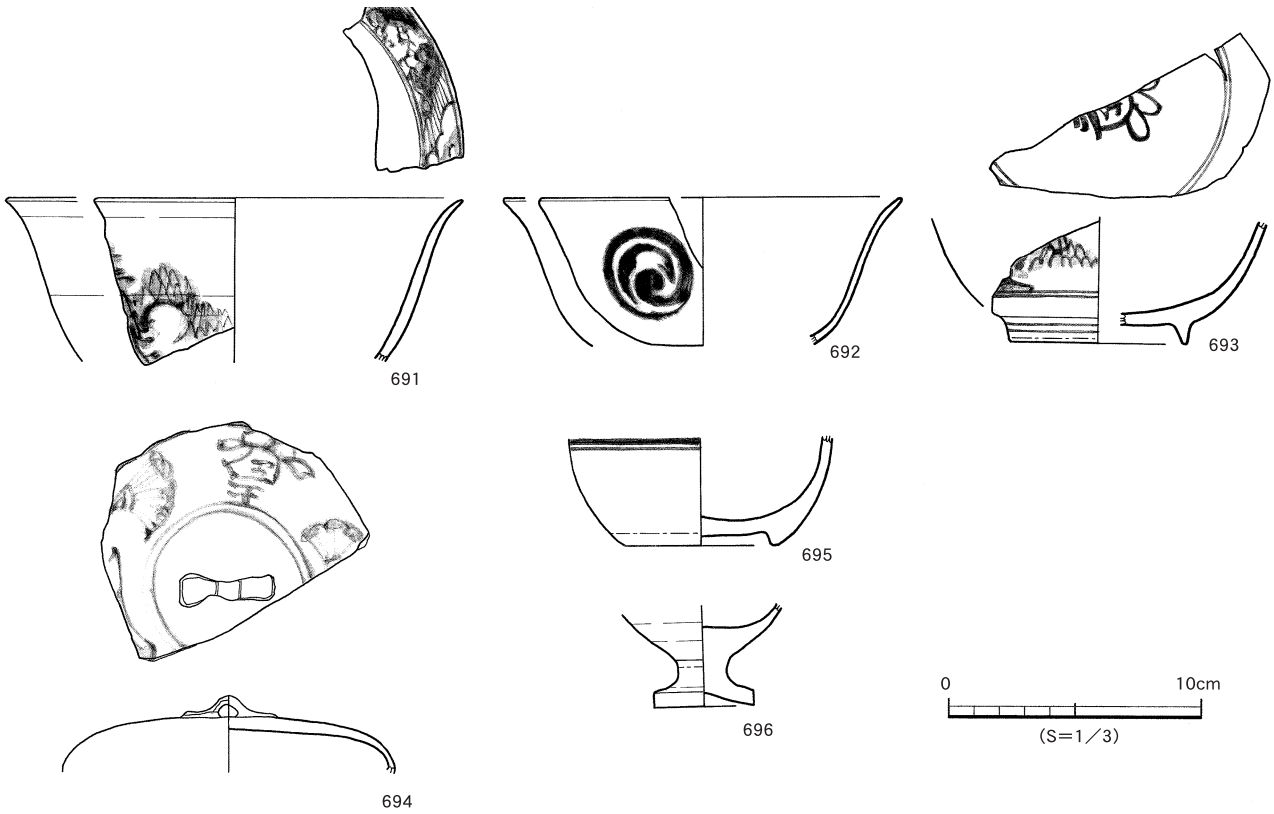
715・716は苗代川系の鉢である。715は外面に少なくとも３条の沈線が巡る。716は外面に把手が形骸化したと思われる突起が付く。

擂鉢（第105図717～722）

717は肥前陶器の擂鉢である。口縁部上位にのみ鉄釉がかけられる。718～722は苗代川系の擂鉢である。718～720は口縁部がＬ字状を呈するが，718の口唇部はやや丸みを



第102図　近世以降磁器実測図（１）



第103図　近世以降磁器実測図（２）

持ち，外面口縁下位に非常に弱い突帯を有する。721は小鳥用の餌擂鉢である。722は大型の擂鉢である。

蓋（第106図723・724）

723・724は甕・壺用の蓋である。723は口唇部が平坦につくられ，外面に２条の弱い沈線を有する。724は壺蓋である。

甕・壺（第106図725～729）

725・726は苗代川系の甕である。727・728は肥前陶器の甕である。内面にタタキ成形時の格子目状のあて具痕が残る。

729は苗代川系の壺である。

土瓶・鍋・蓋（第106図730～第107図737）

730は堅野系の白薩摩の土瓶である。外面に呉須により山水文が描かれる。731～733は苗代川系の土瓶である。731は丸形で小形のものである。732はソロバン玉形を呈し，胴部に明瞭な稜を有する。733は外面肩部に数条の横筋を有するもので，茶留め穴はなく，1穴である。734はやや下垂した丸形を呈するものである。

735は土鍋である。底面に足が３か所，側面に耳が２か所，片口が１か所付く。

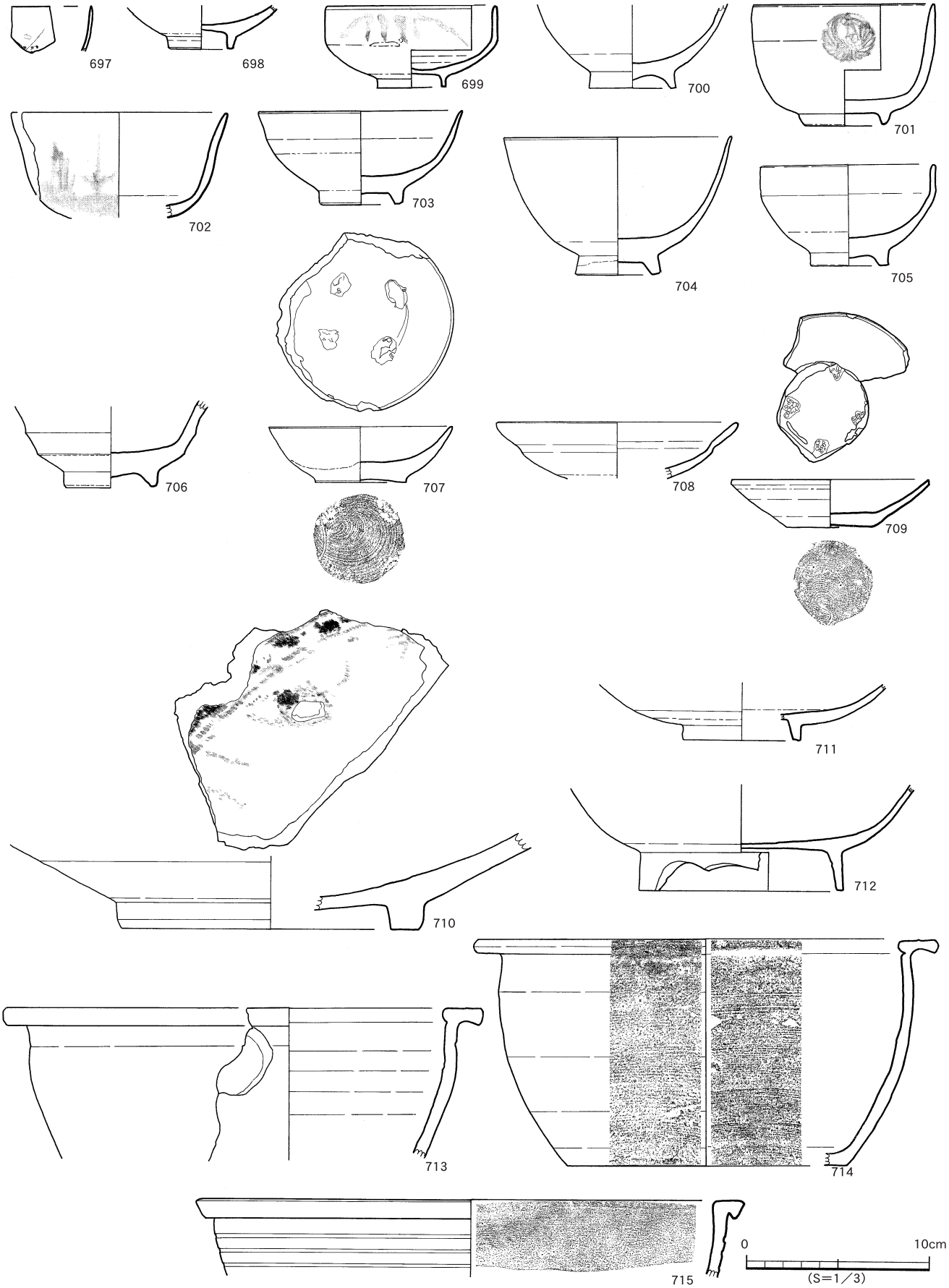
736・737は苗代川系の蓋で，736は土瓶，737は鍋・釜の蓋である。

徳利（第107図738）

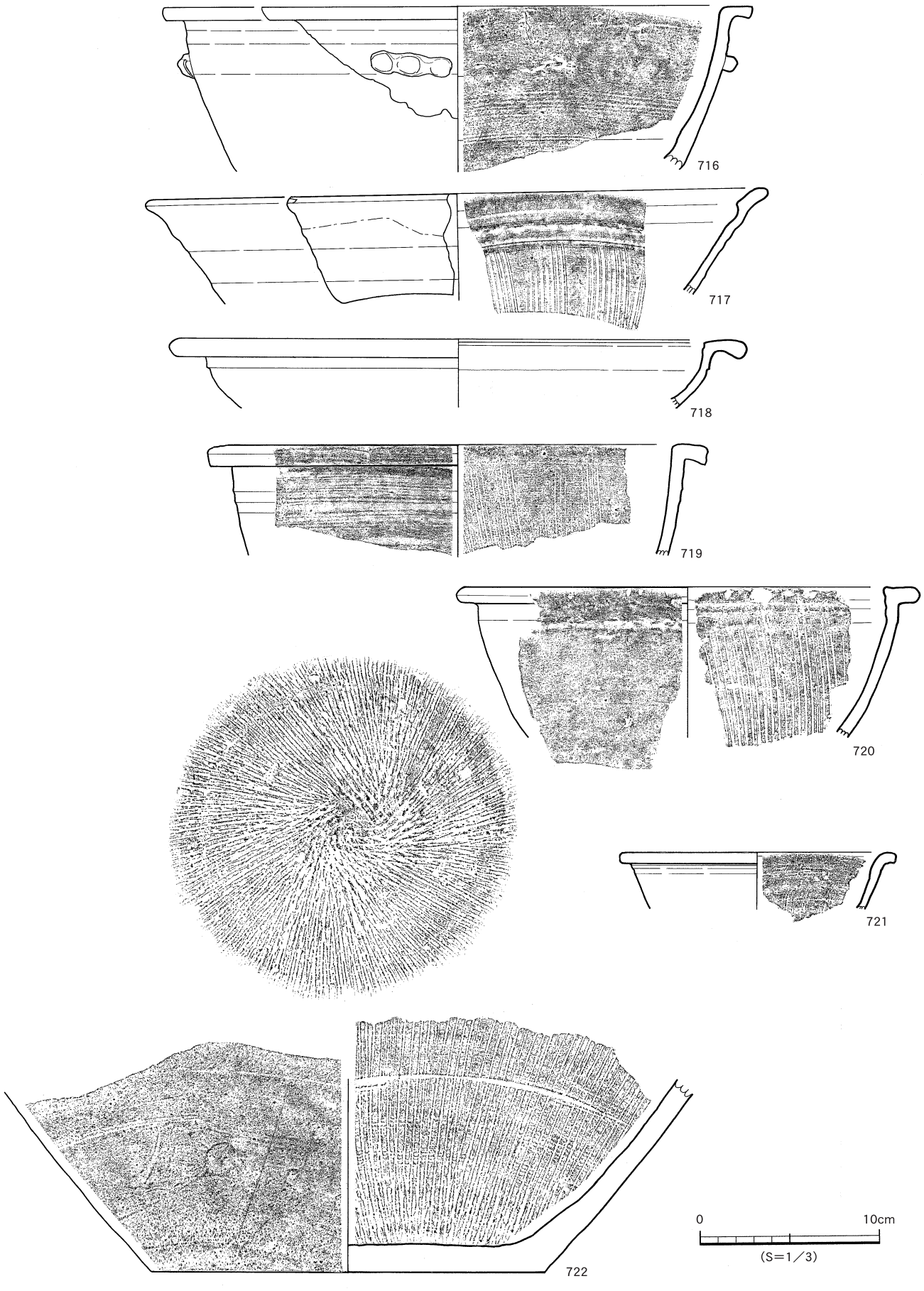
738は苗代川系の徳利である。口縁部がラッパ状に広がる形状を呈する。

繰糸鍋・煮繭鍋（第107図739）

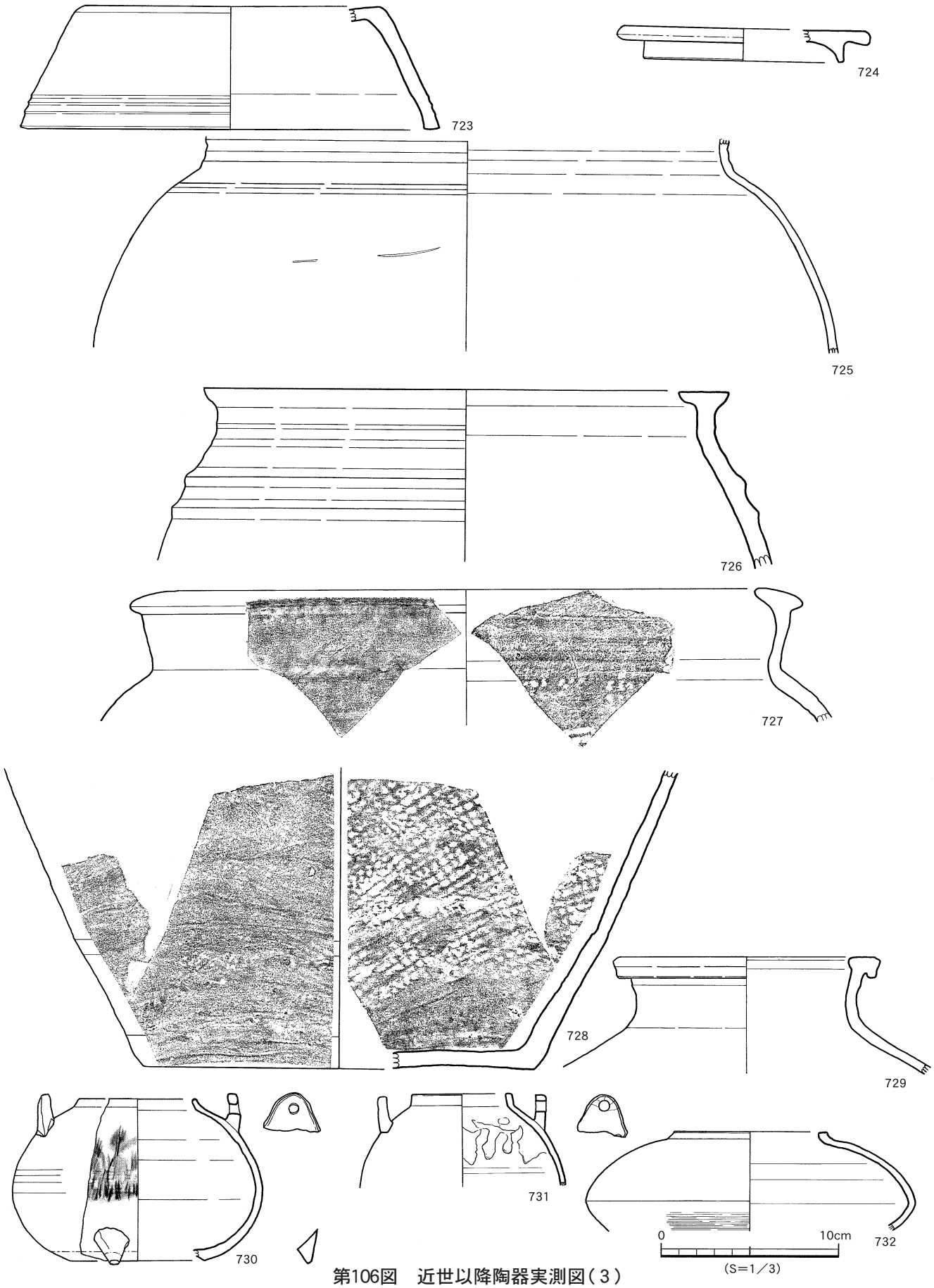
739は繰糸鍋（そうしなべ）あるいは煮繭鍋（しゃけんなべ）と呼ばれるものである。外面に蒸気あるいは湯を通すための管，見込みには蒸気を通すと思われる細かな穴を開けた管がつけられている。製糸の際，蒸気で柔らかくした繭から糸を繰り出す際に用いられる。底には１条の溝がつけられているが，大分県，群馬県の製糸施設のものには見られないつくりで，用途は不明である。



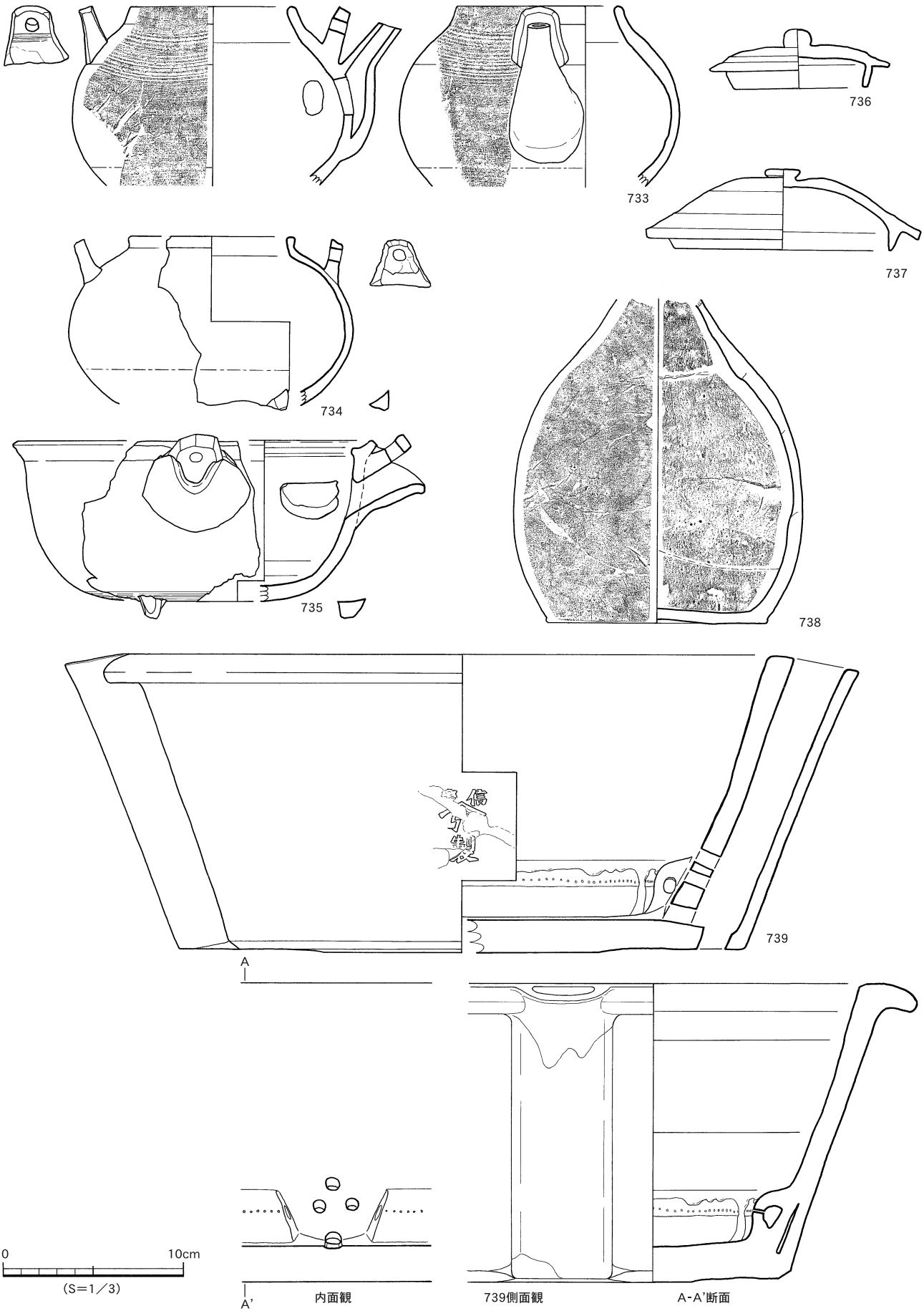
第104図　近世以降陶器実測図（１）



第105図　近世以降陶器実測図（２）



第106図　近世以降陶器実測図（３）



第107図　近世以降陶器実測図（4）

表34　陶磁器類観察表

挿図	番号	区	層	種別	分類	器種	産地	法量（cm）				胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期
								口径	底径	器高	胴径				
101	668	北一括	Ⅱ	瓦質土器	鉢	火鉢・焜炉	－	19.4	－	－	－	にぶい赤褐	－	－	－
102	669	R－19	Ⅱ	染付	碗	中碗	肥前	－	4.0	－	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	18世紀中頃
	670	R－19	Ⅱ	染付	碗	中碗	肥前	11.8	5.4	5.9	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	18世紀中頃～後半
	671	P－16	Ⅱ	染付	碗	中碗	肥前系	－	4.2	－	－	灰白	透明釉/灰白	残存部全面施釉	18世紀中頃～後半
	672	Q－16	Ⅱ	染付	碗	中碗	肥前系	12.4	－	－	－	灰白	透明釉/灰白	残存部全面施釉	18世紀後半
	673	Q－16	Ⅱ	染付	碗	中碗	肥前系	12.0	4.6	4.7	－	灰	透明釉/灰	見込み蛇の目釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭
	674	R－19	Ⅱ	染付	碗	中碗	肥前系	10.6	4.0	4.9	－	灰白	透明釉/灰白	見込み蛇の目釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭
	675	Q－16	Ⅱ	染付	碗	中碗	在地（平佐）	11.0	3.8	6.9	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭
	676	Q－16	Ⅱ	染付	碗	中碗	在地　肥前系	9.9	4.4	5.6	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭
	677	9T一括	Ⅱ	染付	碗	中碗	在地	11.6	6.0	6.4	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	19世紀
	678	R－19	Ⅱ	染付	碗	小碗	在地	7.7	4.0	6.1	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	－
	679	Q－16	Ⅰ	染付	碗	中碗	在地	11.7	4.6	5.2	－	灰白	透明釉/灰白	見込み蛇の目釉剥ぎ	19世紀
	680	11T一括	Ⅱ	染付	碗	中碗	在地	11.3	4.6	5.7	－	灰白	透明釉/灰白	見込み蛇の目釉剥ぎ	19世紀
	681	Q－17	Ⅱ	染付	碗	小碗	肥前	7.6	3.6	5.6	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	17世紀後半
	682	Q－16	Ⅱ	染付	碗	小坏	肥前	4.4	3.1	3.1	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	18世紀
	683	Q－16	Ⅱ	染付	碗	小坏	比前系	4.2	2.9	2.9	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	19世紀
	684	S－19	Ⅱ	染付	皿	小皿	肥前	10.2	5.6	2.9	－	灰白	透明粕/灰白	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭
	685	Q－16	Ⅱ	染付	皿	小皿	在地	11.5	4.1	3.2	－	灰白	透明釉/灰白	見込み蛇の目釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭
	686	Q－16	Ⅱ	染付	皿	小皿	在地	11.8	4.2	2.9	－	灰白	透明釉/灰白	見込み蛇の目釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭
	687	Q－16	Ⅱ	染付	皿	小皿	在地	－	8.2	－	－	灰白	透明釉/灰白	蛇の目凹型高台内釉剥ぎ	19世紀
	688	北一括	Ⅰ	染付	皿	五寸皿	肥前	14.0	7.6	3.3	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	17世紀中頃
	689	Q－17	Ⅱ	染付	皿	五寸皿	肥前系	13.8	7.8	3.4	－	灰白	透明粕/灰白	見込み蛇の目釉剥ぎ	18世紀後半
	690	3T一括	Ⅱ	染付	皿	中皿	肥前系	21.9	14.6	3.0	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	17世紀後半～18世紀初頭
103	691	北一括	Ⅱ	染付	鉢	中鉢	肥前系	18.1	－	－	－	灰白	透明釉/灰白	残存部全面施釉	18世紀後半
	692	Q－16	Ⅱ	染付	鉢	中鉢	肥前系	15.8	－	－	－	灰白	透明釉/灰白	残存部全面施釉	18世紀後半
	693	R－19	Ⅱ	染付	鉢	中鉢	肥前系	－	7.0	－	－	灰白	透明釉/灰白	畳付釉剥ぎ	18世紀後半
	694	P－16	Ⅱ	染付	鉢	蓋	在地	－	－	－	－	灰白	透明釉/灰白	残存部全面施釉	18世紀後半～19世紀初頭
	695	北一括	Ⅱ	染付	鉢	小鉢	平佐	－	6.0	－	－	灰白	透明釉/灰白	胴部外面施釉	19世紀
	696	R－19	Ⅱ	染付	仏具	仏飯器	平佐	－	4.0	－	－	灰白	透明釉/灰白	脚部無釉	19世紀
104	697	9T一括	Ⅰ	陶器	碗	小碗	肥前	－	－	－	－	灰白	透明釉/明オリーブ灰	残存部全面施釉	18～19世紀
	698	Q－16	Ⅰ	陶器	碗	小碗	肥前	－	3.6	－	－	灰白	透明釉/灰黄	高台脇以下無釉	17世紀後半
	699	R－19	Ⅱ	陶器	碗	中碗	肥前	9.4	3.8	4.4	9.5	灰白	透明釉/灰黄	高台脇以下無釉	17世紀後半
	700	R－19	Ⅱ	陶器	碗	中碗	肥前	－	4.8	－	－	灰白	透明釉/灰白	高台内無釉	17世紀後半～18世紀初頭
	701	9T一括	Ⅱ	陶器	碗	中碗	肥前	10.0	4.4	6.6	10.0	灰	透明釉/オリーブ灰	畳付釉剥ぎ	17世紀後半～18世紀初頭
	702	Q－15	Ⅱ	陶器	碗	中碗	肥前	11.8	－	－	－	灰	透明釉/オリーブ灰	残存部全面施釉	18世紀後半
	703	Q－17	Ⅱ	陶器	碗	中碗	龍門司	11.2	4.6	5.1	－	にぶい赤褐	透明釉/黄褐・暗褐	蛇の目釉剥ぎ	19世紀
	704	I－16	Ⅱ	陶器	碗	中碗	龍門司	12.4	4.6	7.5	－	にぶい赤褐	鉄釉/黒褐	蛇の目釉剥ぎ	18世紀後半
	705	U･T－16	Ⅰ	陶器	碗	中碗	龍門司	9.5	4.2	5.5	9.6	にぶい褐	白色釉･透明釉/灰白	高台内無釉	18世紀後半
	706	Q－15	Ⅱ	陶器	碗	中碗	龍門司	－	5.1	－	9.3	灰	白色釉･透明釉/灰白	高台内無釉	18世紀後半～19世紀初頭
	707	Q－16	Ⅰ	陶器	皿	小皿	肥前	10.1	5.0	3.0	－	にぶい赤褐	灰釉/灰	高台脇以下無釉	16世紀後半～17世紀初頭
	708	I－16	Ⅱ	陶器	皿	小皿	肥前	13.2	－	－	－	灰	透明釉/褐灰	残存部全面施釉	17世紀後半～18世紀初頭
	709	R･S－19	Ⅱ	陶器	皿	灯明皿	龍門司	10.8	4.8	2.6	－	灰	褐釉/褐	内面･外面一部施釉	18世紀後半
105	710	R－19	Ⅱ	陶器	皿	大皿	肥前系	－	6.5	－	－	灰黄褐	緑釉/暗緑灰	内面施釉	－
	711	北一括	Ⅱ	陶器	皿	大皿	肥前	－	16.2	－	－	赤褐	透明釉/にぶい褐	蛇の目釉剥ぎ	17世紀初頭～中頃
	712	R－19	Ⅰ	陶器	皿	大皿	肥前	－	11.2	－	－	灰黄	鉄釉/灰オリーブ灰	高台内底無釉	18世紀前半
	713	P－16	Ⅱ	陶器	鉢	片口	苗代川系	26.0	－	－	－	にぶい赤褐	鉄釉/灰褐	口唇部釉剥ぎ	－
	714	R－19	Ⅱ	陶器	鉢	片口	苗代川系	25.4	－	－	－	にぶい赤褐	鉄釉/暗褐	口唇部釉剥ぎ	18世紀
	715	K－10	Ⅱ	陶器	鉢	大鉢	苗代川系	30.0	－	－	－	にぶい赤褐	鉄釉/明暗灰	口唇部釉剥ぎ	19世紀後半
	716	Q－16	Ⅱ	陶器	鉢	大鉢	苗代川系	32.9	－	－	－	にぶい赤褐	鉄釉/暗オリーブ灰	口唇部釉剥ぎ	－
	717	北一括	Ⅰ	陶器	鉢	擂鉢	肥前	34.3	－	－	－	にぶい黄	褐釉/暗褐	口縁部施釉	17世紀前半
	718	P－16	Ⅱ	陶器	鉢	擂鉢	苗代川	32.1	－	－	－	にぶい赤褐	鉄釉/暗オリーブ灰	口唇部釉剥ぎ	18世紀前半
	719	Q－17	Ⅱ	陶器	鉢	擂鉢	苗代川	24.0	－	－	－	にぶい赤褐	鉄粕/暗オリーブ灰	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半
	720	R－16	Ⅱ	陶器	鉢	擂鉢	苗代川	25.8	－	－	－	明赤褐	鉄釉/暗オリーブ灰	口唇部釉剥ぎ	19世紀
	721	K－10	Ⅱ	陶器	鉢	擂鉢	苗代川	15.0	－	－	－	にぶい赤褐	褐釉/赤黒	残存部全面施釉	－
	722	北一括	Ⅱ	陶器	鉢	擂鉢	－	－	22.0	－	－	灰	透明釉	残存部全面施釉	－
106	723	R－19	Ⅱ	陶器	蓋	甕蓋	苗代川	23.0	16.8	7.0	－	にぶい赤褐	鉄釉/黒褐	上面･底部釉剥ぎ	18世紀
	724	T－15	Ⅰ	陶器	蓋	壺蓋	肥前系	14.0	11.2	1.8	－	灰白	透明釉/灰白	上面施釉	19世紀
	725	北一括	Ⅱ	陶器	甕･壺	甕	苗代川	29.0	－	－	－	にぶい赤褐	鉄釉/褐灰	残存部全面施釉	17世紀後半
	726	R－16	Ⅰ	陶器	甕･壺	甕	苗代川	23.8	－	－	－	にぶい赤褐	褐釉/暗緑灰	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半
	727	R－19	Ⅱ	陶器	甕･壺	甕	肥前	36.4	－	－	－	にぶい赤褐	－	－	18世紀
	728	R－19	Ⅱ	陶器	甕･壺	甕	肥前	－	23.8	－	－	灰白	－	－	－
	729	R－19	Ⅱ	陶器	甕･壺	壺	苗代川	15.0	－	－	－	赤	鉄釉/褐灰	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半～18世紀初頭
	730	Q－17	Ⅱ	陶器	水注	土瓶	堅野系	6.6	－	9.3	－	灰白	透明釉/灰白	底面無釉	18世紀後半
	731	Q－16	Ⅱ	陶器	水注	土瓶	苗代川	5.6	－	－	－	灰褐	褐釉/暗赤褐	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半
	732	Q･I－16	Ⅱ	陶器	水注	土瓶	苗代川	8.4	－	－	－	にぶい赤褐	褐釉/灰黄褐	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀中頃
107	733	北一括	Ⅱ	陶器	水注	土瓶	苗代川	9.0	－	－	15.3	褐灰	鉄釉/灰褐	底面無釉	18世紀～19後半
	734	北一括	Ⅱ	陶器	水注	土瓶	苗代川	9.0	－	－	15.7	明赤褐	鉄釉/灰オリーブ	底面無釉	18世紀～19後半
	735	R－19	Ⅱ	陶器	鍋	土鍋	苗代川	20.1	－	－	－	にぶい褐	鉄釉/褐灰	底面無釉	19世紀
	736	Q－16	Ⅱ	陶器	蓋	土瓶蓋	苗代川	7.6	－	－	3.8	暗赤褐	鉄釉/褐灰	上面施釉	18世紀後半～19世紀中頃
	737	Q－17	Ⅱ	陶器	蓋	鍋釜蓋	苗代川	12.0	－	－	4.5	にぶい赤褐	鉄釉/褐灰	上面施釉	18世紀後半～19世紀中頃
	738	北一括	Ⅱ	陶器	瓶	徳利	－	－	12.0	－	15.9	灰白	鉄釉/灰オリーブ	外底面無釉	－
	739	北一括	Ⅱ	陶器	鍋	繰糸鍋･煮繭鍋	－	33.4	29.6	16.6	－	灰白	透明釉/灰白	外底面無釉	－

エ　金属製品

金属製品は釘類のほかキセル４点，手鏡１点，古銭17点などが出土した。ここでは手鏡・釘各１点，古銭３点を図化した。

手鏡（第108図740）

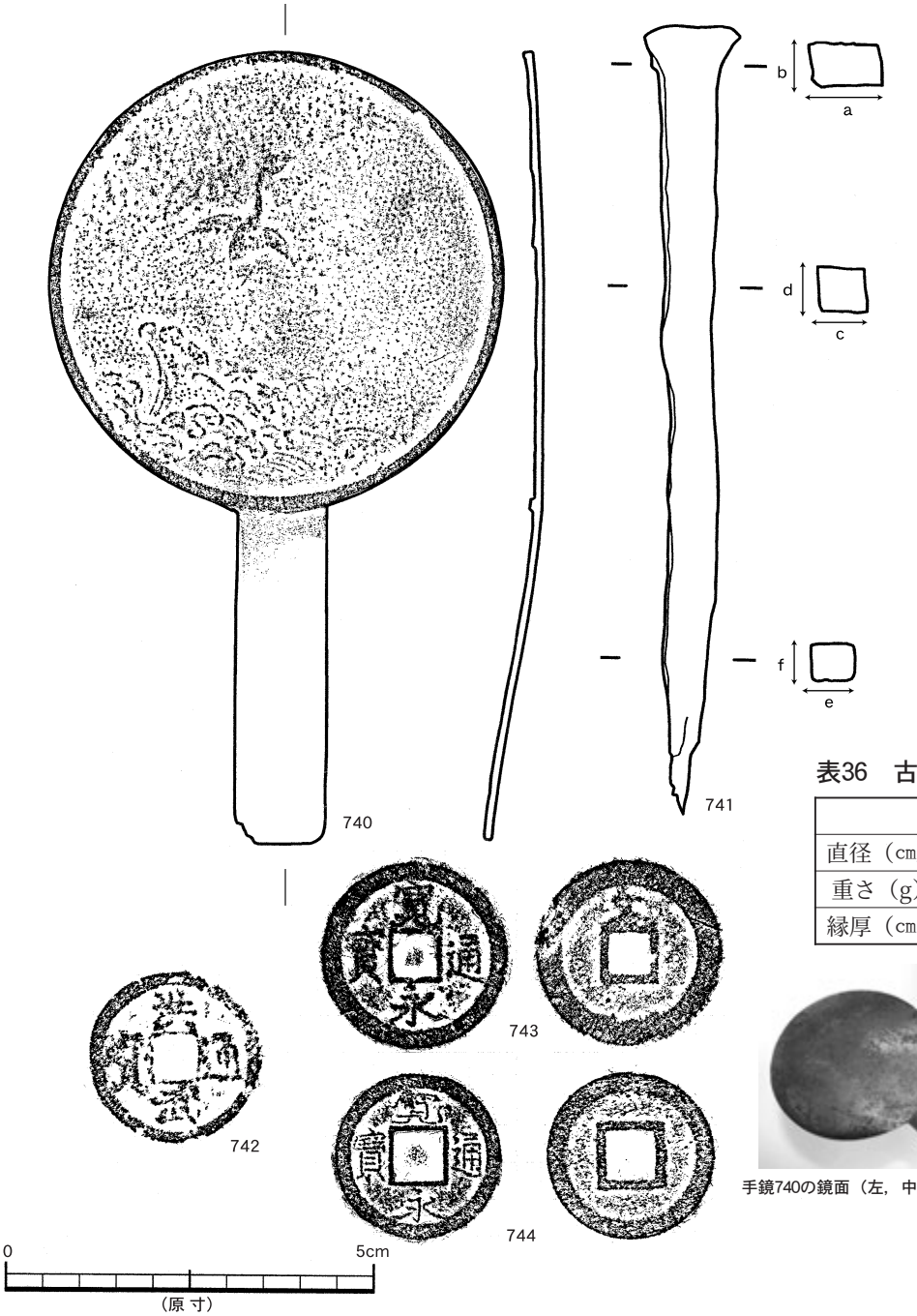
直径6.3㎝，厚さ0.1㎝の小型のものである。裏面には波しぶきのあがる海面上を飛ぶ１羽の鶴が描かれる。鏡面は錆の進行がほとんど見られず，まだ幾分光沢を残している。当センターの蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所ＸＧＴ－1000）で鏡面の分析をしたところ，主な成分は銅・鉛で，微量の錫を加えていることがわかった。

釘（第108図741）

大きなものはこの１点のみで，長さは10㎝を超える。このほかには長さ３㎝程度のものが３点見られた。先端にわずかな亀裂が見られるが，全体的にしっかりした作りで，相応の建築部材を固定したものと思われる。

古銭（第108図742～744）

「洪武通寶」が１点見られた（742）。ほかは「寛永通寶」である。743は裏面に「文」の文字が記されている。



第108図　近世以降金属遺物実測図・古銭

表35　金属製品観察表

No.740　手鏡		
鏡面径（㎝）		6.25
重さ（g）		31.3
鏡面縁厚（㎝）		0.17
持手厚（㎝）		0.14
No.741　釘		
長さ（㎝）		10.60
重さ（g）		24.78
断面（㎝）	a	1.05
	b	0.71
	c	0.69
	d	0.69
	e	0.65
	f	0.58

表36　古銭観察表

	No.742	No.743	No.744
直径（㎝）	2.29	2.58	2.30
重さ（g）	1.77	3.23	2.01
縁厚（㎝）	0.15	0.18	0.15

手鏡740の鏡面（左，中央右の白△は分析点）と文様（右）

第５章　自然科学分析

第１節　概要

自然科学分析は，平成21年度に１項目２件を（株）加速器分析研究所に依頼し，平成22年度に４項目７件を（株）パレオ・ラボに依頼した。分析の結果については，納品された各報告書を基に，編集を行い掲載した。また，当センターで行った顔料分析等の結果もここに掲載した。

第２節　土坑及び礫集積出土炭化物の放射性炭素年代測定

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

二渡船渡ノ上遺跡は，鹿児島県薩摩郡さつま町二渡（北緯31°51′50″，東経130°25′33″）に所在する。測定対象試料は，3号土坑出土炭化物（No. 1：IAAA－91738），6号礫集積炭化物（No. 2：IAAA－91739），合計２点である。

２　測定の意義

遺跡内で複数検出された用途や時代の不明な遺構について解釈する。

３　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお，ＡＡＡ処理において，アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合，表中にＡａＡと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

４　測定方法

測定機器は，3ＭＶタンデム加速器をベースとした^{14}Ｃ－ＡＭＳ専用装置（NEC Pelletron 9SDH－２）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。

⑵　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}Ｃによって補正された値である。^{14}Ｃ年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}Ｃ年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}Ｃ年代がその誤差範囲に入る確率が68．2%であることを意味する。

⑶　δ^{13}Ｃは，試料炭素の^{13}Ｃ濃度（^{13}Ｃ／^{12}Ｃ）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}Ｃ／^{12}Ｃを測定した場合には表中に（ＡＭＳ）と注記する。

⑷　pMC （percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}Ｃ濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}Ｃ濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}Ｃ濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}Ｃ年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}Ｃ年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い，OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

６　測定結果

３号土坑出土炭化物Ｎｏ.１　の^{14}Ｃ年代は1130±30ｙｒＢＰ,6号礫集積Ｎｏ.2の^{14}Ｃ年代は290±30ｙｒＢＰである。暦年較正年代（１σ）で見ると，Ｎｏ.１は９世紀末から10世紀頃，Ｎｏ.2は16世紀と17世紀頃の範囲が示されている。

炭素含有率は60%を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

表37　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理	δ ^{13}C(‰)(AMS)	δ ^{13}C補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-91738	No.1	3号土坑	炭化物	AAA	-24.09 ± 0.39	1,130 ± 30	86.89 ± 0.32
IAAA-91739	No.2	6号礫集積	炭化物	AAA	-24.57 ± 0.55	290 ± 30	96.45 ± 0.34

表38　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91738	1,110 ± 30	87.05 ± 0.32	1,128 ± 30	889AD-904AD (13.7%) 913AD-970AD (54.5%)	782AD-789AD (0.9%) 813AD-845AD (4.6%) 857AD-990AD (89.9%)
IAAA-91739	280 ± 30	96.54 ± 0.32	290 ± 28	1522AD-1573AD (46.3%) 1629AD-1650AD (21.9%)	1495AD-1602AD (64.0%) 1616AD-1662AD (31.4%)

参考文献

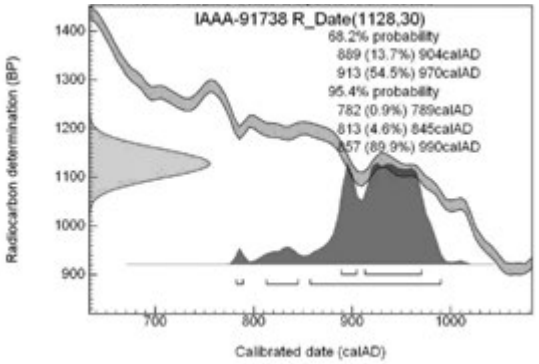
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

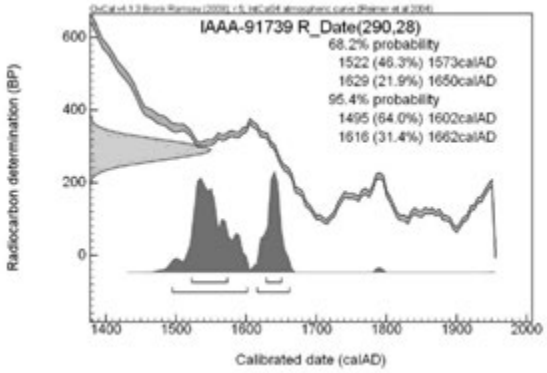
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



第109図　古代３号土坑の暦年較正年代グラフ



第110図　中近世６号礫集積の暦年較正年代グラフ

第３節　土器付着炭化物及び炭化種子の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ
伊藤茂・尾嵜大真・丹生越子
廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur　Lomtatidze
Ineza　Jorjoliani
中村賢太郎

１　はじめに

鹿児島県さつま町に位置する二渡船渡ノ上遺跡，山崎野町跡Ａより検出された試料について，加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行った。なお，ＰＬＤ－16960の炭化種実については種実同定を行っている（詳細は種実同定の報告参照）。

2　試料と方法

測定試料の情報，調製データは表39のとおりである。

表39　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD － 16959	試料 No. 1 遺跡名：二渡船渡ノ上遺跡 遺物取上 No.8298 レイアウト No.347	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：口縁部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：0.5N，塩酸：1.2N）
PLD － 16960	試料 No. 2 遺跡名：二渡船渡ノ上遺跡 調査区：Ｂ－３区 レイアウト No.456	試料の種類：炭化種実 （モモ核，１点） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD － 16961	試料 No. 3 遺跡名：山崎野町跡Ａ 遺物取上 No.1700 レイアウト No.535	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：胴部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：0.5N，塩酸：1.2N）
PLD － 16962	試料 No. 4 遺跡名：二渡船渡ノ上遺跡 遺物取上 No.7607 レイアウト No.70	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：口縁部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：0.5N，塩酸：1.2N）

二渡船渡ノ上遺跡の試料は，弥生時代早期の刻目突帯文土器347の口縁部外面に付着した炭化物（PLD－16959），古代の包含層であるＢ－３区のⅣａ層から出土したモモ炭化核456（PLD－16960），縄文時代晩期の刻目突帯文土器70の口縁部外面に付着した炭化物（PLD－16962）の計３点である。

山崎野町跡Ａの試料は，縄文時代前期末～中期前葉の貝殻条痕文土器535の胴部外面に付着した炭化物（PLD－16961）１点である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}Ｃ年代，暦年代を算出した。

3　結果

表40に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}Ｃ），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}Ｃ年代，^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代範囲を，図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}Ｃ年代はＡＤ1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}Ｃ年代（yrBP）の算出には，^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}Ｃ年代がその^{14}Ｃ年代誤差内に入る確率が68．2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}Ｃ年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：Intcal09）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95．4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}Ｃ年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4　考察

以下，2σ暦年代範囲（確率95．4%）に着目して結果を整理する。

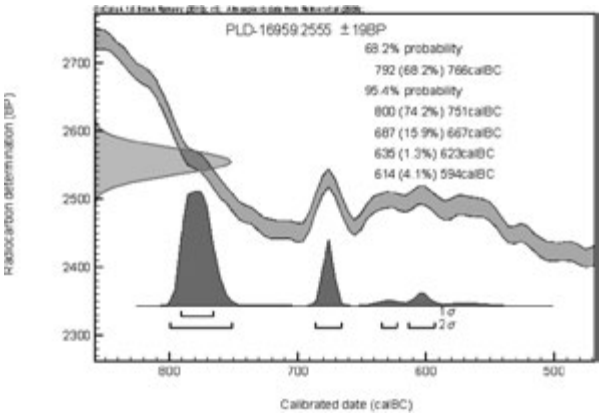
二渡船渡ノ上遺跡では，弥生時代早期の刻目突帯文土器347の口縁部外面付着炭化物（PLD－16959）は800－751 cal BC（74.2%），687－667 cal BC（15.9%），635－623 cal BC（1.3%），614－594 cal BC（4.1%）の暦年代範囲を示した。Ｂ－３区Ⅳa層出土のモモ炭化核456（PLD－16960）は，778－794 cal AD（7.1%），800－900 cal AD（71．9%），918－952 cal AD（16.4%）で，８世紀後半～10世紀中頃（古代）の暦年代範囲を示した。縄文時代晩期の刻目突帯文土器70の口縁部外面付着炭化

表40　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

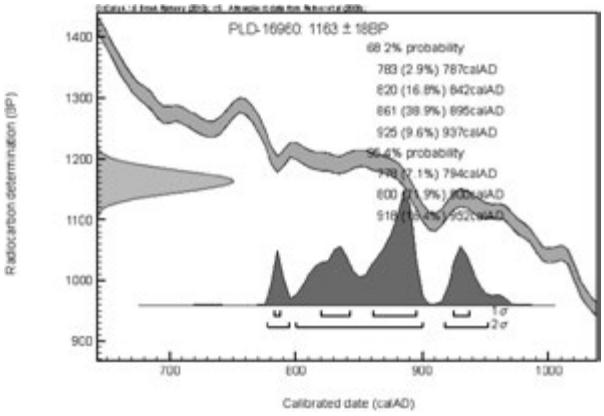
測定番号	δ ^{13}C （‰）	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD－16959	-26.67 ± 0.17	2555 ± 19	2555 ± 20	792BC (68.2%) 766BC	800BC (74.2%) 751BC 687BC (15.9%) 667BC 635BC (1.3%) 623BC 614BC (4.1%) 594BC
PLD－16960	-24.74 ± 0.15	1163 ± 18	1165 ± 20	783AD (2.9%) 787AD 820AD (16.8%) 842AD 861AD (38.9%) 895AD 925AD (9.6%) 937AD	778AD (7.1%) 794AD 800AD (71.9%) 900AD 918AD (16.4%) 952AD
PLD－16961	-26.30 ± 0.17	4704 ± 22	4705 ± 20	3619BC (5.2%) 3611BC 3521BC (17.3%) 3500BC 3431BC (45.8%) 3380BC	3628BC (15.5%) 3594BC 3527BC (21.4%) 3495BC 3463BC (58.5%) 3375BC
PLD－16962	-26.26 ± 0.18	2578 ± 20	2580 ± 20	797BC (68.2%) 777BC	804BC (91.9%) 763BC 681BC (3.5%) 673BC

物（PLD－16962）は，804－763 cal BC（91.9%），681－673 cal BC（3.5%）の暦年代範囲を示した。

山崎野町跡Aでは，縄文時代前期末～中期前葉の貝殻条痕文土器533の胴部外面に付着した炭化物（PLD－16961）は3628－3594 cal BC（15.5%），3527－3495 cal BC（21.4%），3463－3375 cal BC（58.5%）の暦年代範囲を示した。



第111図　弥生時代早期土器の暦年較正年代グラフ



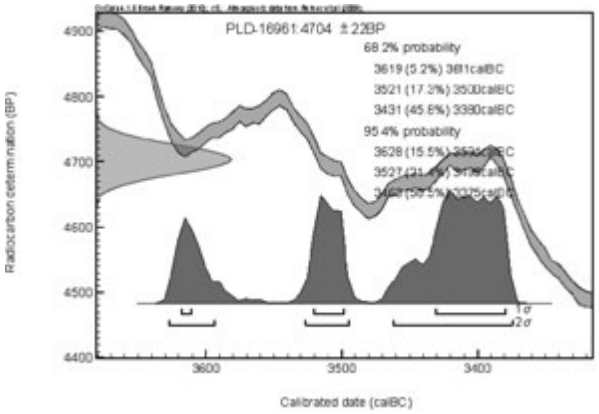
第112図　古代モモ核の暦年較正年代グラフ

参考文献

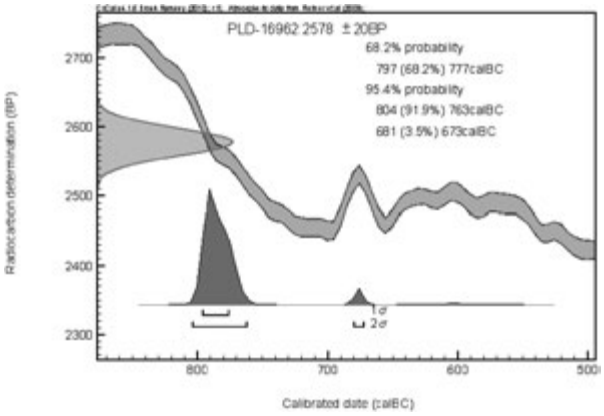
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3－20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第113図　縄文時代前期末～中期前葉土器の
暦年較正年代グラフ



第114図　縄文時代晩期土器の暦年較正年代グラフ

第４節　二渡船渡ノ上遺跡出土の炭化種実

佐々木由香
バンダリ　スダルシャン（パレオ・ラボ）

１　はじめに

二渡船渡ノ上遺跡は鹿児島県薩摩郡さつま町に位置する，縄文時代中期から近代までの複合遺跡である。ここでは放射性炭素年代測定を行った炭化種実の同定を行い，利用植物について検討した。

２　試料と方法

試料は，古代の包含層であるＢ－３区Ⅳａ層から出土した１試料（試料No.２）である。炭化種実は発掘調査時に目視で取り上げられたものである。試料が出土した位置の周辺からは土坑が多数検出されているが，試料は遺構外からの出土である。

同定は肉眼と実体顕微鏡下で行った。試料は鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

３　結果

同定した結果，木本植物のモモ炭化核１点が見いだされた（表41）。

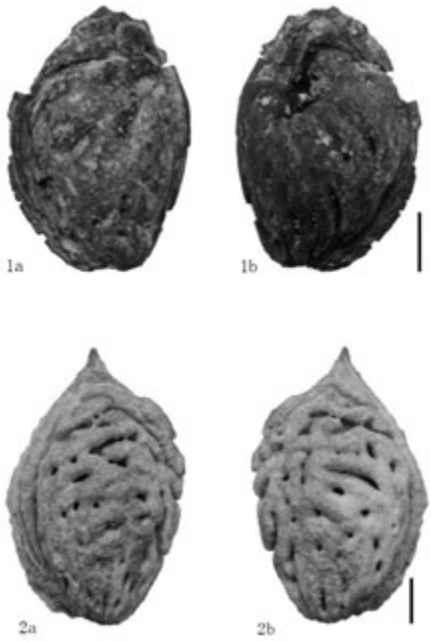
表41　二渡船渡ノ上遺跡から出土した炭化種実

	試料No.	No.2
分類群	部位／層位	Ｂ－３区Ⅳａ層
モモ	炭化核	1

以下に炭化種実の記載を行い，第115図に写真と現生標本を示して同定の根拠とする。

（１）モモ　*Amygdalus persica L.*　炭化核　バラ科

上面観は両凸レンズ形，側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ22.6㎜，幅16.7㎜，厚さ13.0㎜。



スケール　1, 2：5㎜

第115図　二渡船渡ノ上遺跡から出土した
炭化種実と現生標本

1. モモ炭化核（Ｂ－３区Ⅳａ層，No. 2，PLD－16960）
2. モモ核（現生標本：宮崎県産購入）

４　考察

Ｂ－３区IVa層から出土した炭化種実を同定した結果，木本植物であるモモの炭化核と同定された。モモは栽培種である。同試料（PLD－16960）を用いて放射性炭素年代測定をおこなった結果，２σ（95.4%）の確率で778－794 cal AD（7.1%），800－900 cal AD（71.9%），918－952cal ＡＤ（16.4%）となり，8世紀後半から10世紀中頃の暦年代を示した。そのため，古代において遺跡周辺でモモを栽培したか，モモの流通があった可能性があ

る。また，モモには食用としてのモモと祭祀用としてのモモがあることが知られている。炭化していることから，熱を受けたと考えられるが，遺構との関係が明確ではないため，用途については検討できなかった。

第５節　二渡船渡ノ上遺跡出土埋設土器内埋土のリン・カルシウム分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

１　はじめに

さつま町に所在する二渡船渡ノ上遺跡で検出された埋設土器内埋土について蛍光Ｘ線分析によるリン・カルシウム分析を行い，遺構中に骨が存在した可能性を検討した。

２　試料と方法

試料は，縄文時代晩期の埋設土器内部より採取した埋土（試料№３）と，比較対照試料として埋設土器周辺より採取した土壌（試料№４）の計２点である（表42)。

分析は藤根ほか（2008）の方法に従って行った。この方法は，元素マッピング分析によりリン，カルシウムを多く含む箇所を直接的に検出できるという利点がある。

測定試料は，土壌約５～６ｇを乾燥後，極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し，油圧プレス機で20ｔ・１分以上プレスしたものを作製，使用した。

分析装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT－5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は，X線管が最大50kV，1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット，X線ビーム径が100μmまたは10μm，検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で，検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また，試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る，元素マッピング分析も可能である。

本分析では，まず元素マッピング分析を行い元素の分布図を得て，その結果を基にリン（Ｐ）のマッピング図の輝度の高い箇所を選び，ポイント分析を行った。また，ポイントを選ぶ際には，ジルコニウム（Zr）のＬα線がリンのＫα線のピークに近いため，ジルコニウム（元素マッピングはＫα線で測定）の輝度の高い箇所は避けるよう留意した。測定条件は，元素マッピング分析では50kV，1.00mA，ビーム径100μm，測定時間2000sを５回走査，パルス処理時間Ｐ３に，ポイント分析では50kV，0．10～0.24mA（自動設定），ビーム径100μm，測定時間500s，パルス処理時間Ｐ４に設定して行った。定量計算は，装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており，半定量値である。

３　結果

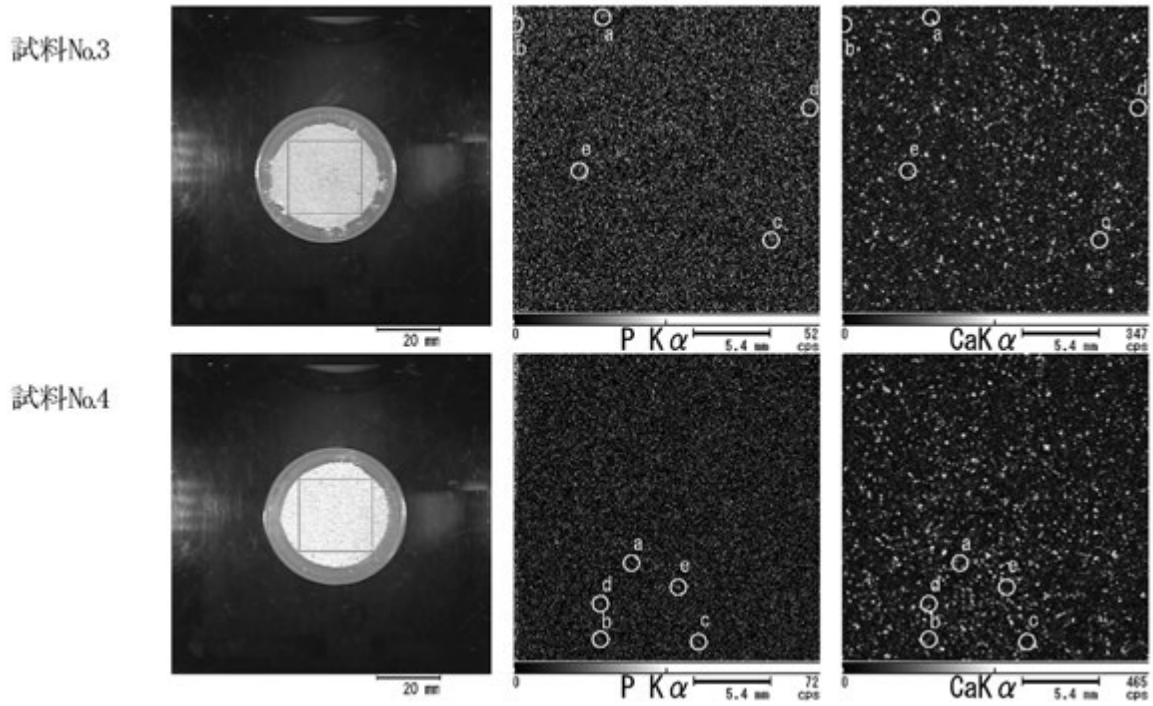
各試料の元素マッピング図およびポイント分析箇所５点を図116に，ポイント分析の結果より酸化物の形で表した半定量値を表43に示す。分析の結果，試料№３のリン（P_2O_5）が0.02～0.67%，カルシウム（CaO）が0.89～1.47%，試料№４のリン（P_2O_5）が0.02～0.78%，カルシウム（CaO）が0.82～1.26%の値を示した。

表42　分析試料

試料番号	採取地
Ｎｏ．３	埋設土器内埋土
Ｎｏ．４	埋設土器周辺土壌

表43　半定量分析結果

試料	ポイント	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO_2	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2
№.１	a	0.00	24.86	58.68	0.67	0.27	2.11	1.01	1.07	0.30	10.84	0.03	0.15	0.01	0.01
	b	0.84	21.97	61.64	0.02	0.13	3.54	1.00	1.18	0.19	9.35	0.04	0.07	0.01	0.03
	c	0.00	16.48	66.75	0.26	0.21	3.60	1.47	0.64	3.61	6.81	0.03	0.06	0.01	0.07
	d	0.00	18.48	65.10	0.06	0.20	2.28	0.89	1.34	0.24	11.28	0.04	0.05	0.01	0.03
	e	0.00	21.95	64.24	0.39	0.22	2.35	1.14	0.87	0.24	8.45	0.03	0.07	0.01	0.03
№.２	a	0.93	19.53	67.25	0.78	0.27	2.14	1.00	0.66	0.26	7.05	0.03	0.04	0.01	0.05
	b	1.12	17.86	71.84	0.63	0.16	2.85	1.26	0.60	0.15	3.43	0.03	0.03	0.01	0.02
	c	0.90	20.55	63.67	0.02	0.13	2.64	1.03	0.79	0.21	9.94	0.04	0.04	0.01	0.05
	d	0.89	18.53	59.41	0.52	0.24	2.37	0.82	1.77	0.28	14.99	0.05	0.06	0.02	0.05
	e	0.72	23.73	51.15	0.41	0.21	1.18	1.23	1.28	0.22	19.71	0.03	0.08	0.01	0.04



第116図　プレス試料および元素マッピング図

4　考察

ヒトを含む動物の骨や歯は，ハイドロキシアパタイト$Ca_5(PO_4)_3OH$が主成分であり，すなわち蛍光X線分析ではリン（P）とカルシウム（Ca）が共に高く検出される。ただし，鉱物由来の可能性も考慮する必要があり，特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素である。カルシウムのみの検出では骨由来であるか判断し難いため，分析ではリンを中心に検討し，かつカルシウムも高く検出される箇所に着目してポイント分析を行った。また，本来は骨が存在していたが，堆積・埋没過程で分解拡散が進行し，現状ではほとんどリンが検出されない，またはリンが多く検出されてもカルシウムが少ないという可能性もある。

分析の結果，いずれもリンは１％未満で明らかにリンの含有量が多い箇所はなく，また土器埋土と周辺土壌との含有量の差異も見られなかった。リン・カルシウム共に明らかに多く含まれる物質は検出されなかった。

5　おわりに

埋設土器内埋土について蛍光X線分析した結果，リン・カルシウム共に明らかに多く含む箇所は見出せなかった。以上，自然科学的見地から，骨・歯などの存在していた可能性を検討したものの，存在を積極的に肯定できるデータは得られなかった。

引用文献

藤根　久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析．日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，108－109.

第６節　山崎野町跡Ａにおけるテフラ分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

1　はじめに

山崎野町跡Ａは，鹿児島県薩摩郡さつま町山崎地内に所在し，縄文時代早期～近代の遺構・遺物からなる遺跡である。調査では，南調査区確認トレンチ北壁土層断面のⅥ層中において明黄褐色の斑文状のテフラが堆積していた。ここでは，この斑文状に挟在するテフラ層について検討した。

なお，テフラ分析に際し道都大学の鈴木正章教授にご教授願いました。ここに感謝の意を表します。

2　試料と分析方法

試料は，南調査区確認トレンチ北壁土層断面のⅥ層中

の斑文状のテフラである。このテフラは，明黄褐色（10YR 6／6）の比較的細粒のガラス質テフラである。分析は，以下の方法で行った。

自然含水状態で約30ｇ程度秤量し，恒温乾燥機中で乾燥した後，1φ（0.5㎜），2φ（0.25㎜），3φ（0.125㎜），４φ（0.0063㎜），の４枚の篩を重ね，流水下で湿式篩分けを行った。各ふるい残渣は，乾燥した後秤量して粒度組成を求めた。このうち４φ残渣(粒径0.25～0.125㎜）については，重液（テトラブロモエタン，比重2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。分離した重軽鉱物は，封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作製し，偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定・計数して鉱物組成を求めた。なお，重鉱物は，斜方輝石（主に紫蘇輝石），単斜輝石（主に普通輝石），角閃石，磁鉄鉱（チタン鉄鉱を含む），不透明鉱物（その他の不透明粒子を含む）に分類した。また，軽鉱物のうち火山ガラスについては，町田・新井（2003）の分類基準に従って分類した。

火山ガラスおよび重鉱物の屈折率については，横山卓雄ほか（1986）等に従って，温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率を測定し，その結果を範囲（range）で表した。

3　分析結果

以下に，テフラの鉱物や火山ガラスの形態的特徴，屈折率測定結果について述べる。

篩分けした結果，2φ以上の粒子の占める割合は低く全体重量の6.65%，3φ粒子と４φ粒子の占める割合が高く全体重量の40.17%を占めることから（表46），このテフラは細粒質テフラである。１φ粒子を観察すると，約５㎜程度の軽石を含み，淡褐色のガラスを含む（第118図）。

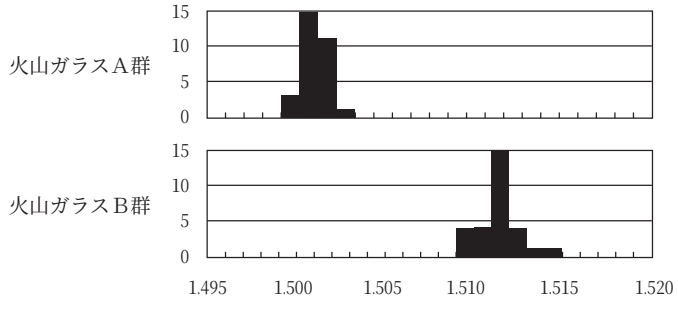
重鉱物は，斜方輝石が43.56%，単斜輝石が30.69%，普通角閃石が19.80%であった。また，軽鉱物は，長石類などの粒子を含むが，火山ガラスが全体の約61%を占める。

火山ガラスの形態分類では，バブル（泡）型の平板状ガラスが13.17%，バブル（泡）型のＹ字状ガラスが60.48%，軽石型繊維状ガラスが26.35%であり，バブル型ガラスが圧倒的に多い（表46）。なお，ガラスは薄手であり，淡褐色のガラスも含まれている。

火山ガラスの屈折率を測定した結果，2群のガラス群（Ａ群とＢ群）からなることがわかった。屈折率の低いガラスＡ群が，範囲1.4987－1.5011（平均値1.5000），屈折率の高いガラスＢ群が範囲1.5095－1.5148（平均値1.5114）であった。これらのガラス群は，測定時において種類の異なる浸液を使用するために，正確な比率を求めることは難しいが，火山ガラスＡ群：火山ガラスＢ群＝３～２：７～８と推定される。

なお，火山ガラスＡ群の屈折率は，姶良Tnテフラ（AT）の火山ガラスの屈折率（ｎ＝1.498－1.501）に一致，狭いレンジを示す点においても類似する。また，少量含まれる普通角閃石の屈折率（n_2）は，1.6713－1.6767であった（10粒測定した結果）。

このテフラの主な成分は，鉱物組成や火山ガラスの形態あるいは屈折率から，鬼界アカホヤテフラ（K－Ah）と同定される。ただし，屈折率の異なる火山ガラスを含み，重鉱物においても普通角閃石を含むことから，他のテフラが混入していると考えられる。この点については遺跡における堆積環境によるものと考えられる。



第117図　火山ガラスの屈折率（n1）

表44　屈折率測定結果

範囲（range）	平均（mean）	計数
1.4987 - 1.5011	1.5000	30
1.5095 - 1.5148	1.5114	30

【鬼界アカホヤテフラ（Ｋ－Ａｈ）】

鬼界アカホヤテフラは，南九州鬼界カルデラから約7,300年前に噴出した降下軽石,火砕流堆積物とその降下火山灰をさす。このテフラは，輝石デイサイト質のガラス質テフラで，部層により大差なくほぼ均質である。バブル型の多い火山ガラスは，姶良Tnテフラ（AT）のそれに比べると，薄手で淡褐色を帯びるものがあり，屈折率もかなり高く，広いレンジをもつ（ｎ＝1.508－1.516)。もっとも，完全には水和していないガラスの継目などガラスの厚い部分の屈折率は低く,1.500前後のものがある（町田・新井，2003)。

南九州では多数の遺跡でK－Ahの上下から縄文土器が発見され，また中九州の熊本県や大分県でも文化層との関係が観察されつつある。それによると，K－Ahの上位と下位の火山灰土から出土する土器は，型式を異にするようである。下位から出土する土器は塞の神式，吉田式，前平式，石坂式などの諸型式の土器で，上位から出土するもののうち，最も古い土器は轟式および曽畑式である。新東晃一は，前者の土器群は縄文早期に入るもので，後者のそれは縄文前期に入るものとし，K－Ahを両期の境界にあると考えた（町田・新井，2003)。

4　おわりに

テフラ分析を行った結果，このテフラは，鬼界アカホヤテフラ（K－Ah）と同定された。ただし，屈折率の異なる火山ガラスを含み，重鉱物においても普通角閃石を含むことから，他のテフラが混入している可能性が指摘された。

参考・引用文献

町田　洋・新井房夫（2003）新編　火山灰アトラス. 336ｐ，東京大学出版会.

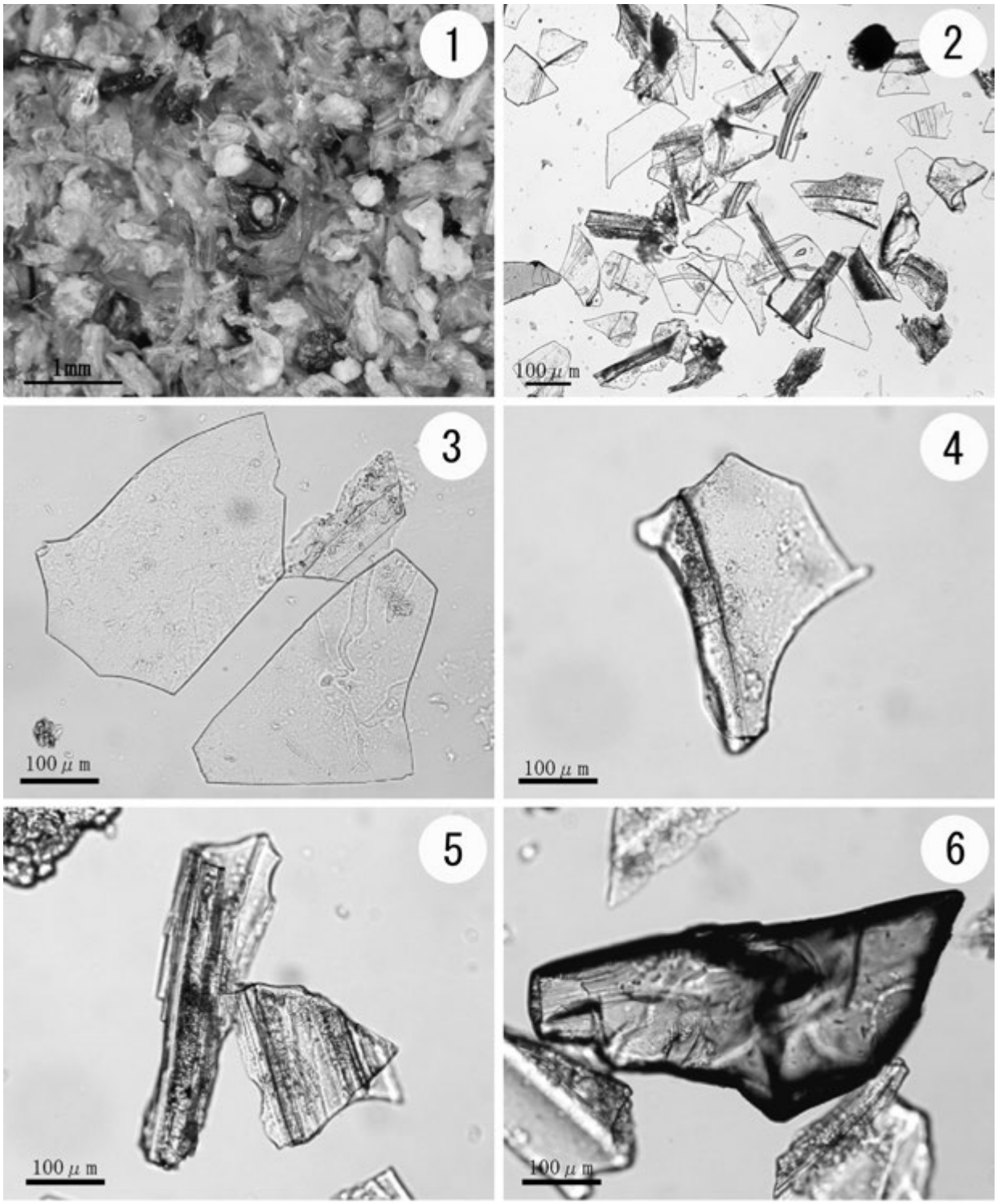
横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究，25，21－30.

表45　山崎野町跡Ａのテフラ分析結果（１）

サンプル名			Ⅵ層中テフラ
試料重量（g）			0.311
軽鉱物（g）			0.280
重鉱物（g）			0.015
磁性鉱物（g）			0.014
重量合計（g）			0.309
粒度組成（g）	1φフルイ残渣		0.80
	2φフルイ残渣		1.60
	3φフルイ残渣		8.10
	4φフルイ残渣		6.40
重鉱物組成（個）	斜方輝石		88
	単斜輝石		62
	普通角閃石		40
	カンラン石		0
	黒雲母		0
	その他		12
	合　計		202
火山ガラス（個）			167
非火山ガラス（個）			108
火山ガラス形態分類（個）	バブル（泡）型	平板状ガラス	22
		Ｙ字状ガラス	101
	軽石型	繊維状ガラス	44
		スポンジ状ガラス	0
	急冷破砕型	フレーク状ガラス	0

表46　山崎野町跡Ａのテフラ分析結果（２）

サンプル名			Ⅵ層中テフラ
重液分離後の回収率（重量％）			99.36
軽鉱物の含有率（重量％）			90.61
重鉱物の含有率（重量％）			4.85
磁性鉱物の含有率（重量％）			4.53
合　　計			100.00
粒度組成（重量％）	1φフルイ残渣		2.22
	2φフルイ残渣		4.43
	3φフルイ残渣		22.44
	4φフルイ残渣		17.73
重鉱物組成（個数％）	斜方輝石		43.56
	単斜輝石		30.69
	普通角閃石		19.80
	カンラン石		0.00
	黒雲母		0.00
	不明及その他		5.94
	合　　計		100.00
火山ガラスの形態分類（個数％）	バブル（泡）型	平板状ガラス	13.17
		Ｙ字状ガラス	60.48
	軽石型	繊維状ガラス	26.35
		スポンジ状ガラス	0.00
	急冷破砕型	フレーク状ガラス	0.00
	合　　計		100.00
ガラスＡ群	火山ガラスの屈折率（n_1）の範囲		1.4987-1.5011
	火山ガラスの屈折率（n_1）の平均値		1.5000
ガラスＢ群	火山ガラスの屈折率（n_1）の範囲		1.5095-1.5148
	火山ガラスの屈折率（n_1）の平均値		1.5114
普通角閃石の屈折率（n_2）			1.6713-1.6767



第118図　テフラ中の火山ガラス・鉱物の顕微鏡写真

（1，2：実体顕微鏡写真，3－6：偏光顕微鏡写真）

1．2φ粒子の火山ガラス　2．4φ粒子の火山ガラス　3．バブル型平板状ガラス

4．バブル型平板状ガラス　5．軽石型繊維状ガラス　6．普通角閃石

第７節　縄文時代晩期土器に見られる赤色顔料について

１　概要

二渡船渡ノ上遺跡から出土した縄文時代晩期の土器８点に赤色顔料の付着を確認し，そのうち３点について調査を行った。

２　試料採取土器

滋賀里式土器No. 34，精製浅鉢No. 181，No. 238

３　観察・分析方法

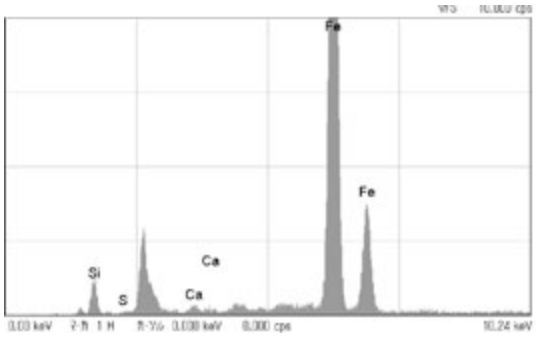
観察用の試料を採取し，走査型電子顕微鏡（SEM，日本電子製JSM－5300LV）による粒子観察を行った。

さらに，エネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDX，堀場製作所製XGT－1000，X線管球ターゲット：ロジウム）による成分分析を行った。分析条件は次のとおりである。

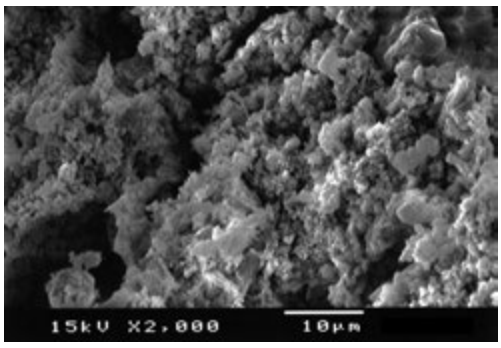
X線照射径：100μm　　X線管電圧：15kV／50kV
電流：自動設定　　測定時間：200秒
X線フィルター：なし　　試料セル：なし
パルス処理時間：P３　　定量補正法：スタンダードレス

４　結果

観察・分析の結果３点全て鉱物由来のベンガラであることが判明した。



第119図　No.181外面付着顔料の成分（スペクトル）



No.181の外面付着顔料の粒子（電子顕微鏡画像）

表47　No.181外面付着顔料の成分分析結果

元素名	質量濃度(%)	3 σ (%)	強度[cps/mA]
アルミニウム	18.75	1.87	7.06
ケイ素	23.31	1.25	17.26
カリウム	1.40	0.41	3.18
カルシウム	0.81	0.26	3.16
チタン	0.51	0.16	6.39
鉄	68.79	1.13	2070.14

第８節　布目痕土器について

１　概要

二渡船渡ノ上遺跡から出土した縄文時代晩期土器の底部外面に布目痕がある資料を２点確認し，調査を行った。

２　資料

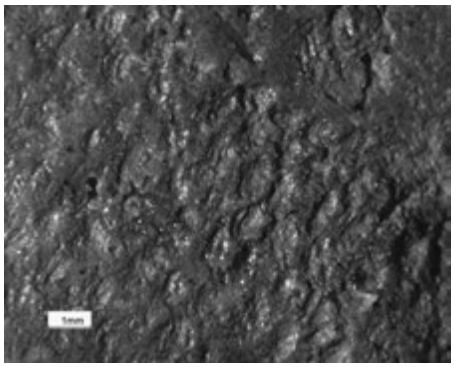
挿図29－No. 127－E類　半粗半精製土器ほか１点

３　観察方法

双眼実態顕微鏡（10～60倍）及びキーエンス社マイクロスコープ（～100倍）よる観察と計測を行った。

４　結果

１㎝四方あたり経10本，緯12. 5本の布目と１本の表面に約４本ほどの繊維が確認できた。



No.127の布目痕

５　考察

組織痕は，縄文時代晩期から弥生時代早期に時期の土器に多く，ほとんどが編布と網目である。しかし，今回調査した組織痕は，状況から平織りが想定される。これまでに，垂水市宮下遺跡で１㎝あたり６～７本，旧松元町のフミカキ遺跡で１㎝四方あたり経14本，緯14本の平織りの組織痕が確認されている。今回調査した布目痕はフミカキ遺跡のものほどではないが緻密である。製作の方法や素材は不明であるが，類例の増加によって今後明らかになるであろう。

第６章　総括

第１節　二渡船渡ノ上遺跡

１　縄文時代中期

平成19年度の調査で出土した縄文時代晩期の遺物の中に春日式土器の底部１点が確認できた。また，平成21年度のⅥ層の調査において船元式土器２個体（第10図1，2）が近接して潰れた状態で出土した。ただし，局所的に２個体が出土したのみで周囲での遺構検出・遺物出土は皆無であった。この状況から，本遺跡において積極的に当時の人々の生活を復元することは困難である。また，船元式土器と春日式土器が出土しているが，出土地点がそれぞれ自然堤防と後背地で，約20m離れているために一様に評価できない。型式の異なる土器が同時期に存在した可能性や生活の復元等は今後の調査の進展を踏まえて検討しなければならないだろう。

２　縄文時代晩期

該期の調査では，多くの成果が見られた。遺構は，円形の土坑９基と埋設土器１基を検出した。土坑内遺物で時期の認定が可能で，入佐式土器の終わりから黒川式土器の時期と考えられる。ただし，土坑の用途については断定できる状況でなく不明である。埋設土器は，底部に打ち欠いた形跡と地層断面に明瞭な掘込みが見られない。しかし，1個体の土器が転倒せずに土中に存在し，土圧で土器は割れているがほぼ現位置に土器片が残存している状況から埋設と判断した。埋設の用途を明らかにする目的で自然化学分析で土器内の土壌分析を試みたが，リン・カルシウムを多く含む物質は検出できなかった。

包含層であるⅤ層からの出土遺物は，土器・石器ともに豊富であった。出土した粗製の深鉢形土器は，ほとんどが黒川式土器で，該期から増加するとされる組織痕が外面に確認できる半粗半精製土器と赤色顔料の付着が見られる精製の浅鉢が共に出土している。精製の浅鉢の中には，口縁部と底部付近に沈線が施され，波状口縁を呈する干河原段階が見られた。これは，さつま町虎居の一ツ木Ａ遺跡で底部片の出土例があるが，今回の対岸の山崎野町跡Ａの調査でも出土していることから，この地域において広く分布する可能性があり，今後の調査研究の進展が待たれる。さらに，Ｂ・Ｃ－12・13区付近において刻目突帯文土器が相当数出土している。他にもごく少量であるが上加世田式土器と入佐式土器が出土している。なお，該期の壺形土器は出土遺物の中に見つけることはできなかった。

石器は，剥片石器から礫石器まで一通りの器種が出土している。石鏃の中には小型のものや五角形鏃も見られた。石鏃の石材は，ほとんどが黒曜石で，腰岳産の黒曜石に酷似する。石斧は，打製がほとんどで，器種別では，出土数が最も多かった。扁平幅広で大型の打製石斧や小型のものが出土し，様々な用途が想定できる。磨石も多く出土している。砂岩・安山岩・花崗岩などを石材としている。また，石錘が若干出土している。これら石器の出土状況とその特徴から該期の生業が炭水化物を耕地に，タンパク質を河川と山野に依存している状況をうかがい知ることができる。

３　弥生時代から古墳時代

Ⅴ層の調査で縄文時代晩期の遺物に混在する状態で弥生時代の土器片が出土した。弥生時代早期と考えられる口縁部と胴部突帯に刻目をもつ甕形土器が出土している。また，弥生時代前期の高橋式土器の壺（第51図364，365）が出土している。口縁部と胴部突帯に刻目をもつ甕形土器については縄文時代晩期終末に出現する刻目突帯文土器に非常に近い形態的特徴をもつものである。しかしながら，口縁部突帯が口唇部と一体となっている特徴で該期遺物と判断した。第５章に記載してある放射性炭素年代測定結果でも縄文時代晩期土器より新しい年代が示されているが，差は僅かである。今後，南九州における弥生時代開始時期の問題が検討されるときに整理される土器型式であろう。

古墳時代は，ごく少量の土器片しか出土しなかったが，布留式に酷似する甕形土器が出土した。底部を欠く状態であるが復元できた。在地の土器型式と異なることから注目される。

４　古代

該期の調査では，多くの成果が見られた。遺構は，円形の土坑５基と柱穴状遺構（以下「ピット」と呼称。）78基を検出した。土坑埋土からは，土師甕，須恵器などが出土し，埋土内の炭化物で放射性炭素年代を測定したところ９世紀末から10世紀頃の結果を得た。ただし，土坑の用途については断定できる状況でなく不明である。ピットは土坑を検出した周辺で多く検出し，埋土からは土師器破片等が出土している。また，根石をもつピットも１基あった。これらピットについては，発掘時に配置を検討したが，建物を構成するような状況を確認できなかった。

包含層であるⅣ層からの出土遺物は，土師器・土師甕・内黒土師器・須恵器・輸入陶磁器・土錘であった。土師器は，椀が多く出土した。底部には様々な形態的特徴を見いだせた。充実高台は少なく，高台をもつ個体が多い。また，高台の高さ・開き具合にも差が認められた。内黒土師器がある程度まとまって出土したことから，伊佐市菱刈町の遺跡に多く見られる赤色高台をもつ個体の有無を確認してみた。しかし，1つも見られなかったことから，赤色高台の出土遺跡分布域が南へ広がる状況は，とらえられなかった。

5　越州窯系青磁について

９世紀後半から10世紀前半頃には，「越州窯系青磁」という中国から輸入された焼物がある。本県ではこれまでに30数か所で発見されているが，実はこのうち３か所が川内川激特関連事業に関する調査によるものである。このうち２か所は下鶴遺跡（伊佐市）と坂ノ下遺跡（薩摩川内市）であり，残る１か所が本遺跡である。

本遺跡においては，碗と水注の２種類が発見されている。碗は大宰府分類（註）のⅠ類とⅡ類が発見されているが，Ⅰ類は本県で多くみられるのに対してⅡ類はごく少数であり，本遺跡での発見例は注目される。また，水注に関してはさらに重要で，本県においては類例の少ないものである。

同時代の注目される遺物としては，緑釉陶器（越州窯系青磁を模したとされる国産陶器）もあげられる（小片のため実測せず）。本県では約20か所で発見されており，これについても，下鶴遺跡でも発見されている。

以上のように越州窯系青磁・緑釉陶器は出土遺跡がある程度限定される傾向があるが，この点については堀田孝博氏による指摘がある。堀田氏は，この時期の陶磁器の多くが川内川流域に分布することを明らかにし，「薩摩国北西部から日向国諸県郡西部（加久藤盆地）に至るルート」として「川内川ルート」を暗示するものとする（堀田2010）。この指摘は，まさに今回の川内川激特事業に伴って調査された３遺跡から当該遺物が出土しているという事実からも裏付けられるものといえよう。

本県第１位の河川である川内川は，戦後まもなくの頃まで物流において重要な役割を担っていたわけであるが，当該遺物の発見によって古代には重要な幹線となっていた可能性が高いということが明らかとなったといえよう。

6　土錘について

縄文時代晩期に石錘があったように該期においても土錘が出土し，その数は74を数える。川内川での漁労をうかがわれる遺物である。土錘の出土位置についてはグリッド一括で集計し，出土量に応じた重み付けを行い，第123図に表した。出土範囲は，包含層であるⅣ層の残存が確認されている自然堤防の後背地に限られ，中でも最も多く出土しているのはＢ－３区である。Ｂ･Ｃ－３･４区は，土坑とピットが多く検出した場所であることから，土錘と遺構には何らかの関連があると思われる。

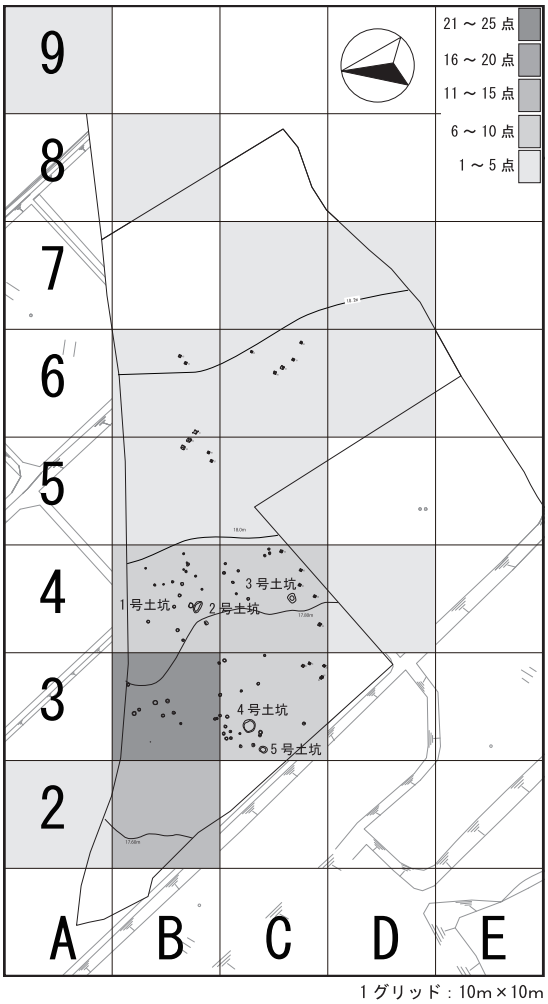
7　中近世

周囲に礫がなく，およそ水平に礫が集積されている状況が明瞭であった７基を礫集積と呼称し，調査を行った。古代の遺構検出面より若干高い標高で検出し，6号礫集積から採取した炭化物の放射性炭素年代を測定したところ，16世紀と17世紀頃の結果が出ていることから，該期の遺構と判断した。調査終了時の状況からは，用途を想定することは困難である。今後の類例の増加をもって検討を加えなければならないだろう。

包含層は確認していないが，表採，表土中から該期の遺物を確認した。青磁，白磁，青花・染付，陶器，須恵質土器，石製品など多様な遺物であるが量は少ない。

8　近代

該期の状況は，Ｄ－６区～Ａ－10区の調査で明らかになった。耕作等での土地利用がうかがわれる畝状遺構や水田跡などの遺構を検出した。古い地籍図にも建物等の構築物はなく耕作地であったことが記されている。対岸の山崎野町は近世から野町として栄え，町家が並び，近代には，製糸工場があった痕跡が今回の調査で確認されているが，それとは対称的である。



第120図　土錘の出土状況

第２節　山崎野町跡Ａ

１　縄文時代早期

北側調査区で押型文土器，塞ノ神式土器，苦浜式土器などが出土した。押型文土器はつぶれたように集中して出土したものを，口縁部を除いてほぼ完形に復元できた。遺構では集石１基を検出した。この中には炭化物や掘りこみは確認できず，平地に礫を集めたような状態で検出したことから，調理など生活の手段として使用された可能性は低い。

当地は，川内川と久富木川に挟まれる河岸段丘上にあり標高およそ20m，川内川の川面からはおよそ５mの高さがある。土層は単純な火山灰層や腐植土層の重なりではなく砂質の土壌である。遺物の出土状況をみると，洪水等の影響が大きいと思われるが，幅広い時代の遺物が混在して出土しており，定住する場としては適していなかったのかもしれない。しかし，複数の土器型式が見られることから，この時代からすでにこの地で人の往来があったことは確かである。

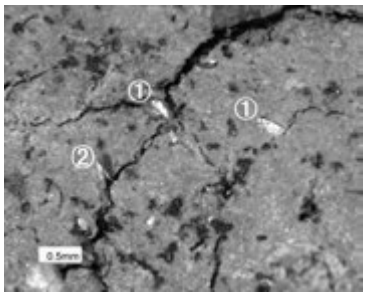
２　縄文時代前期から晩期

全体の遺物数としては多くないが，すべての時期にわたり多様な土器が出土した。縄文時代前期では曽畑式，大歳山式，深浦式など，中期では船元式，春日式，並木式，後期では出水式，西平式，晩期では黒川式，刻目突帯文土器などである。これらの多くが南側調査区で出土している。

発掘調査では，各時代の包含層を明確に分けることができなかった。ほとんどの遺物がⅡ層・Ⅲ層に集中し，両者の色調や土質に大きな差が見られなかったためである。南側調査区の取上げデータをもとに，該期の掲載土器の標高値を図化したものが第121図及び第122図である。幅広い時代の遺物が混在する状況で出土していることがよくわかる。

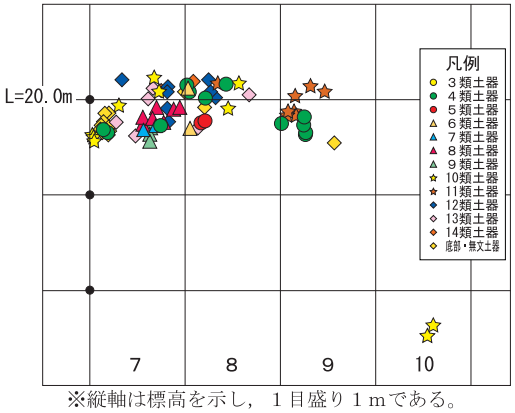
そのため，出土遺物を見通し，それぞれの特徴をもとに整理した。この作業の中で，すべての時代にわたって人の活動があったことをうかがい知ることができた。

これらの中で特筆すべきところは，県内での出土例が少ない大歳山式土器が５点，並木式土器が17点出土している点であろう。大歳山式土器は口縁部のみで，同一個体のものであると考えられる。胎土にはわずかながら細かい雲母や火山ガラスが含まれており，在地の土を用いた可能性も考えられる。並木式土器は，口縁部を中心に胴部の一部が出土した。今回は復元するに至らなかったが，同一個体のものと考えられる。胎土に滑石が多く含まれ，銀色に近い光沢を持つことから持ち込みの可能性が高い。指ナデ文様の間に二叉状の刺突具で押引き文様が描かれており，口縁部付近には補修孔も残っている。



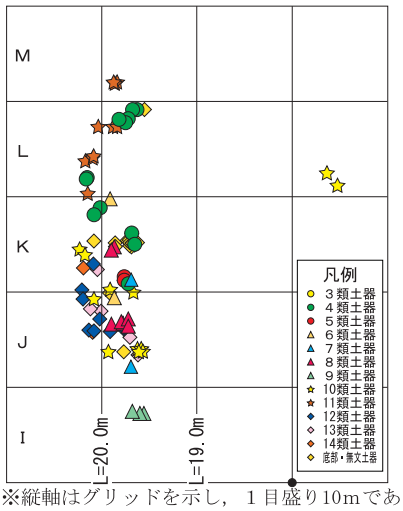
大歳山式土器胎土表面
①：雲母　②火山ガラス

前項でもふれたが，層位は全体として砂層で乱れており，遺構を検出することはできなかった。しかし，遺跡立地が２つの河川の合流点であることを前提に考えると，漁業活動の拠点あるいは河川利用の中継地や野営地的機能などが想定できる。川の対岸に所在する二渡船渡ノ上遺跡では，縄文時代晩期に石錘が18点出土していることや，当地でも晩期の遺物が他の時期に比べて格段に多いことからもこの傾向は裏付けられる。



※縦軸は標高を示し，１目盛り１ｍである。
横軸はグリッドを示し，１目盛り10ｍである。

第121図　縄文時代前期～晩期土器垂直分布（１）



※縦軸はグリッドを示し，１目盛り10ｍである。
横軸は標高を示し，１目盛り１ｍである。

第122図　縄文時代前期～晩期土器垂直分布（２）

3　弥生時代から古墳時代

遺物量としては多くないが，限られた範囲内に甕や壺などが集中して出土した。遺構と認定できるような痕跡は確認できなかったが，復元できた甕が２個体，壺が１個体となった。これらはＪ－７～９区に集中しており，北側調査区ではＱ－15区，Ｒ－19区などで数点出土しただけである。

南側調査区は，東南方向に階段状の耕作地を形成しており，最上部にあたるＪ～Ｌ－７～９区が後世の削平を受けていなかった。遺物の状況から考えると該期にも盛んに人の交流があったと思われる。

4　古代から中世

Ｑ－17区で掘立柱建物跡１棟を検出した。庇をもつ３間×２間の建物である。近世以降のものとみられる礎石建物跡等と軸の向きが合っているが，遺跡の地形を見ると自然な配置であることや他の類例などから該期のものと判断した。南側調査区も含めて掘立柱建物跡は１棟のみで，そのほかの遺構は確認されなかった。

遺物は両調査区で41点の土師器と２点の須恵器が出土した。土師器はろくろ成形によるものが１点出土している。

5　近世以降

第２章でふれたように，藩政時代は島津氏の直轄地であり，遺跡北側には地頭仮屋・名頭屋敷・部当部屋などが並び，遺跡付近には日記所，山崎輿御倉があった。また，当時から養蚕が盛んで大正時代末まで続いたとされている。今回の調査で，これらの記録を断片的ではあるが確認することができた。

遺構は礎石建物跡や布基礎などが検出された。礎石建物跡はいずれも性格の異なる建造物であったと思われる。礎石建物跡１号や３号は礎石の配置や大きさなどからかなりの重量を支える構造であったと推定される。布基礎としたものはクランク状の石列に相応する柱穴は確認できず，用途を断定するには至らなかった。遺構内と断定できる遺物や炭化物が得られなかったため，これらの遺構の時期を判断することは困難であるが，第３図の山崎輿御倉や，記録に残る製糸場に関係するものである可能性は高い。

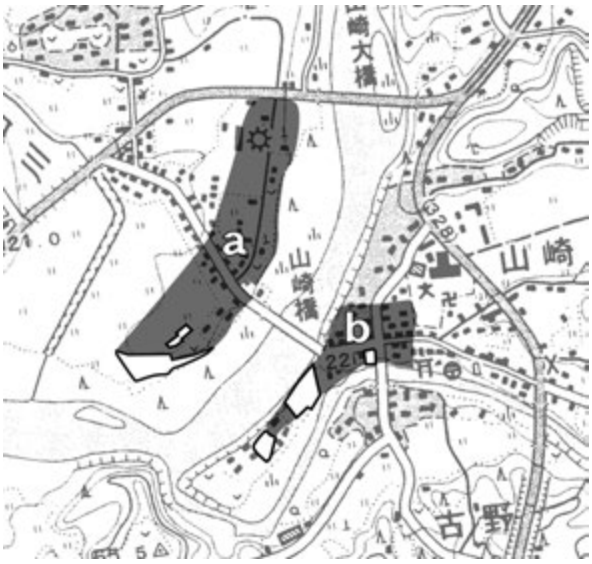
出土遺物を見ると，白薩摩に染付を施した堅野産土瓶，比較的上手な肥前産大皿のほか，京焼の色絵碗などが見られる。これらは，出土数が少ないものの鹿児島城下では身分の高い武家屋敷跡などから多く出土しているものである。川内川に面し，交通の要所でもあったこの地域が栄えていた様子が偲ばれる。また，煮繭鍋が出土したこともこの地で養蚕が盛んだったこと，製糸工場があったことを裏付けるものである。

第３節　今後の取扱い

二渡船渡ノ上遺跡は，県営中山間地域総合整備事業に伴い，平成12年に旧宮之城町が記録保存調査を実施し，調査を終了している。また，新山崎橋の架け替えに伴い試掘調査を平成21年12月実施し，遺跡の有無を確認した。その結果，川内川右岸の山崎橋から上流側の住宅地２筆においては，遺跡が残存していないことが明らかになった。これらのことから，今回の二渡船渡ノ上遺跡の記録保存調査を含めると，現時点で遺跡が残存している可能性がある範囲は，第123図ａに示すとおりである。

山崎野町跡は，東橋がかかる久富木川右岸を平成21年９月に記録保存調査を実施し，調査を終了している。これらのことから，今回の山崎野町跡Ａの記録保存調査を含めると，現時点で山崎野町跡として遺跡が残存している可能性がある範囲は，第123図ｂに示すとおりである。

今後，上記２遺跡の未調査範囲及び周辺において，現状を変更することとなるような開発行為等を計画する際は，事前に当該自治体の教育委員会と協議を行い，文化財保護法に基づく適切な対応を取らなければならない。



第123図　二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町の遺跡範囲
（網フセが遺跡の残存範囲）

註

ここでは大宰府分類（太宰府市教育委員会2000）を用いる。大宰府分類とは，大宰府の調査研究で整理されたもので，九州で用いられることの多い分類基準である。

参考文献

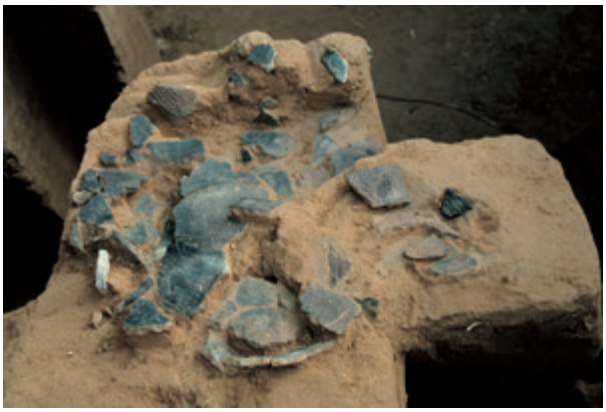
堀田孝博2010「物の動きから見た都城盆地の境界性ー古代後半期の陶磁器類を中心としてー」地方史研究協議会編『南九州の地域形成と境界性ー都城からの歴史像ー』雄山閣

写　真　図　版

トレンチ③（Ｂ－5区）土層断面

トレンチ⑤（Ｃ－12区）土層断面

トレンチ②（ｈ－25区）土層断面

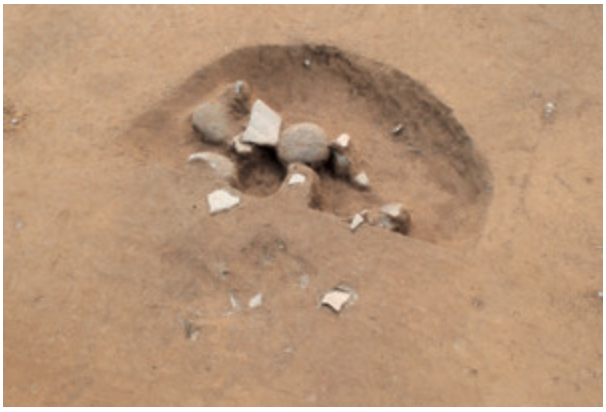


縄文時代中期土器（１）出土状況

縄文時代中期土器（２）出土状況

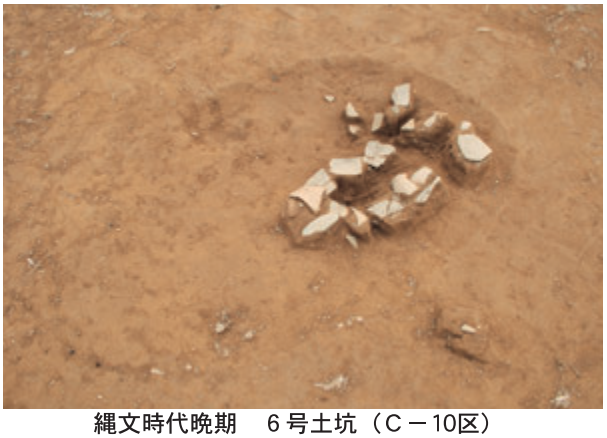
復元された縄文時代中期土器

縄文時代晩期２号土坑（B・C－11区）

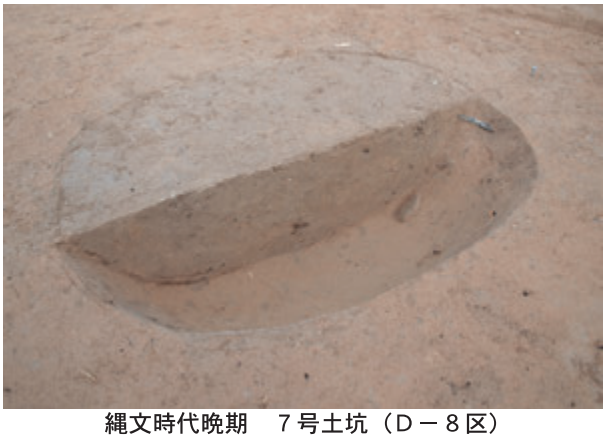


縄文時代晩期３号土坑（Ａ－10区）

縄文時代中期・晩期の調査状況



縄文時代晩期　６号土坑（Ｃ－10区）



縄文時代晩期　７号土坑（Ｄ－８区）

縄文時代晩期　９号土坑（Ｆ－６区）

縄文時代晩期　埋設土器（28・Ｄ－９区）

Ｖ層打製石斧（279）

Ｖ層磨製石斧（305）

Ｖ層遺物出土状況（H19年度調査）

Ｖ層遺物出土位置測量（H21年度調査）

縄文時代晩期の調査状況

古代　１号土坑（Ｂ－４区）遺物出土状況

古代　３号土坑（Ｃ－４区）埋土断面

古代　４号土坑（Ｂ－３区）遺物出土状況

古代　根石を持つピット63（Ｃ－3区）

土師器（400）出土状況（Ｂ－３区）

炭化桃核出土状況（Ｂ－３区）

古代遺物出土状況（Ｂ・Ｃ－3・４区）

古代の調査状況

１号礫集積（Ｃ－11区）

２号礫集積（Ｄ－11区）

３号礫集積（Ｆ－5・６区）

６号礫集積（Ｂ・Ｃ－３区）

７号礫集積（Ｄ－３・４区）

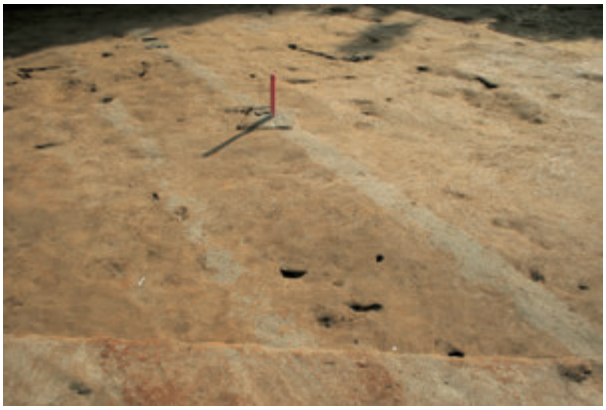
石組遺構（Ｄ－６・7区）

上空から見た石組遺構（Ｄ－６・7区）

中近世・近代の調査状況

石組遺構（Ｄ－６・7区）の裏込め石

石組遺構（Ｄ－６・7区）の背面に見られた土層



畝状遺構（Ａ・Ｂ－10・11 区）

水田跡（Ｂ・Ｃ－７・８区）

杭跡（Ｂ－６区）

杭１（Ｂ－６区）

調査風景（平成19年度）

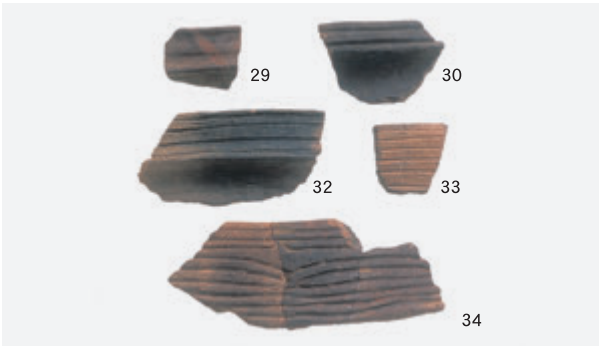
調査風景（平成21年度）

近代の調査状況・調査風景

縄文時代中期　船元式土器

縄文時代中期　埋設土器

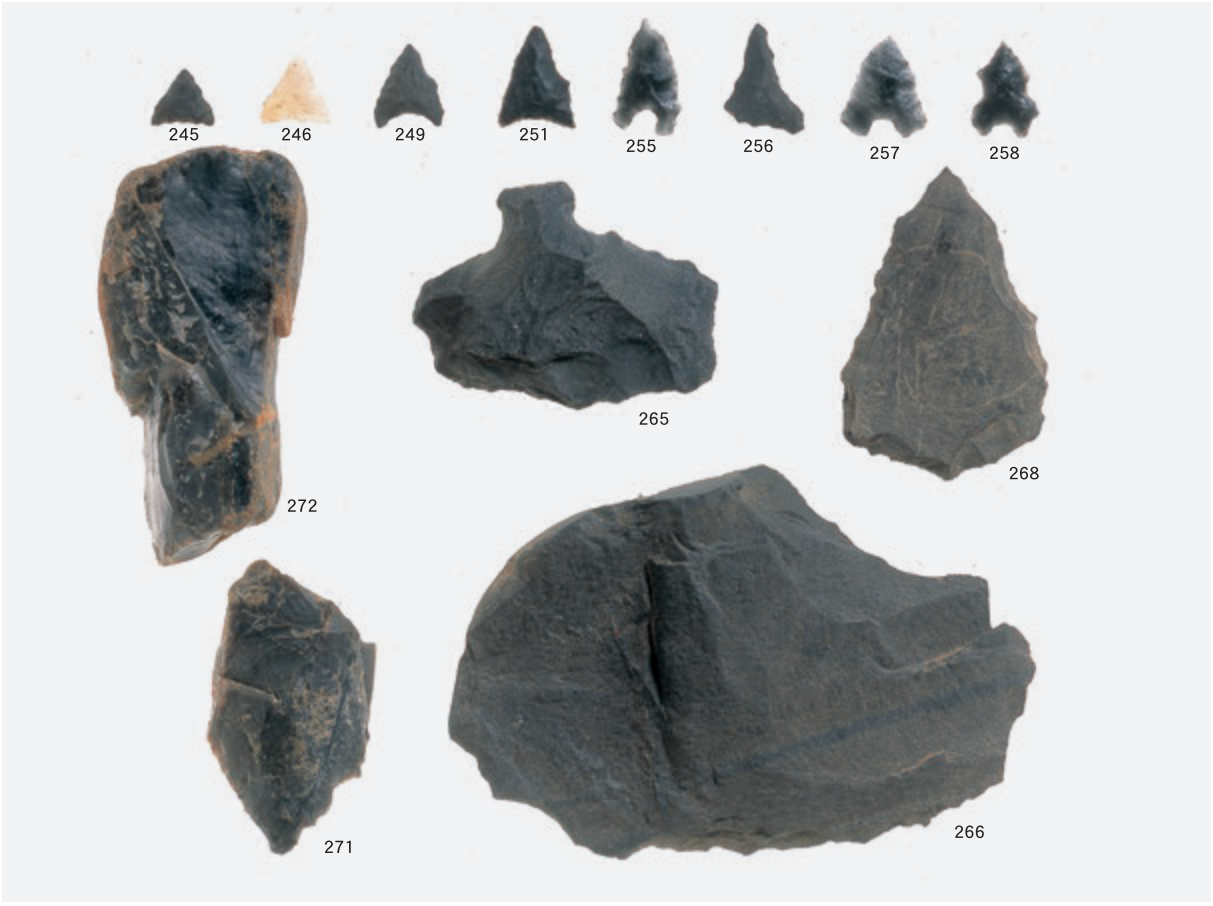
縄文時代晩期　６号土坑埋土出土土器



縄文時代晩期　Ａ～Ｃ類土器

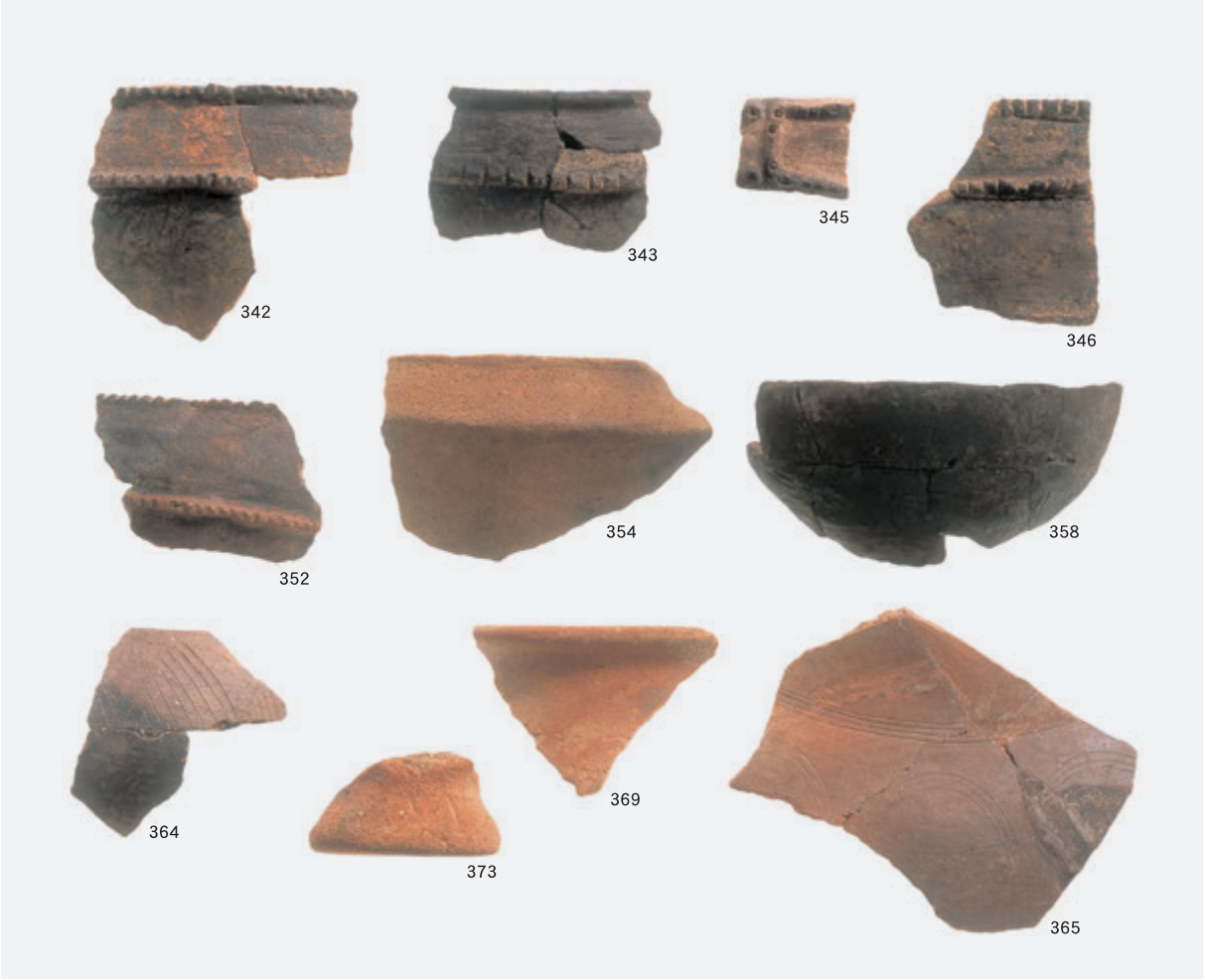
縄文時代晩期　Ｄ～Ｆ類土器

縄文時代中期・晩期の土器

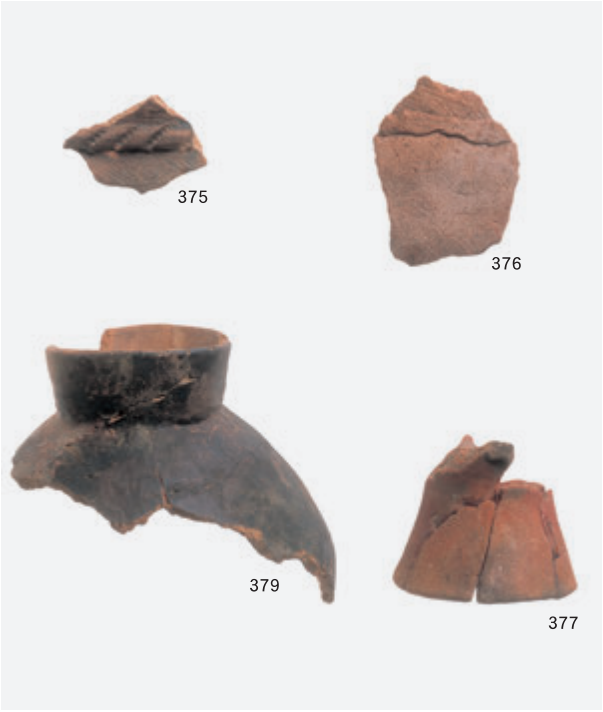

245
246
249
251
255
256
257
258
265
268
272
271
266

279
282
294
304
308
305
274
298
290
337
334
331
317
311
339
329
335

縄文時代晩期の石器



弥生時代



古墳時代

古墳時代

弥生時代・古墳時代の土器

古代　３号土坑出土須恵器・包含層遺物

古代　土師器

古代　越洲窯四耳壺

古代　内黒土師器

古代　越洲窯青磁・土錘

中近世出土遺物

古代・中近世の遺物

図版10（山崎野町跡A）

土層断面（U－17区）

Ⅱ層遺物出土状況（R－18・19区）

遺構検出作業（礎石建物跡１号，R・S－15・16区）

礎石建物跡２号（R－19区）

上空から見た遺構群
北側調査区（１）

布基礎（Q－15区）

布基礎と切り合う礎石建物跡１号（R・S－15・16区）

井戸枠（S・T－16区）

礎石建物跡３号（P－15区）

掘立柱建物跡（Q－17 区）

北側調査区（２）

北側調査区

縄文時代早期集石（R－17区）

II層遺物出土状況（Q・R－16区）

押型文土器（476）の出土状況（Q－16区）

南側調査区

調査前

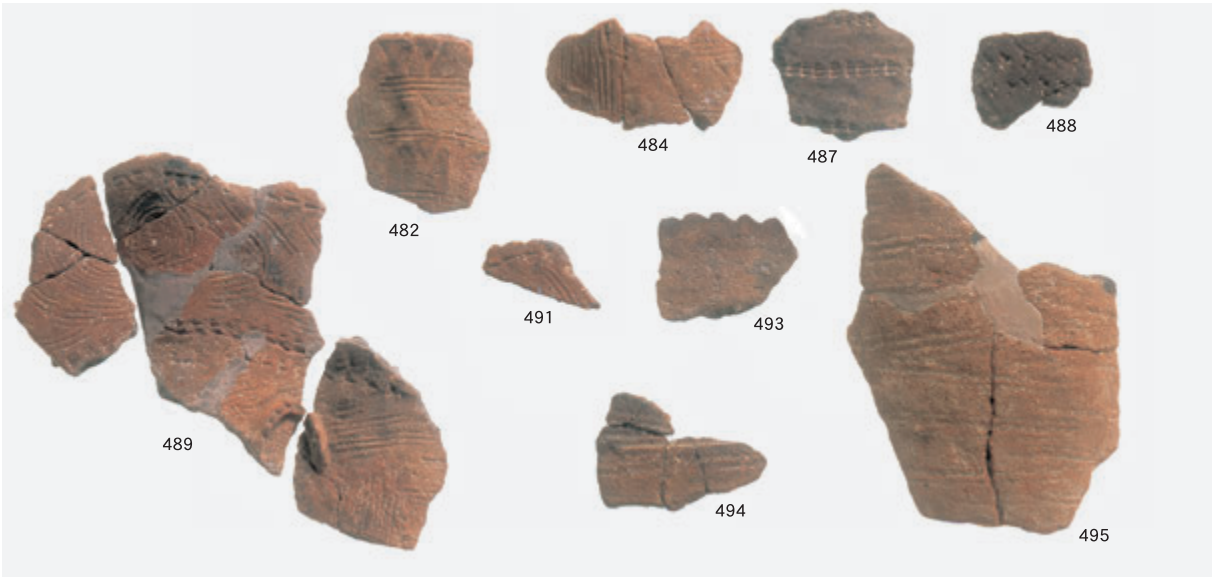
土層断面（K－8区）

磨製石斧（623）出土状況（K－8区）

袋状口縁壺（662）出土状況（J－8区）

北側調査区（3）・南側調査区

北側調査区



縄文時代早期

南側調査区

縄文時代前期～中期

出土遺物（１）

南側調査区

縄文時代中期～近世
出土遺物（２）

南側調査区

縄文時代前期～晩期，古墳時代
出土遺物（３）

北側調査区

近世～近代
出土遺物（４）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（１６１）
川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅲ）

二渡船渡ノ上遺跡・山崎野町跡Ａ

発行年月日　2011年３月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号

ＴＥＬ　0995－48－5811　　ＦＡＸ　0995－48－5821

印　　刷　（株）あすなろ印刷

〒890－0041　鹿児島県鹿児島市城西２－２－３６

ＴＥＬ　099－214－3757　　ＦＡＸ　099－214－3758